

【更新停止】 紅次元ゲームネプテューヌ 深紅の呪血

APOCRYPHA

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

紅次元……幻想種の最後の勢力である吸血鬼達が住まう世界であり、同時に女神と女神の守護する人間達が住まう世界でもある。

そこに、遥かなる古より続く因縁……光と闇の争いへと、狂気に満ちた紅い月が……終わらない夜の申し子がどのような幕引きをもたらすのか

2019 1/8 22:44 諸事情により更新停止しました

# 目次

m k 2編 序章く違えた世界のプレリユードく

プロローグ 改善後 1

第一章く血塗られたマーチく

第一話 改善後 3

第二話 改善後 8

第三話 改善後 12

第四話 改善後 16

第五話 改善後 22

第六話 改善後 28

第七話 改善後 33

第二章く黒い二人のワンダーソングく

第八話 改善後 39

第九話 改善後 43

第十話 改善後 45

第十一話 改善後 49

第十二話 改善後 55

第十三話 改善後 61

第十四話 改善後 63

第十五話 改善後 66

第十六話 改善後 71

第十七話 改善後 76

第十八話 改善後 82

第十九話 改善後 87

第二十話 改善後 91

第二十一話	改善後	95
第二十二話	改善後	99
第二十三話		105
第二十四話		109
第二十五話		116
第二十六話		121
第二十七話		125
第二十八話		130
第三章く緑と白のララバイく		
第二十九話		139
第三十話		143
第三十一話		147
第三十二話		153
第三十三話		157
第三十四話		161
第三十五話		166
第三十六話		169
第三十七話		173
第三十八話		177
第三十九話		180
第四十話		185
第四十一話		190
第四十二話		196
第四十三話	改善後	200
第四十四話		206

第六十七話	319
第五章く呪いの剣のファンタジアく	
第六十六話	316
第六十五話	310
第六十四話	305
第六十三話	300
第六十二話	294
第六十一話	289
第六十話	285
第五十九話	281
第五十八話	277
第五十七話	271
第五十六話	268
第五十五話	262
第五十四話	259
第五十三話	255
第五十二話	249
第四章く女神救出のワルツく	
第五十一話	243
第五十話	238
第四十九話	230
第四十八話	225
第四十七話	220
第四十六話	215
第四十五話	210

第二話	432
第一話	428
Re;Birth3編 第一章く呪怨のオーベルテューレく	
第八十六話	421
第八十五話	412
第八十四話	407
第八十三話	401
第八十二話	394
第八十一話	389
第八十話	383
第七十九話	376
第七十八話	372
第七十七話	367
第七十六話	361
第七十五話	355
第七十四話	349
第七十三話	343
第七十二話	340
第七十一話	335
第七十話	331
第六十九話	327
第六十八話	323

## mk2編 序章く違えた世界のプレリユードく プロローグ 改善後

——プラネタワー最上階

ここは無駄に発展しているプラネテューヌの象徴——だったか？まあ、摩天楼が並んでいるこの国の首都でも群を抜いて高いプラネタワー最上階、最近は何故か治安も悪いので矢鱈アクティブで街でサボっているあの女神が無事かどうかを観に気紛れでやって来たが……

「両方とも留守……か」

「はい、ただいまネプテューヌさん達は治安悪化の原因である組織の鎮圧に四カ国の女神様達と向かわれました」

……この通り、もの見事に当てが外れてすれ違ったらしい。目の前にいる妖精種？によく似た容貌——1mちよいで金髪ツインテールをして、背中には蝶っぽい一對の羽根があるにも係わらず、何故か本に載って空中に浮いている教祖のイストワール曰く、ネプテューヌは妹のネプギアを連れて最近和解した他国の女神と共同戦線を張り大仕事をしているらしい。

しかしまあ、妹の方や他の連中はさておきネプテューヌが仕事をしている……か

明日は槍の雨でも降ってくるのだろうか？

「それで、何時帰ってくるのだ？どうせ奴の事だ。能天気遊び倒して帰ってくるのだと思うが、他の連中もいる以上はある程度自重して帰ってくるのだろうか？」

それまでは適当に時間を潰してぶらついているとするか……幸いにも、この国は機密が少ないのか他の国の教会と違い散歩の制限も少ない訳だし。

「……なっ?!」

そんな事を考えていた時、目の前にいるイストワールが急に慌て出した。

「どうした？急に慌てて……………バグったのか？」

バグか……………だとしたら何処に修理に出せばいいのだろうか？

「違います！ネプテューヌさん達が負けたんです!！」

……………はあ？

「……………冗談だろう？アレ等全員の相手とか、俺でもお断りなぐらいには面倒なのだが……………」

実際に、あいつ等全員を同時に相手にするのに固有能力で壊す前提なら普通に勝てるが、肉弾戦や魔法戦で競いたいかと聞かれると即答でNOだ。

「私はこんな冗談を言いません。急いで対策をしなければならぬので、私はこれで失礼します」

そう言つて、イストワールはかなりの速さで部屋を出て、ドアを開けっぱなしのままおそらく対策本部があるだろう階層に降りて行つた……………何故か階段で

「……………いや、急いでるならエレベーター使えよ」

そんな一言が口から出たものの、それを聞く者は既に居ないのであつた。

……………これ、どう動くべきかねえ？

「取り敢えず、アイエフかコンパ辺りにここの端末からメールでも送つて知らせてやるか？」

我ながら意外と呑気な行動だが、そこまで慌てる気も起きないのでまあいいかと流しているのであつた。

「……………さて、これからどうするか……………取り敢えず、真祖の連中が嫌がらせの類で動くならとつくに干乾びてるだろうけど、連中は最近特に大きな動きが無い以上は関係ないだろうし、適当に散歩してるかな？」

そう呟いて、俺はプラネタワールの屋上へ出て、留めて置いたモンスタアの血で出来た非常食兼移動手段に潜り、プラネタワールから去るのであつた。



# 第一章く血塗られたマーチく

## 第一話 改善後

——ギョウカイ墓場

無駄にオドロオドロしいゲーム機やCDソフトの残骸と思われるモノで構成された山が複数……と言うか山のように存在する地。

ゲーム会社やごみ処理業者にとっては地獄絵図としか表現しようがない、ゴミ屋敷も真つ青なほどに積み上げられたそれらの残骸が溢れんばかりに散乱し、地平線の果てまで続いているその場所の名はギョウカイ墓場。

ゲームギョウ界で死んだモノは皆等しくそこに送られ朽ちていく。だが、現在そんな場所に似つかわしくない生者達がさまよっていた。

そう！アイエフとコンパと呼ばれている二人の少女達だ。

「ふう……中々見付からないわね」

「そうですねえ……わたしは早くねぷねぷ達を助けて帰りたいですう」

「そうね……かれこれ数日は探してるけど、本当に見付きやすいわいわ」

どうやら、二人は数日ほどさまよっているらしく、本当に疲れているような顔をしてぼやいている。

その疲労具合を表しているかのようには、心なしかアイエフは腰まである茶髪が乱れ、コンパはオレンジ色の髪とセーターに所々、周囲の残骸から付いたのだらう螺やプラスチック片が絡み付いていた。

「所でコンパ、今更だけどここ雰囲気って結構オドロオドロしいけど……大丈夫なの？」

「はいです……ここに来る前に見たあなざーさんが戦った跡のせいでこのぐらいは大丈夫になってたです」

「……ああ、あのR18G指定確定の残骸見たらね……そもそも、アイツはこの非常事態に一体なにやってんのよ」

そう言つて、アイエフは地面に転がっていた石を蹴り飛ばす。

どうにも、相当ストレスが溜まつているらしい。蹴り飛ばされた石はかなり遠くまで飛んで行った。

コンパはコンパで、アナザーと呼ばれた人物が戦闘を行った跡を思い出したのか相当気分が悪そうな顔をしている。

「全くアイツは……人により一方的に連絡入れて自分は何年も行方知れずとか、見付けたら扱き使つてやるわ」

「それに、幾ら悪い人達でもあんなにやることはないです。見付けたら真っ先にお説教です」

そうして憤慨していた二人だが、しばらく憤慨していると時間の無駄だと思つたのかまた搜索を再開し始めた。

「……………」

暫く歩き、ゲーム機やCDソフトの残骸の山を幾つか越えた辺りで拓けた場所に出た。

そして、その場所にはコードらしきナニかに縛られR15位にはなりそうな格好をした5人の少女達がいた。

「ねぶ（子）ねぶ!!」

アイエフとコンパは探し人が見付かったらしく、自分達が立っていた山を駆け降り、コードらしきナニかに縛られた少女達に駆け寄つた。

「ひどいですう……女神さん達がこんなことに」

「コンパー！助けるわよ。アレを出しな！そこだア！」なっ!？」

不意打ちで叩き付けられた、斧の接続部分に髑髏の意匠があらわれた巨大な黒いハルバードの斧のような部分を間髪で避けたアイエフは、青を基調としたコート袖口に収まっている両手の甲から一本ずつの刃物が付いた籠手のような武器——カタールを構えて迎撃する。

「コンパー！コイツは私が抑えておくから急いでアレをネプ子達に使つて！」

「わかりました！任せてくださいです」

そう言つて、コンパがカバンから取り出したのは、光の加減で様々

な色に光る球体の水晶だった。

「つまらねー牢屋番をさせられてたんだ！精々オレを楽しませろよお  
おおおおおお!!」

「うるさいってーの！コンパ、そのシエアクリスタルを使って！ネプ  
子達を任せたわよー!」

「はいです！アイちゃんも頑張つて下さいです」

「当然！それに、別に倒してしまっても良いんでしょう!」

「アイちゃん！それ負けフラグですう!」

そう言いつつも、コンパはシエアクリスタルを掲げてその輝きを女  
神達に照射する。

「……………う……………う……………ここ、は?」

そう言つて目覚めたのは、腰まで伸びた長いピンク色の髪をした少  
女だった。

「ギアちゃん！良かったです。兎に角他の女神さん達も「キャアアア  
ア?!」ですう!」

目覚めた少女に、嬉しそうに声を掛けたコンパだったが、その時、自  
称牢屋番を名乗る黒く攻撃的な見た目をしているロボットと戦つて  
いたアイエフがコンパのいる辺りまで吹き飛んできた。

「?!?アイエフさん！コンパさん!!」

「イタタタタ……………このぐらいは大丈夫よ。ネプギア、三年振りね？悪  
いけど詳しい話は後にしてちょうだい」

そう言つて、アイエフは半ばからへし折られたカタールを構えて迎  
撃の姿勢を構える。

「弱い……………弱すぎるううう!!この程度じゃオレの渴きは満たされ  
ねえ！闘争の甘美な美酒で酔えねえんだよおおおおお!!」

「アイエフさん！逃げてください!」

そこに、黒いロボットと思われる者が巨大な黒いハルバードを構え  
て突進してくる。その姿は、黒いロボットがとても攻撃的な見た目を  
している事もあって、まるで死神が命を狩り獲ろうとするかのような  
情景を思わせる。

それを見たネプギアは、アイエフを助けようと先程まで全身を縛つ

ていたコードを振り払い、女神のみが保有する神器――

マルチブルビームランチャー

M P B Lを具現化させて、白を基調とした機体の銃身部分からビームの発射体制に入り、ビームによる迎撃を図る。

「これで……逝ってください!!」

「効くかそんなもおおおん!!」

そして、どうにか間に合って発射したビーム砲だが、敵を足止めする程度にしか効果を發揮していない。

それでも、時間稼ぎにはなっているのだが……………

「ゴフツ……まだ……まだ……………」

発射しているネプギアもM P B Lも、病み上がりで長くは持ちそうにない。

マルチブルビームランチャー

ネプギアは口から血を吐き、M P B Lは現在進行形でビーム砲を放っている汎用機関銃のような部分も、その下部に接続されているエネルギーで紫色の刃が形成されている刀風味の部位からも煙を吐き出し、今にも爆発しそうである。

(なにか……なにか無いの!?!このままじゃジリ貧だよ!……………そうだ!)

ネプギアは、時間を稼ぎながらどうにかしようと考えて、何かを思い付いたように顔をあげる。

「コンパさん!それ」

「えっはい」

そう言って、コンパが持っていたシエアクリスタルを受け取り空に翳すと……………

ピカーン!!(パリーン)

「ギアアアアアアアア!?!目が!?!目があああああああ!?!」

周囲を強烈な光が強烈な光が包み、敵のロボットの目を潰すことに成功した。

しかし、その代償にシエアクリスタルは粉々に砕け散りその役目を果たしたかのように霧散してしまった。

「どうにか……………これ、で……………」

「ギアちゃん!?!」



## 第二話 改善後

バーチャフォレスト

緑溢れる自然公園の大きな木下

元はスライヌを代表とする弱小モンスターの巣窟で、子供の遊び場として機能していたそこは、犯罪組織の横行とそれに伴った四女神の失踪により、幸いにも危険なモンスターが出た訳ではなかったが、スライヌ等の弱小モンスターの数が増大し狂暴化した影響でクエストの処理も追いつかなくなり、冒険者やハンターも駆け出しでは膨大な数の暴力により圧殺されてしまい、数が多くても問題なく討伐できる中堅冒険者以降の層からも、弱小モンスターしか居ない関係上旨味が殆ど存在しない事から放置されてしまい、すっかり廃れてしまっていた。

そんなバーチャフォレストでは、現在蒼い血が溢れて池のようになりスライヌやダイコンダー等の残骸が大量に溢れた凄惨な光景が展開されていた。

中でも特に凄惨なのは、殆どの死骸には同士討ちをしたとしか思えない状態で転がっている、数匹のスライヌの死骸だ。

その数匹のスライヌ達は、ある個体はその全身に牙で付けられたような歯形があり、またある個体は名前の由来にも関係している犬のような口や耳、尻尾を筆り取られ、スライヌではなくスライムと化している。

そんな死骸が溢れた蒼い血の池の中心部だったが、そこだけはまるで平和そのものであり、一滴も血が溢れておらず、そんな台風の目のような場所には一人の紅い血のような長い髪をした男が立ち、やる気がなさそうに周囲を眺めていた。

「久し振りにここで昼寝しようとしてみればうじゃうじゃと……雑魚の血は不味いから、適当な一体を汚染して内側からぶち壊してやったが、昼寝出来る環境じゃ無くなったな……面倒な事だ」

そう言つて、男は暫く考え込むような動作をすると妙案でも思いついたのか顔を上げる。

「取り敢えず、ここの奥地に雑魚の入り込まない良さげな昼寝ポイントがあったはずだからそこで寝よう」

そう言つて、男は森の奥地へと向かつて行つたのだった。

ギルド：プラネテューヌ支部内

一方その頃、女神救出に半分失敗したアイエフ達はどうにか救出に成功した『女神候補生』ネプギアのリハビリの為に、ギルドでスライ又退治のクエストを受けていた。

「さて、このくらいならリハビリにも丁度良いでしょうし、スライ又退治にバーチャフォレストに行きましょう」

「そう言えばアイちゃん、ギアちゃんを助ける前にバーチャフォレストに行きましたけど……………」

アイエフがバーチャフォレストの名前を出した際に、微妙に蒼い顔をしながらコンパは声を上げる。

「どうしたのって……………言うまでもなかったわね」  
「はいです。あれはひどい光景だったです……………」

二人としては、余程思い出たくない光景だったのか、微妙に吐きそうな顔をしながら遠い目をしている。

そんな空気の中、話に着いて行けないネプギアは心配そうな顔をして声を掛ける。

「あの、バーチャフォレストがどうかしたんですか？」

「ああいや、アンタは気にしなくていいのよ。寧ろ見ない方が良かった訳だし」

さあ、さつさと行くわよつと、アイエフはコンパを伴い、急かすようにギルドを出て目的地のバーチャフォレストに向かって行つた。

「……………う？つて、待つてくださーいー！」

不思議そうにそれを見ていたネプギアも、自分が置いて行かれそうな事に気が付き、急いでアイエフの後を追いつけたのだった。

バーチャフォレスト

「おかしいわね……何時もならその辺にうじゃうじゃ居るスライヌが、今日に限ってこんな少ないだなんて」

「そうですねえ……犯罪組織が台頭してる影響で、モンスターさんも活発になって、普段は人の影を見ただけで突進してくるのに、今日に限っては殆ど出て来ませんねえ」

そう言つて、二人は周囲をキョロキョロと眺めて目的のスライヌを探す。

「あの、アイエフさん。わたし達が捕まってる間にそんなにモンスターがいっぱい出てくるようになったんですか？」

「ええ、普段はこの辺にも、広場を埋め尽くす勢いで溢れ返つて、とてもじゃないけど奥まで行けなかつたんだけど……」

「今日に限ってはモンスターさん達を少しも見ませんねえ」

救出されたばかりで、イマイチ状況が分からないネプギアはアイエフ達に問いかけているが、返ってきた答えと現状を比べた差異に疑問が深まっただけらしい。

チンパンカンパンとでも言いたげな顔で周囲を見回している。

実際問題、ネプギア達一行がバーチャフォレストに入ってからスライヌを含めて、モンスターに遭遇した回数はほんの数回ほどでしかなく、その過程でスライヌの討伐クエストはどうか達成したのだが、アイエフとコンパは状況がおかしいと言う事で、バーチャフォレストの奥地にまで向かっているのだ。

「……………」

そして、暫く森の中を進むと、今度は開けた広場のような場所に出たのだった。

……………厳密には、スライヌを筆頭にチューリップやダイコンダーを含めた残骸と、蒼い血が池のようになっている『広場だった』と思われる場所ではあつたが

「アイちゃん……………これって…………？」

「ええ、そうでしょうね……………相変わらずエグイ戦闘跡を残していくわ……………まだ遠くには行つてないでしょうし、探し……………つて、ネプギア？」



「……………」

二人して、気分が悪そうな顔をしながらコンパとアイエフが今後の相談をしている時に、一人呆然と立ち竦んでいるネプギアを見てアイエフは声をかけるが、異様に反応が薄い。

「……………キユ〜」

「気絶してるですう」

「仕方無いわよ。私だって前に見た時は吐きそうな位キツかったし」

そう言っつて、アイエフはネプギアを背負うと、コンパと共にバーチャフォレストの入り口へと向かって行くのだった。

……………その後、意識を取り戻したネプギアは色々なショックから更にネガティブなオーラを纏いへこんだのは言うまでもない。

### 第三話 改善後

ギルド：プラネテューヌ支部内

「……………ふう、報告完了っつと」

バーチャフォレストから気絶したネプギアを連れてプラネテューヌに帰還したアイエフは、ネガティブな空気を纏っているネプギアをコンパに任せて教会へ連れて行って貰い、1人ギルドでクエスト達成の報告をしていた。

「今回のクエストでアイツが意外と近くにいる事がハッキリしたわね……………この三年間、一体何やってるんだか」

そう言いながらギルドを出たアイエフは、ネプギア達との合流場所に向かう道中で1人呟く。

「……………まあ、今はその事よりもゲームキャラの方が重要か……………なんか、その道中でばったり会いそうな気はするけど」

そもそも、アイエフがギルドの報告を1人でしていたのには理由があった。

イストワールがネプギア救出成功の後にネプギア達へ語っていたゲームキャラの居場所がようやく判明したのだ。

なんでも、プラネテューヌのゲームキャラは非常に気紛れな性格らしく、長期間一か所に留まる事無くプラネテューヌ各地を転々としているので犯罪組織もこの三年間で一度も捕捉出来なかったとかで現時点では無事なのだが……………ゲームキャラは現在地を報告をしようと云った思考も無いようで、教会側まで居場所を知る者が居ないと言う事態に陥っていたらしい。正直、プラネテューヌらしいゲームキャラだと思った。

らしいと言うのは、アイエフ達諜報員の仕事は対犯罪組織班として全員組み込まれており、ゲームキャラの居場所捜索にはイストワールが行方不明のアナザー（最大戦力）捜索を隠れ蓑にして同時進行で極秘裏に進めていた為に詳しい事は殆ど知らないのだ。

「ネプギアは精神状態が不安定だし、アナザーはアナザーで行方不明で音信不通だし……………半吸血鬼組合ダンピールは数少ないマジエコンユーザー

になつてない正常な戦力だけど街の防衛戦力としては外せない……  
と言うか、プラネテューヌ防衛戦の際かネプ子の言う事以外聴きそう  
にもないから酷く扱い難い……ギルドの上級冒険者はマジエコン潰  
けで殆ど働かないし中堅以下の冒険者は戦力としたら不安が多い」  
これまで、アイエフは現時点までのプラネテューヌの戦力と勢力図  
を頭に描きこれからどうすればネプテューヌ達を助けられるか考え  
ていた。

そもそも本来ならプラネテューヌには女神であるネプテューヌを  
筆頭に大きな勢力や個人戦力が多数あり、シエアの量こそ四カ国一少  
ないが、単純な戦力比で言えばルウィーを除いた国2つと同時に戦争  
しても勝てない戦争になる事は殆ど無いのだ。ただ、今代に到るまで  
の女神達の様々な方針から結局一度も本気で戦争する事は無かつた  
だけで……

しかし、犯罪組織が台頭してからは何処も彼処もガタガタで、最悪  
の事態である首都陥落は熱心な人間の首都防衛部隊やうっかりネプ  
テューヌが防衛戦だけ頑張つてと言う歴代女神からのお願いを解除  
し忘れてとっ捕まっている為に継続している半吸血鬼組合ダンピールの首都防  
衛隊により防がれているが、冒険者達を筆頭にした一部の戦力のマ  
ジエコンユーザー化が主な要因でモンスター退治に手が回らないで  
いる。

その結果、幾つかの村が壊滅に追い遣られ、生き残った難民達が中  
規模以上の街に集まり出来たスラムから治安も悪化の一途を辿る事  
態に陥り、治安の悪化から生活の苦を忘れようとマジエコンユーザー  
が増える悪循環が発生している。

それらを解決する為に救出したネプギアのリハビリに力を入れる  
事になったが、今回のネガティブなネプギアの姿を見てある決心をし  
ていた。

「結局の所、私が頑張るしかなさそうね。変身も出来ないぐらい精神  
的なトラウマを受けてるあの子を無理に戦わせて死なれたらとうと  
うこの国も終わりでしょうし……」

一通りの考察を終えたアイエフは、コンパとネプギアを連れてゲイ

ムキャラの現在地であるバーチャフォレスト奥地へ向かって行くのだった。

——ネプギア視点で凹む——

同刻、プラネテューヌ教会

「はあ……」

(憂鬱です……)

バーチャフォレストで無数の残骸を見て、ふっと意識が飛んでいくような感覚を覚えてからどれだけの時間が経ったのか……

何時の間にかプラネテューヌ教会プラネタワーの最上階に在る自分の部屋で目覚めた私は、ベットの上で膝を抱えながら蹲って、こんな調子でお姉ちゃんを助けられるのかと独り黄昏ているのでした。

「スライヌが合体して、アイエフさんに促されるまま変身しようとしても失敗して……挙げ句の果てに気絶……ははは……なんでもか分からないけど、変身は出来ないし……スライヌには鼻で笑われるし……挙げ句に気絶するし……」

「……こんな事で……お姉ちゃんを助けられるのかな……？」  
でも、私が助けないと……私が、三年前に足を引っ張っちゃったから、こんな事になったのに……」

「ううん……頑張らないと……私が、お姉ちゃんを助けるんだから……!!」

(……でも、私なんかそんな事が出来るの……?)

「ギアちゃん！アイちゃんが帰って来たので、ゲームキャラさんの所に行くですよー？」

「あ、はいー！今行きますー！」

……きつと、ゲームキャラさんから力を借りれば、お姉ちゃん  
だつて助けられる……よね？

こうして、私達は、いーすんさんから聞いたゲームキャラさんの今  
の居場所——バーチャフォレスト深部へと向かうのでした。

## 第四話 改善後

バーチャフオレスト最深部

ガン！ガリツ！ ガンガン！！ギヤリギヤリ！

ウォーローン！！ ギチギチギチギチ

バーチャフオレストの奥深く。

普段は静かで、蟲の鳴き声や木々の葉が擦れる音位しか聞こえず、犯罪組織が幅を利かせている昨今では数少ない『平和』な森の奥だったのだが、現在は森の獣やモンスターが暴れ回り、木々は倒れて花は散り、地面には光ながら粒子に変換されかけている植物の残骸や獣の血と肉と臓物が散乱する神秘的ながらも凄惨な風景と化していた。

そんな森の中、1つのディスクを囲んで立っている人間が2人居た。

「チツ……頑丈なディスクだなアオイ」

「確かにな……面倒な仕事を引き受けてしまったよ。本当に……」

1人は、ネズミをモチーフにしている灰色のパーカーを着て鉄パイプを肩に担いだ灰色の肌の少女？で、もう1人は蒼い服を着てその上から純白のコートを羽織っている銀色の瞳が特徴的な黒い表紙に金色の刺繍が施された分厚い本を持つ蒼い髪の青年だった。

「……急ぐぞ。アイツに見付かったら私でもただでは済まぬ」

「わーってるよ！だから急いでんだろが！！これ以上急げてるならテメエも手伝いやがれ」

「断る。何故、私が下っ端程度の指示に従わねばならん」

「誰が下っ端だ誰が！！」

「構成員は下っ端だろうに……不服なら部隊長にでもものし上がって出直して来い」

そんな風に言い争いながらも、下っ端と呼ばれた少女？はディスクを殴る手を止めないし、蒼い髪の青年も周囲を異様に気にしている。

2人は何かには怯えるように焦っていて、任務でなければ疾うに逃げ出していると言わんばかりに周囲を警戒しながら全力で紫色のディ

スクを殴り倒していた。

そして、そんな2人の必死の努力も間に合わず、死神の鎌が振り下ろされようとしていた。

「……………最後の言葉は、それで良いかあ？」

「?!?!」

そして、周辺一帯に大きな爆音が響き渡った。

同刻 バーチャフォレスト最深部 入り口

一方でその少し前、プラネテューヌの教祖イストワールからゲームキャラの情報を受け取ったネプギア達は、バーチャフォレストを抜けてその最深部の入り口に居た。

「ここに、ゲームキャラが……………」

「どこから探せばいいんでしょうか？」

「さあ？奥まで行けば分かるんじゃないかしら」

そう言つて、ネプギア達を先導しようとアイエフが先頭に立った瞬間、バーチャフォレスト一帯を揺るがす程の爆音が響き渡った。

「な……………何?!」

「分かりません！でも、急がないと……………ゲームキャラさんが危ない!!」

「ツツ!!急ぐわよー!」

アイエフ達は、先程の爆音である最悪な結末を想像した。

即ち、犯罪組織によるゲームキャラの破壊だった。

それを考えたネプギア達は、全速力でゲームキャラが居るだろうバーチャフォレストの奥地へと駆け出して行った。

バーチャフォレスト最深部 side???

「ハア……………はあ……………殺ったか？」

先程まで緑豊かだったバーチャフォレストの最深部は、蒼い髪の青年が咄嗟に放った爆裂魔法によって灼熱の大地へと変貌を遂げた。た。

燃え上がる火の手は周囲の巨木を燃やし、吹き飛んだ土は周囲に飛

散する。

当然、モンスター達も例外ではなく、その身を焦がした黒い塊が周囲に四散し、光の粒子へと変換され続けていた。

「……………チツ……………もう、魔法は打ち止めだな。これ以上は帰還用の転移魔法にも支障をきたす」

本来、青年にとって先程の爆裂魔法は奥の手の1つであった。

少なくともこんな序盤の序盤に使用する魔法ではなく、ましてや帰還用の転移魔法を使うのに必要な最低限の魔力を除いた全魔力を使用して使うのは論外の一言であった。

しかし、命に変えてまで隠し通すようなレベルの切り札ではなかった。たので青年は爆裂魔法と言う奥の手を切ったのだ。

（しかし、本格的に乖離しているな……………既に『知識』に頼るのは不可能か?）

このような思考から分かる通り、青年は所謂転生者……………それも、神様転生と言われる分類に入る人物だった。

青年は前世ではしがない一般人であったのだが、心臓発作で急死した結果、神を名乗る老人の暇潰しに付き合う対価に2つの特殊能力を得ていた。

そして、生前愛用していたゲーム『超次元ゲーム ネプテューヌmk2』の平行世界に転生を果たしたのであった。

「しっかしまあ、相変わらずバカみたいな威力の魔法だよな? 固有能力持ちってのは皆こんなバケモンばつかなのかよ?」

「知るか……………いいから下っ端は下っ端の仕事を全うしろ」

そして、青年は得たチート能力で無双してハーレムなり荒稼ぎなりをしようとしたのだが、非常に残念な事に、そこまで目立つような行いをすると教会に目を付けられてしまう可能性が非常に高く、うっかり自分の目的がバレると粛清されかねない状況が既に出来上がっていた。

（全く、前に俺のような存在を送り込んでいたのならそう言えと言うのに……………お陰でこちらは予定が丸潰れだ）

どうにも、過去に自分と同じように神様転生をした存在がいたらし



く、そのご同類は非常に『無茶苦茶』な輩だったらしい。

教会へお祈りに行った際に、偶然転生者への注意書を記した書物を観ていなければ多種多様な意味合いでアウトだった。

書物を見た限りでは、一般的な良識の範疇での行動を心掛けていれば消される心配は無いようだが、自分の目的は『あらゆる』魔法の研究とホムンクルス数体の美少女を侍らせる事なのだ。人間の美少女でも良かったが、はつきり言って面倒な人間よりも法的には人形ではないホムンクルスの方が色々都合がいい。

ただ、研究したいあらゆる魔法については禁術も含まれているし、ホムンクルスの方も製作には取得が難関な資格と莫大な設備費用に、一体製作する度に面倒至極極まりない書類審査が待っていた。

(だからこそ、私は犯罪組織に身を寄せている訳だがな)

そして行く行くは、幹部に出世して得た資金の裁量からホムンクルスの製造に手をかけて、犯罪神が復活した瞬間に組織を裏切り、どさくさに紛れて行方を眩ます際に眠っている犯罪神へ強烈な禁術を叩き込んで犯罪神の器を破壊するのだ。はつきり言って、折角ホムンクルスを造ったのにゲームギョウ界諸共滅亡とか、溜まったものではない。

「しかし、先程の男は一体何だったのだ？」

「ああん？ テメエ、大隊長なのにそんな事も知らねエのか？」

(……ウザイ。やはり、人間の女などクソだな。こればかりはトリックのロリペド野郎と同意見だ。)

私が先程の血のような男の事で疑問を口に出すと、訳知り顔で下っ端のリンダが長々とウザイどや顔で説明を始めた。

曰く、あの男は何人も犯罪組織の部隊を滅ぼしている。

曰く、あの男は今捕まっている女神達への信仰心はないらしいが何かの約定があるらしく、人質としての効果はない。

曰く、あの男と殺し合った者は発狂して血祭りにあげられる。

曰く、あの男は吸血鬼ヴァンパイアの系譜らしく、とある軍団長が死力を振り絞って付けた怪我がその場では再生しなかった事から半吸血鬼ダモンピールではないかと噂されている。

以上の事から、無闇に接触する事を禁じられていて、接触した者への援軍はどんな理由があっても禁止されている。

「へへっ……まあ、結局はあの様だったかなア？」

「……へえ？そんな噂されてるんだ？」

「ああ！何でも、『ナイトメア・ブラッド血の彩りの悪夢』とか『ブラッディ・デーモン血塗れ悪魔』とか呼ばれてるらしいぜ？なのにアツサリくたばっちまってよオ！マジでダツセエよなあー！」

「おい、今のは私ではないぞ!？」

「へ？」

ギギギギギ……

そう言うと、下っ端は声が聴こえてきた方向……つまり、私が居る場所の反対方向へと、ぎこちない動きで顔を向けた。

「やつほー？さつきぶり……と言う訳で、シネ」

ガガガガガガガツガガガツガガガツガガガツガガツガツガツガツガツガ……

「うおおおおおおお!!」

そこには、先程消し飛ばした以上の蒼いモンスター血の彩の悪魔の血を背後に浮かべ、その血を弾丸のように射出してくるあいつが立っていた。

射出してくる弾丸の余りの勢いに、咄嗟に張った障壁は崩壊まじかである。

私は、そんな状況で最後に出来る手段を採った。

「おい下っ端！一旦引くぞ!!」

「け……けどよお」

私は事前に用意していた転移魔法を起動させ、撤退の用意を始める。

しかし下っ端は、破壊し損ねたゲームキャラに未練でもあるのか中々逃走を行わない。

「ええい！早く来ぬならば貴様は置いていく！」

「ちよ……分かった！分かったからアタイを置いていくな!？」

始めからそうすればいいと言うのに、本当に使えない下っ端である。

私は、何となくの勘で用意していた転移魔法を用いてこの地バーチャフォレスト 獄  
から逃走を果たした。

「チツ……転移魔法か!?!」

そして、そんな声を最後に私の視界は白く塗り潰され、転移魔法に  
よる離脱は成功したのだった。

## 第五話 改善後

side アナザー

「ちっ………逃したか」

周囲を強烈な光が包み、俺は敵を逃がした事を理解した。敵は意外に強固な魔法障壁まで張って身を護っていたのだ。

勿論、あと少しの時間があればあの程度の障壁はぶち破れたのだが……勘が良かったのだろう。相手は事前に用意していたらしき転移魔法を使っただけで逃げて行った。

『アナザー……あと少しの時間があればここに女神候補生がやって来るでしょう。その時まで時間が稼げれば十分です』

「……まあ、それもそうだな。でなければ何の為に三年間も森の奥に引き籠ったのか………うん？」

その時、俺は先程の男達相手に自分が何をやってたかを思い出して顔を蒼くせざるを得ない事に気が付いた。

「……………あ」

『……アナザー？………今度は何をしたのですか………？』

「……………そう言え、俺の血を奴らが放ったフェンリスヴォルフに叩き付けて放置してたような気が……………」

『…………………………』

二人（一人と一枚？）して沈黙に包まれたが、その沈黙も長くは続かなかった。

『いやあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！』

『GURUAAA！！！！』

「……………急いで殲滅してくる！！！！それまで何処かに隠れてろ！！」

『急いで潰して来てください！ここで候補生が死んだら本末転倒ですよ！！』

「分かってる！急いで殲滅しないと一体三年間何やってたのか分から

なくなる!!」

そして、俺はバーチャフォレストの最奥から最奥入り口の方面に向かつて全力で急ぐのだった。

……無駄にパワーアップしているフェンリスヴォルフを殲滅して女神候補生をゲームキャラの元に連れて来る為に……ひいては紫色のディスクの姿をしているゲームキャラの防衛を完了させる為に

side out

side フェンリスヴォルフ

その日、フェンリスヴォルフは酷く不機嫌だった。

元々棲んでいた縄張りを二人の人間に荒らされ、襲い掛かった所を妙なディスクに押し込められてしまったのだ。

しかし、そんなフェンリスヴォルフにチャンスが訪れた。

己を捕獲した二人組が、これからやつて来る男を殺せば己を解放すると確約したのだ。

本音を言えば、己を捕獲した人間に従えられるのは嫌だったが……だからと言って他にやりようも無かった。

プライドと自由の2つを天秤に掛け、結局は従う事を選んだ。

故に、今日の前にいる男を殺す事に理由はない。あの二人組が指定した人間かどうか等は論外である。

ただ単純に、目の前に男が来たから殺す。それだけでしかなく、己にとつてはそれ以上の情報は必要ない。

奴等は数までは指定しなかったので、こいつを殺して早々に逃げやる事にした。

勿論、己が長年棲み続けた縄張りには惜しい。しかし、縄張り等はまた何処かで確保すればいい。それより今は、あの人間から離れる事が方が重要なのだ。

そして、大樹の上からタイミングを見計らい飛び掛かった己に、ナニか紅いモノが力カッタ。

ソレイコウノイシキハオボロゲダ。

side out

side ネプギア

ああ、どうしてこうなったんだろう？

私達はゲームキャラさんを見付けて力を貸して貰わないとダメなのに……………

なのに何で……………

「いやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

「GURUAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

何で危険種に襲われてるんですかああああああ

ああああああ！！！！

いやそりゃあ、確かに道を間違えたかなって思いましたよ!? 思いま

しただけど!?

!?!?

だからっていきなり何でフェンリスヴォルフに襲われているのく

くく……………追っフェンリスヴォルフ手も止まって私達の周囲

を旋回し始めた。

「くっ……………ネプギア! コンパ! アンタ達は先に行きなさい!!」

「そんな!? アイエフさん?!」

「いいから! ネプギア! コンパを連れて先に行つて!!」

「ダメです! アイちゃん殺されちゃうですよ!!」

「大丈夫よ! それに、早く行つてくれないと私も逃げられないじゃない!」

そんな時、アイエフさんが囹を買って出てくれた。

しかし、あのフェンリスヴォルフは絶対にただのフェンリスヴォルフではない。明らかにヤバイ奴だ。

目は（元々紅いけど）血走って血の涙まで流しているし、口からは

今も、呻くような声を上げて唾液のようなものを垂れ流しにしている。

これとアイエフさんが戦えば、万が一もなくアイエフさんは殺されてしまいかもしれない……でも、私が戦ってもそれは同じ事だと思う。

……いや……死にたくない……

「とにかく……私が時間を稼いでる間にアンタ達は逃げなさい!!アンタ達が逃げ切ったと確信したら私も逃げるから!!」

「アイちゃん!アイちゃん!!」

アイエフさんはあの明らかにヤバイフェンリスヴォルフに目掛けて突撃してしまった。

でも、私にはどうにも……本当に、出来ないの？

そう思った私は、改めてフェンリスヴォルフ(?)を観察し始める。

そして、冷静になってよく視るとあのフェンリスヴォルフには、蒼い毛皮に血管にまで届くような無数の裂傷が在る事に気が付いた。

おかしい……あれだけ強いのなら、あそこまで傷付いている筈がないのに……

他のダンジョンなら兎も角、ここは最近まで自然公園として親しまれてきた場所なのだ。アレに傷を負わせられるモンスターが居ない事は、ギルドでも確認されている。

そもそも、私達がここに来るまでに戦ったのはパックンやホイニン等、駆け出しの冒険者さんでも倒せるようなモンスターばかりだ。

そして、私が考察を続けていると、アイエフさんと戦っているあのフェンリスヴォルフに異変が訪れた。

ブチブチブチ……ブシュウウウ

「Voo  
ON」

なんと、フェンリスヴォルフ自身が自壊し始めたのだ。

アイエフさんの頭を喰い千切ろうと大きな口を開いて後ろ脚に力を入れたのですが、その後ろ脚と口がいきなり大きく裂けて、そこからモンスター特有の蒼い血が噴き出したんです。

「アイエフさん！退いてください!!」

「なっ……ネプギア、アンタ……」

それを確認した私の行動は、普段よりも数段早かった。

この時は気が付かなかったのですが、後で聞いた話によると私は無意識の内に変身していたらしい。

「マルチブルビームランチャー M・P・B・L、オーバードライブ!!」

(体が軽い……これなら、行ける!!)

そんな事を考えながら、ネプギアはマルチブルビームランチャーM・P・B・Lを構えてフェンリスヴォルフを力尽くで跳ね上げる。

「これが、私の全力全開!」

そして、跳ね上げる行為によって出来た隙に、フェンリスヴォルフの先程出来た後ろ脚と口の端、そして元からあった前脚と横腹の裂傷に刃を当てながら、剣舞の如く素早く斬り刻んで行った。

「あなたの様な存在は、ゲームギョウ界にはいらないます!」

そして、高速の剣舞が終わるとネプギアのマルチブルビームランチャーM・P・B・Lは銃形態に変化してフェンリスヴォルフにビームを放ち、ネプギアの必殺技——プラネットティックディーバは終わるのであった。

side out

side ???

何処とも知れない闇の中、暗がりの中にそれは在った。

(ふーん……こんな感じで変わってるんだ……)

それは、この世界の事をよく知っていた。

そして、その知識では女神候補生ネプギアの対犯罪組織に於ける初陣の相手は断じてフェンリスヴォルフ擬きではなかった。

つまり、それが知っているのはこの世界の原型の知識である。

(……まあ、別にどうでも良いんだけどね。俺アタシとしては、こっちの方が気になるかなー?)

そう言っつて(?)それはネプギアの変化から目を逸らすと、急いでネプギア達の居場所に向かう紅い髪の男……アナザーの方を妙に



熱っぽい目で観ていた。

(さてさて、お前は俺アナタにとつてどれだけの未知を魅せてくれるのかな  
俺アタシはそれが一番知りたい！)

そのような事を呟いて、それは何処へともなく存在感を揺らがせる  
事で全ての認識から完全に外れてしまった。

s i d e o u t

## 第六話

side ネプギア

「……………ギア!…プギア!!」

「……………アちゃん!…ギアちゃん!!」

(……………アレ?私、生きてる?)

よく分からないが、私達はどうか生き延びたらしい。

暫く意識が飛んでいた私は、ボーっとする意識をどうか覚醒させて、周囲の状況を把握する事に努める。

(確か私は……………バーチャフォレストの最深部に居るゲームキャラさんに力を借りに行つて……………そこで、フェンリスヴォルフに襲われて……………!?!?)

ガバツ

「「キヤアツ!?!」」

「アイエフさん!!無事ですか!?!」

「ちよ…ネプ、ギア…ギブ…ギブ…!」

私は、飛んでいた意識で記憶した最後の記憶を思い出すと、慌てて意識を覚醒させた。

そして、コンパさんの隣にいるアイエフさんに駆け寄ると、必死に肩を掴んで揺らしていた。

「あ……………すみません」

「アイタタタ……………いいわよこれぐらい……………まあ、それだけやる元気があるなら大丈夫そうね」

(うう……………恥ずかしい)

穴があつたら入りたいとはこういう気分なのだろう。慌て過ぎてアイエフさんを振り回していた私は、罪悪感から全身を小さくして縮こまっていた。

「やあね……………そんなに落ち込まないの。アンタは無事にトラウマを乗り越えて……………変身して私を助けてくれたのに、これじゃあ私がアンタをイジメてるみたいじゃないの」



散々迷いながら、どうにかネプギア達を見付けた俺は……出るタイミングを完全に逃していた。

と言うか、ネプギアが変身してフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬をしばき倒していた。予想外にも程があった。

寧ろ、何でこいつ等あんなにボコボコにしている癖に悲鳴を上げたと思わずにはいられない程にボコボコにしているので、ちよつぷりフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬が可哀想になってきた程だ。

「……………あー……………そう言う事な」

しかし、周囲をよく見るとボロボロのアイエフとそれを治しているコンパが目に入った。

どうやら、あのフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬は変身前のネプギアには荷が重かつたらしく、アイエフが暫く時間を稼いでいたようだ。

……………まあ、それでも荷が重いのは変わっていないが、幾らか可能性があったのも確かなのだ。

俺の血は確かに浴びた輩の力を上げるが、それでも頑丈さが上がる訳ではない。

寧ろ、理性が彼岸に逝く分、肉体を自壊させながら死ぬまで暴れるのだ。

パワーアップもする分、ヤバさは倍増と言う奴だろうか？

どちらにしろ、これを使うと味方が敵に寝返って見境なく暴れ出すので我ながら性質が悪いとは思っている。

「……………あ、気絶した」

所々でヤバイかと思ったが、どうやら無事に終わったらしい。

しかし、気が抜けてしまったのか……………フエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬を滅すると同時にネプギアも気絶してしまった。

(……………しかしまあ、何処で出ればいいんだ?)

本当に、タイミングの悪い話である。

それから、暫く登場のタイミングを計りながら待っていると

……………



(私としては早くゲームキャラさんに会って力を借りたいんだけど……出来るかなあ?)

「……いいわ。今はそつちを優先してあげる。案内しなさい」

私は、アイエフさん達の様子を見て少々心配になっていたが、どうやら杞憂だったようだ。

一旦ではあるが、怒りを呑み込んだアイエフさん達を背後に、私はアナザーさんの先導に任せるのだった。

## 第七話

side アナザー

「さて、さっさと」

俺は、現在割と感慨深い思いを抱いている。

理由は単純

三年近く続けていたゲームキャラ防衛を完了したからだ。

幾ら俺が400年生きていようが、変わり映えのしない日々の消化は非常にキツイ……退屈過ぎて死にかねないからだ。実際問題、永く生きた真祖吸血鬼達の死因では一番多いらしいので笑えない。

勿論、それなら辞めれば良いと言う者もいるだろう。しかし、これは俺のプライドの問題なのだ。

なんせ、俺は『約束』してしまったのだから………

『二年半前』

当時、女神達がギョウカイ墓場に捕らわれた事を偶然にも聞いた俺は、非常食も兼ねた移動手段である血の池に乗って今後の事を考えていた。

と言うのも、俺は女神と無暗に人間を襲わないで教会から回される強力なモンスターを討伐すれば女神の血を貰う契約をしていたからだ。

その上で、得た死体からどれだけ大量の血を持って行っても自由と言うオマケ付きで

だからこそ、あの駄女神がとっ捕まった事を聞いた俺は、これからどうするかを考えなければならなくなった。

と言うのも、俺はあの駄女神が嫌いではないが……特に好きと言う訳でもない。あくまでも契約によって互いを律して利用し合うだけの関係だったのが大きい。

勿論、乞われれば犯罪組織撲滅でもマジエコンユーザー殲滅でも協

力はしただろう。しかし、あいつ等は俺に何も言わずに犯罪組織に特攻を仕掛けている。

……まあ、返り討ちに遭っている以上は栓無き事だが……何をすればいいかの指示さえ忘れるとは思いもしなかった。

お陰で俺はこうして何をするかを考える必要に駆られている。

ゲームは……面倒だ。そこまで興味が湧かん。

モンスター狩りは……散々狩ったが、プラネテューヌのは弱いし血も不味い。教会から紹介される程の危険種ならともかく、そこ等の雑魚は不味過ぎる。

なら、素直に別の国に行けと言われてそうだが……他の国は俺の入国許可を発行する際に、女神か女神候補生と一緒になければ面倒な手続きが発生するから却下だ。

例外はルウィーぐらいだろうが、あそこは吸血鬼ヴァンパイアの巣窟だ。下位や中位程度ならともかく、夜中の上位や、古代エルダーに真祖トゥルに遭遇したら流石に手間だ。

そんな風に、半年間延々と考え込んでいた俺は気が付けばどこぞの工場の奥地に居た。

「……………って何処だ此処は!?!」

当時、考え事に没頭し過ぎた影響で道を憶えていなかった。

しかも、非常食兼乗り物の血は飲み干していた為に消失。故に、新しく血を確保するまでは歩きだ。

……まあ、んなもの使わなくても俺自身が走った方が速いのだが……面倒だろう?!

誰にともなく言い訳をしていた俺だが、暫く工場内を歩いていると、なんかよく分からんが一枚のディスクを寄って集って大の大人が殴り倒しているアホみたいな光景に遭遇した。

「へへっ……こいつを破壊しとけば俺様は組織で幹部になれるぜエ……!!」

「ピヤッハー!! 出世の為に、ゲームキャラは消毒だアー!!」

『……………どうしよう?…もの凄く帰りたい』



その光景は、どう見ても世紀末なモヒカン共が一枚のディスクを殴って出世がどうか言ってる明らかにヤバイ薬をキめたかのようなアレな光景である。

「……………うむ、どうしようもないアホなチンピラ」誰がアホなチンピラだゴルアア!!」……………面倒だなオイ」

なるべく小声で喋っていたが、どうやらアホなチンピラと言う単語に反応したらしく、こちらに襲い掛かってこようとしていた。

「アアン? 誰がアホなチンピラで社会のクズだ! アア!?!」

「殺つちまいますよ! ぜ! アニキ!!」

「おうともよ!! このガキには社会の厳しきってヤツをよーつく叩き込んどかねえとなア!!」

「ギャハハハ!! お代はテメエの持ちもんと命で勘弁してやんよオ!!」

(いっそ、清々しいぐらいのチンピラだったが……………どうやら敵らしいのでブチコロシは確定だな)

そして、チンピラA……………アニキとか呼ばれてたゴミは俺に向かって拳を振り被り、襲い掛かって来た。

他のチンピラはそれをニタニタと無性に気色悪い笑みを浮かべながら眺めている。

「……………滅殺を開始」

「ヒデブツ!?!」

俺は、拳を振って来たチンピラAの下に回り込み、顎の辺りへ体内から引き出した血で作った刃を刺して、そのまま股下まで一気に斬り割いた。

「……………穢い」

しかし、流石はゴミ虫とでも言えがいいのか……………斬り割いて溢れた血は、腐ったような臭いがする程に不味そうで、俺はこのチンピラAに接触した俺の血を含めて、俺から切り離して遠隔操作する事に決めた。

「ヒイイ!?! 化け物?!?!」ドスッ

「逃げろ! 逃げろお?!?!」ザシユッ

「死にたくねエよオ?!」ブチッ

そんな言葉を聞きながら、俺は目の前のチンピラを殺し回った。あるチンピラは矢の様に形状を変えた血で心臓と脳髓を射貫きその反対側のチンピラは首を刎ね

最後のチンピラは、両方の三匹のチンピラから奪った血で全身を覆い、圧縮して殺した。

「……………さて、出口でも探すか」

『待って!』

「ぬお?!なんだ?誰か居るのか?!」

当時、チンピラを血祭にしたので誰も居ないと思っていた俺は、何処かで聞いた気がする声が聞こえて動揺してしまった。

別にどうと言う事でもないのだが、そんな動揺をうっかり興味と間違えた俺は、その声の言い分に耳を傾けていた。

要約するところだ。

①自分はゲームキャラと言い、目の前のディスク（紫色）である。

②先程のチンピラ達のような連中が所属している犯罪組織に狙われている。

③とっ捕まってる女神達が来たら誰であれ力を貸すから助けて

Help me

……………面倒臭そうだな。

『今、面倒臭いとか思いましたね?一応、あなたにとつてもメリットはある筈ですが?』

「心を読むな……………それで、メリットとは?」

『はい……………具体的には、暇が潰せますよ?』

……………こいつ、何で俺が暇だって分かったし

『こんな所まで来る人なんて暇人以外に居ませんから……………まあ、先程のモヒカン達も暇人だったようですが』

……………アレと同列の扱いは不愉快だな。しかも、また心を読んで

……………

『いえ、顔に出てますから……………それで、どうしますか?』

「……………まあ、いいか。うむ、引き受けてやるよ」

『それはどうも……………取り敢えず、これで死なずに済みそうです』

俺は、それから今日に到るまでずっと……このディスクの防衛に従事するのだった。

『さて、では行きますよ』

「何処に？」

『取り敢えず、安住の地を探してですが？先程のモヒカン達が消えたポイントとして探しに來られては面倒ですし』

「……………それもそうだな」

……………色々な話をしながら暇を潰して

『回想終わり』

『では、女神候補生ネプギア——この激動の時代に貴女が何を成すのか……或いは、どのような秩序を齎すのか……何処かで愉しみに待っていますよ』

「はいー」

『最後にアナザー……………平和になったら一緒にゲームで遊ぶとしましょう』

「「え？」」

「ああ、良いからとつとと雲隠れしておけ……………ぶっ壊されたくはないだろう？」

『はい……………では、また今度』

それだけ言って、ゲームキャラは身体(?)を粒子に変換し、別の亜空間へと移って行った。

(今度会ったら絶対に白黒付けてやる……………)

(……………ねえ、ゲームキャラってゲーム出来たの?)

(さ……………さあ?どうなんでしょうか……………?)

(さっぱりですう)

その後、暫く余韻に浸っていた俺は教会への帰りの道中にアイエフとコンパから三年間も行方知れずだった事と、犯罪組織の人間を無残に殺した事でお説教があったの言うまでもない。

第一章く血塗られたマーチく完

## 第二章く黒い二人のワンダーソングく 第八話

side アナザー

(……………懐かしい……………か?)

バーチャフォレスト最奥から三年振りにプラネテューヌ教会に到着し、イストワールの待つ謁見の間へと向かう最中に、俺はそう思う。

別に、ゲームキャラとの日々は嫌いではなかったが……………ゲームぐらいしかする事が無かったので、逆に犯罪組織からの防衛が娯楽になつていた程だ。

(……………しかし、犯罪組織マジエコノヌ? 何処かで聞いたような覚えがあるような……………?)

「ほら、着いたわよ」

「む……………了解した」

そんな事を考えている内に、謁見の間に着いたらしい。

アイエフから声を掛けられた俺は、一旦思考を打ち切つて謁見の間に入つて行つたのだった。

side out

side アイエフ

「では、無事にゲームキャラの力は得られたのですね」

「はい。ただ、アナザーから聞いた話によると、マジエコノヌの連中は二年以上前からゲームキャラを襲い続けていたようです」

「ああ……………それと、アイツは亜空間に姿を隠したから、この国に加護を与える事は殆ど出来ないが壊される心配は無いぞ」

(……………それを早く言いなさいよ?!)

私は、謁見の間でイストワール様に今回の任務の報告を行つていた。

……そもそも居るとは思っていなかったアナザーを連れて、だがしかし、イストワール様は最高戦力の奴が一緒に帰って来た事を喜んでいた。

そして、私自身もアナザーが居た事を悪く思っていない節があった。

と言うか、聞いた話によると居なかったらとつくにゲームキャラが破壊されていたでしょうし、そうでなくても途中で見た破壊の後を見る限り、私達が焼却されていた可能性は高かった。

敵に英雄級から女神級の魔術師が居たらしく、道中は所々修復されていたが——あまりの熱量に頑丈な筈のダンジョンが融解し、天然ガラスが出来上がっていた程だ。

アナザー自身もネプピタンを飲んでいる間は動けなかったと言うし、相当な人外であったと言える。

そこまでの被害を齎した人物は、転移魔法で下っ端共々逃げ帰ったらしいが……現時点では絶対に戦いたくないと思う。と言うか、遭遇したら即撤退モノだ。

「さて、これからの方針ですが、各国を回ってシエアの回復とゲームキャラを……」

「後は、他の女神候補生や強者から力を借りたらどうだ？」

「そうですね……では、順番はどう致しますか？」

敵の事を考えていると、これからの方針がどんどん決まって行っ

た。

しかし……国を周る順番か……

「取り敢えず近いし、ラストイションからでいいんじゃない？ どうせ、犯罪組織の行き先なんて知らないんだし」

「そうですね……その方がよさそうです」

そうやって話しをまとめていくと、順番が決まって行っ

た。

「ラストイション↓ルウィー↓リーンボックス」

こんな感じだ。

「……ああ、それから、俺は暫く戦わないから」

いきなり、アナザーが訳の分からない主張をして会議は混迷を極め

るのだった。

side out

side ネプギア

「……………ああ、それから、俺は暫く戦わないから」

その言葉は、これから各国を巡ってゲームキャラの力を得る方針に決まった私達にそれなりに衝撃を加えた。

「は……………はあ?!なんでよ?!」

「弱いから……………と言うか、ネプギアの弱体化が甚だしい。お前達二人も弱過ぎる。以上だが?」

「……………それもそうですね」

しかし、アナザーさんからの返答は私を納得させるに足るものだった。

今回、私は犯罪組織に捕まる前よりも遥かに弱くなっている事を痛感した。あのフェンリスヴォルフ?だって、後から反芻したら犯罪組織に捕まる前なら変身しなくても一太刀で倒せた筈なのに、実際には変身してギリギリだ。

アイエフさんもコンパさんも、お姉ちゃん達と一緒に戦ってた時に比べれば弱くなっている。

だとしたら、アナザーさんの主張は間違いではない。

しかし……………

「ああ、それから……………絶対に勝てない相手が出たら代わってやる」

「……………仕方ないわね。確かに、私達も大分弱くなってるし」

「でも、どうして戦わないのに着いて来るんですか?アナザーさんならてつきり、別行動だぐらいは言うと思ってたんですけど……………」

「……………」

私がそう思って、質問したら、アナザーさんは顔を顰めて非常に言いたく無さそうな……………でも、言おうか迷ってる顔をして考え込んでしまっていた。

「……………」

「あ、あの……言いたくないなら無理して言わなくても……」

そして、暫く考え込んだ後、言い難そうに口を開いた。

「……ゲームキャラとの賭け……つまりは、罰ゲームの一環」

「……はい?」

「だから、二年間の防衛時に暇な時間はゲームしてた。その勝敗で色々賭け事をやって、その結果の罰ゲームの一種に女神か女神候補生の救出に着いて行くか行かないかを賭けたゲームをやった。以上」

「え……えーつと……つまり、罰ゲームとして着いて来てくれるって事でいいんでしょうか……?」

「……そう言ったが、何か問題でも?」

『うわぁ……』

「とにかく、俺は先に待つてるから早く準備を済ませてラストেশヨン行きの駅に来るように!」

そう言つて、誤魔化すようにアナザーさんは謁見の間から出て行ってしまった。

……何と言うか、いいんでしょうか?色んな意味で

【いいと思いますけど?俺アタシ的にはあの羞恥から朱く染まってる顔も

中々……(ジュールリ)】

……何か、幻聴が聞こえた気がした。

……何だっただんでしょうか?今の幻聴は

「……まあ、私達も早い所準備して駅に行きましようか?」

「そうですねえ。えーつと、回復薬ヒールケラスを買い込んで来ますです」

「あ、私もお手伝いしますね」

「はいです。よろしく願いますです」

「では皆さん、気を付けて行って来てください」

「はい。ラストワール様も頑張つて下さいね」

私達は、ラストেশヨンに行く前にこれからの準備に向かう事になったのだった。



## 第九話 改善後

side アナザー

それぞれの準備を終えた俺達は、プラネテューヌ駅ラストーション  
行きの列車に乗り込み2時間程の時間を費やして、矢鱈ときっちりし  
た区画整理が成され、工業地帯からは黒い煙が昇っているラストイ  
ションに到着したのだった。

因みに、何年か前に環境の改善があつたらしく、空気清浄機が工業  
地帯周辺には配備されている。なので工業<sup>爆心</sup>地帯は兎も角、住宅地には  
煙害が出る事はないらしい。詳細は知らん。

「わあ、ここがラストーション…本当に機械がいっぱいな街なんです  
ね！ああ！♡楽しそうだなあ。色々見て回りたいなあ…☆☆」

「……アイエフ、こいつはどうしたんだ？」

「ああ、そう言えば、アンタはまだ見てなかつたわね」

ラストーションに着いて早々に、ネプギアは普段の大人しそうと言  
うか、根暗そうと言うか……とにかく、普段の静かな雰囲気をぶち抜  
いて矢鱈とテンション高きはしゃいでいた。正直、気持ち悪いぐらい  
テンション高い。

その辺をアイエフに聞くと、どうやら機械オタクと呼ばれる人種  
だったらしい……いや、女神種？

……まあ、そんな事は棄てといて

「ほら、後にしろ……ラストーションには姉の女神を助ける準備に  
来てるのに、機械を観ている場合か？」

「そ、そうでした……。私達がんばらなきや、此<sup>ラストーション</sup> 処も無くなつちや  
うし…よし。今日は、ガマン、ガマン……… (泣)」

(……泣く程嫌か)

「そう言えば、あなざーさん、これから行くアテはあるんですか？」

ネプギアの行動にちよつとイラつと来た俺は、このコンパの言葉に  
少しだけ救われた気分になった。

……本当に、ネプギアはやる気があるのか？

そう思いはするものの、よくよく考えたら姉のネプテューヌはもつと酷かった記憶があるのでまだマシだと思おう事にする。

「あるぞ？教会の教祖だな」

「……ゲツ」

行き先を提案したら、アイエフからすごい嫌そうな顔をされた。解せぬ

「……何か問題でもあるのか？」

「いや、まあ……この教祖ってあんまりいい噂を聞かないのよね」

「……正直、否定のしようが無い程にまともな理由であった。

「……なら、俺は1人で教会に行く。お前らは好きにしろ」

「えっちょ……」

そんな声を尻目に、俺はラスティションの教会へ急ぐのだった。

side out

side アイエフ

「……行っちゃいましたね」

「……ま、アイツもまあ言ってる事だし、私達はギルドにでも行きましょうか」

そう言って私は、ネプギア達の先導を始めた。

「そう言えば、教祖の人への悪い噂って何ですか？」

「いやまあ……気にしない？所詮は噂だし」

「……道中、この教祖の事での噂をどうか誤魔化しながら

……まあ、アイツが殆ど反論もせず教会に向かった事から察するに、殆ど真実なんだろうなあ……『ラスティションの英雄に首輪を嵌めて馬車馬のように働かせてる』とか『休日無しで何十時間も低賃金で働かせてる』とか『偶に鞭でしばいてる』とか言うアレ過ぎる噂……何でそんなのが教祖してるんだろう？

## 第十話 改善後

side アナザー

アイエフと別れた俺は、ラストেশヨンの教会で教祖の……いや、ここは気を利かせて憐れにも変態の餌食にされた不憫な輩と云っておこう。

何故いきなりそんな事を言うのかと……？それは現状が……

「教祖ケイ。私としてはこの百倍の仕事を回して欲しいのだが？」

「無茶を言わないでくれないかい?!これ以上僕の印象を不本意な方向に悪くする気は無いんだけど?!」

「……………」

「そんなにも不思議そうな顔をして首を傾げないで貰えるかな?!」

「……………何を今更」

「だからって口に出すのも止めて貰えないかい?!」

……………病的に仕事を熟す黒髪の青年とそれを咎める銀髪ショー  
トヘアで子供用の黒い礼服に身を包んだ少年のような教祖(女)の言  
い争いが勃発しているからだ。

机に文字通り山のように積まれた書類の山(複数)が在るにも拘ら  
ず、それ以上の仕事を要求している青<sup>ラストেশヨンの英雄</sup>年と、教祖の神宮寺ケイは  
そんな言い争いを謁見の間の外にも響く勢いで続けている。

「寧ろ、ノワール様であれば嬉々として大量の仕事を回して頂けるし、  
出来なかつたら鞭でしばいて頂けると言うのに……………これだから等  
価交換を旨とする心無い輩は……………」

「ノワール!!!」

「バカ者!!飯にも教祖が大声上げて女神様の名を呼び捨てにするとは  
何事か!!」

「君の趣味に付き合わされるのもどうかと思うんだけどね!!」

「……………取り敢えず、話を進めてもいいか?」

「……………」

この光景は一見、仕事の邪魔をする上司<sup>教祖</sup>とそれを咎める青年に見え

る事だろう。そうなれば青年の言い分は真つ当に聞こえるから性質が悪い。実際に一部の単語さえ聞き流せば、真つ当なのは言うまでもないが

しかし、このままでは話も進まないと思い、俺としてもそれは不本意なので声をかける事にする。

先程から変態的な発言を繰り返している男の名は『グロウ』と言う。ラステイションの英雄と名高い、女神に匹敵するとまで言われてる英雄級の強者だ。

書類全般にも有能で、文武両道で通っている。

(……………本当に、有能なのだがな……………)

「時に、アナザーよ……………」

「なんだ？」

「ここには何用で来たのだ？お前がここに来るなど、随分と珍しいではないか」

「来たくて来ると思うのか？」

思わずそう返すと、その横で教祖の神宮寺ケイは何度も頷いていた。

思えば、こいつも初対面の際から随分と変わったものだ。初対面の神宮寺ケイは、どうにも人形のような側面が目立つ人間だった。

しかし、女神ブラックハートがマジエコンヌに捕まって数日後、ふよふよと浮いて流離っていた俺にコイツから問い合わせがあった。当時の俺は住所不定にも拘らず、どうにかして見付けたいらしい辺りに切実さが現れている。

因みに、質問の内容だが…………

『ノワールがラステイションの英雄を鞭でしばいて過酷な労働をさせたのって本当かい？』

との事だ。勿論、YESと返しておいた。

アイツも、最初の数日はストレスを溜めていたが……………それ以降は開き直って鞭打ちをするレベルになっていたな。うん

まあ、そんな感じで出来た伝手があるので、今回、俺はラステイション教会ここを頼った訳だ。

「……………しかし、よくあのような噂が流れているな……………ノワールの時には完璧に隠蔽をした癖に」

「うむ、どうにも教祖ケイの下は好かぬ。そして、隠蔽へのやる気が失せる」

「……………この嘗て無い程の怒りを、僕は一体どうすれば……………。o r z」

「……………ハッ」

「(#。∩。(ビキビキ#……………喧嘩を売ってるのかい?だとしたら、高く買うよ?」

そんな感じに、凹む教祖を鼻で晒った青年だが、その青年への怒りは収まらないらしく、神宮寺ケイはまた怒りを露わにし出した。

その挙句に、またも言い争いを始めたケイとグロウである。正直、話が進まないので迷惑極まりない。

「そんな事は良い!早々に話しを終わらせるぞ!!」

「そんな事とは何だ!!」

……………ほう、そう来るか

俺としては、実に矯正し甲斐がある返しに思わず怒りが降り切れてしまっていた。

「……………そうか、それが答えか」

「ヒイ?!」

そして、振り切れた感情から表情の消えた俺に怯えている二匹の駄犬の矯正の時間は続いたのだった。

『しばらくお待ちください<m ( ) m>』

「……………と、言う訳だ。分かったか?」

「YES!!」

暫くしばき倒した後、漸く話しが進める準備が出来た。

これだから、ラストイション教会ここは嫌なのだ。手間がかかり過ぎる。

「とにかく、私はお前達の旅に着いて行けばいいのだな?」

「……………やつとこの日々から解放されるんだね」

「そうなるな」

そんな感じに話が纏まったのだが、その時、またも面倒事が発生してしまった。

「神宮寺教祖！緊急事態です!!」

「なんだい？僕としては休憩を挿みたいんだけど……」

「言ってる場合ではありません！ユニ様及び共にクエストを請けられたネプギア様御一行が犯罪組織所属の英雄級に負け、捕らえられました!!」

「「……………ハア!?!」」

思わず、白目を剥かずにはいられない程の大惨事と共に……………

side out

## 第十一話 改善後

side ネプギア

「それじゃあ私、お仕事貰ってきますね」

そう言つて、私、ネプギアはアイエフさん達と別れてギルドのカウンターに向かつて歩き出しました。

(…………でも、なんでアイエフさんはあんなにも話を教祖さんから外そうと必死になつてたんだろう?)

そして、考えるのはアナザーさんと一旦別れてから、ギルドに辿り着くまでのアイエフさんの言動だった。

正直、あんなアイエフさんは見た事がないから、少し心配だ。

(……この教祖さんつて、一体どんな人なんだろう……?)

ドンツ

「きゃっ?!」

そんな事を考えながら歩いていたのがダメだったんだと思う。

私は、目の前を歩いている女の子に気が付かずに正面からぶつかつて、転んでしまった。

「いたたたた……もう！気を付けなさいよ!!危ないじゃない!」

「ご、ごめんなさい!!」

私は、凄い剣幕で怒られたものだからつい謝ってしまっていた。

うう……ちよつと怖いよ……

「ちよ……そんな泣かないですよ!アタシが泣かせたみたいじゃない!」

「う……うん。ごめんね?私、考え事をすると外が目映らない性質みたいで…………」

「…………ううん、アタシこそ、考え事をしてたから……ちよつとイライラしてたみたいなの。ゴメン」

そう言つて、目の前の女の子は、クエストのカウンターへと向かつて行つた。

…………クエストのカウンター?

「あなたもお仕事を貰いに来たの？」

「そうよ。アタシはアイツを一日でも早く追い抜かないといけないの……!!」

そんな感じで燃えている女の子だったが、私の言い回しに思う所でもあつたのか、意外そうな顔を向けてこう返してきた。

『も』？……………アンタもクエスト受けに来たの？」

「うん。そうだよ」

「ふーん……………大丈夫なの？まだ子供なのに」

酷い言われようだった……………否定し切れないけど。

正直、独りだったらアナザーさんの方が普通に強いし……………あれ？

「それを言ったらあなただつて子供じゃない」

「アタシはいいの。これでも結構強いし……………それに、アンタってなんでか鈍臭い印象があるのよね？」

「そんな?!」

正直、普通にショックだった。そして、自分自身でも否定し切れな  
いのがキツイ。

「まあ、そんな事より、アンタはなんでクエストなんて？」

「そんな事って……………街の人を助けて、少しでも女神のシェアを回復させるためだよ」

「うわ、優等生発言。アンタって結構生真面目なのね。」

「えええ？そ、そんな。真面目で何が悪いの？」

どうしよう……………更にショックだよ。

私が、二重のショックに耐えていると、目の前の女の子はいきなり  
笑いだして、謝ってくれた。

なんでも、同じぐらいの年代の子と話すのが久しぶりだったから口  
が軽くなつちやつたみたい。

確かに、私も久しぶり……………つと言うか、周りが大人ばかりで、こ  
う言った経験は初めてだったので、割と新鮮だった。

「ねえ、アタシはユニ。アンタは？」

「ネプギアだよ。よろしく、ユニちゃん」



「ネプギア、ね。ねえ、折角だしさ、これから一緒にクエスト行かない？」

すっごく嬉しい提案だった。

折角友達になれたんだから、もう少し一緒に居たかったからだ。

「うん！いいよ。一緒に行こう！」

「じゃあ、行きましょう！」

そうして、私達は一緒にクエストを請ける事になったのでした。

side out

side ユニ

「へえ、それでギルドでお友達になったんですね」

リビートリゾートに来たアタシ達は、途中に出くわすシカベーター改やヤンキーキャットを殲滅しながら奥に奥にと進んで行く。

しかし……………

「なーんだ。そっちは一人でクエストしてる訳じゃないのね？まあ、しようがないか。アンタ超弱そうだし？」

アタシとしては、もう少し強いと思ってたんだけど……………？

勿論、現状では変身しない場合、三対一で戦えばアタシが負けるのは認める。悔しいけど、多勢に無勢ってやつだし

ただ、一対一ならネプギア達の誰と戦っても、変な油断さえしなれば変身するまでも無く勝てる。

「そ、そんなこと……！ま、まあ……確かに強くはないけど……」

「あー…………面倒くさいから落ち込まないの。現状でアイツと比べるのは間違いよ」

(…………アイツ?)

アイツって誰だろう……………？

アタシとしては気になるけど、多分、ネプギア達の保護者かと思い、深くは気にしない事にした。

(だって、アイツに勝てる人類なんて各国に1人ずつ居るかどうかだから…………!!)

少なくとも、少しだけ見た感じだとネプギア達の強さはパーティーで冒険者達の中堅処が精々だし、大方上級冒険者の誰かに師事して修行中なのだろうと思ひ、アタシはスルーしておく事にした。

「さあ！4人がかりならこんなクエスト楽勝でしょうし、ぱぱっと終わらせちゃいましょう！」

そして、アタシ達はリビートリゾートの奥地を目指して行くのでした。

side out

side Free

「ミラージダンス！」

「魔界粧・轟炎!!」

ネプギアは、手に持っている白い棒状の物体からビーム状の刀身を出し、ボスリザードに高速の剣舞を叩き込む。

そして、それによつて出来た隙を突いてボーンフィッシュが突進してくるのを、アイエフが魔界粧・轟炎による火柱で周囲に居た雑魚諸共蒸発させる。

それを観ていた周囲のモンスター達は、勝てないと悟つたのか2人の傍を全力で離れ出したが……

「逃がさない！」

「行つくですよ♪」

それを、ユニとコンパが見逃す訳も無く、狙撃銃による三発の銃弾と巨大な注射器による攻撃で、カブリカエルやシカベーター改などの雑多な雑魚は敢え無く殲滅されてしまっていた。

「ふふん♪楽勝楽勝♪」

「やったね！ユニちゃん♪」

「当然よ！あんな雑魚に殺られるアタシ達じゃないわ」

ネプギアとユニは、機嫌良さげにハイタッチを決めて、新たなモンスターを探し始める。

そんな様子を見ていたアイエフとコンパは、苦笑しながらもどこか

微笑まし気にそれを眺めていた。

「この短時間で急に仲良くなっちゃって……」

「そうですねえ……微笑ましいです」

そして、2人は先へ行くネプギア達を追う為に、歩を進めるのだった。

「よおーラストেশションの女神候補生と……その他諸々!!」

しかし、リビートリゾート奥の方から、粗暴そうな声が掛けられた事により、そんな平穏で楽しい時間は終わりを告げるのでした。

side out

side ユニ

「よおーラストেশションの女神候補生と……その他諸々!!」

(っ?!またこいつ?!)

アタシは、数日程前に遭遇して、辛くもグロウと退けたこいつの声を聞いて、動揺が隠せない。

「今日はテメエの保護者は居ねえのかア? あんときガタガタ震えて何も出来なかった雑候補生さんよオ!」

「っ?!」

否定できない……確かに、アタシはあの時、アイツの援護さえ出来ない程の力の差から、何も出来なかった。

下手な事をする、変身してもなお、目で追えない程の高速で戦っているアイツに弾を撃ち込みかねなかったから……でも

「そう言うアンタは、あの時あの場で誰の手で海に落とされたのか……もう忘れちゃったの? 随分と空っぽな頭よね?」

「あア!」

幸いにも、こいつの足は遅かったので、エクスマルチブラスター<sup>B</sup>をフルチャージで叩き込んで足場を蒸発させてやったんだ。

そうしたら、足場が蒸発したのにこいつは蒸発しなかったけど……足場が蒸発したおかげで、こいつは下の海へと落ちて行った。

「……お知り合い?」

「ええー！こいつはマジエコンヌ四天王直属の幹部よ！」

「……まア、いいかア……オレの名はイヴェルト！ジャツジ・ザ・ハード直属の大隊長ってヤツらしいが……んなもんでもいい！オレを愉しませろやアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「っ!?!散開して！こいつは足が遅いわ!!！」

そして、戦いの火蓋は切り落とされたのでした。

## 第十二話 改善後

side ユニ

「イイヤツハアアアアアアアアアアアアアア!!」

「あぶな?!」

奇声を上げながら、イヴェルトは拳を振り、アタシ達へと突撃してきた。

しかし、幸いにもイヴェルトの早さはたいしたことは無いので、銃弾を撃ちながらもどうにか避けられる。

けれど、アイツの体は相当硬いらしく、至近距離で放たれた弾丸は、まるで分厚いコンクリートにでもぶつかったかのように四方八方に跳んで行く。

不幸中の幸いと言おうか、アイエフ達は既に十分な距離を取っていたので、跳弾による誤射は無い。

「ち……本当に、厄介なぐらい硬いわね! アンタ」

「ギャツハハツハハツハハハ!! どオしたア? さっきまでの威勢は何処に行きやがったんデスかアアア!」

アタシは、隙を見て手早く変身し、どうにか上空へと飛翔した。

「ほんと、勘弁して欲しいわ……」

「ユニちゃん! 私も手伝うよ!」

アタシがあまりの面倒くささにボヤいていると、ネプギアは空を飛んでいるアタシの隣にやって来て………ん? 隣?

「ユニちゃんがラストেশションの候補生だったんだね! 一緒に頑張ろう!」

名前といい、容姿といい、似てるだけかと思えば………プラネテューヌの『女神候補生』……か……他人の空似だと思ったけど………

「……………いいわ。アイツを倒すまでは共闘してあげる!」

アイツはエクスマルチ<sup>X</sup>ブラスタ<sup>M</sup>ー<sup>B</sup>に限界までエネルギーをチャージするまでは、誰かに前衛に——壁になって貰わないと撃退さえ出

来ない。

だから、ここでは一旦我慢してあげる……………

side out

side アイエフ

「ユニちゃん！私も手伝うよ！」

「……………いいわ。アイツを倒すまでは共闘してあげる！」

私達がどうにか距離を取った頃合いを見計らってか、変身してユニの元へ飛んで行ったネプギアは、さつきから大暴れしてる、自称マジエコンヌ四天王直属の配下『イヴェルト』を倒す為に、ユニに共闘を申し出ていた。

しかし、私が見た限りでは、少しだけユニの表情が不穏だと感じたが……………まあ、気の所為でしょう。

「ユニちゃん！私はどうすればいいの？」

「時間を稼いで！その間にエクスマルチブラスター<sup>M</sup>を限界までチャージしてるわ！」

そして、その言葉を皮切りに、ユニは変身してから両手で抱えている黒い鉄塊のような武骨な巨銃———当人曰くエクスマルチブラスター<sup>B</sup>と云うらしい———のチャージを開始した。

「あいちゃん……………わたし達も」

「ええ、私達は魔法でネプギアを援護しましょう」

「はいです！」

そうして、私達は、コンパの回復魔法と私の攻撃魔法の射程範囲ギリギリにある岩まで近寄って、息を潜めるのだった。

「ほんと、とんだ厄日ね」

「へへっ……………そうだろうなア？」

「ふむ、これで我らの任務は終わったな」

ゴンツ！ガンツ！

「…な……………な、に……………が……………？」

「キユウウ〜」

背後から衝撃を受けて、振り返った私が見たのは、何か棒状の物を振り被った、妙に小物臭がする灰色の肌とネズミっぽいパーカーをした粗暴そうな女と、本を片手に持ち、蒼い髪を伸ばして純白のローブを羽織った気障な雰囲気纏った男だった。

そして、そんな光景を最後に、私は意識を失ったのだった。

side out

side Free

ネプギアは、空中に滞空しつつも時折飛んでくる瓦礫や岩を回避しながら、イヴェルトを攻撃し、彼の気を惹いていた。

「M・P・B・L、ソードフォーム 剣形態開始！」

「効くかよ雑魚がア!!」

しかしネプギアがどれだけ攻撃を繰り返しても、イヴェルトの強靱な肉体には傷一つ付きはしない。

いや、それ所か、イヴェルトが纏う衣服の端にさえ、攻撃が徹ったとは言いがたかった。

「クカカ……不思議かア？ テメエの攻撃がオレの服の端にさえ効果がねエのはよオ!!」

「ハアアアアアアア!!」

そうしている間にも、ネプギアはソードフォーム 剣形態に変形させたマルチプルビームランチャー M・P・B・Lでの攻撃を続けているが、イヴェルト自身が言うように、服の端さえ焼き切る事が出来ないでいた。

確かに、ネプギアの攻撃性能は決して高くはない。寧ろ、どちらかと言えば速さを武器にして手数で攻めるタイプではある。

しかし、それは女神や女神候補生と言う枠の基準での話だ。女神で在る以上は並みのモンスターよりも高い身体能力を保有している。

幾ら捕虜として過ごした日々の影響で、三年前よりも弱体化したとは言っても、生半可な力の差ではこうはならない。

しかも、ネプギアは女神化までしているのだ。その力は上位の冒険

者に匹敵するレベルにまで膨れ上がっている。

「無駄だつつウのオ!! 本当に、プラネテューヌの連中は良い仕事をするよなア!!」

「プラネテューヌ?! その服はプラネテューヌ製なんですか!？」

「オウよ!! 少しばかり脅し付けてやったらヒイヒイ言いながら必死扱いて作ってくれたぜえ?」

そう言つて、イヴェルトは下卑た高笑いを挙げながらも纏う衣装の解説に入りだした。

ネプギアにとっては、ユニがエクスマルチ<sup>X</sup>ブラスタ<sup>B</sup>を限界までチャージする時間を稼げれば良いので、大人しく乗って聞き手に回る。

曰く、『耐熱・耐火・耐水・防刃・防弾等の多種多様な攻撃への耐性』  
曰く、『非常に頑丈ながらも特殊な繊維を特殊な織り方で織っている為に、行動を阻害しない柔軟性を保有する』

曰く、『直径6mのビーム砲の直撃でも壊れない頑丈さ』

それらの解説を聞きながら、ネプギアはその衣服の弱点に気が付き始めていた。

(もしかしたら……これなら行けるかも?)

「あはははア! テメエ如きじやアオレに勝てねんだよオ!!」

「アナタなんか、負けません!!」

そう言つてネプギアは、M<sup>マルチ</sup>・P<sup>プル</sup>・B<sup>ビーム</sup>・L<sup>ランチャー</sup>の剣形態を維持しつつ

も、ビーム状になっている刃の形状を細く、鋭く変えて、イヴェルトへと突撃を開始した。

(もしも、前に聞いた通りの織り方で編まれてるなら……!!)

「今度は自棄起こして特攻かア? もう少し工夫して来いやア!!」

そう言いながら、カウンターを狙って防御したイヴェルトの間を突く為に、ネプギアは突撃を続行した。

「カハッ?!」

「ああ、言つてなかったなア……」

しかし、現実是非情である。

確かに、ネプギアがやったような、刺突武器による攻撃はイヴェルト



トの衣服には有効だった。

「そん、な……確かに、あなたの、服に……使われた、技法は……構造、上の……問題、で……」

「なあ？何時から、オレがオレの服より脆いと言ったんだア？」

そう……単純に、イヴェルトの肉体が極端なまでに頑丈だったと言っただけでしかない。

数メートル程殴り飛ばされたネプギアは、絶望したかのような顔をして、呆然としている。

「エネルギー充填完了！」

「ッ?!」

その時、ユニの最大の攻撃が完成した。

その言葉に、これまで平然としていたイヴェルトは、遊びが過ぎた事を少々後悔しながらも、近場にある岩を拾う為に、全速力で走り始めた。

しかし、先程までネプギアへと投げ飛ばし続けた岩は少々遠くにまで飛んで行ってしまっており、数秒程度では、とてもでは無いが取れそうもなかった。

「さあ……これで終わりよ!! エクスマルト「油断大敵……」と言う言葉を知らぬのか？」カハッ?!」

あと少しで、イヴェルトを退ける為のレーザーが発射されようと言う時、背後から、気障な雰囲気を纏った男の声が聞こえ、後頭部に強い衝撃を受けたユニは、衝撃から気を失った際に変身まで解けてしまい、十数メートルの空から、大地へと墜ちて行こうとしていた。

「ククク……ここで死なれては困るのでな」

「アレリスト……!! 邪魔すんなって言っただろうがア!!」

しかし、意識のないユニを、背後から掴み、支える事で落下を防いだ男——アレリストは、皮肉な顔をしながら、イヴェルトへの皮肉を返した。

「ハ……先の失態を忘れたか？脳筋風情が」

「黙れ！てめえからブツ殺されてエのかア!？」

「はいはい、後にしましょうや？これからメインドイツシュがあるん

ですし、こんな所で体力を使う事もねエでしょう?」

そう言つて、どうにか喧嘩腰な二人を宥めた妙に小物臭がする少女

——下<sup>リン</sup>端<sup>ダ</sup>は、間に入って仲裁に奔る。

「チツ……まあいい、オイ下<sup>リン</sup>端<sup>ダ</sup>……いつ等を拠点に運べ!!」

「ふん、そうだな。バカに付き合つて体力を浪費する暇があるのなら、トリツクと談義でもしている方が数段マシだ」

「誰ガバカだ誰が!! テメエからブチ殺すぞゴラア!!」

「はいはい! それじゃあ、自分はこいつらを運んでるんで」

険悪な雰囲気の中、下<sup>リン</sup>端<sup>ダ</sup>の少女は1人、疲労から溜息を吐くのだった。

## 第十三話

side ケイ

「神宮寺教祖！緊急事態です!!」

「なんだい？僕としては休憩を挿みただけけど……」

「言ってる場合ではありません！ユニ様及び共にクエストを請けられたネプギア様御一行が犯罪組織所属の英雄級に負け、捕らえられました!!」

「……………ハア!?」

やあ、画面の前の君達

まだ一秒も経ってないけど、凄く久しぶりだとボクは感じたよ。なんでだろうね？

「その情報……確かなのかい？」

「ハイ！念の為にとユニ様に隠れて警護させていた情報部の《銀》曰く、以前グロウ殿がユニ様と協力して撃退なさったコードネーム《狂戦士》及びに最近までプラネテューヌで活動していた《千魔の繰り手》が犯人であるとの事です!!」

(……成る程、確かに彼女では無理だね)

いや、別に情報部の彼女を侮辱している訳じゃない。寧ろ、仮に敵が《狂戦士》だけで彼女と情報部で双壁を成している《妖精の影》と二人掛りでユニを護ろうと戦っても、精々数十秒稼げれば良い方だろう。

《狂戦士》単体でそれなのだ。犯罪組織で《狂戦士》に並ぶと言われている《千魔の繰り手》まで居れば、彼女が単独で戦わなかった事を責める事は出来ない。情報を持ち帰ってくれただけ、上出来だと言える。

「そうか……ならば、即刻連中の足取りを調べ上げよ！但し、手は出すな!!命を無駄に散らすものではない事ぐらい、女神ブラックハート様の下で働く貴君等で在れば理解していようが、敵は英雄級の實力者だ！見付かれば一貫の終わりと思い、極力気取られぬように常に一定の距

離を保て!!」

「ハッ!!ラストレーションに栄光の輝きがあらん事を!!」

そんなやり取りの後に、ラストレーションの情報部門室長の地位に就く男はグロウ——『漆黒人機軍団長』の指令を部下に伝える為か、全速力で走り去って行った。

しかし、ボクとしてはそれを複雑そうに見るしかない訳で……

(……本当に、こうして仕事をしていれば、英雄的なカリスマ性さえ感じる美青年だと言うのに)

普段、ボクが見ている彼は非常にアレだが……国民から見れば、彼はラストレーションが誇る英雄なのだ。正直、勘弁して欲しいとさえ思う。

しかし、彼自身は(趣味的な意味で)絶対に認めないだろうが、ノールよりもグロウに心酔している人物は……ボクから言わせれば意外だが非常に多い。噂では、最近ファンクラブのメンバーが6千人を超えたとか……まあ、非公式な集まりなので実態は完全に掴めないが、彼が率いている漆黒人機軍を中心に、民間人や教会職員など、様々な層からの支持が集まっていると言う事ぐらいは掴んでいる。

「さて、教祖ケイ。私はこれより陣頭に立ち、捕らわれた女神候補生達を救助に向かう。故に、後は任せたぞ」

「ああ、任されたよ」

「なら、俺も手伝おうじゃないか………一応、駄女神との契約はまだ続いているしな」

「うむ。卿の協力を感謝する」

そんなやり取りをして、グロウとアナザーの2人は、教会の外へと向かって行くのだった。

side out

## 第十四話 改善後

side ユニ

「…っ…」(やられた…まさか、あんな所で伏兵にやられるなんて…)

気が付いたはいいけど、ご丁寧に猿轡まで噛まされたアタシは、薄暗い工場で1人、剥き出しの地面に転がされていた。

周囲に監視らしき姿は見えないけど、アタシの武器も周囲には無かった。まあ、当然でしょうけど

(そして、ネプギア達の姿も見えないけど…ううん！ネプギア達を気にしてる場合じゃないわ!!)

アタシは、頭を振るってネプギア達の事を頭から追い出す。

此処に居ない人の事よりも、アタシ自身の心配でもしている方が建設的だとアタシは思う。

(こんな時、お姉ちゃんやアイツならどうするのか…)

こんな時アタシが考えたのは、アタシが知る限り完璧に近いお姉ちゃん達の事だった。

勿論、お姉ちゃんは犯罪組織に捕まってる事ぐらいは分かっている。アイツも、人間である以上は限界もある。

しかし、それでも今のアタシより上なものには違いない。

(…考えてもしょうがない、か)

しかし、格上だからこそアタシじゃあ二人の探るだろう手は読めなかった。

だからと言って、思考放棄して自棄になる訳じゃない。それでも、読めない相手の行動を考えるより、何が出来るかを考えた方が良いと言うものだ。

——そんな時だった。

「ふむ、目は覚めたようだな」

「っ?!」(誰?!)

背後からドアが開くような機械音が聞こえたかと思うと、そこには

蒼い長髪と銀色の目が特徴的な……何て言うか、似非貴族風な衣装でも着せてみれば妙に似合いそうな感じの人がいた。

(……けど、この声……何処かで聞いたような気が……?)

「ククツ……不思議そうな顔だな? まあ、それはどうでも良い」

そう言つて、目の前のこいつが話を打ち切ると、アタシを中心にした魔法陣が顕れた。

「つつ!!?」(何よこれ!?)

「喧しい。別にお前に害がある訳ではない……いや、ある意味では害があるかもしれぬが……」

「んゝんゝゝゝ!!」(それを聞かされて安心できる訳ないでしょうが?!)

喋れない事がこうまでもどかしいなんて……せめて拘束だけでもなんとかなれば……!!

そんな事を考えながらも、魔法陣は少しずつ完成に近付いていた。

もう駄目なんだなって思ったその時――

シューーン……

「ふむ、成る程な」

「……………」(あれ? 何ともない……?)

そんな間抜けな音を立てて、魔法陣はその機能を停止してしまつた。

てつきり、魔法陣から炎が上がって来たり、『地下の魔神』とか呼ばれてる龍珠の神殿みたいな形状をして目が幾つも有る奴に目から電撃バチバチな感じにされたりしないの????

しかし、事態はアタシが思つてた以上に深刻なようで……

「えーっと、女神候補生ユニ。身長:149cmで体重は39kg」

「むぐう?!」(ブツ!?)

「スリーサイズは上から順にB:77/W:55/H:81のカップB」

「うゝうゝうゝうゝ!!」(ちょ?! やめっ?!)

「健康状態は良好で膜は……残ってるな。うむ」

「ガルルル!!」(許さない! 絶対にぶちのめしてやるわ!!)

「うむうむ。他の連中といい、中々に良いデータが集まるな」

どうにも、あの魔法陣の効果は身体測定だったみたいで……気が付けば乙女の秘密を盛大にぶちまけられていた。

(けど……他の連中?)

しかし、こいつはそんな事を考える暇も与えてくれず……

「さて、女神化した際の違いはと……」

「むううううううう!!!」(ちよっ?!そっち!?今度はそっちも計測されるの!!?)

「身長は148cmで体重は38kg……体重が減った?」

「ふうう!!ふうううう!!!」(ちよっ?!せめて口に出すのはやめ?!)

「スリーサイズは上から……B:75/W:54/H:80のカップA……成る程、縮んで……」(憐憫の眼差し)

「ぐううう?!」(ちよ?!そんな憐れんだ目を向けないでよ?!)

正直、ダメージを受けると衣装が弾けるアクションに参入させられる以上の屈辱だったわ……(泣)

……何よ?!泣いてなんかないんだからね!……誰に言ってるんだろう?アタシ

「さて、必要なデータは集まった事だ。こいつは元の場所に還しておくでしょう」

「ムグ?!」(ひどっ?!)

そんな適当な感じに、乙女の秘密をぶちまけられたアタシはこいつの展開する魔法陣の効果で、別の場所に跳ばされつつも、意識まで飛ばされるのでした。

……アイツ、絶対にぶっ倒してやるわ!!

side out

## 第十五話

side グロウ

(さて、これからどうするべきか……………?)

ユニ達が犯罪組織に捕まったと報告を受けた私達は、漆黒人機軍の本部があるラステイション郊外の平地にて調査の報告を受け取っていた。

(よりにもよってミッドカンパニーに立て籠もっているとは……………面倒な話だ)

因みに、ミッドカンパニーとはモンスターの大量発生が原因で廃棄されてしまった廃工場である。

当然、そこに住まうモンスターも非常に厄介であり、下級モンスターの大量に加え、『R4下位危険種』、『キラーモーション中位危険種』、『シゴジンコウキ上位危険種』が揃い踏みだ。当然、掃討には私を含めた漆黒人機軍が総出で掛かっても相応の被害が出る。……………何故、それなら早々に退治しなかったのか? 勿論、私として被害を出す事を恐れて放置していた訳ではない。ただ、犯罪組織が健在な上に女神を欠いたラステイションの現状では漆黒人機軍の手が足りていないのが問題なのだ。なにせ、人間と機械の割合が2対8なのでな。

それに、機械とてタダではない。修理にも時間を要する事を考えれば、『当時』必要が無かった場所の掃討などしている場合ではあるまい……………私は誰に説明をしているのだ?

……………まあ、それはさておき、だ。

(私としては、あの単純バカが態々人質を捕って立て籠もるとは思っても見なかったのだが……………まあ、籠ってしまった者は仕方あるまい。生身でそこらの要塞よりも頑丈な奴だが、そう言う日もあると思っ諦める他にない)

「さてさて、こんな時に面倒を持ち込んだ虫けらは血祭よろ? ってなオチに持って逝きますかねえ……………」

「殺してどうする! 今回は捕らわれた候補生達の安全が最優先だ!!」



「あゝ……はいはい。了解しましたよつと……めんどいけど」

「何か言ったか？」

「いや何にも？」

そう言つて、協力者であるアナザーは目的地であるミッドカンパニーへと向かつて歩みを始めた。

（全く、物騒な所は相変わらずか……まあ、あれで戦力としては非常に優秀なのは知っている。私としても、阿呆の様に頑丈な狂戦士バーサーカーや、上位危険種シユンコウキは手に余ると思つていたのだ。どうにか手綱を握つて誘導する他あるまいな……）

そう思い、私はアナザーの対応を抑制から誘導に切り替える事を決めた。

元より、アイツとて契約事は守るので必要以上に心配はしていないが、同時に必要以上に抑えが効かないので抑制など出来はしないのだ。

しかし……

（思えば、随分と遠くに来たものだ……）

思えば、前世では親の手で机に齧り付かされてまで勉強に励まされたと言うのに、いざ就職してみれば早々に営業方面に廻されたのは予想外が過ぎた。

運動すら殆どしなかった身には日々を過労気味のオーバーワークで全身に疲労が溜まり、ふとした拍子にした些細なミスが元で大事に発展した所為で会社をクビにされ、その頃にちょうど親も死んでいた所為で頼る身寄りも無く、就職難で次の職場も決まらずにホームレス生活が始まり……挙句に、そんなホームレス生活に慣れてきた頃合いで最後は路上で寝ていたら居眠りしていた大型トラックに轢かれてお陀仏である。恐らく、大多数の人間は不幸だと思ひ同情ぐらいはされる人生だったと客観的には思う。

実際、死んでから出て来た人の運勢を決める担当の神とやらも不幸な手違いでしたとお悔やみ申し上げられた程だ。恐らく、自分の生涯は客観的に観て比較的不幸な人生ではあったのだろう。

その後、あれよあれよと転生する事が決まり、一般的に観れば

シヨツパイにも程がある『天才は無理でも秀才には成れるだけの才能』だけが与えられ……恐らく、一般的な感性をした人物であれば怒り狂って大暴れしたのではないかと思う酷さだ。

ん？らしいとか恐らくとか、酷く他人事のようなだなど？

……まあ、他人事ではあるな。実際に、私は己が不幸だと嘆いた事が無いのだから

(寧ろ、前世で死んだ恩恵で私は最高の職に就いているのだ！給金が多いのは玉に瑕だが、それを用いて我が至高の女神の守護せしこの国に奉仕せよとの事であったのだろう!!やはり、私は幸福な生涯であると断言出来る!!)

そう！やはり、人生とは多大な苦痛が無ければ成り立たぬ!!幸福な絵面？鞭を持った美少女な上司が薄給で休日無しの長時間労働で私を扱き使う事だが何か？

(そもそも、その点から言つてあの教祖は———《長い上に変質的な内容を含むので省略します》———しかし、あんな者で

も我が至高の女神が任命したのだ。仕方あるまい……しかし、鞭を渡した程度で動揺することであろうか？全く、これだから合理主義者は困るのだ。寧ろ、どうせならばその無表情な顔で目だけ塵でも観るようなモノに変えて———《長い上に変質的な内容を含むので省略します》———……うむ。このような思考をしている場合ではないな。早々にユニを救出して、ノワール様をお救いせねば……!!)

そうして、私は日課としている日記へ記す内容を脳内で纏め終えた頃に丁度ミッドカンパニー前に到着したのだった。

(さてと……イヴェルトよ。私は今、生きている!!)

side out

side イヴェルト

「おいアレイストオ！テメエどこ行ってやがったあ!？」

「貴様には関係あるまい？私には私の、貴様には貴様の目的がある」

そう言つて、アレイストの野郎は、下っ端雑魚が事前に用意したらしいソファアで寛ぎ始めた。

(だあクソ!!あの野郎!このオレ様を嘗めやがって……!!腐れ英雄をぶっ殺したら次はアイツを……!!)

そもそもオレは、あの腐れ英雄をぶっ殺すまではこんなムカつく野郎との行動でも我慢しなきゃならねえ現状に非常にムカついていた。

はつきり言つて、籠城なんざオレの趣味じゃねーし人質はもつと趣味じゃねえ。寧ろ、あの腐れ英雄と正面から殺り合つてる方がまだ性に合っている。

しかし、ジャツジの野郎はオレにこいつと協力しろと、態々オレの肉体に刻まれたシェアを送る為の刻印まで使つてあの野郎に従えと命令しやがった。正直、アタマがイカレてやがんじゃねーかと一瞬でも心配した程だ。

しかし、あのイカレ野郎がああ腐れ売女のクソババアとクソガキにしか発情しねえ万年発情期の変質者に暇潰しでしやがった賭けポーカーで負けたのが原因でオレにとぼちりが来ただけだった。死ぬボケナスが

しかしまあ、面倒な話しながら、あの刻印まで使われている以上、命令には逆らえねえ訳で……

(しやあねえ、とつとと敵をぶっ殺したら返す手でアレイストの野郎をぶっ殺して、次にジャツジの野郎をぶっ殺す!!)

オレは、分厚い鋼鉄製の扉越しにでも伝わってくる殺気を感じながら、渴きを癒してくれる血戦の気配を堪能していた。

side out

side ???

ミッドカンパニーの近くには、二つの小柄な影が在った。

「ここにアタシの嫁が捕まつてるんだね!いっくよー!!」

1つの影は、そんな頭が悪そうな声を上げると、ミッドカンパニーの内部に突撃して逝った。

「潜入か……ワクワクするわね!よおーし!いっくぞー!!」

そして、もう1つの影は目にも留まらない速さで、ミッドカンパ  
ニーの天井より中に侵入したのだった。



そんな風に、イヴェルトが狂喜乱舞している横で下つ端とアレイスは結構本気でドン引きしていたのだが……そんな不安の声も、どんどん近寄って来る爆音に掻き消され、ケタケタと嗤い続けるイヴェルトには届かなかった……

side out

side グロウ

「ふむ……協力者の選定を誤ったか？」

私は、目の前で繰り広げられている惨劇をどのように対処するかに思考の大部分を割かざるを得なくなってしまった現状に、強烈な頭痛を覚えていた。

事の始まりは、内側から鍵付きできつちりと閉められた頑丈な分厚い鋼鉄製の扉をどのように攻略するか作戦会議からだった

——回想始め——

「ふむ、物理と魔術の両面から強固なロックが掛けられているか……」「はい。しかも、どうにか傍受した無線で拾った音声によると、我々がどちらか一方の鍵に対処した時点で銃弾や矢などが雨の様に降り注ぐような段取りが組まれているようです」

如何なさいますか？と、目の前の部下は私に問い掛けた。

私は、意外と考えられている敵の作戦に、敵の危険度を一気に引き上げた。

「今は漆黒人機軍の人手も足りぬ。故に、少数精鋭と機械による奇襲で「必要ないよ」……なに？必要ないとはどう言う事だ？」

「言葉通りだが？態々時間掛けて雑魚を集めてまで人数と兵器を使う程の脅威か？あの工場」

そう言っつて、アナザーはミッドカンパニーの扉に向かって歩き始めた。

「おい、勝手な行動を「ああ、そうだ」……なんだ？」



「……仕方あるまい。あやつが人質を潰す前にどうかしてこちらで回収するでしょう」

そんな感じで、現在進行形の大惨事をどのように誤魔化すかに頭を悩ませていた私ではあるが、そんな事を考えている場合ではないと思いい、待機していた部下の数人を率いて人質にされてしまっているユニ達の回収に臨むのであった。

「……まあ、幸いにも扉は破壊された。後は、人質にされたブラツクシスター様及びにパープルシスター一行を救助に向かう！卿等も付いて来い!!」

そう言つて、どうにか怯える部下を奮い立たせる為に先陣を切った私は、破壊の限りを尽くされた上に敵の残骸である肉片や脳漿が混じった血の海が溢れるミッドカンパニーへと足を踏み入れた。

……しかし、敵影さえ見えない現状ではあるが私にはどうしてか嫌な予感が抑えきれないのであった。

side out

side ???

何処とも知れない極光の中、俺は分体の視界を通して映している紅い塊を観る。

(クスクス……相変わらずの力だよな？ああ、やっぱり俺はお前が欲しい……)

俺は、それだけを胸に、俺を覆い続ける極光の封印を破ろうと暴れ続ける。

(そして……貴女も大概強情ね？貴女の一部を棄てた人間なんかの為にそこまで頑張るなんて……いいえ？それとも、既に意識も力も殆ど失ったからこそ、そこまで愚劣に抗い続けられるのかしら……？……まあ)

そのような独り言を呟きたくもなる俺は、そう言つて少し溜めた後に、俺を封印し続けて来た貴女へと、嘲る意味合いも兼ねて闇から一つの影を投影した。



その投影された影は人の姿を成すと、紫の髪にオレンジ色の髪飾りを付け、黒つぽい男物のシャツとスカートを身に纏った少女の姿をしていた。

(結局は、最後は全てがこうなってしまうのにな?……あの子も、貴女<sup>アレンタ</sup>の最後の光も全て)

そして、俺<sup>アタシ</sup>はあの子が起こす悲劇と惨劇に心を躍らせ、分体である影を無数に配置して観戦に洒落込むのでした。

(……まあ、後で時空間事切り取って永久保存するんだけどな)

s i d e o u t

## 第十七話 改善後

いきなりだが、犯罪組織に所属する一構成員の俺は、仕事で滞在しているミッドカンパニーの通路で命の危機に直面していた。

(クッソ！何が簡単な仕事だ!!)

今回、俺はこの仕事を受けた事を本心から後悔している。

目の前には高さ3メートル程の巨大な紅い塊——その全てが仲間の血で構成された血の塊が迫って来る。

「アツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ!?」

「ホロビヨ!!」

……しかも、あの紅い塊から紅い血を浴びせられた仲間人間もモンスターも問わずに発狂して殺し合いを始める。

更に、その殺し合いで死んだ奴から流れている血まで集めて肥大化を続けた結果、触手のような形状まで取り始めた。

(ミッドカンパニー)を人質の交渉が終わるまでの間防衛するだけの簡単な仕事だった筈なのに……なのに、なんでこんな事に……?)

既に逃げる事は試みた。

しかし、どう言う訳か足が一切動かない。

心では逃げたいと思うのに、身体が操作が効かねえ……!!

(クッソ！クッソ!!動け……動けよ!!!)

そう思っ、て、必死に足を動かそうと考えるが、身体が一切言う事を聞かない。

それどころか、寧ろあの紅い塊(バケモノ)に向かって足が進み始めてさえる。

(い……嫌だ……死にたくn)

そして、そんな思考を最後に、紅い血を頭から引つ被せられた俺の意識は何処かへと消えて逝った。

「アツハハハハはははハハハははははは!!!」

狭い通路ヲ俺ハ移動スル。

眼前ニワラワラト蛆ノ如ク涌イテ居ルゴミヲ轢キ潰シ、奥へ奥へト

破壊スル  
進ンテ行ク。

「死にたくnアアアアアアああああ嗚呼aaa?!?!」

眼前ノ比較的高イ性能ヲ保有スルゴミヲ中心ニ、狂乱ノ渦ヲ撒キ散  
ラス。

俺ノ周囲ニ満チル紅い鎧ハ既ニ、十数mニ到達シタ。

コレヨリ敵主力ノ殲滅ニ移行スル。

「aaaaハハハッハハハハアッハアaaaaハハハアッハハハハハハ」

紅い塊となったアナザーが敵の主力を求めてその場を去ってから  
も、その紅い血を浴びた人物は狂ったように暴れ続ける。

その狂乱っぷりは、敵も味方も関係ないと言わんばかりの暴れよう  
であり、アナザーを追いかけて突撃し、挽肉のような姿になった者も  
居れば、味方である犯罪組織の構成員やモンスターを相手に、理性を  
代償に得た本来の実力以上の戦闘力によって複数の味方<sup>犯罪組織の構成員やモンスター</sup>を  
殺し、その死体にさえも破壊の限りを尽くし、己が討たれた時か、そ  
の肉体が自壊し果てるその時まで、ただひたすらに破壊の限りを尽く  
した。

そして、紅い血の塊が通った後には、腕も足も眼球も臓物も頭蓋も  
脳漿も金属部品もオイルも………血以外の全てが入り雑じった無  
惨な死体——否、死骸が残るのみであった。

アタシは日本一！ゲームギョウ界の悪を蹴って蹴って蹴り倒す正  
義の味方だよ！

憧れのグロウ様が動いたと聞いて………（ゲフンゲフン！）

じゃなくって、女神様が犯罪組織に捕まったと聞いたアタシは、独  
自に探し出した女神様の居場所に華麗な潜入を果たして、女神様救出  
作戦を敢行した。（コラそこ〜都合主義とか言わない！）  
ただ………

「……………なによ、これ」

女神様が犯罪組織マジエコンヌに捕まったと聞き、ミッドカンパニー　ここの屋根

裏から華麗に潜入を果たしたアタシは、狭い排気口を破壊して降り立った通路の惨状に血の気が引く思いを抱かずにはいられなかった。

「大丈夫なの?!生きてる人が居たら返事をして!!」

そして、そう言いながらもアタシの冷静な部分は生きてる人なんて居ないだろうなと判断してしまっていた。

なにせ、これだけの惨状にも関わらず《何故か血液だけは無い》が、一番軽傷だろう人でさえ、全身に一目で致命傷だと言い切れるような裂傷が複数あった。

そして、酷いものと死体が原型を無くしているものや、全身をバラバラに分解してグチャグチャに潰したとしか表現しようが無い腕や足が幾つも転がっていたんだ。

これで生きてる人が居ると言い切れるのは、流石にアタシも無理だった。

「酷い……一体誰がこんな……」

「キュ〜」(バタン)

「ちよ……ネプギア?!」

「ツ?!誰?!」

そして、誰かが倒れたような物音を聞いたアタシは、念の為に愛用のプリニーガンを構えながら、物音がした方向を警戒しながら顔を向けた。

「……………私達は敵じゃないわ」

そして、観念したかのような溜め息が聞こえると、アタシが助けに来た女神様の1人を背負った茶髪の女の子を始めに、気分が悪そうな顔色をしたオレンジ色の髪の毛の女の子(胸が大きい)や、世が世なら踏み台にされそうな感じがした赤髪に白いメッシュが入った女の子(この子も胸が大きい)と、周囲をしきりに警戒している黒髪の女神様が現れた。

「取り敢えず、ここを出しましょうか。このままここに居たら凄く危険よ」

『何が遭ったかは道中で話すから』と、そう言った茶髪の女の子――

アイエフの言葉に従って、アタシはこの地獄のような場所ミッドカンパニーから脱出する事になった。

時は少々遡り、日本一が排気口を彷徨っている最中の話

犯罪組織に捕まった私達は、武器を取り上げられて縛られた状態で牢屋の中に押し込まれていました。

「……………ロス」

「……………(ちよつと、何が遭ったの?)」

「……………(さ…さあ?なにが遭ったんでしようか?)」

狭い牢屋の中で、何かを呟き続けているユニちゃんの周囲には可視化出来る位の濃密などす黒いオーラ——多分、怒りだと思っ——が、陽炎の様に漂っていて、正直、怒り狂ったブランさんを彷彿とさせるような恐怖が私達を襲っていた。

(恐過ぎるよ……一体何が遭ったの?)

しかし、どれだけ怯えてもこの狭い牢屋の中では逃げる事も儘ならず、私達に出来る事はそのとぼちちりを受けないようにと小さくなつてジツとしている事だけでした。

「……………騒がしいわね」

「え?」

しかし、そんな時間はアイエフさんの一言で終わりを告げました。

「何かあったのかしら?」

「この場合、アタシ達への救援って言う線が濃厚だと思っわよ?」

(あ、元に戻った/わね/です)

いつの間にか、『しようきにもどった』ユニちゃんは、凄く自信と誇りと信頼に満ちた様な表情をして語りだしました。

「グロウは有能だもの!相変わらず手を打つのが早いわね!」

しかし、いきなり扉が開け放たれて、そんなユニちゃんの背後から黒っぽい影が突っ込んできた。

「嫁ええええええええええええ!!とつたどーーーー!!」

「ギャフン!?!」

『……………』

えつと……………誰でしようか？

「あたしはREDちゃん！嫁を探して、ゲームギョウ界を旅してるんだ！」

「そう言えば、最近嫁を探して旅をしてる女の子がいるって変な噂を聞いた覚えがあるわ……………まさか、アンタの事？」

「おおー！アタシってそんなに噂になってるんだー！うんうん、アタシ凄い!!」

(……………変なつて所はスルーなんですね／のね)

「……………ンニ」

しかし、そうしてのんびり話をしていたのが不味かったんでしょね……………

「いい加減に、アタシの上からどけえええええええええええええ!!!!」

『はい!!!!』

そんな私達にユニちゃんの雷が落ちて来るのに、そう時間はかかりませんでした。

それから少しして、ユニちゃんの怒りも治まったので私達は牢屋の外から脱出を図る事になりました。

「しかしまあ、武器を近くの看守が持つててくれて助かったわ」

「そうですね。流石に無手じゃどうにもなりませんでしたし」

とは言え、一体どうしたものでしょうか……………

武器こそ回収出来ましたが、非常に嫌な予感がします。

「んく……………コツチ！コツチなのだ!!」

「……………本当に合ってるのかしら?」

土地勘も何もなく、取り敢えずREDさんを先頭に置いた私達は前に前にと進んで行きます。

途中、ゾウっぽい見た目のドット絵な姿の『ゾウベーター』や、鈍色で丸い、真ん中に黒いラインが入った『ビット』等のモンスターさんに襲われていますが、それらをどうにか切り抜けながらなので、どうしても多少は時間が掛かってしまうのですが……………幸いにも、モンス

ターさんの数が少ないので何とかなっています。

「……………っ?! 止まって!!」

「え……………キユ〜」(バタン)

「ちよ……………ネプギア?!」

唐突に目に入った凄惨な光景に、思わず私の意識は飛んでしまいました。

……………やっぱり、慣れないよ……………お姉ちゃん(ガクツ)

## 第十八話 改善後

ミッドカンパニーの通路半ばにして、運良く冒険者（漆黒人機軍に勧誘したら日本一と言う黒いライダースーツを着ている紺色の髪をしたヒーロー志望の《少年》が新たに入団したので、新たに《魔勇士》のコードを与えて銀に任せた）の救助によって脱出に成功していたユニ達と合流した私達は、ユニを除けば比較的情報の整理が巧いだろう『プラネテューヌの諜報員』アイエフからミッドカンパニーの外で詳しい話を聞き、情報の確認を行っていた。

「……成る程、それで無事だったのか」

「ええ……所で、アナザーの奴はやっぱり……」

「ああ、お察しの通りとだけ答えておこう」

そう、私が答えると、アイエフは頭痛を堪えるかのように、双葉のリボンがトレードマークな茶髪の頭を抱え始めた。

まあ、それも仕方がないだろう。詳しい被害を確認した訳ではないが、アナザーがミッドカンパニー入り口で犯罪組織相手に叩き出した大規模な破壊活動を見た私としては、同情の念を禁じ得ない。

「……………」（ムスツ）

しかし、私としてはプラネテューヌの女神候補生一行以上に、我が至高の女神の妹御の機嫌を損ねてしまっている事の方が何億倍も重要な事である。

（……………ふむ、一体何が原因で機嫌を損ねてしまっているのだろうか？）

最悪な事に、思い当たる節が欠片も存在しない。

我が至高の女神が妹御を非常に大事にしていたのは周知の事実であり、もしも知らぬ間に妹御を傷付けていたのだとしたら、我が至高の女神からの失望は決してあり得ぬ未来ではない。

もしもこれが基で怒りを買ひ、死を命ぜられたならば私は喜んで死ぬ。元よりこの生涯は余生のようなモノであり、私は至高の女神に仕えたその時から命も能力も何もかもを我が至高の女神ノワール様に捧げているのだから……………

だが、失望されて他国に鞍替えさせられる事だけは断じて避けねば



ならぬ。それは、我が忠義にとつて最悪の結末と言えるだろう。

「……………（……………分からぬ。一体私は捕虜になつて疲れているだろう妹御にどのような失態を犯したのだ……………!!）」

「……………（……………後々、国際問題になつたりしないわよね？いや、冗談抜きに……………）」

「……………ム……………!!（何でアイツはアタシには何にも聞かないのよ……………!?アタシだつて当事者の1人なのよ!!）」

そして、気が付けば私は隣のアイエフと一緒に頭を抱えていた。

そんな入り口のほのぼのした雰囲気と反比例するかのようには、ミツドカンパニーの奥地での空気は最悪の一途を辿っていた。

「アアアa a a a a A a A a A a A a A ああアアア!!」

「ギャハハツハハアアアア!!!!良いね良いねエ！最ツ高じゃねエかアア!!」

「……………最上位爆裂魔法」

「ぎゃああああ!!?!危な……………危な!!?!」

紅い血の障壁がアナザーとイヴェルトを覆う中で、暴走するアナザーがイヴェルトを殴り、イヴェルトは深紅の血に塗れながらこれまでの人生で殆ど負った事がないダメージに歓喜して殴りかかり空振っている。

そして、紅い壁の外からイヴェルト諸共に最上位爆裂魔法でアナザーを爆殺しようとして、殆ど効果がない魔法を撃ち続けるアレキスト……………と、同様に壁の外で逃げ遅れて右往左往しながら戦いの余波で吹っ飛ばされたり降つてくる資材を避けたりしながら必死に逃げ回り続ける下っ端は……………意外としぶといので、もしもこ戦いが終わった後に生きていれば、囚役兼肉壁求むアレキストやイヴェルトから地獄の鬼や獄卒も真つ青な修練を課される事だろう。アーメン

……………まあ、そんな事はギョウカイ墓場の隅にでも棄てておいて現在、犯罪組織の手で要塞として改修までされたミツドカンパニー





視界が雷撃魔法によって空けられた孔から見えた紅い塊の中身である血塗れた悪鬼が煙を上げながらもダメージが見られない無傷な姿を収めて、私はショックからそのまま防衛魔法以外の全ての魔法の行使を止め、呆然自失としていたのだった。

——回想終わり——

「ギャハハ……ゴフツ……ま、だ……まだア……!!」

「A a a a a」

「……………潮時か」

どうにか俺が私を取り戻した時には、既に戦いは紅い化け物の優勢で決まってしまうていた。

先程空けた穴から見えた限りでは、全身から血を流していたイヴェルトの状態を見るに自力での逃走は不可能だろうし、そもそも転移魔法自体が発動に数秒程の時間が必要なのだ。

その隙を餌も無しにあの紅い化け物が見逃すとは思えない以上は、紅い化け物の領域に取り込まれているイヴェルトを助けている余裕など存在しない。

幸いにもイヴェルトは頑丈なので後数分なら持つだろう。

ならば、囷として紅いナニかの内部に居るイヴェルトを盾にしつつ下っ端を回収して逃走するのが現状での最善手か？

そう、逃走の手段を考えていた私だったが——

「ふむ……妙に帰りが遅いと思えば、このような状況になっていたか」  
(……………神はまだ私達を見棄ててはいなかったらしい)

巨大で重厚な純白のボディを見付けた私は、大して信じていなければ、恐らくは破門されているだろう故郷の女神ホワイトハートでもなく、ましてや原作を見た限りでは信者に破滅は与えても絶対に恩恵は与えないだろう犯罪組織の神である犯罪神マジエコンの事を思い、皮肉にもそんな事を考えていた。

## 第十九話 改善後

「ふむ……妙に帰りが遅いと思えば、このような状況になっていたか」  
ギョウカイ墓場より、厄介なラストイションの英雄と教祖を潰そうと女神候補生達を人質にミッドカンパニーに立て籠った同僚達の部下達の帰りが余りにも遅く、犯罪神様のシエアの恩恵を与える為に刻まれている刻印が危険な信号を発している事を察知したマジックより仲間の救出作戦が出され、直属<sup>我が</sup>の部下<sup>盟友</sup>共々転移魔法でミッドカンパニーに転移した俺達は、道中で散々見た仲間の無惨な死体と、恐らくはその仲間達から何等かの手段で搾り取ったのだろう紅い血の塊が、ボロボロの状態で気絶しているイヴェルト<sup>ジャッジの部下</sup>を取り込み、その付近では息が上がっているアレリスト<sup>トリックの盟友</sup>と………仲間の構成員の疲弊し切った姿を見て、死者を冒瀆するかの如き余りの惨劇に激しい怒りを憶えたと共に、1人でも多くの仲間が無事であった事に俺は喜びを禁じ得なかった。

「勇者様、わたくしはどのようなにしましょうか？」

「いや、俺は勇者ではないのだが……まあ、いい。生き残った仲間達に治癒魔法を掛けた後に、お前達は我等が家であるギョウカイ墓場に帰還せよ」

「Yes. Master……仰せのままに」

長い白髪を靡かせながら俺の肩から飛び降り、汚い大人達の身勝手な都合によつてボロボロな筈の病身を共に目指す理想の為に押し、その小柄な身体を緊張からか震わせながらも仰々しく礼をしてきた相棒に俺は苦笑し、非常に複雑ながらも嬉しく思うが……

「……俺としては、もう少し砕けた感じで接してくれた方が嬉しいのだが？」

「とんでもありません！わたくしはブレイブ様に救われたのです！その大恩を無かったかのような振る舞いは、わたくしにはとてもとても」

「そう……か……無理はするなよ？つと言つても、お前は聞かないのだろうか……」

「当然です！では、わたくしは皆様を救助して帰還致します……勇者様も、わたくしが戻るまでは必ず無事でいてください」

そう言って、直属<sup>我が</sup>の部下<sup>盟友</sup>リリスは傷付いた仲間達の元へと向かって行った。

……まあ、流石に紅い血の塊に取り込まれたイヴェルトはリリスではどうしようもないのだが、そこは俺が努力すべき所だ。

「ふむ、存外に空気は読めるのだな？……否、獣並みの頭だからこそ彼我の実力差を弁えていると言った所か？」

「GURAAAAAアアアアアアアアアアアア……！！」

目の前で姿形を様々な形状へと自在に変化させ、まるで流体そのものが意思を持ったかのような動きを見せる仲間の血で造られた紅い塊は、獣型や竜型モンスターの呻くような声をその中心部から響かせながらも、周囲に散っていた無数の細かい血液を浮上させ、その形状をまるで針のように、細く鋭く変化させていった。

それらの針は、俺にとっても当たればそれなりのダメージを覚悟する必要があると感ぜられる。

「……成る程、侮辱を理解する程度の頭は有ったようだな？だが、所詮はその程度……か」

「G a A a a Aアアアアア嗚呼ああああ a a a A A A A A A A 亜鏢 亜鏢 a a a a a !!!」

狂ったような絶叫を上げながら突撃して来た紅い血の塊は、背後に展開した血の針と共にその巨体からも無数の血を弾丸のように射出してくるが……

「なんの！これしきの事、大した事ではないわ!!」

「A A A A A A 亜鏢 a a a a Aアアアアア嗚呼ああああ a a a a !!!」

確かに、現状使えるのがこの剣一本しかない俺にとって広範囲攻撃は鬼門だ。しかし、物事には限度と言うものがある。

こいつの攻撃はそもそも遅過ぎるのだ。如何に俺のボディを傷付ける威力を持つが、そもそも当たらなければどうと言う事はない。

飛んで来る無数の血の針と弾丸を、俺達に当たりそうなものだけこ

の愛 ブレイブソード 剣で時に弾き、時には斬り捨てて粘りながら、俺は転移魔法で脱出しようとしている背後の仲間達の気配が消えたのを確認した。

「今度はこちらから行かせて貰う！俺の仲間はず返して貰うぞ!!」

呻くこやつに突撃した俺は、先程よりも多少はサイズが削れた紅い血の塊から、イヴェルトを救い出す為にブレイブソードを構えて斬り掛かった。

【おやおや、この状況は少し拙いかな?】

『イタ痛いアア嗚呼ああ a a 亜亞鏢吾 a a 吾 a a a?!?』

極光の中で、漆黒の闇よりも尚、深く暗い闇の球体は、分体の1つから送られて来た光景と紅い塊と化したアナザーの莫大な負の思念を確認し、次の手を思考する。

『半宰紫N認m絵亡i滅suメツス滅州滅SU琉ウウウウウウウウウ!!?』

【あの子を直接制御するのは……流石に暴走が激し過ぎて、『今』の俺アタシには不可能でしようし……】

とは言え、どうにかしない事にはどうしようも無い状況である事には代わり無いのだ。

ただ単純に、現状では手立てが殆ど残っていないだけで

『勇イブ負冥イイ尹イイイ異いいい!!?』

【まあ、最悪の場合は——の俺アタシに——かな?】

そして、俺アタシは暴走するあの子とブレイブ・ザ・ハード役立たずな駒の駒の激突に対処する為に行動を開始した。

『いぎッ?! 異偽亜亞鏢吾 a a 吾 a a アア嗚呼ああ a a 亜亞!?!?』

【全ては大願成就を成す為にと……】

最後に、そんな不吉な言葉を残しながら——

【あ、今斬り飛ばされた肉片が飛んでった……ブレイブ・ザ・ハード役に立たない駒から生まれた役に立つ駒 G J! 取り敢えず時空間から切り離して鮮度も状態も最高の状態にして永久保存しないと……!!】

.....  
不吉な言葉（意味深）を残しながら――







白い鉄腕は回収して行った。

「さて、ここからが本番だ！覚悟するがよい!!」

『子寝紫植師子紙涅氏音死煉重枝獲餌依慧衛娃依子!!!?』

認めない。断じて認められるものか

何故、俺が犯罪神本体なら兎も角、こんな——この程度の、■にも■にも行けないようなどっち付かずな半端者の端末<sup>四天王</sup>一体に負けなければならぬ?!

「オオオオオオオオ!! 餓えず！ 渴かず!! 無に還れ!! ブレイブソード!!!昇華!!」

「名瀬奈是那世南豺何故拿攻納皆蛇亜唾吾蛙充嗚呼!!!??」

しかし、何れ程憤怒を滾らせても、埋め難い程の膨大な力の差はどうしようもなかった。

<sup>不快感の強い塵芥</sup>白い金属塊が振るう焰を纏った大剣から飛んで来た焰の斬撃は、咄嗟に防御に回した血の壁の9割を蒸発させ、俺の肉体を腹部から横一文字に斬り裂いた。

『グッ……アアア……』

何故だ!? 何故攻撃が効かない!? 一体、■▼●◆▲の??↑となにが違う!?

……いや、待て

違い? 一体、何が違うと言うのだ?

そもそも、目の前の<sup>不快感の強い塵芥</sup>白い金属塊とは何時戦った?

……思い出せない。分からない。しかし、ナニかジュウヨウナジヨ

ウホウガ——(ザザツザザザ……)【はいはい、お前はもう少<sup>アナタ</sup>

し後に全てを悟<sup>塵芥</sup>つてね? じゃあ、オヤスミナサイ】——

そんな思考に急なノイズと意味不明な幻聴が混ざると、俺の意識は腰から上半身と下半身に別けられる程の大きなダメージからか、急速<sup>極光</sup>に暗闇の中へと沈んで逝った。

——なあ、結局、オレハドコデマチガエタ? 『◆◆◆◆?』?

(……ふむ、存外にあっけなかったか?)

俺は、自分自身でも慢心のように思うが、この結果にはそう思わずにはいられなかった。

勿論、目の前のコヤツに対して過小評価したつもりはないし、油断したつもりもない。寧ろ、結構本気で怒っていたので全力を以って叩き潰した程だ。

しかし、実際に蓋を開けてみれば紅い怪物の正体であるコヤツは俺に傷一つ付ける事も出来ずに、こうして倒れ伏している。

(これは……やはり、犯罪神様のお力がそれだけ強大だと言う事なのか?)

俺自身も不思議に思うが、コヤツを見ていると不思議と本能が身構える。

初対面で間違いはなかったのだが、戦いの最中も不思議とコヤツのやる事が頭に入ってきて来るのだ。

丸で、焼き直したテープを再生するかのよう――

「GURU……Guraaaaa……」

「つ?!コヤツ、まだ生きて……!?!」

俺は、何故か未だに生きているコヤツに止めを刺そうとブレイブソードをコヤツの頭に振り下ろすが……

「……何のつもりだ?マジック」

「……………」

それは、突然現れたマジックが、愛用の戦バトル鎌サイズで防いでしまい、不発に終わるのだった。

## 第二十一話 改善後

「……何のつもりだ？マジック」

「……………」

突然現れたマジックは、マジックにとって神器である戦バトル鎌サイズを用いて、敵である筈のコヤツを護る為に俺のブレイブソードを止めた。

その行いは当然、犯罪神様を裏切る行いであり、如何に四天王のリーダーと言えど、到底赦される行いではない。

「……………」

「どうした！何も言えぬと言うのか!？」

そうしてマジックを問い詰めると、溜め息を吐きながらも重々しく口を開き……

「…ハア……犯罪神様より『この者を次の器に』と神託が下された」

「……なん…だと……………」

信じられない内容が飛び出て来た。

無論、犯罪神様や仲間を疑う気はない。だが、これは……………

「何かの間違いではないのか?」

「……………私が犯罪神様からの御言葉を聴き違える?」

「……………いや、そう言う訳ではない。些か信じ難い内容だったものでなそう、俺1人で潰せる程度の雑魚を器にする等と……………どのようなお考えの基でそのような結論に至ったのかは知らぬが、何れにせよ俺には理解出来ない事に代わりはない。

そのような考えがマジックに伝わったのか、更に補足が加えられた。

「……………安心しろ。犯罪神様も弱者を器になどはしない」

「と言うと?」

「この瀕死の状態から生還し、このまま強くなれば、との事だ」

「……………成る程、将来性に期待しての話であったか」

納得の話ではある。

だがしかし、それは逆説的に犯罪神様と並び得るだけの潜在能力がコヤツに秘められていると言う事ではあるまいか?

(ならば尚の事、今この場で仕留めておくべきではあるまいか……?)  
「……ああ、それとだ」

ブレイブソードの柄に加わった力を見咎めながら、マジックは思い出したかのように口を開き始めた。

「犯罪神様はこうも仰っておられた——『我が器候補を器として覚醒させ、献上した者の願いを1つだけ叶えよう』——とな」  
「……………っ!?!」

その言葉に、俺の心は大きく揺れ動いた。

犯罪神様のお力は強大だ。それこそ、我ら四天王では出来ない事であろうと、犯罪神様のお力添えさえあれば、大抵は叶ってしまう程に……

そう、子供達の幸福も、相棒を蝕み、今もなおその命を削り続けている病の完治も、犯罪神様のお力があれば十分に可能ではある。

しかし、叶うのはどちらか一方のみ

(……………俺は、どうする? 一体、どちらを叶えたい?)

これが両方共に叶うのであれば、こうも悩みはしない。

しかし、叶うのは一方のみ……その事が、俺を苦悩が苛んでいく。

「……………帰るぞ」

「……………ああ、そうであるな」

そして、願いを叶えると伝えられた時に俺の脳裏を過つたのは果たして一体どちらだったのか……俺には結局分からないままだった。

「……………g i ……グア……」

【ダメージ大

損傷率……不明。しかし、上半身と下半身が切り離された事によって失血死の可能性が大

パッシブスキル:『生命維持:流血』を発動

肉体の周辺に残存する全血液を支配、それに伴い操作を開始【

「ガフツ……」

理解出来ない  
不明である……一体、何が遭ったのだろうか？

何時の間にか、気が付けばどこぞの工場の中に居た俺は、かなり鋭利な刃物で一刀両断にされただろう身体を見て、訳が分からないと言  
う思いで溢れていた。

（確か、俺は犯罪組織にとつ捕まったネプギア達の救助にミッドカン  
パニーにまでやって来て………それから、どうなった？）

思い出せない。何かが突然、俺の意識を侵蝕したかのような……い  
や、どちらかと言えば、不快な力の波動を感じたような……

（……一体、何が遭ったと言うのだ？）

その思考は、静まり返った工場にネプギア達が現れるまで続いた。

どうやら、俺は相当酷く暴走していたらしく、出口にまで運ばれる  
最中でも、ミッドカンパニー内部は大量の死体と光に分解されかけて  
いる機械系モンスターを中心としたモンスターの死体が散乱し、出入  
り口では扉が拳大の痕を中心に、まるでティッシュのようにグチャつ  
と潰れていた。

恐らく、暴走が原因で記憶が曖昧なのではないのかとの事だったが

……

（しかし、俺の記憶が曖昧なのは、本当に暴走した事が原因なのか？）

その辺の記憶も無い以上は、どうしようもない事ではあるが  
………一体、どうなっているのだろうか？

………因みに、これは完全に余談だが

この後、滅茶苦茶アイエフに怒られた。

光に包まれた闇の中で、黒い影が蠢き続ける。

【本当に、今回ばかりは焦ったな】

その影は、汗を拭く真似のような動作をしながら、誰に聞かせる訳  
でもなく、ただ独りで光に覆われた闇の中で呟いた。

【しかし、確かにあの子を生かせと命じたけど……まさか、あの使えな  
い駒、俺アタシからあの子を……】

そうして、黒いナニかの動きが数瞬だけ止まると、そこから堰を切ったかのように激しく燃え盛る。

「アハ……アハハハハハハハハハ!!!あの使えない駒が!!あの子を俺アタシから奪う?アハ♪……潰してやる!滅却してやる!!引き筆つて最後の欠片になるまでバラしたらもう一度あの悪夢と絶望の狂気を骨の髄まで……イエー!魂の髄まで叩き込んでやる!!!」

そうして、激しく暴れ、周囲の光を喰い破ろうと暴れ出した闇だったが、暫くすると、急に大人しくなった。

「……………そう、貴様は、そうまでして俺アタシを阻むんだな」

そうして、一旦元の立ち位置にまで戻った闇の塊は、何処までも冷めた冷淡な声で言い放った。

「なら、この気色悪い極光の中から魅せて貰おうじゃない。あんな劣化品女神如きになにが変えられるのか……400年前の女神塵芥の焼き直しにならなきゃいいけど」

そう言つて、極光に抗い続けた闇は、中心にある闇の中へと潜って行った。

「…………アツハ♪そうね。取り敢えず、新しくいっぱい手に入れたあの子の写真や吐息や足跡や肉片に雑じりつ気のない純度100%の血や唾液etc.でも整理して並べ直すとしましようか」

「……………(汗)」

……………潜って行った。



## 第二十二話 改善後

……………頭が痛い。

それが、ミッドカンパニーから助け出された私達の感想だった。ラステーションに助け出されてから暫く、獣か何かの雄叫びみたいな咆哮が響き続けていたミッドカンパニーが静かになったので、状況を探る為に漆黒人機軍の人と協力してミッドカンパニーを探索し、奥地で何故かプカプカ浮いてる下半身がないアナザーが見付かった。

訳が分からないけど、これで詳しい事が解ると思いい、近くに在った下半身をどうにかくっつけようとしながらお説教混じりに色々と問い質した訳だけど……………

「……………本当に、何も憶えていないのか？」

「ああ、さっぱり全く分からない。と言うか、どうして俺は腰から叩き斬られてるんだ？」

「いや、知らないから」

……………これだ。

どうにもミッドカンパニーに辿り着いた辺りから記憶がないらしくて、一体どうして上半身と下半身が腰の辺りから斬り別けられてるのかとか、そもそも何があったのかとかが全て謎になってしまった。

因みに、ネプギアはバイオレンス過ぎる光景（下半身がないアナザー）を見てまた気絶したわよ。私？……………この位で気絶してたらキリがないわとでも言っておこうかしら（震え声）

（……………と言うか、どうして上半身と下半身が別れてたのに生きてるのかしら？）

「ふむ……………まあ、先にお帰り戴いたユニ様と、捕らわれた女神候補生一行が無事だっただけ良しとしよう。漆黒人機軍、撤収だ！」

『Yes, sir!』

そう言つて、漆黒人機軍の面々は、ラステーションの方角へと撤退して行った。

……………グロウ以外

「……………さて、これからの方針についてだが」

「ああ、そう言えば、お前も付いて来るんだっけ？」

「うむ、その事だが……」

(……………なんだがさらっと私達の同意もなく話が進んでいる気がするけど、実力は私達よりも上みたいだし、仲間になってくれるなら心強いから、一旦スルーするわ)

実際、感じる気配からして私とコンパが束になっても勝てないでしょうし

……………そう思っただけで、事態は結構ヤバイみたいで……

「すまんが、私はこれからこの事件の隠蔽と捏造に掛かりきりだろう。暫くは傷や疲れを癒す為に逗留してくれても構わぬが、仲間になるのは当分不可能だ」

「……………そうか、好きにすればいいと思うが」

(……………あー、それもそうよね。確かにこれは拙いわ)

記憶が無いアナザーは理解していないようだけど、確かに今回の戦いはやり過ぎてたわね。

幾ら女神を人質にしたから言っただけで、女神様一行のメンバーが犯人グループ相手に降伏勧告も無しにいきなり大虐殺をやらかすのは……あまり褒められた事じゃないわ。

(……………まあ、とっ捕まってた私達が言えた事じゃないんだけど)

幾らアナザーだって、せめて私かコンパのどちらかが居ればまだ暴走なんてせずに言う事を聞いてくれてたでしょうし

ただ、この事実が大々的に漏れると一般人から非難轟々で女神のシェアが大暴落するのは目に見えているわ。

実際、犯罪組織の構成員とは言っても、元は一般人が近年の貧困から抜ける為に犯罪組織に入ったって人も大勢いるだろうし……………まあ、幸いにもミッドカンパニーに配置された敵の大部分はここで始末した訳だし、後は現場を秘密裏に処理すれば……………まあ、大丈夫でしょう。多分

「私としては、ルウィーよりも先にリーンボックスの女神候補生に協力を仰ぐ事を奨めよう。もしも先にリーンボックスへ向かうのなら、私の方からも向こうの教祖へ根回しをしておく」

「……………」

「……確かに、それもそうね」

気絶したネプギアを背負った私を見てリーンボックス行きを勧めてくれたグロウの言う通りかもしれないわね。

アナザーは物凄く嫌そうな顔をしてるし、今回は私達にも問題があったにせよ、流石に次暴走されたら私達じゃあ手に負えないわ。

「あのく、なんでリーンボックスなんですか？」

「ああ、コンパは知らないのね」

まあ、この辺の情報はある程度の立場や許可が無いと閲覧できないし、コンパが知らなくても無理はないか

「ふむ、では後日、資料を届けさせよう。暫くはラスティシヨンの教会でゆるりと休むがよい」

「私の方からも簡単になら説明しておくわ」

「そうしておいて貰えれば助かるな」

「アイちゃん、ありがとうございます」

「いいのよ、気にしなくて……資料を見た方が詳しく書いてるんだし、本当に簡単な概要を教えるだけなんだから……それじゃ、教会へ向かうとしましょうか……………」

教会へ向かおうとした私は、よくよく考えたらこのままじゃあ街に入れない事に気が付いた。

「所でアナザー、アンタはどうするの？」

「……………何がだ」

「いや、万が一応急処置した下半身が街中で取れたら大騒ぎになるわよ」

「……………」

私がそう指摘すると、アナザーはちよつとポカーンって顔をしてすっかり忘れてたと言わんばかりに頭を抱え出したわ。

「一応、この場でも大量の血かそこそこ強力な回復魔法を掛ければ修復は可能だが……………出来るか？」

「悪いけど、私はそこまで強力な回復魔法は使えないわ……………コンパはどう？」

「ごめんなさいです。わたしもまだ、そこまで強力な回復魔法は使えないです」

(本当ならREDにも聞いた方が良かったんですけど、話が意味不明な方向に拗れる気がして、先に帰ったユニに付いて行つて貰つたのは早計だったわね)

多少は後悔してるけど、もうどうしようも無いわね。

仕方なく、私とアナザーでちよつとモンスター狩りに行つて血を集めようかと思つた所で、グロウからこんな提案があつた。

「二応、そこに装甲車を用意してある。教会に帰ればラステイションで指折りの治癒魔法使いも詰めている筈だから、そこで治して貰うが良い」

「そうね。それなら下半身が街中で取れても騒ぎにならないでしょうし、そうしましょうか……いいわね？アナザー」

「……………ああ、別に構わん」

「では、付いて来るが良い」

こうして、ラステイションの教会までグロウが用意していた装甲車で向かい、教会に詰めてるつて言う治癒魔法使いの手でアナザーの上半身と下半身は再度くつついた訳だけど……………結局、アイツの上半身と下半身をあんな風に叩き斬つた犯人は判らないままだった。

けどまあ、よつぽどキレイにスパツと斬れていたらしく、くつつけるの自体はそこまで難しくなかったのは、唯一幸いと言つてもいいんじゃないかしら？

正直、一緒に旅をするのにデュラハンみたいなのと一緒つて言うのは流石にちよつと困るし……………まあ、この場合は首なしじゃなくつて腰なしなんだけど

(……………腰なしつて、腰抜けみたいでそれはそれでなんか嫌な表現ね)

「……………う、ううん……」

おつと、ネプギアが気絶から回復したみたいだから、ここで私の視点は終わりよ。

……………でも、トラウマになってなければいいんだけど

「……う、ううん……」

「……ここは？」

「確か、私は……うっ!？」

「うえ……」

「思い出しました。」

「確か、私は……」

「ちよつと！大丈夫なの？ネプギア!!」

「だ、だ、い、じ、よ、う、ぶ、で、ず」

「いや、全然大丈夫そうに見えないから！ほら、エチケツト袋」

「あ、り、が、と、う、ご、ご、ざ、い、ま、す」

「気持ち悪い……それだけが、今の私を支配する唯一の感情でした。」

「大丈夫なの?」

「……うつぶ……はい。なんとか」

「とにかく、無理しちやダメよ。なにか食べたいものはある?して欲しい事は?」

「……あの、少し、話を聞いて貰ってもいいでしょうか?」

「ええ、いいわ。何の話?」

「はい……」

「——これまで私は、言っではなんですけど結構いい暮らしをしてたんだと思います。」

「候補生とは言え、同じ女神が絡まない限り滅多な事では死なない——いいえ、殺されない力を持った身体と、生活に困る事は無いだろう環境」

「勿論、危ない事は在りました。」

「でも、お姉ちゃんに助けて貰ってどうにかなっていたので、死ぬなんて思いもしなかったし、犯罪組織が台頭して守護女神戦争が中断になってからは、ますます死ぬなんてあり得ないなんて思いは強くなっていたんです……勿論、犯罪組織の四天王の人にあっさりべられた」

お姉ちゃん達を見て、死ぬなんてあり得ないなんて思いは恐怖に取って代わられてしまいましたけど

ただ、アナザーさんと再開する直前に遭遇したあのおかしなフェンリスヴォルフを倒してからは、お姉ちゃん達の敗北あんな光景はただ少し油断があっただけで、シエアさえ戻ってくればあり得ない……………心の何処かに、まだそう言った慢心のような考えがあったんだと思います。

そして、そう言った考えは、下半身が斬り離されていたお姉ちゃんと同じかそれ以上に強い人アナザーさんを見た時に、全て砕けました。

正直、言つてはなんですが、アナザーさんの事は苦手です。

何時もムツとして怖い顔だし……………モンスターは倒せたのにキツイ事言われた事もあるし

けど、ハード守護女神戦争戦争が中断されて数カ月の間、お姉ちゃんと一緒に各国を回つたアナザーさんの戦いを見て、この人は何が遭つてもまらず死ぬ事はないんだらうなって思ったんです……………思つて、いたんです。

「あつはは、こんな話なんてされても困りますよね……………ごめんなさい。少し、1人にして貰つてもいいですか？」

「……………ええ、分かったわ」

私がそう言うと、アイエフさんはお部屋の外に出て行つてくれました。

それを確認した私は、お布団を頭にまで掛け直して、アイエフさん人の前では抑えていた感情が堰を切つたように溢れて来ました。

「うう…怖い……………怖いよお…お姉ちゃん」

—— 助けて、お姉ちゃん

## 第二十三話

「くあ……やっとなんか治ったな」

ラストイシヨンの教会に着いてから数時間、当初は直ぐに治るなどと嘯いていた治療だったが、思いの外難航してしまい、結局あれから8時間も掛かって漸く、何時の間にか斬り別けられていた下半身と上半身が治ったのだった。

結局、あれから一晩中起きていたので眠くて仕方がない。

しかし、まだやる事がある以上は呑気に眠る訳にもいかんか

……………

「ゼエ……ゼエ……アンタ、どんだけ魔法抵抗力が高いのよ！」

「ハ……雑魚が、お前が弱過ぎるだけだ」

「ムツキー!!人を!!しかも乙女を一晩中付き合わせといてその態度は無いですよ!!その態度は!!」

……それに、近くで息を荒くして喚く乙女(笑)が五月蠅くてとてもではないが眠れそうもない。

一瞬、血を搾り取ろうかを迷ったが、現状でこんな雑魚一匹の為に態々ラストイシヨンに喧嘩を売る気はない。面倒だが、殺した方が面倒なのだし放置しておくか……ウザイが

「キーキーと喧しい虫けらだな。いつその事治療師など辞めて音響系の魔術師にでもなったらどうだ？」

「余計なお世話よ!夜更かしや徹夜はお肌に悪いんだからね!!」

そうして、近くでキーキー喚く治療師雑魚の発する雑音に耐えていると、扉からノックの音が聞こえてきた。

「あーもう!今度はなによツツ?!?!」

「早朝から失礼、緊急の話があって訪ねさせて貰ったのだが……お邪魔かね?」

「……………何の用だ?俺も暇だ「はくい!何の御用でしょうか?治療がご入用ですか?はっ?!まさか何処かお怪我でも!?早速治療致しますので、脱いでください!!さあ!さあ!!」……………なんという変わり身の早さだ」

「いやなに、すまないが彼の方に用があつてね。後でまた訪れる故、少し待っていてはくれぬかね？」

「は〜い♪……………あの方に無礼を働いたり私の素を話したりしたらブツコロスからな？」

最初は少しドスが効いた声で返事をしていたのに、入って来たのがグロウだった事を知ると、もの凄い勢いで変わり身を発揮し気色悪いぐらいの猫撫で声を発した雑魚<sup>治癒術師</sup>だった。

と言うか、さり気にもその媚びたような笑みはそのままにして小声で脅迫までしてきた辺りに清々しさを感じた。

「……………まあ、いい。移動しながらで良ければ聞こう」

「うむ、それで構わぬよ」

「またのおこしをお待ちしていま〜す♪……………今度は、グロウ様が怪我して来ますように（ボソツ）」

最後に不穏な事を呟いていた治癒術師<sup>雑魚</sup>を努めて無視しながら、俺はネプギアの気配がする辺りまで歩き出した。

そもそも、色々（誘拐とか）遭つてすっかり忘れていたが、今回のラステイション訪問は各国の実力者の勧誘とゲームキャラの確保ないし保護の前座だ。

それを終わらせない事には、リーンボックスにもルウィーにも行けない。

「それで？何の用だ……………言っておくが、あまり時間はとれんぞ」

「ああ、私の用件だが……………まあ、ネプギア殿の元に向かうならば、共に聞くが良い。彼女にも関係があるのでな」

「ふーん……………別にいいが、邪魔だけはするな」

結局、一体コイツは何の用で来たのか分からないままだが、別に興味もないからどうでもいい。

……………ああ、ちょうどいいか

「所で、ゲームキャラの居場所は知っているか？」

「うん？無論、知っているが……………まあ、暫し待て」

そう言つて、グロウはネプギアの気配がする方向へと足を進めた。

当然、俺もネプギアに用があるので、グロウの後を追う形になつて



しまったが、ネプギアの気配がする方へと向かって行った。

ミッドカンパニーに起こった惨劇の隠蔽と処理を終えた私は、治療師のステファニー女史が詰めている保健室（正式名称は集中治療室だが、ステファニー女史の要望で保健室と呼ばれる事が多い）に向かい、アナザーの行き先を聞こうとしたのだが……………

「……………なんだ？」

「いや、なんでもないと」

「ふーん……………」

どうやら、ステファニー女史は私がアナザーに用があると察して引き留めてくれていたらしく、アナザーは保健室に滞在していた。

私は、ステファニー女史の評価を二段階程上げて感謝し、今度ボーンナの支給でもしようかと考えたが……………まあ、今は目の前の事案であるな。

どうやら、アナザーは……………と言うよりは、ネプギア殿一行はラステイションのゲームキャラに用があるらしい。

……………まあ、ネプギア殿一行がラステイションで聞き込みをしていたのを漆黒人機軍の一般兵が察知していたので、神宮寺教祖共々知っていたが

神宮寺教祖は、この情報を元になにか女神級の者が必要な難題をやらせようとしていたらしいが……………私としては、別にくれてやって構わんとさええ思う。

無論、ゲームキャラ自身が拒否すれば話は別だが、そこまでは私も知った事ではない。

「ネプギア！居るか？入るからな！」

「ちよ……………?!」

……………済まぬが、ネプギア殿の部屋に着いたようだ。

故に、私の視点はここまでとさせて貰う。



## 第二十四話

……………現在、俺は黒っぽいのに何故か豪奢だと感じるラスティシヨンの説教部屋（懺悔室はなんか嫌）に居る。

何故か？……………決まってるだろうそんなもの

「まったく！前にも人の……………特に、女の子の部屋に入る時は必ずノックをしなさいって言ったわよね？」

「いや、ノックはしたぞ？声もかけたし「黙らっしやい!!」……………」  
「そうですよ？あなざーさん！ちゃんと反省するです！」

……………コンパとアイエフに説教されてるからだよ。

確かに、ネプギアにはちよつと悪い事したかなとは思うが……………何故興味が無いものを見せられてこんな長い時間をクドクドと説教部屋に押し込まれて説教なぞされねばならんのか……………と言うか、確かに女神だけあって整ってはいるが、幾らなんでもこの歳<sup>4</sup><sub>1</sub><sup>5</sup>にもなって10代相手に発情する程色に呆けてはいない。

人間的に例えるなら、幾らキレイでも可愛くても2歳のガキ相手に発情するのかつて話だ。もう少し成長<sup>歳</sup><sub>喰って</sub>してから出直して来い。

……………いや、そう言えば前にルウイーには7歳か8歳辺りの容姿をした女神候補生や同じぐらいの人間のガキ相手に発情のような反応をしている変態<sup>ロリコン</sup>が大勢居るとか噂で聞いたような……………？

「聞いてるですか？」

「あーはいはい。聞いてるよつと……………と言うか、こんな時間があるなら鍛錬の一つでもしてた方が建設的だと思いが……………」

『なにか言った／いましたか？』

「なんでもない……………ハア」

これは、相当長引きそうだった。

……………本当に、何故こんな無意味な時間を過ごす破目になっっているのだろうか？

(……………俺<sup>吸血鬼</sup>やネプテューヌ<sup>女</sup>と違って、お前<sup>人</sup>らは有限なのだろう？なのに何故、こんな無意味な時間の使い方が出来る？……………有限だからこ

そ、時間は有効に使うべきだろうに)

「今度からちやんとドアを開ける前はノックをしてから了解を取って入る事!良いわね?」

「後、声を掛けるのも忘れちゃダメですよ!」

「はいはい……………ハア(訳が分からん)」

本当に、勘弁して欲しいと心の底から思った。

教会の最上階にあるアタシの部屋にまで聞こえるすごく大きな悲鳴を聞いたアタシは、悲鳴の中心らしき現場に急行したんだけど……………

「……………ここ、ネプギアの部屋よね?」

現場は、グロウから聞かされてなんとなく(なんとなくよ!なんとなく!)憶えてたネプギアの部屋だった。正直、結構気まずい。

ここはお姉ちゃんの教会なんだから本当なら気にする事なんてないんですけど……………

「合わせる顔があるの?あんなに大見得切ったのに?」

……………ムリムリムリムリ!会える訳ないじゃない!!ネプギアが頑張ってあんなの相手に稼いでくれた時間を、油断して不意討ち喰らって無駄にしたのよ?アタシ

「……………でも、あの悲鳴はネプギアのじゃないかもしれないし……………うん、きつと偶然違う人が入っちゃって、クモか何かでも見ちゃって悲鳴を上げちゃったかもしれないのよね?」

……………でも、ほんとにネプギア達が居たらヤだし……………って!?

「あーもう!どうしてアタシがここでこんなに悩まないといけないのよ!!こうなったr『ユニちゃん?居るの……………?』」

……………居た?!居たの!?!こうなったら最終手段、居ないフリを——

『……えっと、そこに居るんならだけど、少し、相談に乗ってくれないかな?』

「え……ええ、いいけど」

………しまったああああ!! うっかり反応しちゃった!? ヤバイ………これ、もう居ないフリとか無理があり過ぎるじゃない?!?!!  
もう、こうなったらヤケよ! 女は度胸! 気まずいとか言う前に、借りを返すと思って相談にぐらい乗ってあげようじゃないの!!

こうして、覚悟を決めたアタシはネプギアがいる教会の一室に突入したのでした。

「………ここは相変わらず暗くてジメジメしてるね」

やあ、画面の前の諸君、久々に登場した神宮寺ケイだ。

今ボクは、教会の地下に巧妙に隠された地下室に居る。

その地下室は、ボクが数年前にノワールに誘われて教祖を始める前に造られ、以後はグロウとノワール以外の許可を持たない人物は基本的に存在さえ知らされず立ち入りも禁止のエリアに指定された訳だが………ん?なんでボクがそんな部屋に居て、そもそも場所を知ってるのかって?

そこはまあ、禁則事項とさせて貰おうか………とてもじゃないけど話せたものじゃないし(ボソツ)

………わかったわかった、じゃあ、せめてなんで居るかって部分は教えてあげよう。

………グロウの目撃情報がこの辺りで出たからだよ。凹んでもいいかな? 良いよね? ぶっちゃけると、こうして強引にでもテンションを保ってないと死にそう。憂鬱で

憂鬱になるのに何で態々グロウを探してるのかを詳しく言えば、あの仕事中毒の権化が今日と明日にしなければいけない最低限度の仕

事を超特急で片付けて、急に一日有休を捻じ込んだからだ。

……いや、それは別に良いんだよ？良いんだけど………

あまりにも急過ぎたからなのか、今は教会中がてんやわんやの大騒ぎさ……職員の半分が（終わってないのに）仕事を投げ出して「グロウの状態を知ろうの会」を開いた所為でね！て言うか、キミ達はグロウを目標にしたいんならせめて自分の仕事を片付けてからそんなふざけた会議を開いてくれないかな？いやほんと……お陰で、ボクに回って来る仕事为天変地異みたいな量になったじゃないか

（………まあ、そんな怖い事はとてもじゃないけど言えないんだけどね）

罷り間違つて彼グロウファンクラブ会員らにそんな事を言ったら最後、間違いなく呪

い殺されかねないし

実際、（何をしたのか詳しくは知らないけど）グロウを慕う美女美少女目当てに適当な気持ちで入会して強引なナンパをしたとある『元』男性会員数人は全裸で全身の毛を筆られて公共の通路に吊るされ、去勢されてた挙句に過去の不正や浮気話に恥ずかしい過去等の諸々まで詳細にネットに晒され、同様の内容をその身体に彫り込まれて社会的にも男性的にも仕事的にも家庭的にも永遠に再起不能にされてたし（因みに、未だに時折ネプッターやブログで晒されては巧妙に可哀想とかの気持ちを潰して再度再起不能にさせられてるよ）

そんな連中に喧嘩を売るとか、実質自殺みたいなものだね。ボクは御免被る。

そんな事を考えていると、何時の間にか目的地に着いていた。

『100、101、102、103………』

（………やつぱり、ここだったんだね）

………これは酷い。

そう表現する他無いぐらい、ボクの目に映った光景は、酷いものだった。

（変態も大概にして欲しいんだけど………ノワール、マジで早く帰って来てくれないかな）

「111、112、113、114、115……………」

そこには、何故か上半身が裸な上に片手の親指一本で倒立腕立てをしながら、他の余った手足を使って作文用紙になにかを素早く書き込んでいる変態グロウの姿があった。

しかもおぞましい事に、作文用紙の中に書かれた文字は無駄に丁寧な上にきつちり枠内に収められ、別々の文字を三枚同時に書いているのに普通に文章として成立している。正直言つて、人間技じゃない。

「……………」(ドン引き)

「122、123、124、12g……む？神宮寺教祖か、何か用かね？」

余りにも酷過ぎる光景に、思わず後退りしたボクの足音や気配を察知したのか、倒立腕立ての姿勢だけは絶対に崩さないが、こちらに気が付いたらしいグロウが声をかけてきた。

「いや、何か用か？じゃないよ。君が急に「いやなに、些か早急に有休を振じ込んだのは申し訳なくも思うのだが、私はこれより反省文を書かねばならないのでね。少々忙しい。余程の緊急事態でなくば後に回して貰いたい」……………いや、聞けよ」

最後まで言い切る前に強引に話をぶった斬り、再度倒立腕立てを再開してしまったグロウだった。

(と言うか、仮にもボクは教祖なんだけど……………流星に雑過ぎないかい?)

余りにも雑な扱いに心が折れそうだった。が、しかし、ここで引き下がる訳にはいかない。

「反省文とは言うけど、なにを反省してるんだい？」

「144、145……………ああ、実はアナザーと共にネプギア殿の部屋へ向かってね……………アナザーが急に扉を開けたらネプギア殿が全裸だったのだよ……………」

「ああ、そう言う事……………」

……………ああ、そう言えばそんな話があったね。

仕事が怖いぐらい増えていったから、すっかり忘れてたよ。

「……………つて、じゃあなんで倒立腕立てをしながら書いてるんだい

？時間の無駄じゃないか」

「……………ふふふ」

ボクが倒立腕立てをしている理由を聞くと、凄まじく暗い顔をしながら、急に不気味な笑い声を上げ始めた。

「聞くかね？聞きたいかね？では教えようじゃないか！」

(あ、これ長くなるやつだ)

「いや、最初は普通に書いていたのだよ？だが、よく考えてもみよ。普通に書いた場合、作文用の用紙が200枚程度など、一時間もあれば十分片が付く。それは、些か非礼が過ぎないかね？そも、確かに私はノワール様以外には欠片も興味はない。寧ろ、唾棄すべき十二かとか感じぬ。しかしだ、それでも女性を相手に（以後、もの凄く長くてくどい言い回しでノワールの名誉を傷付けたくないと言う内容が語られる）——と、言う訳なのだよ。ご理解をいただけただかね？」

……………もの凄く長かった上にどうでも良く、なんだかものすごい滅茶苦茶な事を言い出した。

ボクとしては、ノワールの名誉にそこまで配慮できるならもう少しボクにも配慮して欲しいと思うし、そもそも君がユニ以外には適当な隠蔽をしている所為でボクの胃は一日一回の胃薬が必須なんだけど……………

それに、常人ならそもそも作文用の用紙200枚は一時間では終わらない。と言うか、そもそもそこまで書けないだろうに

……………まあ、何時もの事だけどね（遠い目）慣れたよ。色々

「ふう……………まあ、いいけどね。今度からは有休を取るなら一言説明をしてからにしてくれるかい？」

「ああ、了承したとも……………尤も、あまり休暇など取る気は無い故に、無用の心配であろうがな」

なんだか、またボクにとって不本意な悪い噂が悪化しそうな気がしたけど、なんか疲れたし、どうでもいいや。

「……………聞かなかった事にしよう）じゃあ、ボクはここで失礼させて貰うよ」



「うむ、私は明日までにこれを終わらせる故、ゆつくりと休むが良い」  
こうして、グロウが急に有休を取った謎は解決？した。

……え？グロウの状態を知ろう会議の問題はどうしたって？

………あんなの、解決する訳ないじゃないか

こうしてグロウを探しに来た時点で会議も終了してたし、なによりもボク自身、関わりたくないとの底から思うよ。

## 第二十五話

お説教から早1日。

やっとコンパとアイエフから解放された俺は、説教が終わったら何時の間にか部屋の中に居たグロウと昨日の用件を終わらせる為にネプギアの元へ足を運んでいた。

「……………二徹か」

「ククツ、私は二徹程度、何時もの事……いや、寧ろ朝食のオマケ以下だが、卿は少々キツそうだな？」

「喧しい。普段は森の中で暮らしているからな。二徹も三徹もする必要性が長い事無かっただけだ」

ああ、ほんとに眠い。

欠伸を噛み殺しながら、早くネプギアに話を押し通して寝直そうと歩みを進めていると……………

「そのこの2人！ちよつと待ちなさい!!」

「……………んあ？」

「これはユニ様、如何なさりましたか？」

……………目の前に、なんか黒っぽいのとネプギア？が居た。

(……………と言うか、アレ、ネプギアだよな？なんかすごい顔してるけど)

「ちよつと明日の修行に付き合いなさい!!」

「ええ?!ユニちゃん？なんかすごい色々端折ってるよ!？」

そう言つて、ネプギアがネプギヤ変な顔のままツツコミ、おそらく説明でもしようとしたのか、口を開くが…………

「ごめんなさい！えつとこー」「はい。喜んで、拜命を受け賜わりました」ええ!?!説明とかいらなかった?!

変質者グロウの速答に対してこの様である。

「いや、説明はやれ」

「それが女神様の御望みならば、何も聞かずに受けるのは当然であります」

……………一瞬、色々つぶん投げて隣の変質者グロウをぶつ殺してやろうか

と思ったのは秘密だ。

「えっと……説明はちゃんとしますから、2人とも落ち着いてください」

そう言つて、ネプギアは顔芸を止め、神妙な顔をしながら、語り始めた。

「えっと、あれは昨日の夜の話でした」

時は少し遡り、懺悔室でアナザーが説教をされていた時のネプギアの部屋――

――回想始め――

現在、ラストেশヨンの教会でネプギア達に割り当てられた部屋ではネプギアとユニの2人が、それぞれベットと椅子に座り向かい合っていた。

そして、沈黙する2人の顔は、それぞれ理由こそ違うものの、神妙なものであった。

「……………で、相談つてなによ」

「うん……………あのね、ユニちゃん」

先に沈黙を破ったのは、相談を頼まれたユニの方であった。

恐らく、この沈黙に耐えかねたのだろうユニの表情は、気まずさと苛立ちが滲んでいた。

「……………えっと、なんて言ったらいいのかわからないんだけど……………」

「……………なによ？いいからはつきり言いなさい」

そして、そんな微妙な空気を感じ取ったのか、ネプギアの表情もまた、微妙な言い難さが滲んでいた。

「あのね……………怒らないで聞いて欲しいんだけど……………」

「……………なによ？怒るような事でも聞くの？」

「……………ううん……………そうじゃ、ない……………と、思うんだけど……………」

「だったら、とりあえず聞かせて……………怒るかどうかは聞いてから決めるから」

「そこは、怒らないって言い切つてくれないんだ……………」

「当たり前でしょう？アタシにも許せない事ぐらいあるんだし」  
ほら、早く言いなさいと急かすユニに対して、ネプギアは静々とその心の内を語り始めた。

「……あのね、ユニちゃん………」

『ユニちゃんは、戦うのが怖いって思った事は無い？』

「……………は？」

それが、ユニがネプギアに返せた唯一の反応だった。

「えっと………」

「……………正確には、死ぬのが怖いって思った事なんだけど…ね」  
その言葉を聞いた時のユニの表情は、よく分からない事を聞かれた際の困惑したものだったと言う。

それもそうだろう。本来、女神と言う存在はただ女神と言うだけで、基本的に死ぬ可能性など無いに等しい。

生まれ付き強靱な肉体に、天性の幸運と溢れんばかりの魔力

周囲の一般モンスターはそれらから幸運を除いた1つを適当に振り回すだけで死に至るし、一、二発は耐え得る危険種も、少しでも戦いの経験を積み余程の力の差が無い限り、ダメージを負うかもしれないが……しかし、所詮はそれだけだ。女神の敵為り得ない事には変わらない。

勿論、女神でも危険な敵に成り得る存在は居ない訳ではないが………同族故に同格為り得る女神は守護女神戦争が終わって以来闘う事は無くなり、種として同等以上に当たる最高位二柱の吸血鬼達はルウイーのダンジョンや山の奥深くだ。

「私は……怖いよ……間違いなくお姉ちゃんは助けたいのに、怖くて動けない………死にたくない………ねえ、私は………どうしたら良かったのかな？」

せめて、守護女神戦争に参加するか周囲の人間が死んだ場面を目撃した事があれば別だったろうが………そこまで早く生まれた訳でもなく、かと言って女神生が長い訳でも無いユニは、そんなネプギアの問いに対する明確な答えを持ち合わせてはいなかった。

「……………っ?」

パアン！

「え……う？」

しかし、ユニは答えを持ち合わせていないなりに答えを出していた。

叩かれた頬を抑えながら、呆然とユニを見上げているネプギアに対して、ユニは怒ったような……或いは、なにかを抑えているような表情でこう言い放つ。

「ふざけないで……いいわ！そうやってうじうじへこんでる位なら、いつそ迷わず国に——プラネテューヌに帰りなさい！そこで、アタシがお姉ちゃんを助けるのを指をくわえて見てれば良いじゃない！！」

「……っ?!」

「それがイヤなら……一緒に強くなりましょう？もう、誰にも——お姉ちゃん達にも負けないぐらいに強くなる！」

誰にも負けないぐらいに強くなる。

これが、ネプギアの問いに対するユニの答えだった。

当然、簡単な事ではないだろう。姉の女神達は、何百年も同格の女神相手に戦い抜いた果てに<sup>100Lv</sup>越え<sup>レベル</sup>の力を得たのだ。

それを、たったの十数年しか生きていない2人が越えるのは困難の極みと言ってもいいだろう。

「さて、そうと決まれば早速行くわよ!!」

「え？ちよ……ユニちゃん!？」

こうして、ネプギアはユニに引き摺られ、教会中を歩き回る事になったのでした。

——回想終わり——

「と、言う訳なんです」

「ネプギア！今日はもう寝るわよ!!」

「あ、うん！ユニちゃん……じゃあ、また明日！」

そう言ってネプギア達が出て行った後、俺は妙な高揚感に包まれて

いた。

「……………珍しい事もあったものだな」

「そうかね？私としては、別段珍しいとは感じないのだが……………それに、卿も修行を付ける気だったのであろう？渡りに船ではないか」

グロウはそう言うが、俺としてはやはり、珍しいと思う。

修行を付けるなんて言っておいて難だが、俺は人に闘いを教えるのは苦手だ。

勿論、出来ない訳ではないが……………まあ、当たれば発狂と幸運の反転を叩き付ける血が主要な武器な時点で、お察しと言う奴だな。

「……………」一応言っておくが、ユニ様を発狂させたらコロスからな？」

「頭の隅には置いておこう。さて、俺は明日の用意で忙しい」

「うむ、万全の状態で教えるがよい。と言うか、万全な教え以外は断じて認めん」

こうして、明日の修行の用意をする為に、俺は一旦ラスティシヨンの教会を離れた。

## 第二十六話

あれからまた一晩経った。

ネプギア達を引き連れながらラスティシヨンの教会が保有する森の奥深くに移動した俺は今、非常に眠かった。

「……………眠い」

「えっと……………よろしくお願いします!」

「ちよつと!本当にコイツで大丈夫なの?」

「ユニ様、申し訳ありません。私はアイエフ殿とコンパ殿をゲームキャラの元へと送らねばならなくなりました……………今日限りですので、これも経験と思って挑んでいただければ幸いです!」

結局、修練の準備に一晩中追われ続けた俺は、あれから一睡もしていない。三徹だった。

正直言うと、意識が落ちそうだ。眠い。

「では、ユニ様、ネプギア殿……………御武運をお祈りしております」

「あ、はい……………ユニちゃん!頑張ろうね!」

「え、ええ……………死なないように頑張るわ」

(……………何故殺す前提でやるような言われようなのだろうか?)

訳が分からない。幾ら眠くても、相手が女神でも、俺が『女神候補生』程度を相手に本気で殺し合うような輩に見えるのだろうか?甚だ心外だ。

「……………準備はいいか?」

「ええ!……………それで、どうするのよ?」

「……………なに、簡単な話だ」

グロウが教会の方に向かった事を確認した俺は、一晩中殺し回ったスライヌから絞り出した血と、その血を支配できるギリギリの濃度まで川の水で薄めて蒼い塗料(血ではない)で色付けした大量の液体を背後に浮かべ、無数の弾丸を形成した。

「……………?なによ、それ」

「無理ですダメです死んじやいます!?!死にますよ?!死んじやいますからねこれ!?!」

「……………落ち着け。これはただの水……とは言いきらんが、昨晚の間に雑魚を塵殺して血を搾り取り、川の水で薄めながらモンスタ―に浴びせて実験した結果、この濃度ならスライヌ程度でも余程大量に浴びなければ酒に酔うのと同様変わらんのは確認済みだ」

そして、何故か慄いているネプギアとよく分かかってなさそうな顔をしている黒いのに対して、俺は今回の修行の内容を伝えた。

「俺はこの液体弾丸以外は一切使わん。お前等はお前等で、逃げるもよし、その手に持った武器で撃ち落とすもよしだ。持てる全てを使い限界まで抗え」

「……つまり、前方方向からの回避と迎撃の訓練って事？嘗めないでよねー！そんな基本中の基本、とつくにマスターしたわよ!!」

「ユニちや……これ、まゝ」阿呆か貴様は……誰が前方からだけと言った………全方向から一面数十発が基本に決まっているだろう？」

………あ、マズいんじゃないかってダメですね。これ」  
ネプギアがなにかを言っているが、知らぬ存ぜぬ。纏めて心底どうでも良い。

「さて……………精々、長い時間を踊れ」

「ふんーやってやろうじゃないの!!さあ、どこからでもかかってって……痛い痛い!?まさかの一斉射撃?!」

「い……いやあああああああああああああああああああああああ  
あ!!!」

こうして、俺もやった事が無い、単なる液体(水)同然にまで薄まった血液(実質水)操作での弾幕ゲームが始まったのだった。

「ちよ……せめて開始の一言ぐらい言ってから撃ちなさいよー!!?」

「知るか………実戦で敵が待つてくれるとでも思っているのか?」

……………動かし難いな。

えつと………皆さん、お久しぶりです。それとも初めましてでしょう



か？コンパです。

今現在、わたし達はぐるーさんの案内でラステイションのゲームキャラさんの元へと案内されてるんですけど……………

「さて、ここだ」

「…………成る程、ラステイションのゲームキャラはもうとつくに保護してたつて訳ね」

なんと、ゲームキャラさんは教会の地下深くで保護されてたんです。ビックリしちゃいました。

「道理で、あれだけいっぱい聞き込みをしても見付からない訳です」

「いやコンパ？普通はこんな機密情報なんて一般人に聞き込んだだけで手に入るものじゃないからね？」

……………え？

「そうだったんですか?! プラネテューヌだと、町の人や職員さんに聞いたらねぶねぶの居場所や次の政策や会議の内容とかを普通に教えてくれるから、てつきり、聞けば教えてくれるものとかばかり思ってたです?!」

「……………コンパ、それってどこの誰？特に、教会職員については詳しく教えてくれないかしら?」

「……………アイエフ殿、流石に同情するぞ」

(あいちゃんが……………あいちゃんが怒ってるです)

なんだかうむを言わせずって感じのあいちゃんに迫られてつい誰に聞いたかを言っちゃったですけど……………大丈夫ですよね?!

「……………さて、話しも終わったであろう?」

「ええ、待たせて悪かったわね」

「うむ、気にする事ではない。卿等が話をしている間にゲームキャラ殿には話を通しておいた。存分に交渉してくるがよい」

そう言つて、ぐるーさんはゲームキャラさんの居るお部屋の扉によくあいちゃんがやるみたいに凭れかかってお休みしてしまいました。

「……………いや、あんたは着いて来ないの?」

「うむ、着いて行ってやりたいのはやまやまだが、生憎とゲームキャラ側からのオーダーだ。どうやら、卿等2人に話があるそうだ」

「お話してなんでしようか？」

「さあ？……まあ、そう言う事なら行かせてもらおうわ」

「うむ、私はここで待っている故、存分に話し合ってくるがよい」

こうして、わたしとあいちゃんはゲームキャラさんの待つ、ラストイシヨン教会地下の一室に入って行ったのでした。

……でも、この時はまだゲームキャラさんのお話しがあんなものだったとは、わたしもあいちゃんも思いもしませんでした。



「なんですって!?!」

「飽きたと言ったんだ。『お前』の銃術もネプギアの『剣技』も、もう見飽きた……弱過ぎて話にならん。女神化しろ」

「ツツツツ!!」

弱過ぎる? 飽きた? 言うに事欠いて女神化しろ?

ふざけんじやないわよ!! 人を舐めてんの?!

(良いわ……そっちがその気なら、アタシだって……!!)

「いい加減にしてください! これの一体何処が訓練なんですか?! こんなもの、ただのなり」殺るわよ……ネプギア」ユニちゃん?!

「変身するわよ……アイツに一泡吹かせてやりましょう!」

「……………(くあ)」

「……………ユニちゃん、本気なんだね」

「当たり前よ! あんなふざけた事言われて、黙って引き下がるものですか!!」

「……………(早く終わらないかな……この無駄話)」

「わかったよ……ユニちゃん……一緒に、強くなるって決めたもんね」

「ネプギア……!!」

こうして、目の前で呑気に欠伸をしながらぼさつと突っ立ってる目の前の女顔に一泡吹かせる為に、一矢報いる為に、アタシとネプギアは真正正銘、本気の本気で戦う為、変身する事を決めた。

『括目してください! / プロセッサユニット、装着!』

そして、アタシとネプギアを眩い極光が覆い、0と1が入り乱れるなか、全身をより完全に、より優れた形状へと変換していく。

「……………」

『女神ネプギア! ここに参上です! / 装着完了ね!』

その後、アタシとネプギアを覆う眩い光が晴れると、そこには変身して女神として力を極限にまで高められたアタシ達の姿があった。

「今までのアタシだと思わないことね!」

「えっと、覚悟してください!」

「……………まあ、こんなものだろうな。……………所詮、同

じ候補生でもアイツとは比べるのが間違いだったか（ボソツ）」  
『行くわよー／＼行きますー！』

こうして、今までの鬱憤を晴らす為……じゃなくて、アイツの指示通り、女神化したアタシ達は、アイツの作った水弾を時に避かし、時には撃ち／＼斬り落としながら、協力してアイツへと近付いて行つたわ。

（とつちめて泣くまでめてやるから、覚悟しなさいよ！）

「……………まあ、こんなものだろうな。……………所詮、同じ候補生でもアイツと比べるのが間違いだったか（ボソツ）」  
『行くわよー／＼行きますー！』

現在、ラストイシヨンの森の中で先日とつ捕まっていた候補生達の修行を付けているアナザーだ。眠い。

正直言うと、二轍三轍は堪えている。怠いし重い。

「このM・P・B・Lでー！」

「蜂の巣にしてあげるわ！」

「……………」

今は変身したからか、先程までの亀が歩いているかのような鈍い動きではなくなったが、それでもまだ遅い。

亀が蝶になるのが、誤差のようなものだ。結局、退屈な時間である事には変わらない。

ネプギアが振るうM・P・B・Lマルチプルビームランチャーに4発の水弾を叩き付けながら、同時に背後よりその倍の8発の水弾を撃ち込んだ。

「ツ?!」

「アタシの事を忘れてんじゃないわよ！」

「……………生憎だが、記憶する必要がある程の脅威ではないのでな」

ネプギアを撃墜した直後に、エネルギー弾を何十発も撃ち込んできた黒いのだが、弾数に重点を置き過ぎて威力が不足している。籠めら

れたシエアエナジーの密度も薄い。

俺の血弾のような特殊効果狂でもない限りこれで殺れるのは、精々が格下の雑魚程度だろうに………つまらん。

「ケホツ……ケホツ！」

「大丈夫？ネプギア」

「う……うん、なんとか、大丈夫だよ。ユニちゃん」

「………そうだな。今のお前達に点数を付けるとすれば、精々が60点だ」

はつきり言って、落第点だ。

揃いも揃って変身してもこの程度でしかない上に、この修行の趣旨を何も解っていない。

「なんですつてえ!?!」

「ユニちゃん！冷静になつて!!」

「っ！………そうね。ネプギア、ありがとう」

「ううん、それより、もう一回行くよー！」

「ええー！」

そう言いながらも再度突撃してくる候補生を見ると、この修行の意義が何故分からないのかが心底不思議に思えてくる。

この修行は、格上との闘争ではなく格上からの逃走を達成させる為のものだ。

なのに何故、こいつらは揃いも揃って抗う事しか考え付かない？逃げると言う選択肢はないのか？

折角、全方位に弾幕を張っているながらも、背後の弾幕だけは薄めにしてやっていると言うのに………やはり、所詮は候補生と言う事か（………しかし、謎だな）

目の前に迫る候補生を片手間で捌きながら、俺は考え事をしていった。

（何故、俺はここまで直ぐに水弾に慣れた？最初は操作にさえ梃子摺っていたと言うのに、これほど大量の水弾を撃てる程の練度が直ぐに身に付くものだろうか？）

そう、つい先日、この修行の為だけに大量の水と雑魚の血を使いな

がら、操作可能なギリギリの濃度を見付け出し、殆どぶっつけ本番で運用しているこの水だ。

最初は、大量の水を浮かせて数発の弾丸を操作するのが精一杯だった筈だ。血の能力は酒と同程度にまで零落れ、威力もそれこそ相当な格下にしか通用しないレベルのそれだ。

(だが、今はどうだ？この数時間程で薄まった特殊<sup>発</sup>効果<sup>狂</sup>こそ戻らなかったが弾数の最大展開数は数百発になり、威力は準同格レベルなら通用するレベルにまで跳ね上がった)

はつきり言おう。これは可笑しい。

数百年前、俺が最初に血弾を形成した際はまず形の維持に困った。

大きな塊で形成する分には支障はなかったのだが、どうにも小型化して亜音速程の速度で射出すると形状の維持に支障が出た。それを数年掛けて試行錯誤をしながらどうにかしたら、今度は展開数の問題と威力の問題が併発し、解決に至るまで更に相応の時間が掛かった。

なのに、この水弾はほんの数時間程度で時間を掛けて解決した問題をクリアしてしまった。

確かに、前回の経験があれば必要とする時間は減るだろう。だが、だからと言って数時間はない。

(……………まあ、だからどうしたと言えはそれまでだがな)

そう、そんな事はどうでもいい。

今の俺に最も重要なのは、何故か突撃ばかりしてくる女神候補生2人をどうやって逃走路線に切り替えさせるか

ただ、それだけなのだから……………

## 第二十八話

ああ……憂鬱ね。

……いきなりなんだって？そうね。ごめんなさい。

今はちようど、ラステイションのゲームキャラと交渉中なんだけど

……

『ふん、お前達がこの条件を呑めないと言うのなら、私もお前達に力を貸す事は出来ぬ』

「だから、なんでそんな事をしなくちやいけないんですか?!理由を教えてください！」

『言えぬ』

……交渉は難航しているわ。主に、ゲームキャラの無茶苦茶で意味不明な条件の所為で

「……せめて、理由ぐらいいは聞かせてくれないかしら？じゃなきゃ、私達だってどうしようもないと思わない？」

『生憎だが、理由は断固として言えぬ』

……強情なディスクね。

「そう、生憎と、私達だって理由も解らずに仲間を殺せと言われてはいそいですかとはいかないのよ」

『ならば、引き下がるが良い。そのぐらいの温情は持っているつもりだ』

「ッ!？」

コイツ……足元を見て……!!

『……だが、私も鬼ではない。お前達がどうしても出来ぬと言うのならば、妥協案ぐらいいは出してやろう』

「なんででしょうか？」

『……なに、そう難しい話ではない』

「ッ!コンパー!ここは一旦『遅い』……」

私は、急激に変化したゲームキャラの雰囲気になにか嫌な予感を感じ、急いでコンパを連れ逃げようとしたんだけど……

『……そう、難しい話ではない。私があバのクケソモ野郎を破壊するまでの





「ちよっ?! ユニちゃん、それやってないフラグだよ!？」

「…………あ」

そして、うっかりフラグを建てちゃったユニちゃんがやったみたいなの顔をして、土煙の上がついている爆心地を見てるけど……………

「……………お前達、本当にこの鍛錬の意義を察せなかったのだな」

「……………」

そこには、大きな怪我こそありませんでしたが、見える範囲だけでも身体中が火傷や煤に覆われたアナザーさんの姿がありました。周囲に有った大量の水は、跡形も無く蒸発してしまっただけです。

「……………まあ、いい。この威力の攻撃が出来るなら十分だろう……鍛錬はこれで終わりだ」

そう言つて、アナザーさんは教会がある方向へ1人で帰って行つてしまいました。

「……………えっと、鍛錬の意義ってなによ? そんなのあったの?」

「……………さあ? なんだろうね? 私もてつきり、何も考えずに戦えば強くなるみたいな考えだと思つてたし……………」

結局、訳が分からない事ばかりでしたが、これだけの力が有ればお姉ちゃんを助けられると思うと、嬉しくて仕方ありませんでした。

【ピコーン♪ネプギアとユニはスペリオルアンジェラス(未完)を習得した】

鍛錬が終わった夜

ラストেশヨンの教会に用意された一室で、俺は寝台に寝転がつて鍛錬の最中に感じた疑問を纏めていた。

……………しかし

「……………くあ」

……眠い。非常に眠い。

頭も上手く働かないし、起きているのも限界だった。

「……………今日はもう寝るか」

そう思っただけで床に就こうとしたその時だった。

ボタン!!

「……………む?」

「……………」

急に扉が蹴り開けられ、その扉の向こうには鍛錬の始まる前にゲイムキャラとの交渉に向かったアイエフとコンパの2人が居た。

「(…………いや、流石にこれだけ時間があれば決裂であれ締結であれ、結果は出ているのだろう)……………それで、どう言った用件だ?」

そう思った俺は、比較的話し易いアイエフに声をかけてみたが……………

「……………」

「……………おい、聞こえているのか?」

なんの反応もない。

こんな事は今まで……………いや、そう言えばネフテューヌ駄女神に悪戯で就寝前を邪魔された事があったな。その類か……………?

「……………用が無いなら自室に戻れ。俺は眠『シャア!!』……………何のつもりだ?」

いきなり武器を構えて襲い掛かって来た2人を見て、俺は非常に困惑していた。

確かに、これまで散々無茶はやってきたが、この局面で襲われる謂れはない。

これまでにはつきりと記憶している範囲で殺したのはモンスターか犯罪組織に与するゴミだけだ。その辺はこいつ等も把握している筈だし、理解できない程幼稚でも愚かでもない筈だと、俺はそう認識していたが……………

「シッ!」

「ジャ!」

「……………まあ、いっ!」

説教を垂れる程度なら駄女神ネプテューヌの手前、色々和我慢してやっていたが……物理的に殺しに来ると言うなら知った事ではない。血祭りに挙げてやろう。

「ギヤ」

「ギイ」

武器を構えて襲い来る塵アイエフとコンバ 共を力尽くで跳ね返して壁に叩き付け、俺は体内に粒子として変換し収納している愛用の剣（肉切り包丁）を取り出し、壁に叩き付けられて気絶している2人を叩き斬る為に大きく振り上げた。

「死にたいと言うなら是非もない。せめてもの情けだ。お前達は2人纏めて殺してや<sup>掃除して</sup>r」ダメー!!嫁を殺すなんて、絶対に認めないんだからー!!」邪魔をするな!!」

「きやつ?!……やったな!もう許さないんだから!!」

肉切り包丁を持った腕に纏わり付いてきたアホを振り払い、全力で床に叩き付けたが、それでもなお、足に絡み付いてしつくく食い下がって来るアホを振り払おうと、俺は力の限りに絡み付かれた足を振り回した。

「邪魔だ!なんの心算だ貴様!!」

「この娘達はアタシが嫁候補にずーっと狙ってたんだから!これ以上酷い事するなら、このREDちゃんが許さないんだから!!」

ああ、本当に鬱陶しい。

しかし、そう呑気にアホな会話をしている暇はない。

「ギ……イ、イ」

「ク……」

どうやら、この騒ぎで連中は意識を取り戻したようだ。

しかも、こちらが状況を理解できないアホに絡まれているのを良い事に武器を構えて突撃の構えを見せている。

「とにかく!絶対に放さないんだからね!」

(……仕方ない。始末するか)

『シネエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!』

大きな声を上げて突撃して来た塵屑に対して、俺は盾にするように





しかし、目の前のこいつはどう見ても18歳程だ。明らかに一部の容姿が違う。

(……………一体、どうなっていると言うのだ)

「ん〜♪まあ、良いでしょう。要件は簡単ですし、手短に片付けて私から外れましょうか」

そう言いながら、目の前の異物の姿が掻き消え

『……………は?』

私は、私の意思を保存した器たるディスクが砕け散った音を聞いた気がした。

【さくて、使えない駒は始末しましたし、後は後始末隠蔽をして事実を振曲げたらコレクシヨンの整理整頓に戻りましょうか♪】

そんな言葉を最後に、私は私である意思を砕かれ、この世界から完全に消滅した。

【……………あ、このディスクは要らないし、ギアかう二にでもくれてやるとしましょうか……………邪魔ですし♪】

「ツ~~~~~!!!」

良く寝た。

アイエフとコンパに頼んで夜中の奇襲をして貰ったが、やはりダメだな。事前に奇襲があると判っているとどうにも緊張感に欠ける。

しかも、事情を知らない外野が乱入して来て大騒ぎだ。恐らく、今後二度と建物内で奇襲に対する鍛錬をやる事は無いだろう。

(……………まあ、そんな事はさておくか)

「これが…私……………」

「へえ……………確かに、結構強くなるじゃない」

「これで、ネプ子達の救出に一步近付いたわね!」

「わたし達もパワーアップしましたし、ねぶねぶや女神さん達の救出目指して、いっきますよ〜♪」

何故か、俺だけは適性が無かったらしく力を得る事は叶わなかったが、ゲームキャラはネプギア達以外にも力を与え、俺以外の面々は程度の差こそあれ、集団としてみれば大幅なパワーアップをしていた。……まあ、力を与え過ぎたらしく、ゲームキャラは人格が休眠しているらしいが、その辺の詳しい事は知らんし興味もない。ただ、先日行った水弾幕の鍛錬は必要なかったのかもしれないと、俺は思った。(……まあ、本来の鍛錬の方向性ではなかったが、その内役に立つ事もあるだろう)

取り敢えず、問題があるとすれば、数時間前に急遽リーンボックスに行く事が決定してしまった事だな。

(………やだなー。アイツに遭うの……消し炭にならないように全力で防御しよう)

………リーンボックス逝きだけはどうかならないものだろうか？

「アナザーさん！リーンボックス行きの席が取れましたよ!!」

「………ええい！わかった！わかったから引つ張るな!! (鬱だ……)」

非常に憂鬱だが、アイエフになにか吹き込まれたらしいネプギアに引き摺られ、俺はリーンボックス逝きの飛行機(何故か貸し切りだが)に乗り込んだ。

「さあ！リーンボックスでも、頑張つて修行するわよ！ネプギア!!」

「うん！頑張ろうね！ユニちゃん!!」

(………ああ、だから貸し切りなのな………あの変質者が……余計な真似をしてくれたものだ)

俺は、無駄に蒼く晴れ渡った大空にグロウが無駄に良い笑顔でサムズアップしている光景を幻視した。果てしなく不快だった。



### 第三章く緑と白のララバイく 第二十九話

飛行機に乗ること数時間

俺は今、出来れば絶対に来たくなかったリーンボックスに居た。

「……………」

「どうしたの？随分と静かじゃない」

黒いものの妹……………ユニだっけ？まあ、黒いものの妹でいいか……………面倒臭いし

黒いものの妹が声をかけてくるが、正直俺には気にしている余裕がない。

今も、何処から溶人熱光線が飛んでくるのかと冷や汗が止まらない。

「……………」

「ちよつと！無視は良くないと思うんだけど!？」

黒いものの妹が騒いでいるが、そんな事は後だ。

とにかく今は、無駄に特徴的な戦闘用に改造されている修道服を着込んだ銀髪を探し出して、視界に収めるのが最優先事項だ。でない

(俺の) 命に関わる。

……………本当なら不意打ち気味に叩き込まれる攻撃に対して近くの人間を囮寄せしても良いのだが、アレの攻撃は人間程度では壁にもならん。寧ろ、一瞬で溶けて(俺への)被害が増すのが落ちだ。

「……………」

「ユニ、そつとしておいてあげなさい」

「なんでよ！人がせっかくしんp……………気にしてあげてるのに、無視は流石に酷くない?!」

「ユニちゃん……………落ち着いて、目立ってる……………すごく、目立ってるから」

「……………あ」

(そうだな。お陰で余計に見付け難くなったぞ。うん)

荒ぶる黒いのの妹をアイエフが止め、ネプギアが説得した事でやつと落ち着いたらしい黒いのの妹だったが、俺としては手遅れ感が満載だ。

周囲からの視線が集まり過ぎている所為でどの視線が正解なのか  
がさっぱりわからん。

『ピンポンパンポーン♪』

そんな時だった。軽快な音が鳴ると同時に、不愉快至極極まりない  
仕打ちが行われたのは……………

『えー、リーンボックス空港をご利用のお客様、迷子のご案内つちゅ。  
えーつと…………アナザー、ハク様がお探しつつちゅよ。直ちにリーンボッ  
クス空港の迷子センターまでお越しくださいっちゅー！』

『ピンポンパンポーン♪』

そして、軽快な音が鳴り終わると同時に、周囲からの視線が生温く  
なったのを感じた。

「……………えつと、アナザーさん、昔リーンボックスでなにをしたんで  
すか？」

「アナザー、お呼びみたいよ。行ってきなさい」

「あなざーさん、迷子だったですね。お迎えが来てるみたいですから、  
早く行ってくるです」

「じゃあ、アタシ達は教会に行つて挨拶をしてからクエストを受けて  
修行でもしましょうか」

「おー！」

それぞれ言いたい事を言うと、空港の出口に向かってさっさと行つ  
てしまった。ふぎけるな。

（まさかの着いて早々に迷子呼ばわりか……………やっぱり、リーン  
ボックスなんぞ来るんじゃないかった）

ああ……………不幸だ。

「…………仕方ない、行くか」

こうして、俺は（無視したら何されるか分からないから）仕方無く  
リーンボックス空港の迷子センターにトボトボと歩いて行つた。

『ピンポンパンポーン♪』

軽快な音楽が鳴り止むと同時に、おいらは耳に当てていたイヤホンとマイクを取って後ろへ振り返ったつちゆ。

「ワレチューさん、お疲れ様でした」

「いやいや、ハク様の為ならこのぐらいはお安い御用つちゆよ!」

振り返った先には、緊急で運び入れたVIP用のソファアールで寛いでいるちよつと変わった服装なおいらの雇い主……と言うよりは、パトロンのハク様がいるつちゆ。

正直、出会いこそあんまり良くなかったつちゆけど、ハク様がこのマスコットに斡旋してくれたお陰でマスコットに成れたつちゆしね。今となつては良い思い出つちゆよ。

「いいえ、アナタもお仕事があつて大変でしょうし、教会として今度なにか埋め合わせをしようと思えますから、楽しみにしていてくださいね」

「了解つちゆ!ハク様も、無理はせずに頑張つて下さいつちゆ!」

「ええ、それでは…そろそろ時間が来そうですし、私はこれで」

そう言うと、ハク様は迷子センターの待合室に入つて行つたつちゆ。

「……けどまあ、大丈夫つちゆかね?この国は」

正直言うと、おいらはそれだけが心配つちゆ。

……………まあ

「おいらが気にしてもしょうがないつちゆよね。おいらに出来るのは日々の仕事をただ頑張る事だけつちゆし」

取り敢えずは、次の迷子の連絡が来るのを待つつちゆよ。

しかし、この数十分後……おいらは運命の出会いをするのをまだ知らなかったつちゆ。

「……………(ここ)か」

ネプギア達と別れて数分後、俺はリーンボックス空港の迷子センターの中にある待合室の前に立っていた。

正直、扉越しに気色悪い光の気配が漏れ出ている、非常に気分も悪く精神的な正気狂気をドリル水で泥を流すで削岩ように洗い流されてするように削って逝く感じがして、かなり気怠い。

「……………早い所終わらせて合流するか」

途中でデカイネズミを見た気がしたが、俺は知らんしどうでもいい。

嫌な事は手短に済ませるに限ると言うし、俺は全神経を前方の視界に集中させながら扉を開いた。

「……………あら?」

「…………………………」

ボタン!!

(……………は?何この状況???)

……………なんか、目の前の扉を開いたら着替え中らしいハクが居た件について

ここ迷子センターの待合室だよな?!なんであいつこんな所で着替えているの?!バカなの? (俺が)死ぬの?

思わず全力で閉めたわ!え?なんで呼び出されたの俺!?!?

訳が分からん。とにかく、俺は融かされる前に「あー、別に怒ってないのでそこで待っていてくれて結構ですよ?」

……………これは、逃げたら殺される。

(……………仕方ない、ここで待つか)

そして、ハクの奴が扉から出て来たのはその数分後だった。

## 第三十話

いきなり何故か着替えていたハク訳の分からない事態が遭ったが、その後は特に何事も無く事は進み、俺は今、待合室のソファでハクと向かい合って座っていた。何の拷問だ。

「……………で、何の心算だ？」

「はい、要件ですけど……………あの、他の方は何処に？」

丁重な物腰でそれだけ言うと、ハクは小首を傾げた後にキョロキョロと周囲を見回しだした。

「ハア？他の奴？」

「はい。お仲間が居るのでしよう？通信でグロウさんから要件は何つています。アナザーさんがお世話になっているようですし、これからは私もお世話になるのですから挨拶ぐらいはしておこうと思ったのですが……………」

……………ああ、そう言う

「お前は俺の保護者かにかか？と言うか、俺の名前しか呼ばなかったから他の連中は教会で教祖に挨拶してからクエストに行くとか言ってたぞ」

「え？」

俺がそう答えると、ハクはポカンと口を半開きにした阿呆のような顔でこう言った。

「……………あの、実は……………」

「は？」

その言葉を聞いた俺は、訳が分からないとしか言いようがない微妙な気分になった。

アナザーと空港で別れた私達は、事前に調べておいたマップで一直

線に教会まで向かい、その教会の中で教祖に会っていた。

(……と言うか、本来なら空港の中で女神候補生本人と話をする算段だったらしいのだけど、私達が教会に来ちゃったからそのまま教祖と話をする事になっちゃったんだけどね)

……まあ、そんな事は置いといて、教祖の箱崎チカに軽い挨拶の後、この国の女神候補生を仲間にする話を終えてさあクエストに行こうかと言う話になってたんだけど……

「……………はい？」

訳が分からないわ……聞き違いかしら？

「だから、残念でしょうけど、この国でクエストを受けるのは諦めてと言ったのよ」

「いえ、その少し前なんですけど……………」

「えつと……………クエストをこの国の女神候補生のハクって奴が殆ど消化しちやったって……………マジ？」

一体、どんなワーカーホリックなら、近年犯罪組織の横行で激増したクエストを消化できるのよ……………流石に冗談よね？

「マジよマジマジ……………アタクシも、まさかあの子1人でお姉様のご不在に加えて犯罪組織の横行の相乗効果で一時期は上位危険種が各ダンジョンに何体も出現するぐらい溜まってしまったクエストが無くなるなんて思ってもなかったから、その気持ちは良く分かるわ」

そう言つて、この国の教祖——箱崎チカは、頭痛を堪えるように頭を抑えながら椅子に座り直した。

「……………まあ、そんな事はどうでも良いわ。とにかく、一刻も早く御姉様を救出してちょうだい！アタクシもあの子が単独でギョウカイ墓場に突撃しないように抑えるのもう限界だったし、何よりもアタクシが御姉様に会いたいのに！大急ぎで！特急で!!」

「わわっ……………ちよ、落ち着いてください！私達はまだゲームキャラさんに力を借りなk」その辺は問題ないわ！あの子がもう力を借りてるから、気にせず行っちゃって！」……………え？」

そして、もの凄い剣幕で捲し立てた箱崎チカは、さらつと爆弾発言(？)をして私達を空港にまで送り返す乗り物の手配を始めてしまっ

た。

「……この候補生って……どんだけ」

そして、ユニの一言が全員の思いを表していたのは……まあ、必然でしょうね。

「あいちゃん、私達はこれからどうしましょうか?」

「……そうね。ルウィーにでも行くしかないんじゃないかしら?」

「……リーンボックスでしなきゃいけない事もないし」

「……まあ、旅が順調なのは良い事よね!」

「手配が終わったわ!数分後に黒い車が来る筈だから、教会の入り口で待ってなさい!」

そして、箱崎チカが手配した乗り物でリーンボックス空港に送って貰った私達は、アナザーとリーンボックスの女神候補生と合流した後、そのままステイションにとんぼ返りする前に雪国ルウィーを旅する為の準備に取り掛かったわ。

「……と、言う訳なんです」

「……お前は仕事のゾンビか何かか?」

ハクからリーンボックスのクエスト事情を聞かされた俺は、呆れ半分残念半分の微妙な気分でソファアに座り込んでいた。

と言うかだ。確かに以前、趣味はクエストマラソンと聞かされた事はあるぞ?あるんだが……だからと言って、誰がクエストマラソン20時間を毎日こなしてると思うよ?アホなのか?こいつは

「……まあ、ここで待て居ればネプギア達も帰って来るんだろう?だったら、俺は暫くここで待つ」

「はい。そうしていただければ助かりますね。あなたを外に出して万が一にも見失うと、一般人や他の健全な企業諸共犯罪組織関係者を血祭りに挙げてしまいかねませんか」

「……………些か心外だが、別にどうでも良いか

ナチユラルに蛮族扱いされている事に思う事はあるが、こいつ相手に話を咲かせる趣味はない。ある程度は流しておけば問題は起きないので、基本はスルーが一番だろう。

「それにしても、ラストイションからの通信でグロウさんから聞かされた時は驚きましたよ」

「……………」

「……………スルーしたいのだが、こいつは意地でも話を咲かせるつもりらしく、ニコニコと笑いながら只管捲し立てるように喋り続ける。

「何時も何時も、人間が嫌いで森の中に引き籠り、偶に気が向けば街中にふらつと現れては教会からお仕事を貰ってモンスターを血祭りに挙げる以外では姉さん達とさえも会話をしたがないあなたが、まさかお仲間を作って一緒に旅をするなんて、思いもませんでした」

「……………」

そして、一区切り喋りたいただけ喋ると、こちらの反応を待つかのよう一旦喋るのを止め、俺が喋るのを待っているようだったが……俺が口を開く気配さえない事を察すると、それでもなお、諦めずに只管言葉を捲し立て始めた。

「今はどんな気持ちですか？お仲間とは仲良くやっていけてますか？無茶苦茶はしてませんよね？毎日ちゃんと三食食べていますか？お仲間には他の候補生の方も含めて女性が多いと聞いていますが、色々気を使っていますか？大虐殺をして血塗ろな光景を造っていますね？ブラッドバスとかブラッドジューズだとか言って、血塗ろライフは送ってはいけませんよ？——（以下、延々と話は続く）——」

そして、その話はアイエフ達と合流するその時まで続いた。正直、殆ど拷問染みた時間だった。



### 第三十一話

「ちゅー……ネズミ遣いが荒い教祖っちゅね」

おいらは今、リーンボックスの教祖、箱崎チカの命令で迷子センサーから出張サービス(?)で車を運転して教会までお迎えに行つて  
るっちゅ。

なんでも、人数が多いらしいから黒くて長い奴で来いとか言われ  
たっちゅけど……今時、教会を訪れる団体客なんていたんっちゅね。  
ビックリっちゅ。

「……………まあ、ハク様にはお世話になっちゃつてるっちゅし、しよ  
うがないっちゅけどね」

色々と思う所はあるっちゅが、浄化と称して融解光線なんてぶちま  
けられてフェードアウトするような人生よりは100倍マシっちゅ。

夢(?)だったマスコットの職業も得て、人気もそれなり且つ堅実  
に伸びているっちゅ……………けど

「でも、なんか足りないんっちゅよね……………」

不思議っちゅよね。

間違いなく死ぬよりはマシ所か破格の待遇なのに、妙に懐かしくな  
るんっちゅよね……………マジエコノヌの中級構成員だった頃が

こう、なんて言うか……………数年前に食べ飽きた筈のやつすいジャ  
ンクフードをまた食べたくなるような……………でも、見付からずに結局は  
今の家庭料理を食べてるような……………

「……………まあ、犯罪組織に帰ろうにも、とつくに居場所なんて無  
くなつてるっちゅし、そもそも犯罪組織に戻ったらハク様に浄化され  
かねないっちゅ……………気にしない方が一番っちゅ」

……………まあ、今の待遇が不満って訳じゃないんっちゅし、どうで  
もいいっちゅよね。

……………なによりも、浄化されて融けるのはマジ勘弁っちゅ  
し。

(本当に、あの状況から良く生還出来たものっちゅよ)

2年前、おいらは犯罪組織の中級構成員として、ピラ配りから犯罪神様のフィギア売りやマジエコンユーター獲得の為の営業をする為、当時の上司だったレミイと言う、幹部直属の大隊長の下の下の上級構成員の女の下で働いていたつちゆ。

「おいネズミ、どうだった?」

「難とか3人程マジエコンユーターを獲得できたつちゆよ!」

「そうかい!アタイは0だ……まあ、フィギアの方は4人の爺や婆に売り付けてやったけどね!アツハツハ!!」

黒髪で清楚そうな上司の女は、見た目に似合わないガサツな口調で成果を確認して、おいらの成果を聞くと自分の成果も告げて豪快に笑い出したつちゆ。

……けど、ガサツながらも豪快なこの女は、いつもこんな感じでお気楽と言うかなんと言うか……姉御肌のレディースって感じの女つちゆね。

「しつかしまあ、リンボックスこの辺も物騒になったもんだねえ」

「そうつちゆねえ」

最近はリンボックスの支部が何者かによって壊滅寸前にまで追い遣られてるつちゆ。

基本的に完全に壊滅してる訳じゃないんつちゆけど、偶に実験施設が襲撃されていると、施設や研究員がドロドロに融かされた後、自然に冷えて固まったような惨状で見付かるつちゆし……本当に、ラストেশヨンと言いい物騒になったものつちゆよ。

「つたく、大隊長と隊長達はなに考えてんだか……こんな所で営業したって人的被害や施設への被害が増すだけだろうに」

「まあ、おいら達は下ツ端つちゆからね。サイ様の命令に逆らえる程偉くない以上はどうしようもないつちゆ」

「それもそうだね……おっと、こんな話をしてる場合じゃなかったね」

そして、そろそろ出発しようかと言う時に、当時のおいら達にとつての災厄の権化は音も無く忍び寄っていたつちゆ。

「……………見付けた」

「ツツツ?!?!?」

声が出た方に振り返ると、そこにはニコニコと笑っている天使のような女が一人いたちゆ。

勿論、天使と言っても可愛いとか綺麗みたいな褒め言葉ではなく、文字通り、天使の様な翼を持ち、頭に円環が乗っかってる感じの見た目的な話ちゆ。

そんな女を怪しいと思ったのか、レミイは女を警戒しながら前に出たちゆ。

「……………あんた、誰だい?」

「見てわかりませんか?解りませんかよね?解ろうが解るまいが構いませんけど……………一応聞いておきましょうか」

そんなレミイの殺気雜じりな問いに対して、この天使擬きの女は何でもないかのように受け流し、逆にこう聞き返してきたちゆ。

「……………素直に投降する気はありませんか?投降して更生すると誓うなら、見逃してあげても良いですよ?」

「……………あ?」

けど、その問いはレミイにとっては地雷そのものちゆ。

普段から赤の他人や年下になから目線で言われるのが大っ嫌いだと公言してるような女ちゆ。

この後の惨劇を想像すると、ちよっと同情はするちゆけど……………まあ、おいらには関係ないちゆ。

「……………アハハ……………そこまで嘗めた事言われるとはね……………楽には殺さねえぞクソガキ」

「……………?」

ドスが効いた声で天使擬きの女に話しかけるレミイと、そんなレミイの様子に気が付いていないのか、能天気になニコニコと笑っている天使擬きの女

そして、レミイが魔力弾を10発程生成すると、それを天使擬きの女に目掛けて一気に射出したのが、その後の悪夢の始まりだったちゆ。

「死に晒せ!!」

「あらあら、交渉は決裂と言う事でしょうか?」

「死ね!!」

当初はおいらも、天使擬きの女——ハク様が、レミイ——当時の上司だった女に血祭りに挙げられる事を信じて疑っていなかったちゆ。

なにせ、上級構成員とは言っても、戦闘に限って言えば隊長クラスの中堅とほぼ同程度のレミイが怒りに任せて能力まで使って手加減無しの一撃をぶち込んだちゆ。

普通に考えれば、頭が可笑しいとしか思えないような格好の女は全身を撃ち抜かれて死に至り、その軀を破壊し尽されると思うのが自然ちゆ。

「アツハハハツハハツ!!まだまだ終わりじゃねえんだよオ!!」

(……何時もの事ながら、キレると本当に怖いちゆよね)

上司だった女は、複製や増殖の効果を付与でもしたのか、射出中に威力を落とさずに分裂して行く魔力弾を何発も何発も撃ち込んで行つたちゆ。

そんな大量の魔弾で天使擬きの女に当たらなかった魔弾は、周囲の木々は破壊し土煙を上げて視界を覆ったちゆ。

「ハッ!ガキは素直に寝てりゃいいんだよ!!……行くぞネズミ」

「了解ちゆ」

(……これで、あの天使擬きの女は死んだちゆね。と言うか、あの質量の魔弾を叩き付けられて生きてるならマジもんのバケモノちゆ)

しかし、そんな予想を裏切り上司だった女が魔力弾の乱発で巻き上げた土煙が晴れると——

「……はあ、どうしてこう、犯罪組織の人っておバカさんが多いのでしょうか?」

「……は?」

そこには、躰がぐちやぐちやになっている筈の天使擬きの女が、五体満足、全くの無傷で立っていたつちゆ。

しかも、訳の分からない事に、女には土煙が巻き上げられたにも拘らず、長い金髪にも、無駄に露出が多い衣装や肌にも埃1つ付いていなかったつちゆ。

——これは後で聞いた事つちゆけど、普段から能力で周囲の埃や塵を浄化<sup>焼却</sup>してるらしく、この時も能力で浄化<sup>焼却</sup>してたとか……………マジバケモノつちゆ。

「……………仕方ありませんよね。姉さん達を捕まえて世界を好き放題しようなんて考えは、改めて頂かないと困りますし……………荒っぽくなってしまいますけど、死なないでくださいね?」

「ナメてんじやねーぞクソガキアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」  
(姉さん達を捕まえて世界を好き放題?この女はなにを言ってるんつちゆか?)

当時のおいらは、なんでこんな頭が可笑しな女の姉を捕まえたら世界を好き放題に繋がるのかを考えたつちゆけど、あまりよく分からなかったつちゆ。

ただ、当時のおいらでも解ったのは——

「キレイに、浄化してあげますから……………」

「ア——」

「ぢゅーーー?!?!」

——目の前で様々な特殊効果を付与したらしき魔力弾を撃ち込でいたレミイが、頭が可笑しな女の手で、グズグズの粘液に変えられてしまったって事だけつちゆ。

(…………ヤバイつちゆ?!殺されるつちゆ?!?!?)

そして、次はおいらだろうと思っただつちゆけど……………

「…………それで、貴方はどうしますか?大きなネズミさん?」

「全面降伏するので、命だけはお助け下さいっつちゆ!!?!」

投降を呼びかけられたので、全力でDOGENZAして慈悲を乞う事にしたつちゆ。

……まあ、この後なんやかやと色々遭って（誤字じゃないっちゅよ？）今の立ち位置マスコットの職業を得た訳っちゅけど……

「あ、あれかしら？」

「運転手さんは………？」

「でっかいネズミだね！」

おっと、考え事をしている内に着いたっちゅね。

おいらの視点はここでおしまいにさせて貰うっちゅ。

「ネズミさん、かわいいですね。あいちゃん」

「え？……ええ、コンパがそう思うんなら、そうなんじゃないかしら？」

（かわいいの？アレ）」

（……………ちゅ……………?!?!?!?)

この日、おいらは運命の出会いをしたっちゅ。



その小さな影は、幼い少女——いや、童女と言っても差し支えないような、幼い少女だった。

しかし、こんな猛吹雪が吹き荒れる中の悪天候としか言いようのない天候で、ピンクのジャージ姿でいながら凍えるような素振りも無く、長く艶やかな黒髪を振り乱される事も無く、満月の様な金色の瞳を瞬かせる事もないこの童女が単なる童女である筈もなかった。

……まあ、そもそも普通の童女であれば、猛吹雪とかの前に先程のトリックの姿を見た時点で腰を抜かして怯えているか、全速力で逃げ出しているだろうが、そこは置いておく。

『……ああ、そうだな——エルマ』

「ん……トリー……トリックは息災？」

そうして、無表情で小柄ながらも美しい、エルマと呼ばれた童女の姿をしたナニかと、雰囲気処か口調や表情まで、容姿以外の一切合切が先程とは別物同然にまで変化してしまったトリックは、まるで旧友と再会したかのような親しみが籠った笑みで笑い合っていた。

『くくっ……吾輩を誰だと思っているのかね？当然、息災であるとも』

「そう、それは僥倖」

そう、トリック（仮）が述べると、エルマと呼ばれた童女は嬉しそうに——しかし、少々複雑そうに、何とも言い難いと言わんばかりの表情を浮かべ、こう、トリック（仮）へと問い掛けた。

「……わたしが頼んでおいて難だけど、あの性格はなんとかならなかったの？」

『……言うな。吾輩もはつきり言えば恥じている』

その問いは、トリック（仮）が先程までの狂乱し、今のトリック（仮）<sup>帰</sup>に変化するまでの、『犯罪組織の幹部：トリック・ザ・ハード』としての意識の事を指していた。

『そも、あの意識は犯罪神が吾輩の■をベースに無数の■を混ぜ合わせ、その果てに生まれたものだ。断じて吾輩の意志でも趣向でもないのだよ』

しかし、どうにもこのトリック（仮）も先程までの人格の事はよく思っていないらしく、その意とあななった原因を示す事でエルマから



の誤解を解こうとしたようだが……………

「……………2000年前の、まだ見た目通りだったわたしに求婚をしてきたのは誰？」

『ガフツ?!』

……………しかし、それでもなお、エルマにとってはトリック(仮)の言葉は信じるに足りなかったらしい。過去の前科を持ち出され、トリック(仮)は精神的ダメージから血を吐いて倒れた。

『い、いや、アレはだな？吾輩すっかり大人の女クッババアの心無い悪辣で最悪で卑劣極まりない手口で色々と傷心だったと言うかなんと言うか……………?!?!』

「……………フツ、冗談だよ」

そして、全力で弁明を始めたトリック(仮)だったが、そんな慌てた姿を見て満足したのか、無表情な表情を少しだけ緩め、軽く微笑みながらエルマは冗談だった事を告げ……………

『……………ホツ、なんだ、冗談なのか』

「うん、半分だけ」

『カハツ!』

更なる言葉を叩き込み、再度トリック(仮)に精神的なダメージを与える事で、満足したのか、悪戯つ子のような笑みを元の無表情に戻し、こう切り出した。

「……………そっちはどう？わたしは、多分もう限界が近い」

『……………うむ、吾輩の方は大凡、十分に用意も完遂した。後は、キーが揃うのを待つばかりだ』

「……………そう」

その言葉を聞くと、エルマは月を見上げ、幼い見た目に見合わない慈母のような表情を浮かべ、こう呟いた。

「……………そう——安心した。ありがとう」

それだけ言うと、月を見上げたまま、エルマは何の前触れも無しに、まるで幻かなにかだったかのように何処へともなく消えて行ってしまった。

『……………さて、吾輩もコレの記憶を弄ったら早々に帰るとするかな』

そして、トリック（仮）も、猛吹雪の中、何処へともなく去って行った。

### 第三十三話

画面の前の皆さん！初めまして。リーンボックスの女神候補生なハクです。

現在、わたしはアナザーさんのお仲間と合流して、今はリーンボックスから飛行機で直接ルウィーにまで飛んで行っています。

「……………ほんと、来てくれて助かるわ」

「気にしないでください。これもアナザーさんを陽光の照らす場所で過ごせるようにする為ですし、それ以上にわたしの為ですから」

アイエフさんからは、道中のお話を聞かせて頂きました。やっぱり、彼の面倒を見るのは物凄く大変なんですね…………

（……………やはり、アナザーさんを更生させるのはわたしがやるべき使命なんですね。もしも彼を更生させる事が出来れば、わたしはきっと、あの人の気持ちが解る筈なんです）

（……………なんでアナザーを日<sup>堅</sup>の当たる場所<sup>気</sup>で生活出来るようにするのがハクの為なのかしら？）

「いや、断じて違うから！しかもなんか片想いの乙女っぽい!!そう言うのは俺<sup>アタシ</sup>の役！ぶっ殺すわよ!!」

……………けど、なんなんでしょうね？この脳裏に直接叩き付けてくるような強烈な思念……………わたしじゃなかったら解体されてますよ？声にも妙に聞き覚えがありますけど……………まあ、長距離から叩き付けられるような質ではありませんし、以前も周辺一帯を調べ尽くしたのに何も在りませんでしたから多分幻聴の類いですよね。

【幻聴じゃねええええ!!……………つと、危ない危ない。あまりのあざとさについ計画を台無しにする所でした。やはり、このクソアマだけは危険ね】

……………けど、一体なんなんでしょうね？この幻聴は……………物心付いた時にはもう聴こえてましたし

……………は!?

（そうなんですネ！夢は自分の深層意識の望みを映すと聞きました！この幻聴はわたしの悪を討ちたいと言う願いが生み出したもの…………

ですがいけません。昔あの人に誓ったではありませんか！必ずこの世全ての悪は更生させ、真人間として生きられるようにすると……やはり、姉さんが捕まった心労でしょうか？昔の過激な所は頑張っただけで抑えないと……！）」

「……………うわ……………めんどくさい奴ね。暑苦しいし思い込み激し過ぎない？都合がいいとは思っただけ……………流星にどうよ？」

これは反省しなければいけませんね。

わたしはあくまでも正すモノです。

審判者が争いを望んでは本末転倒にも程があります。あの方にも示しがつきません。

（……………でも、アナザーさんを更生させるだけでも結構大変ですけど、姉さんも助けなきゃいけないんですね……………がんばろう）

そんな時でした。

「大変よ！操縦室にこんなものが??」

「どうかいたしましたか？」

先程操縦室に入って行ったユニさんが、手に紙を持って客室へ入り込んできたのは……………

「大変よ！この飛行機はもう少しで雪山に追突するわ!!急いで脱出しなきゃ【ズドオオオオオオン!!!】……………!?!?」

そして、そんなユニさんの発言は最後まで続く事なく、リーンボックスから出航したルウィー行きの飛行機は、何処かの巫女さんの放つ弓矢のような大きな音を立て、わたし達はその衝撃で意識を失ったのでした。

……………

……………

「……………さて、死する前に我が贄とンギヤラシガ!?!?」

「……………ああ、思い出した」

目の前にいた<sup>レッサーヴァンパイア</sup>下位吸血鬼を血祭りにし、俺は現状を把握した。  
端的に言おうか

「……………もう、二度とリーンボックスには行かん」

「あのー、女神の目の前で治める国の批判とか、色々と言いたい事はありますけど、今回は聞かなかつた事にしますから取り敢えず助けてくれませんか？」

やはり、俺がリーンボックスに行くとは碌な事がない。

飛行機は雪山に叩き付けられ、起きて早々に<sup>レッサーヴァンパイア</sup>下位吸血鬼の面を拝まされ、拳句の果てに<sup>ヴァンパイア</sup>吸血鬼の集落で餌にされかけ……………と言うかだ。

「ま、待て!!こいつらがどうなってm「黙れ虫けら」ギイヤアアアアアアアアア「五月蠅い」……………?!?!」

言うに事欠いて俺をあの程度の虫けらの餌？

……………余程、死にたいようだな。

「ヒイ!?お助k「知るか。己の不運でも恨め」……………」

感情が制御できないが、そんな事はもうどうでもいい。

目の前の<sup>レッサーヴァンパイア</sup>下位吸血鬼の心臓を素手でぶち抜き握り潰した事で恐怖でも憶えたのか、ネプギア（多分）を人質に取った心算なのだろう、<sup>レッサーヴァンパイア</sup>下位吸血鬼を先程潰した<sup>下等生物</sup>同程度の雑魚の血で足を拘束して股座から左右に引き裂き、そのままネプギア達にぶちまけられた血以外の血を支配下に置いた。

「ピイ!?」

「……………殲滅を開始する」

内臓やら諸々を纏めてぶちまけてしまったが、まあ問題はないだろう。

確かにこいつらの血を浴びると吸血鬼になる可能性はあるが、所詮は下位だ。少々なら問題はない。

仮にこの程度の血で吸血鬼化するとしたら、余程才能があったか、余程大量に浴びたかのどちらかだ。幸いにも量は満たしていない以上、これであるようなら諦めろとだけ言っておこう。

「……………さあ、全力で抗うが良い。貴様等総員ミナゴロシだ」













獄から避難して、温かいコーヒーでも飲みましようか……………

こうして私達は、雪崩が発生してもお構いなしで空を飛び、大乱闘を繰り広げながら大暴れしてる2人を放置して、全速力で下山した。

途中ヤバイ所もあったけど、変身したユニにビームをブツパして貫ってギリギリまで塞ぎ止めて貰う事でどうにかしたし、アナザー達についてはハクとメアドの交換を済ませるからそつちに連絡は入れられる。今はとにかく……

「二」避難する（わよ／です／のよ／のだ）！！！！  
「二」

## 第三十五話

アイエフ達がこの雪崩が頻発している雪山から避難した後も、アナザーとハクの2人は空中で熾烈な争いを続けていた。

「ウオ雄悪汚悪男魚隕塙夫生淤将乙士!!!」

「まだです。まだわたしは倒れる事は出来ません」

暴走したアナザーが、謎の発生方法で歪みブレたような声で雄叫びを挙げながらハクに突撃したかと思えば、ハクはその突進を左手のルミナス・ライト・セイヴァー神 器 でもって防いだ。

「浄化の光よ！ハア!!」

「ツツツツ?!?!」

そうしてアナザーをギリギリまで引き付けながら、ハクは女神であるにも拘わらずその身に宿す焔めきの浄光異能を右手から放ち、その破滅的な熱量を内包した光をバランスを崩しながらもどうにか回避したアナザーへ、肉斬り包丁が離れた事で自由となった左手のルミナス・ライト・セイヴァーL・S.を持って斬り掛かった。

「くっ、相変わらずで安心しましたよ」

「邪a!!!」

しかし、アナザーは足と背中中で凍結してしまっていた血液を操作し、バランスを崩した状態のまま加速して強引に上空へと浮上する事で、ハクの細腕に似合わぬ剛腕から振るわれるルミナス・ライト・セイバーL・S.を回避したが、その強引な回避によって内臓を傷付けたのか口内から血を吐いていた。また、アナザーは吐いた血をそのまま針のように形成して射出する事で、ルミナス・ライト・セイバーL・S.を振り切って無防備なハクへと反撃した。

「この程度じゃ、倒れません」

「**餓亞亜鏹鏹阿會極而闕亞亜鏹鏹阿會極而闕!!!**」

だが、ハクもまたアナザーと殺し合えるだけの怪物だけあって、振り切ったルミナス・ライト・セイバーL・S.へと光を纏わせながら更に逆の方向へ強引に振り戻し、氷漬きながら翔んでくる血の針を蒸発させて防ぎ切っている。

戦況は膠着しており、ハクは単純に性能的な面で己を上回るアナザーを倒す事が出来ず、逆にアナザーはハクの煌めきの浄光クリーンスライトによる、防御をぶち抜き回避さえも困難な光速のバ火力を越えられないでいた。

「鏗破、鏗破破破破破破破破破破!!!」

「つう!? ハア!!」

そして、そんな膠着状態も終わりを迎えようとしていた。

「腐鵜憂優紆、斑有迂羽刃嫗兔侑宇于!!」

「ハア…ハア…」

終わりの原因は、体力的な限界だった。

そもそも、普段からクエストマラソンで鍛えているハクは元より、保有している異能の関係上、肉体的な疲労を感じ難いアナザーでさえ、体力の限界とは無縁でいられるものではない。

……まあ、空中で何十合も巨大な両手剣をぶつけ合い、(ハクにはあまり自覚は無いが)お互いに殺傷力が高い能力を振るいながらもそれを回避し続ける事を強要されている状態だったのだ。それも仕方がないのかもしれない。

「餓亞亜鏗鏗阿會極西闕亞亜鏗鏗阿會極西闕!!」

「次で、決めます」

そして、決着の時は来た。

「雄悪汚悪男魚隕鳩夫生淤将乙士!!!」

アナザーはその身に宿す異能『鮮血クレイジーブラッドの狂喜』で先程殺し、支配した吸血鬼達の雪に混じった血や、事前に支配していた為に雪に混ざらなかつたが余りの低温から半ば凍り付いていた血液を強引に操作し、鋭く脆い氷の蒼い矢尻や丸く蒼い氷球をハクの正面を除いた全方位へと配置していた。

そして、血を射出していない正面もアナザー自身もその手に持った巨大な肉斬り包丁を両手で構えて突撃の構えを見せている。

「浄化の光を!!」

一方でハクも、普段は右腕だけで放っている煌めきの浄光クリーンスライトを身に纏うプロセツサユニットの頭部hユニットeと背部Bユニットaで増幅させな



## 第三十六話

「う、うん……………あらう…ここは何処でしょうか？」

何時の間にか眠っていたわたしの視界に映ったのは、周囲に土の色が広がってその中で倒れているアナザーさんと、その土色の外は雪で覆われている謎の景色でした。

しかも、身に覚えのない女神化までして……………

「……………まあ、女神化は解除してと、一体なにが……………あ」

あ、ああ……………思い出しました。

そう言えば、気分が高揚しちゃってつい、扱いきれてないのに必殺技を使っちゃったせいで周りの酸素を焼き付くして、気絶しちゃったんです。

「我が事ながら、まだまだ未熟ですね。アイエフさん達が巻き込まれたら流石に死んでましたよ……………そう言えば、アイエフさん達は無事でしょうか？」

確か、憶えている限りでは雪崩が激しくなり過ぎて巻き込まれない内に避難してたと思うんですけど……………『pipipi!!』……………あら？……………よく無事でしたね。この端末」

確かに、普段から頻繁に熱暴走を起こすから、徹底的に対物理や耐熱及びに防水を強化した逸品でしたけど……………と、そんな事はさておき「えつと……………『ルウイーの教会で待ってるわ。暴走したアナザーが落ち着いたらそこまで来て』と……………では、アナザーさんを起したらわたしもルウイーへ行くとしましょうか」

取り敢えず、ちよつと焦げちゃってるアナザーさんを起しましょう。

因みに、この後アナザーさんを起したら何故かもの凄く威嚇されました。(´・ω・`) ショボーン

そんな風にアナザー達が雪山を降りる最中、荒地にまで変貌した雪山の一角より遙かに遠くからそれをじっと見つめている存在がいた。

「……………痛い……………」

その者は、長く艶やかな黒い髪を靡かせ、金色の瞳を内包した瞼には涙を浮かべている、クリーム色の学生服を着込んだ童女の姿をしていた。

「……………（いっしょに）」

そんな童女——以前、トリック・ザ・ハードとルウイーの公園で密会していたエルマは、瞼の涙をクリーム色の学生服で拭いながら、先程までアナザーとハクが戦っていた場所へとその視線を移して—

「……………なにあれ怖い」

徹底的に強化されたわたしの視界には、先程まで雪でいっばいだつた山の一角が映っていた。

……………そう、先程まで雪でいっばいだつた山の一角だ。

先程、眼が潰れるかと思う程の（と言うか、強化のし過ぎで光をモロに受けてしまい本当にさっきまで潰れてた。わたしじゃなかったら失明ものだ）極光が、その主と矛先になつた少年以外の全てを吹き飛ばしてしまつていたので。

「……………逃がして、正解……………」

わたしが想うのは、こんな最悪な結末しか用意されていない喜劇に強制参加させられてしまつている、あの方達の後続と、その従者達のことだつた。

今回だって、わたしが介入しなければ、あの方の祖は例え自分の後続達を巻き込んででも、周囲一帯諸共少年を消し飛ばしてでも、最悪な結末を回避する為に、周囲の全てを消し飛ばしていたかもしれない



——いいえ、間違いなく消し飛ばしていた。

あの方達の祖はそう言うものであり、今もなお存在し続ける規格外の光だから——わたしに流れる力だって、流してくれたのはあの方だけど、源流はあの方の祖だ。だからこそ、今もなお、微弱な影響を受け続けている。

「……………」

はつきり言つて、あの状況でわたしに出来たのは、あの方の後続を——その従者達を縛っていた縄を壊して逃走し易くなるように協力する事だけだった。

それ以上の事をしようと動くと、光で覆われた時に一瞬だけ、傍から見なければ分からない、ほんの一瞬だけ、闇に覆われた少年を始末してでも平和を保つように動く事を、わたしはわたしに流れているシェアエナジーを介して強要されかねなかった。

「……………けど、それじゃあダメ……………それじゃあ、何度でも同じ事が起こる……………」

けれど、それに従う訳にはいかなかった。

確かに、衝動のままにあの少年を始末すれば、一見平和が保てるかもしれない。しかし、それで平和を保つのは絶対に不可能なのだ。

そもそもの話として、本当の意味で世界の平和を得ようとすれば、結局の所は意思を失つて単なる力にまでその身を落として棄ててしまったあの方では、もうどうしようも無いのだから……………

「……………もう、限界……………なの？」

そうこうしてしまっている内に、わたしに限界が訪れた。

今のわたしは所詮、天で抗うオリジナル<sup>本</sup>が、地上で女神を補佐する為に創み出された影だから……………力を使い果たした以上は、もう次のわたしに任せるしかないわ。

「……………ああ、トー……………トリックにも会えたし、もう、あんまり思い残すこともない、かな？」

ただ、願わくば……………次のわたしもトー……………トリックに会えますように……………

——そして、アナザー達を見つめていたエルマは、光へと分解されて完全に消滅して逝った。

その表情は、聖母のように慈愛に満ちたものだったとか……………

## 第三十七話

『や、やっと着いた（わ／わよ／のだ／ですう）』  
（し、死ぬかと思つたわ……!!）

まるで片付けが下手な四捨五入したら三十路女（嵐を呼ぶ五歳児とその妹の母、因みに旦那さんの足は死ぬほど臭いとの噂がある）の自宅にある、これでもかと思つた物が詰め込まれた押し入れが崩壊して、文字通り山のように崩れ落ちる私物のような勢いで私達に襲い掛かってくる雪崩を、雪山から死ぬ気で下山しながらある時は偶々そこにいたエンシエントドラゴンを囿にして数秒稼ぐ事で回避し、またある時は変身し空を飛んでるユニにエクスマルチブラスター<sup>M</sup>でビームをブツパして貰う事で吹き飛ばして時間を稼ぎ、またある時は私物のワイヤーで適当な逃げ惑うモンスターを複数体とつちめて（即興だったけど）木々に絡める事で縛り上げ身動きを出来なくした上で雪崩れへの壁にして、どうにか私達は下山した。

「さ、散々な目にあつたですう。早く教会に行つてあつたかいミルクが飲みたいです」

「RED. ちゃんはココアが良いのだ！」

「その前に、ほら、ネプギア……起きなさい」

コンパの意見には全面的に同意したい所だったが、今は取り敢えず、私の背中で気絶してるネプギアを起こすのが先よ………流石に、もうこれ以上は背負つてられないし

「ん、んう………ハッ!? 血塗ろはイヤアアアアアアアアアア!!??」

「あいたあつ!？」

「………あ、あれ? アイエフさん?」

「………ネプギア」

背中から降ろしたネプギアの頬を軽く叩いて起こしたら、思いつきり叫んで飛び起きたネプギアに張つ倒された件について………つと、言つてる場合じゃないわよね。

「………あ、あれ? ここは………」

「………ネプギア、ちよつと落ち着きなさい。ここはルウィーの街

の中よ」

「あ、ハイ」

叫んだ後に、アツパーカートの姿勢で拳を振り上げたまま困惑したような反応をしているネプギアは、ユニがが落ち着くように言うと、数秒程深呼吸をして……………」

「…………あの、私が気絶しちゃってた間、一体何があったんですか？皆さんボロボロですし、ハクさんも居ませんし」

「その事だけどね——と、言う訳なのよ」

これまでの経緯について教える為に、一先ずネプギアが気絶している間に何があったかを簡潔に話したユニは、説明が終わると同時に疲労がぶり返したのか、頭痛を堪えるように頭を押さえていた。

「…………うわあ」

「あらためて聞いていると、頭が痛くなってくるですねえ」

コンパが言うように、現状は非常に頭が痛くなるような状態だった。

なんで私達、対アナザー用の抑制効果を期待してハクを仲間にした（勿論、犯罪組織相手の戦力としても期待してるけど）のに、こんなに頭を抱えないといけないのかしら？

（……………まあ、言ってもしょうがないのかしらね。実際問題として暴走の抑えを任せられるならそれだけでも結構助かるし）

「ねーねー！いい加減教会に行こーよ！そこできつと新しい嫁との出会いが待ってるだろーし、流石にちよつと疲れたよー」

「そうね。取り敢えずルウィーに来たんだから、教祖に挨拶の一つでもした方が良いのは確かなんじやないかしら？」

「そう、ですよ。ルウィーの女神候補生の方ともお会いして、協力をお願いしないといけませんし……………」

「じゃあ、早速教会に行つて女神候補生さんに会いに行くです」

私がハクの事について少し考え込んでいる内に、皆はルウィーの教会（道は判ってないのに）へ向かってどんどん歩いて行った。

「あ、ちよ…………すみません、教会つてどっちに行けばいいかしら？…………ああ、そうですか、はい。ありがとうございました……………待ちな

さーい！」

そして、私もその辺の適当な通行人へ手早く道を尋ねると、先に先にと進んで行く皆を追って駆け出した。

……と言うか、皆そもそも教会までの道は知ってるのかしら？

(……………疲れた)

ルウイーのわりと奥の方の、つい先程までは雪山だった場所で俺は、ただただ脱力し、つい先程までどんよりして曇りだった、晴れ渡る青い空を見上げながら、脱水気味な所為か矢鱈と痛みを主張している頭を更に刺激するデカイ声に顔を顰めていた。

「さてーでは先に教会で待っている皆さんに合流する為に、早く雪山を下山しましょう！」

「……………」

そう言いながら、この天変地異擬きの元凶は駆け足で下山しているが、雪が解けて水になり、そのまま一気に蒸発した水分が周囲に湿気として溢れている為に、はつきり言ってももの凄く暑苦しい。ここに目隠ししたまま連れて来たルウイーの住人に聞けば、恐らく10人中10人がここを真夏のラスティションの荒野と間違えるだろうと思う程暑苦しい。

「ふんふんふん♪♪」

「……………」

その証に、目の前で呑気に鼻歌を歌いながら歩いているハク元凶の服は、普段から無駄に体にフィットしている所為で体のラインが浮き易いの、今ではべっとり肌と肌張り付き、その中身が(規制的にダメな箇所だけは固有能力で乾かしているのか無事だが)透けている。はつきり言って、かなり不愉快だ。

「色々と思う所はありますが、偶にはこうして思いつ切り身体を動か

すのも良いものですね。良ければまた、今度は健全なスポーツとかを一緒にしませんか？あ、勿論ルールを厳守ですからね？」

「……………」

……………挙句の果てにこれだ。

俺は、こいつのこう言う所が特に気に入らない。

先程までの闘争の結果、周辺一帯の生きているものはこいつの手で消し飛んでいる。しかし、こいつはその辺を気にする事がまずなく、あつたとしてもそれは見せ掛けで、そもそも被害に遭うのは大概がモンスターや吸血鬼だ。

「……………」

「……………」

別に、モンスターや吸血鬼を庇う気は一切ない。そもそも初めに  
レツサーヴァンパイア  
奴ら<sup>レツサーヴァンパイア</sup>を殺しにかかったのは俺だし、それをこいつが殺そうが、俺が殺そうが、そんな事は些細な事だ。

「……………どうかしましたか？」

「……………何でもない」

しかし、こいつは救うと、護ると言いながら殺す<sup>壊す</sup>。そして、それを認識していても、恐らく根本的な部分で意識には留まらない。仮に留まっても、精々が『残念だった。また次に頑張ろう』……………この程度だ。何故かは解らんが、その矛盾が異様に気に障る。俺にとつては些細な事の筈なのに、何故かこいつ<sup>女神</sup>等がそのような行いに走っていると、引き篋ってその生命を終わらせ、早々に別の女神を生成させたくなくなる。

(何故だ？何故、こんなどうでも良い事が気に障る？……………解らんな)

……………まあ、これ以上は考えても仕方あるまい。

今はとにかく、この暑苦しい地を離れるのが先決だ。

そして数時間後、俺はルウイーの教会でアイエフ達に合流した。

### 第三十八話

暑苦しい山から寒い雪山に変わった（戻った）道を下り、どうにかルウイーへ辿り着いた俺は、現在ルウイーの教会で寛いでいた。

どうにも、約束した時間にはまだ早いらしく、今は教会の礼拝堂にある椅子に座って疲れを癒しながら待機しているところだ。

（……………怠い）

「皆さん、ご無事でなによりです」

「……………」

「え？…………ええ、なんとかね。そっちはどうだったの？」

「はい。ご心配には及びません（n\*、ω、\*n）。これでも、こう言う事には慣れていきますので……………流石に、ここまで激しいのは初めてでしたけど、次からは然程の手間なくどうにかできそうです」

「は、激しい？（えっちよ、頬を赤くしながら激しいってナニよ!?よく見たら二人とも服がちよつと湿ってるし……………あの後ホントに一体ナニがあったの?!?!）」

「はい。今まで色んな方の相手をしてきましたが、憶えている限りでも一番激しい一時でした」

「……………」キツ!!

近くでは、先程まで暑苦しい場所に居た所為で体温が高いハクがアイエフとなにか話しているが、何故か俺を見るアイエフの物凄い形相を見ると、そこに意識を割くなど全力で本能が警鐘を鳴らしてくる。

かと言つて、ネプギアが居る方に意識を向けると……………

「ごめんなさい。ユニちゃん…………私、また」

「別に、気にする事ないわ。ネプギア、アンタはそのままが良いの。いえ、お願いだからそのままでいて（ネプギアが血に慣れたら女神的にもエンディング的にもヤバイフラグが建つ気がするし）」

「気にしな―い気にしな―い！嫁はそんな事に馴れなくて良いんだよ―！」

「ゆにちゃんの言う通りです！わたしからも、あなざーさんにもう少し穏便に戦えないか掛け合ってみるです！（メラメラ）」

「ユニちゃん、コンパさん……（うるうる）」

………こんな感じで、はつきり言つて物凄く四面楚歌だった。

と言うか思うのだが、何故こいつらは他者が死ぬ事にそこまで意識を傾けるのだろうか？人間はそこまで他人に心を裂いて痛めるものだったか？

（まあ、女神は確かに人間から信仰心を受け取って存在しているから仕方ないのかもしれないが………己を裏切り犯罪組織に付いた者や、そもそも敵でしかない吸血鬼の事など気にするだけ無駄だろうに）

………まあ、そんな事を俺が気にしても仕方ないがな。

そもそも俺は、『女神パープルハート』との契約に従って人間を狩らずに（まあ、人間の血は基本的に不味いから好き好んで狩ろうとは思わないが）モンスターを狩っている。

この旅を共にしているのも、ゲームキャラに課せられた罰ゲームでしかない。

（結局の所、俺をハブって間抜けにも取っ捕まった女神連中を救出後俺がどうするかはネプテューヌ次第だ。そんなどうでもいい事を気にする暇があるなら、このこの教祖に女神候補生を出すよう脅し方でも考えていた方がマシと言うものか）

………しかし、そう言えば3年程前にネプテューヌがルウイーで女神ホワイトハートが大変だとか言つて、大慌てでルウイーへ翔んで行っていたような気がしたが………アレは一体なんだったのだろうか？

（………ああ、なんでこんな事になってしまったのでしょうか？）

いいえ、これは、ある意味でブラン様が犯罪組織に捕らわれた時点で、決まっていたことかもしれません。



ラストイションからの通信で、グロウさんからこちらへ近い内に、プラネテューヌの女神候補生一行が訪れるとは聞いていました。

そして、捕まった女神様達を助ける為に、ロムやラムに協力を求められるだろうとも……………それ自体は、まあ、色々と思う所はありますが、あの子達が女神として望むならば構いません。

ですけど…………

「あの怪物を態々連れて来るなんて、プラネテューヌとラストイションはルウィーを滅ぼすつもりなのでしようか……………？」

一体、両国はなにを考えているのでしょうか？

幾らなんでも、犯罪組織が昼夜問わずに跋扈しているこの状況でそんな事はしれないと思いたいですけれど……………連れてくる人物が人物だけに、笑い話では済まないのが笑えないですね。

「……………せめてもの救いは、あの子達が街へ遊びに行っていた事だけですね」

後は、ストツパーとしてリーンボックスの女神候補生、ハクさんが同行している事ぐらいでしょうか？

ハクさんが居れば、あの怪物も好き放題に暴れたり出来ないでしょうし、被害もある程度は抑えられる筈です……………少なくとも、7年程前にリーンボックスで勃発した戦いでハクさんが辛勝して以来、あの怪物も周囲への被害を少しは考慮してくれるようになりましたし。

……………けれど、本当に……………

(ああ、ブラン様……………私は一体、どうすればいいのですか?)

私はそのまま、約束の時間が来るまで執務室で頭を抱えながら、ルウィーとしてどう対応するべきかを考え続けるのでした。

(……………頭と胃が、痛いです)

### 第三十九話

ルウイーの教会で色々とアレな惨状が繰り広げられている中、その教会を擁している首都では平穩(?)な光景が広がっていた。

雪が積もった公園では子供が雪遊びに夢中になり、各家庭では炬燵と蜜柑を完備してある居間で休日の学生や大人達が、炬燵で暖まりながらゲームをしたり、迷い込んで来て炬燵の上で丸くなる猫を眺めて寛いでいる。

それらの光景は紛れもなく平穩そのものであり、平和な街並みの象徴とも言えた。

民衆達は、何処までも平穩な暮らしを甘受しており、その幸福は何時か天寿を全うするその日まで続くと、欠片も疑ってはいなかった。

【……ある一点の機械が、その平穩を完膚なきまでに崩す兵器地雷とは知らずに、ねえ?】

……その街の一角で白昼堂々とある違法機械の販売営業が行われている現状は、その平穩の全てを崩壊に追い遣るとも知らずに――

【アツハハハハツ――!!!】

「はい。みんな寄つといでー!楽しい楽しい犯罪組織マジエコノムだよー!」

アタイは、慣れない愛想笑いを浮かべながら、周囲のルウイー国民にビラを配る。

「マジエコノムに入信すれば、どんなゲームもタダで遊べちゃう!好きだけゲームし放題だよー!」

勿論、このセリフは定型文だ。アタイにはこのセリフを繰り返しながらビラを配る方が向いていると、何ヶ月か前までビラ配りをやっていた時に学習済みだからだ。

「……………はあ。なんでアタイはビラ配りなんてみじめな真似しなきゃなんネエんだろうな」

「……………そんなにお嫌いでしたら、今すぐにもアレイストやイヴェルトの元へ帰して差し上げましょうか?」

「うおっ!? リリス大隊長?! い、イヤー、キョウモガンバッテビラクバリダー! タノシイナー(棒)」

「そうですか……………では、わたくしはもう少し各所を回って来ます。貴女はその箱に入っている物を空にしなさいな」

言いたい事だけを言って、リリス大隊長はルウイーの街の人混みの中に紛れて何処かへ行っちゃった。

現状のみじめさからついつい本音を漏らしちゃったが、アブねえアブねえ……………後ちよつと誤魔化すのが遅かったら、また大隊長2人にボコられるあの地獄へ送り返される所だったぜ。

「寄つといでー! 楽しい楽しい犯罪組織マジエコヌだよー!」

けど正直、あの人の事は今一よくわかんネエんだよな。

大隊長なんて御大層な身分をやってる割りに、頻繁にこんなビラ配りなんかを頻繁にやってるらしい? そもそも、ブレイブ・ザ・ハード様は他に直属の部下ってモンをこの人しか抱えてネエし?……………まあ、そこはアタイが尊敬してるマジック様も同じだけだよ。何でか知らねえけど、マジック様はアタイ以外の部下を直属にははいネエ。なんでも、2年前まではサイつて言う女の大隊長を抱えてたそうだけど、そいつがプラネテューヌであるバケモンにぶつ殺されて以来、アタイを拾って来るまで1人も新しい直属の部下を持たなかったとか、なんとか

「マジエコヌに入信すれば、どんなゲームもタダで遊べちゃう! 好きだけゲームし放題だよー!」

……………まあ、んな事は後だ。

今はとにかく、この意外と物が詰まってる箱の中に入ってるチラシ

だのフィギュアだのブレイブ・ザ・ハード様の木彫りだのを……………ん？

「…………ブレイブ・ザ・ハード様の木彫りなんざウチの商品に在ったか？」

しかも、やけに精巧に造られてる上に色付けまで完璧にされてるのが幾つも……………心成しか、犯罪神様の姿を模したとか言う触れ込みがあるフィギュアより出来が良いし

(まあ、箱に入ってるって事は商品なんだろう……………えーっと、なにに？ 一体辺り単価2000クレジット……………高いのか？これ)

なんとも微妙な値段設定だった。正直な話し、犯罪神様のフィギュアの方が値段的にも需要的にも高く付「ああ！この間の悪い人だ!!」

「…………悪いこと、めっ……………ああ？」

「もー、またこの下っ端だねロムちゃん！」

「…………こんな事しちや、めっ(ぶんぶん)」

「へっ、んな事アタイが知るかってんだ！そして、誰が下っ端だ誰が!! アタイにはリンダって言うちゃんとした名前がなア!!」

誰かと思ったら、2、3日前にアタイをぶっ飛ばして商品マシエコンをぶっ壊して行きやがったこの国の女神候補生だった。

「えー？でも、こうせいいんってえらい訳じゃないんでしょー？だつたら下っ端じゃない！ねーロムちゃん？」

「うん…………それに、この間戦つたら、とつても弱かった(しよんぼり)」

「一応これでも最近上級構成員に昇格したんだよー！バーカバーカ！」

しかも、アタイの事を下っ端だなんだと見下してきやがるオマケ付き……………しかし、こんなちっこいなりでも実力は女神相応と言えば相応だ。

途中でとんずらしたとは言え、あの地獄アレイストレイヴェルトによる抜きのような鍛錬を潜り抜け、心身共に大幅なパワーアップを遂げたアタイを歯牙にも掛けず、ムカツク事に無駄に有り余ってますと言わんばかりの才能で炎と氷の魔法攻撃をぶっ放なって来たのは記憶に新しい。

「じょーきゆうこーせいいん??ロムちゃん、それってすごいのかな？」

「…………わかんない(ふるふる)」

(スゲエんだよバツキヤロウが！)

見た目相応のおつむしかネエのは不幸中の幸いかもしれねえが、正直、これはこれでマジムカツク……!!

ただ、今回ばかりは何もせずに逃げ出す訳にはいかネエ。今度んな事をしたら、リリス大隊長にあの地獄の特訓場へ送り返されるのが目に見えてるからだ。

そして、事態はアタイにとって最悪の方向へと向かって行つた。

「ま、ぶっ飛ばしちやえば良いよね！」

「うん、お姉ちゃんを攫つてこの国を荒らすマジエコンヌ……嫌い(ぶんぶん)」

「じゃあ、やっっちゃおうー！」

「うん、やっっちゃおう？」

そして、目の前のガキの姿をした怪物はアタイの敗北を決定的なものにする一言を告げる。

『プロセツサクニツト、セツト』

「チイツ!? 負けるかってんだ! どっからでもかかって来い!!」

「……………ていつ」

しかし、妙に気が抜ける声が聞こえ、光に覆われた視界が開けると

「……………は？」

『きゅ〜』

「とまあ、こうすれば非力なわたくしにも簡単に鎮圧可能な訳ですけど……この程度の仕事も熟せないのですか? だから貴女は万年下っ端なのですよ?」

そこには、あっさりと倒されて目を回してやがるクソガキ共と、その背後でばんばんと手を払っているリリス大隊長の姿があった。

「さ、この子達を連れてこの町から出ますよ? 貴女はその箱の中身をきっちり回収してからわたくし達の拠点に来なさいな」

「え? あ、ああ……はい。了解しやした」

そして、リリス大隊長は目を回してやがるクソガキ共に妙に慣れた手付きで縄を回してきつちりと縛り上げ、そのまま魔法でも使った

のか、クソガキ共をふよふよと浮遊させて、本人曰くこの国にある犯罪組織マジエコンの拠点へと向かって行っちゃった。

「……………えー」

しかし、アタイの心中には微妙な気分と消化不良感が残った。

## 第四十話

ルウイーの教会に備えられている、女神用の執務室。

そこでは今、ものすごく重苦しい空気が漂い、私達の胃を荒らしていました。

(えー、ネプギアですが……執務室の中の空気が最悪です)

「それは……あの子達を危険な旅に差し出せと、そう言うことですか？」

「他にどう聞こえる？ 言っておくが、これは要請でしかない。嫌なら嫌でも一更に構わんが……その結果は言うまでもあるまい？」

「……それは、どう言った意味でしょうか？ まさか、ルウイー私達の女神を見捨てるか？」

「はっ……そう聞こえなかったのか？ 少なくとも、俺から言わせれば契約相手であるネプテユーンプラネテユーンの女神さえ救出出来ればそれで問題はない。他の連中はついでに過ぎん」

ルウイーの教祖さん——西沢ミナさんが眉間にシワを寄せてアナザーさんを睨み、とっても不愉快そうに、この国の女神ブランさんを見捨てるのかと問い詰め、アナザーさんはそれに対してあっさり肯定を返してしまいました。

けど……

「アナザーさん!? 私達は他の女神を見捨てたりなんて「お前は黙っている。今は俺が話している」あう」

私は、それを認めないと言おうとしたのですが、問答無用でギロツと睨まれて黙れと返されてしまいました。

「ご生憎さま、アタシは黙らないわよ！ アンタ、お姉ちゃんも見捨てるつもり!?」

「……………」

アナザーさんを睨むユニちゃんと、相変わらず笑顔なハクさん(候補生同士仲良くしようと言われたけど、どうしてかっいついさん付けしてしまいます)はアナザーさんの言い分で自分のお姉ちゃんが心配になってアナザーさんを問い詰めますけど、それに対してアナザーさ

んは訳が分からない物を見るような、とても冷め切った眼差しをユニちゃん達に向けながら、口を開きました。

「……何を訳の分からん事を言っている？お前達がプラネテューヌへ協力する限りは俺とて労力の提供程度は行うが？」

「ハア？なにが言いたいのよ！」

「ふん……お前達女神候補生がゲームキャラを持ち、プラネテューヌへ協力する。代償にプラネテューヌはその国の女神も救出する……これは各国の教祖が取り決めた条約である筈だが？」

「……唐突な新事実が明らかになっていました。」

それだけ言い切ると、アナザーさんは西沢ミナさんへ再度向き直り、再三に渡って要求を突き付けました。

「……それで、お前は どうする？協力を頑なに拒み、何もかも失うか、素直に協力して共に女神を救出するか……言っておくが、これは最終通知だ。これ以降俺がこの問いを受け付ける事はせんし、この提案を蹴った所で俺がゲームキャラ確保を止める訳ではない」

——さあ、どうする？

「……」  
そして、ミナさんはその問いに対して、数瞬の間を於いて絞り出すように声を上げました。

「……どちらも、認められません。少なくとも、私は……幼いあの子達を危険な戦場へ赴かせたくはありませんし、なによりもゲームキャラをこの国から持ち出す事を認める事はけして出来ません」

「……そうか」

その答えは、完全な拒絶でした。

ただ、この国の女神候補生の話とゲームキャラさんのお話ではちよつとニュアンスが違ったような……？

「……そうか……なら、お前を斬り捨て必要な情報を持つ職員なり、女神候補生なりを探し出して、拷問でも加えながら聞き出すとしよう……」

『ちよつま』

そして、そんなミナさんの主張に対して思うところでもあったの



か、アナザーさんが不穏な空気を纏いました。

私達もそれを止めようと動いたんですけど……

「はいはい。ダメですよ〜?」

「ガフツ!」

『……………え』

けれど、私達が止めるまでもなく、アナザーさんが腕をミナさんへ向けたと同時にハクさんはのんびりした喋り方をしながら、何時も通りの微笑みを浮かべ、まるで世間話でもするかのような自然さでアナザーさんの脳天へと、急に具現化させた大きな剣の腹を降り下ろして鎮圧してしまいました。脳天直撃です。

「まったく、いきなり『交渉は俺がやるからお前は黙ってろ』……………なんて言い出したかと思えば、なんで貴方は必要もないのに誰かを殺すなんて言うのですか?命は誰のものであれ1つしか無いのですよ?それに、以前約束しましたよね?不用意に人を殺めないと……………お忘れですか?」

「……………」

「西沢ミナ教祖……………すみませんが、懺悔室をお借りしても?」

「え?……………え、ええ……………勿論構いませんが……………?」

「では、わたしはこれで……………ネプギアさん、申し訳ないのですが、後でギルドで落ち合いますでしょうか?……………わたしは、貴女の決定には従いますから、ね?」

そう言って、気絶しているアナザーさんを背負いながら、ハクさんはこの教会の執務室から出て行ってしまいました。

「……………ふう」

「……………えっと……………アナザーさんが無茶苦茶言っでごめんなさい」

「あ、いえ……………気にしないでください。わたしも、無茶を言ってる事は自覚していますから……………」

ミナさんも、緊張の糸が切れたかのように安堵の溜息を漏らしています。

そして、そんな感じに和やかな雰囲気になっていたその時でした。

「西沢教祖!一大事です!!」

バン!!と、大きな音を立てて扉が開かれ、ルウイー教会の職員の間を着た人が飛び込んで来て……

「何事ですか?」

「ロム様とラム様が犯罪組織マジエコンヌに浚われました!我等の兵士も必死に抵抗したのですが、敵に転移魔法の使い手が居た為に、何処とも知れない場所へ逃げられてしまい、只今一生懸命捜索している最中であります!!」

……とんでもない爆弾を落としました。

「……………え?」

「た、大変ですう!」

「そ、そうね。急いで助けに行きましょう!?(…………でも、何で女神がそんなに頻繁に捕らわれるのかしら?)」

「嫁を攫うなんて…………許せない!!RED.ちゃんが成敗しちゃうんだから!!(嫁が攫われるのってすっごく王道だよね!)」

「……………」

つて、あれ?

「あ、あの、みなさん?どうs『バタツ』…………エエエエエエエエエエエエ!」

何の反応もないみなさんの肩に触ると、みなさんはそのまま床へ倒れてしまいました。

「あく…………ネプギア、そつとしておいてあげなさい…………コンパ、西沢教祖を医務室まで運んであげて?」

「任せてくださいです。えつと、医務室はどこですか?」

「…………あ、はい。こちらです」

「キュ……………」

そうして、倒れたみなさんはコンパさんが職員の人案内で医務室にまで運んで行ってしまいました。

「……………さ、これからどうするか、話し合いをしましょう?」

「そうね…………ま、言うまでもないかもしれないけどね!」

そして、倒れたみなさんを医務室に運びに行くコンパさんと、懺悔室に行ってしまったアナザーさんとハクさんを除いた面々で、この後

の事を話すのでした。

(……………私が気絶したみなさんに親近感を憶えたのは秘密です)  
話すのでした。

## 第四十一話

俺は今、所々に意味は分からんが石壁を彫って造られたのだろうレリーフや、恐らく歴代の女神と教祖と思われる人物を模したのだろう石像（因みに、歴代女神かどうかの判断基準は胸だ。歴代の女神らしき石像は全て胸部がまな板だった。教祖の方は知らん）のある狭い部屋で、精神的にかなりキツイ話しを無理矢理聞かされていた。

「————良いですか？命は大事なのです。不用意に殺すなどと、言っではいけないのですよ？」

「……………」

「……………あの、聞いていますか？（ちよつと強く叩き過ぎちゃいました？……………けど、あのまま西沢ミナ教祖とお話しさせる訳にはいきませんでしたし……………」

（……………くだらん）

しかし、何故俺はこんな場所でこいつのつまらん戯れ言を聞かされねばならんのだろうか？

確か、最後の記憶ではルウィー教会の執務室らしき場所で、イストワールから国を出る前に聞かされていた約定を破った愚か者の頸を刎ね飛ばし、その首を晒した上でここの連中からゲームキャラの情報吐かせる予定だった筈なのだが……………そう言えば、後頭部に大きな衝撃があったような……………？

「あのー、本当に聞いてますかー？」

（まあ、どうでも良い……………のか？）

本当はどうでも良くない気がするのだが、俺の本能が矢鱈とそれ以上気にするなど警鐘を鳴らしてくる為、これ以上気にするのはやめておこうと思う。

……………しかし、まあ

（ああ、この部屋は良い。何となく落ち着くし、何より必要以上に陽が差さん）

この部屋は良い部屋だ。少なくとも、俺個人の感想としては上の中に相当する。

少なくとも昔、ネプテューヌ女に勧められた半吸血鬼ダンプビル自治区の一角よりは気に入った……この悪趣味な石像群さえなければ、ここで暮らしても良いと本気で思う程に

(……正直、半吸血鬼ダンプビル自治区の同類達は嫌いではないのだが……家屋の趣味だけは噛み合わん)

連中にも俺と同じく吸血鬼ヴァンパイアの血が流れている以上、程度の差はあれ太陽に苦手意識ぐらいはある筈だが……まあ、自治区の連中は人間の血の方を優先しているのだろう。うん。

——そんな時だった。

「……………聞いてますか？」

「……………ッ!？」

底冷え焼き殺されそうするような声が聞こえ、思わず声が聞こえた方を向いたが……………

「……………?どうかしましたか？」

「……………何でもない」

そこには、いつも通りの能天気な笑みを浮かべたハクの姿があっただけだった。

「まあ、お説教はこのぐらいにしてと……そろそろネプギアさん達に合流しましょうか？」

「……………そう、だな(先程の寒気は一体……?)」

……………まあ、気にしない方が賢明と言うもの……なのか？

そして俺は、このルウィーで最後になる、のんびり出来る時間を終えたのだった。

【ジジッ……えのげ…ザザツ…を確認、これよりとう………を開始します……………】

『……………』

「えっちよ、アナザーさん!?何処に行くんですかって速い?!」

「……ふう、やっと帰って来られましたわ」

「……むー、むーむー……」

「むー！むぐぐむむー!？」

あれから、二人の女神候補生を縛り上げて風の魔法で浮かせながら街を歩いていけば、気絶中の縛られてる女神候補生を見咎めた衛兵達に追い回され、貧弱なこの身体に鞭を打って全速力で逃げ回り、途中で女神候補生を浮かせている魔法を反魔法装置マジックキャンセラーで強制停止させられてしまい、自力で二人を抱えて逃げ回る羽目になったりとまあ………。本当に、反魔法装置が肉体強化魔法にまで影響を及ぼすようでしたら捕まっていますわ。

「遅かったではないか……いつも時間にも仕事にも遊びを持ち込まずにきつちりしている汝にしては珍しい」

「いえいえ、生憎ですが、わたくしも単騎で一国の教会に備えられている全兵力を掻い潜って嚴重に保護されている——ましてや、当人身もそれなりに強い女神候補生を浚うのは困難ですのぞ」

「ハッ！だからオレ様が手を貸してやろうかつつたんだよ！そうすりゃあこんな無駄な時間を使うことも無かつたらうになア!!」

そんなわたくしに、同僚のアレイス変態さんとイヴェルトチンピラさんはそれぞれ思い遣りの籠った言葉を掛けて来ますが………言っては難ですが、勇者様に言つて欲しかったですわ。ええ、とつても

勇者様からでしたらわたくし、罵倒や暴力でさえご褒美ですもの………まあ、勇者様はお優しいですから、そんな事はしてくれませんけれどそれ………

「そう言うな。我等は実力に多少の差はあれど、対等の地位を頂く身、多少なりとも融通を効かせ合う程度の器量もなくては………いや、すまん。忘れると良い」

「オイゴラァ！テメエ今の間は何だつてんですかア?!」

「いや、気にするでない。私も大人気なかつたと、これでも少々反省し











「ごめんなさい。私が付いていながらこんな失態を……」

「いや、仕方ないわよ……誰にだって失敗はあるんだし」

「そうです。あなざーさんが奇行に走るのなんて今更ですし、はくちやんがそこまで気にする事ないです」

(うう、氣遣いが心に刺さります)

前に見た全力疾走の三倍は速い勢いで走って失踪したアナザーさんを、ルウイーの街中で見失った私は、ルウイー教会の応接室(執務室はミナ教祖が倒れたので宿舎の用意が出来るまでここで待機との事です)でネプギアさん達に合流した私は、どうしてあの程度の事が防げなかったのかと心底反省している真っ最中です。

「……でも、アナザーさんは一体何処に行っただんでしょうか?」

「そうですね。あなざーさんは無茶苦茶はしますけど、約束は破ったりしないですし……」

ネプギアさん達は、失踪したアナザーさんの行方を気にしていますけど……残念ですが、北西の方向に物凄い勢いで向かって行った事以外はさっぱり分かりません。

(……けど、彼は彼で意外と信用されてるんですね……嬉しいです)

「……………」(ポチポチ)

ええ、ええ、アナザーさんはアレで意外と誠実なんですよ。

普段は障害とみなせば誰でも何でも殺して排除しようとしていますけど、嘘は吐かないので約束さえしてくれれば殺さずに収めてくれる事はありますし、出来ない約束はしませんし。

(……まあ、約束してくれてなかったらダメな時もありますけど、その辺は私の今後の努力ですよね)

「……………」(ポチポチ)

……っとまあ、それはさておき

一体、どうしたと言うのでしょうか?

「……………」あ

「アイエフさん、どうしたんですか？」

「……………あいつ、なにやってんのよ……………!?!」

……………なんでしょうか？すごく嫌な予感が……………

「この辺にいるオトメちゃん達にメールしてなにか困った事はないかって聞いたんだけどね……………居たのよ」

「居たって…誰がですか？」

「……………アナザーの奴、世界中の迷宮付近で周りのモンスターを血祭りに挙げながら見るからにボロボロの黒っぽい人とガチバトルを繰り返して……………」

『……………はい?』

ああ、やっぱり……………

「じよ、冗談よね？」

「……………幾らなんでもこんな時に冗談なんて言わないわよ……………こここの女神候補生が浚われて大変な時に、アイツは一体なにやってんのよ……………!?!」

「え？ルウィーの女神候補生の方が浚われてるんですか!?!」

え?……………一体、何時の間にそんな事に……………!?!

「ああもう！その話は道中でじっくりと……………あのー……………なによ今度は!?!」

「あの、西沢教祖から貴女方へ伝えろと言われて来たのですが……………」

慌てて教会から出て行く準備をしていたアイエフさんは、突然……………いえ、この職員の方ですし、突然と言うのも難ですけど……………突然、西沢ミナ教祖からの伝言を持ってやって来た職員の方に呼び止められていました。

「なに? 私達は急いでるの。話があるなら手短かに」ああ、それなら問題ありません。浚われた女神様達の居場所が判明しましたので、救助の依頼に来ただけですので……………それで、何処よ?」

「はい……………場所は世界中の迷宮です!どうか、ロム様とラム様をよろしくお願い致します!」

それだけ言って、返事も聞かずに（いえ、どっちにしても請けましかけど……………いいんでしょうか?）ルウィー教会の職員の方は部屋を出て

行っちゃいました。

『……………はあああああああああああああああ  
!?!?!?』

(ぎ、最悪です)

い……………急がないと……………間に合わないかもしれませんが、最悪の場合、安否の確認だけでもしないと……………

こうして、私達は世界中の迷宮へと向かって全速力で向かって行くのでした。

(……………とにかく、女神候補生の方の無事を祈りましょう！なんかダメそうな気がしますけど、最初から諦めては助かるものも助かりませんしね！)

## 第四十三話 改善後

世界中の迷宮跡地から少しだけルウイーの首都へと近付いた場所

そこは今、周辺の山が幾つも崩れ、植物も動物も悉く薙ぎ倒され死に絶えた死の大地と化していた。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!!』

『や…ザッザザ…かを……ジジジジジジ…す…』

しかし、その元凶である2人はそんな事は知らんとばかりに殺し合う。

『殺殺、殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!!』

『……つづ…に…ジジジ…ん…げジジ……ガガガッし』

喉から黒く染まった泥のような血を流しながら、殺!と叫ぶ血塗れな銀髪の男は、ただ左腕を振るうだけで周囲へ衝撃波を撒き散らし、脚で大地を踏み締める度に大地を砕く。

逆にそれとぶつかり合うアナザーは平時以上に無機質な無表情のまま、何故かノイズが走っている声をこれまた無機質に淡々と発しながら、本来なら全身に膨大な量の血を纏い、その身を完全に狂気に委ねても尚、受け止める事の敵わない筈の拳を正面から力任せに殴り返し、同じように周囲へ衝撃波を撒き散らしていた。

更にその上空ではこの地へと来る道中のモンスターから搾り取ったのか、大量の蒼い血が蠢いた。

上空で蠢いている膨大な蒼い血は、唐突に発生する黒い靄の様なナニかと激突する。

空を飛んでいる鳥系のモンスター達はその余波で死に絶えて、蒼い血を操っているアナザーには問答無用で全ての血を吸い上げられ、<sup>戦</sup>血を吸い上げるのを<sup>増</sup>阻止しようとしたのか、急に発生した黒い靄には肉片1つ残さず消滅させられていた。

そんな世界の終わりのような光景の中で殺し合う二人——しかし相当な無理のある強化だったのか、アナザーの肉体は血塗れな銀髪の男と殴り合う度に何故か黒く染まった血を噴き出しながら自壊す

る。

銀髪の男の拳を防ぐ為に差し出した右腕は、拳そのものこそ防いだ  
が腕の筋肉が断裂し、関節も砕けてだらりと垂れ下がる。

また、銀髪の男の顔面に叩き付け脚で蹴られた左腕は、皮膚が裂け  
て白い骨が服を突き破って飛び出している。

『殺殺！殺殺殺殺殺、殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺！！』

『うっ…ザザ…ん、や……ジジッ…をてん…ガガガツくきを……ザッ  
ザザザ……す』

それを好機と見たのか、血塗れな銀髪の男はアナザーに追撃する。  
しかし、アナザーは急激に黒く染まった血を固めて全身に纏い、更  
には自壊した箇所をその黒く染まった血で固めた事で破れた皮膚か  
ら流れる血を塞ぎ、断裂した筋肉と砕けた関節を補強して肉を喰い  
破った骨を強引に中へと戻した。

『殺！殺殺殺、殺！殺殺殺殺殺殺殺！！』

『…とう……しジジジジッじょうほガガガガくガガツ……ふよ……ザ  
ザきギギギギウ』

そして、そのまま硬化した黒い血を刺々しい鎧のような形状にして  
頭部を除く全身に纏い、血塗れな銀髪の男へと先程以上の速度で向  
かって行った。

(……………)

ふわふわとした不安定な感覚

はつきりとモノが視えない状況

ああ、これは夢だと……不安定な意識の中で想う。しかし、直ぐに  
記憶から抜け落ちる。

『…』

(……………)

目の前には、俺と誰かが居る。以前勧められた明るい部屋に居る。何処となく楽しそうな雰囲気であり、何処となく懐かしいと思う。

』  
』  
』

しかし、俺はこんな知らない。目の前の誰かは誰だろう？どうでもいい。

』  
』

更に誰かが増えた。分からない。小柄だ。

』  
』

』、  
』

』。  
』、  
』

』、  
』

三人で抱き合い、何かを話すと、目の前の俺は玄関から出て行った。そして、特に意味もなく、場面が切り替わった。

』  
』

燃える。燃える。瓦礫と死体と死人紛いの生者が溢れる。

恐らく、平和な田舎町だったのだろう瓦礫の山は、時折崩れ生きている人間を潰し、死体は其処等中に溢れている。

(……………)

目の前で駆け回る俺は、誰かを探しているのだろうか？理解できない。興味は低い。しかし視界は閉じない。離れる事も出来ない。

』、  
』

表情は見えないが、相当必死になって何かを探していた目の前の俺は、半壊状態としか言いようがない。一件の家屋の前で立ち止まった。

(……………)

そして、比較的損傷の少ないその家屋に覚えでもあったのか、目の



前の俺は希望愚に満ちたかような表情で半壊した家屋へと入っていった。  
理解不能

』……』  
其処に在ったのは、案の定、全身を明らかに人為的に破壊された誰か達の姿だった。

寧ろ、俺はこの結末を《《妥当だと》》断定する。

一体なにを期待していたのかは知らないが、人間の言う秩序だの理性だのと言う言葉は、結局の所は単なる幻影だ。何かあればそれだけで人間は獣としての側面を是として表にする。

はつきり言つて、家屋が半壊していた時点で希望など持つべきではなかったのだ。

』!!!』  
俺は、目の前で嘆きの慟哭を挙げているらしき俺を観て、心の底からそう思う。

そして、失った果てに絶望の叫びを挙げる位ならば、極力離れずに共に居れば良かったのだと

』!!!』  
そして、そんな目の前の俺を見張つてでもいたのか、周囲にはなにかを持ったボロボロの服を纏う人間達で溢れ返っていた。集団で袋叩きにするつもりなのだろうか？

』!!!』  
何かを言いながら、周囲の人間達が近寄り、目の前の俺に刃物を振り下ろした時だった。

』……』  
それは、目の前の俺から聞こえた初めてはつきりと聞き取れた声だった。

俺よりも少し低いその声は、狂笑としか言いようがなかったが……しかし、そんな笑い声は直ぐに消え去った。

』!?!』

『……………』

目の前の俺は、振り下ろされた刃物を右手で受け止めると共に、親指以外が殆ど削げたにも拘わらず、痛みさえ感じていないかのようにそのまま刃物を奪い取り、流れ出た己自身の血を操作し、刃物を振り回した。

『……………殺』

『……………!?!?!?』

そして、逃げていく人間達の腕や脚を斬り裂き、そこから流れた血を支配する事で対象を死ぬ限界まで吸い上げる。

『、——!?』

『……………』

そして、周囲でしぶとく生き残っていたネズミやゴキブリ等を吸い上げた血で包み、潰した。

『……………!?!?』

『……………!?!?』

そして、そのネズミやゴキブリ等を潰した血を元の持ち主の血管の中に無理矢理戻し、残骸を強引に血管へ挿れたのを確認すると同時に、血流を強引に進める事でその人間達は死に絶えた。恐らく、内側から血管をズタズタに引き裂かれて即死だろう。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!』

そうして、目の前の俺は紅かった筈の髪が白くなり、そのまま狂ったように暴れ出したのだった。

「くすくす、残念だけどここでおしまい！アナタにはこんな結末の記録なんて必要ありません！おとなしくオレアタシのモノになってくださいね？ア・ナ・タ♪キャツ」

(……………イラスト)

それ以降の映像は、俺には流れて来なくなった。

「……………わたしの『』を——」

「!?!?」

(……………)

そして、なにか異物が挿ってくる感覚が残ったままに、俺の意識は  
浮上した。

## 第四十四話

ルウイーの教会から出て数十分

ルウイーの女神候補生の方を救出する為に大急ぎで世界中の迷宮へ向けて全力疾走した私達は、目的地である世界中の迷宮から後数キロメートル程の地点で足留めを食っています。

ただ、一応断っておくなら、その足留めは決して犯罪組織から刺客が差し向けられたとか、そう言う話ではなくって……………

『殺！殺殺殺、殺！殺殺殺殺殺殺！！』

『どう……………しジジジッじょうほガガガガくガガツ…………ふよ…………ザザきギギギギウ』

『……………』

……………黒い甲冑を纏っているアナザーさんと全身がボロボロな銀髪の人との戦いが近場（5km先）で展開されている影響で、周辺の道が悉く崩壊していたんです。もつと言えば、地面には幾つも巨大なクレーターが出来上がり、周囲の山はインフレの進んだバトル漫画の如く上から半分ぐらいが消し飛ばされて、残された土台の部分が哀愁すら漂わせていました。

「……………あなぎーさんって、こんなに危なかつたんですか？」

「……………いえ、私の記憶が合っているなら、私が女神化して戦えば五分に戦えるので、拳のぶつけ合いで衝撃波が出るぐらい強くはなかつた筈ですけど……………」

コンパさんは何故か上を見て、遠い目をしながら呟いていました。けれど、そんな筈はありません。少なくとも、殴り合うだけで衝撃波が出るような拳のぶつけ合いが基本なら今の私では勝てませんし……………それに、そもそもアナザーさんの筋力は本来あそこまで強くありません。

戦ってる銀髪の方は知りませんが、何故かノイズが走って二重に声が聴こえるアナザーさんの筋力は本来なら私よりも低い筈ですし、その私だってどう頑張っても200mmの鉄板を素手で破れる程度です。

幾ら私でも拳を振るった余波だけで山が吹き飛ぶ衝撃波は流石に……今度、どうやったのかを聞いてみるべきでしょうか？

『え？』

「な、なんですか？皆さんいきなり私の方を見て……ちやんとあつちを見てないと、いざと言う時に命に係わりますよ？」

そんな時、何でかは知りませんが、ネプギアさん達は私を見て変な声を上げたのです。

正直、可笑しな事を言っただつもりはないのですが……なんなのでしょうか？

「……え、あの子、……見え……？」

「さ、さ……聞いて……」

「……ら、……が聞いて……」

「は……!?無……!」

「言い出し……、諦め……」

「……ああもう、分かった、分かったわよ!」

そうして少しの間、皆さんは円陣を組んで内緒話をしていたのですが……話しが纏まったのか、その中からユニさんが出て来て、私の前に立ちました。

「……あのさ、ハク」

「はい。なんででしょう？」

そして、言い難そうに言葉を詰まらせると、意を決したような表情をして、こう言い放ちました。

「……アンタ、アレが視えるの？アタシにはただ単純に空の上で血生臭い紅と蒼の塊と嫌な感じがする黒い塊が激突してるだけにしか見えなんだけど……」

「……はい？」

一方で、ハク達が呆然としている間に、アナザー達の闘いは終わり



【……<sup>ゲート</sup>門解放……強制連行……開始】

——何処からともなく現れた光り輝く円環に吸い込まれ、桁外れのサイズにまで膨れ上がっていた黒い球体諸共に何処へと消え去ってしまった。

そして……………

「え？」

「な、なんでアタシ達まで……………!？」

「吸い上げられてるですー!?!わたしはごみじゃないですよー?!」

「あつはははは！RED、ちゃん空を飛ぶの巻きー!!」

「……………ああ、結局、こんなオチなんですな……………」

「……………(……………懐かしい。なんで、先程までの争いが、今、目の前に広がっている光が、感じた事も無い筈の、母の腕に抱かれたかのような懐かしさを感じているのでしょうか……………?)」

……………アナザー達の殴り合いによる巻き添えを受けないで済んだギリギリの地点に居たネプギア達の頭上にも同じような円環が現れ、アナザーと銀髪の男と同じ様に吸い込んで行ったのだった。

『…………………………』

その後に残されたのは、アナザーと銀髪の男が暴れた結果、無数の生物が動植物問わずに死に絶えて荒れ果てた大地と崩れ去った山ばかりであった。

## 第四十五話

「う、んん……」

「ここは……」

一体、どれだけの間意識を失っていたのでしょうか？

何故か白い輪に吸い込まれてから目が覚めたら、目の前に広がるとっても綺麗な懐かしい景色を前に、私は今の状況を考える訳ですけど……あれ？そう言えば、なんでこんなに焦げ臭いんでしょうか？

『あ”あ!!』

「って、なんでこんなに炎が燃え盛ってるんですか?!?!?だ、大至急お水を用意しないと……!?!?」

「た、大変！一体誰がこんな酷い事をしたのよ?!」

（焦げ臭いって言うか燃えてる?!?なんか凄い勢いで燃え盛ってますよ!?!?)

私が焦げ臭いと思って振り返ると、ここでは白い炎がボーボーと燃えて誰かを燃やし尽くしていました。

それは確かに焦げ臭い訳ですよね!?!?と言うか、一体誰が燃やされるんでしょうか?!

えーっと、アイエフさんもコンパさんも無事ですし、ユニちゃんも無事、RED.さんも無事……と言うより、何故か炎の近くで踊ってますし、ハクさんは慌てて魔法を使おうと……って、魔法陣から凄い勢いで光線が飛んでいって燃えてる誰かを吹っ飛ばしました!?!?なにやってるんですかあの人!?

「ちよつとハク?!」

「あう、間違えちゃいました!?!?えつとえつとえつとえつと……こうしてこうして……ああ?!?!?」

「ちよ、危ない?!アタシを殺す気!?!」

「ご、ごめんなさーい!!」

（うわー……）

更に、うっかりビームを放って慌てたハクさんは、幾つかの魔法陣









「と、とにかく！まだまだダメージは消えていないのですから安静にしてください！」

「ガア?!?!」

そのまま、何故か頸を締め上げられた俺は、もう一度深い眠りに（強制的に）就かされるのだった。

## 第四十六話

何処となく懐かしい、白い光が満ちている草原のような場所

そこで私は今、燃えている誰かを莫大なシェアエナジーを物質化して創った鎖で拘束して引き摺っている女の子の案内で、何処かへと向かっています。

「……………こつち……………」

「一体、何処に向かっているんでしようか…?」

「さあ?その内分かるんじゃない?」

「コンパ、ユニの言う通りよ……………この女神候補生の件もあるんだから、こんな何処ともわからない場所で彷徨ってる場合じゃないわ」

「ええ、本当なら今直ぐにでも女神候補生の方を救助しに行くべきですけれど……………その結果として迷子になって出られなくなつては救助しになんて行けませんからね」

実際、この場所に何処となく懐かしいと感じてはいますけど、私はこの場所を知りません。

下手に動くとそのまま遭難して脱出に時間がかかる可能性は非常に高い訳で……………そのぐらいなら、先住民(?)らしき女の子に道案内をお願いしていた方がマシと言うものです。

『……………』

それから、暫くの間歩き続けた後です。

「おかえり! (びよいーんびよいーん)」

「……………ん、帰った」

なんとそこには、双子のようにそっくりな茶髪の女の子達が何故かあるベッドの上で跳び跳ねていたのです。まるでカンガルーのように

「ねえねえ! そのブーツ! って燃えてるのなに!？」

「なあに? (はてな)」

「……………これ、人……………?」

「ちよ…!？」

可愛らしく小首を傾げながら聞いて来る双子の女の子に対して、黒

い髪の女の子は、燃えている誰かを指し示して、端的にそう説明してしまいました。

大分シヨツキングな光景ではあるので、出来ればなるべく誤魔化してお茶を濁したかったのですが……大丈夫でしょうか？

「ええ!?ちよつとー!それ大丈夫なのかな!?ロムちゃん!」

「うん、大丈夫? (はらはら)」

「……問題、ない……」

(………大丈夫そうですね。意外と)

大丈夫そうですね。色んな意味で

トラウマにならないか心配していたんですけど、安心しました。

(………髪が長い方の女の子が短い方の女の子へ向けてロムちゃんと言つてましたけど……もしかして……?)

そう思った私は、髪の長い女の子へと声を掛けてみる事にしました。

「あの、ひよつとしてルウイーの女神候補生の……?」

「うん。わたし達がルウイーが誇る双子の女神。ラムちゃんロムちゃんとはわたし達のことよ!」

「…… (こくこく)」

『……え／わー、かわいいなー!』

もしかしたらと思えば、案の定、教会で救助依頼を請けた女神候補生のロムさんラムさんのお二人でした。

……まあ、ドヤ顔で名乗りを挙げたお二人ですが、ネプギアさん達もここまで幼いとは思つても居なかったのか、凄く意外そうな顔をしています……かく言う私もここまで精神面が幼いとは思つてもみませんでしたけれど

「やっぱりそうですか……私達は教会からお二人の救助を依頼された者です………無事でよかった」

「当然でしょう?だってわたし達、さいきよーだもの!」

そんな話しの最中でした。

「……んしよ、んしよ………」

私達をここまで案内してくれた女の子が何時の間にかボロボロの

ジャージ姿からピンクのスーツとメガネに着替えて、恐らくシエアエナジーで出来たのだろう黒板を引っ張って来たのは……

「あの、なにw「静粛に……」ア、ハイ」

「……集合……これから授業を始めます……」

ネプギアさんの声を跳ね除けて、そのまま私達の目の前にまで黒板を引っ張って来た女の子は、右手にチョークを持って、宣言通り説明を始めました。

「まず、質問……ある？」

「あ、じゃあ！ここは一体何処なんですか？そして、貴女は一体誰なんでしょうか？」

「……まず……わたしはエルマ……ルウイーの……天使？「はい？天使ってなん」シヤラップ「ア、ハイ」……天使兼、女神の従者……」

まず初めに、手を挙げたのはネプギアさんでした。

ネプギアさんが多分私達の殆どが知りたいだろう事を質問すると、女の子——エルマさんは、ちよつとよく分からない事を言い出しました。天使ってなんでしようか？

しかし、そんな疑問も、この後の答えで一気に吹き飛ぶのでした。

「……次、ここは……ルウイーのシエアの内部」

『………はい？』

……え？え？……シエアって中に入れたんでしようか？

「いや、シエアの中とか言われても……」

「話がよくわからないです。もう少し分かりやすく説明して欲しいです」

「私も、アイエフさん達に同意です。もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「………分かった」

私達の抗議に対して頷いてくれたエルマさんは、少し思考を整理するようにまた黙りだすと……

「………一定範囲内を特殊な結界で世界から隔離した後、この次元と何処かの次元の間に存在している緩衝地帯である次元の狭間に廃棄を前提にしてその隔離した空間を置き直して出入り口の

管理者権限をゲームキャラとわたしのふた r 『ストーリーップ!!』  
……………今度は、なに?」

……………詳しい説明をしてきていたのですけれど……………アイエフ  
さん達にストップをかけられてしまいました。

一体、なにがダメだったのでしょうか……………?

「いや、細か過ぎるから……………詳しい原理とかは本当にいいから……………」

「あ、アタマがクラクラするですう……………」

「すう……………すう……………」

「……………ああ／あ……………」

そこには、難しい説明だったのか、頭を抱えてフラフラしているコ  
ンパさんと眠ってしまっているRED.さんとロムさんラムさんが  
居ました。

「……………次元の外側を街に、次元を家に例えると、一軒家の中にあつ  
た部屋を庭に移築したようなもの……………以上、他」

「な、なるほどです」

「……………」

(……………まあ、魔法を専門に研究しないなら聞いても仕方ないですよね  
……………多分)

固有能力の制御の為とは言え、魔法もそれなりに嗜んできた身とし  
ては悲しくもありますけれど……………彼女とは後でじっくりとお話し  
るとして

「では、膨大なシェアを消費して、何故このような大掛かりな事をした  
のでしょうか?」

「あ、それアタシも気になってたのよね」

「私も……………体感的なこのシェアエナジの密度からして、ルウィー  
だけではこの結界の維持なら兎も角、発動までは賄えませんか?」

今は、この博麗大結界……………基、特殊な異界を造り上げる程の結界が  
何故在るのか……………その意義を問うとしましょう。

(本当なら、目の前で鎖に縛られ相変わらず燃え盛っている方の救助  
を優先すべきかもしれませんが、どう考えても手遅れですし  
……………それに、私が救助しようとするとなんらトドメ差しちやいそう



ですし……………)

「……………それは——次回に続く」

『ズゴ—————!?!?』

……………あ、次回に続くんですね……………次回って何でしょうか？

## 第四十七話

「それは――」

『それは?』

エルマさんは数秒程沈黙した後、こう言いました。

「……………それは、とある『怪物』を封印する為よ」

そんなエルマさんは『怪物』の部分にだけ、まるで親の敵を語るような、或いは、どうしようもない程に不運な人を憐れむような……………とにかく、絞り出すような声からは凄まじく複雑な想いが滲んでいました。

「かいぶつさんですか……………? モンスターさんなら、お外にいっぱい居るですよ?」

それに対してコンパさんはゲームギョウ界<sup>外</sup>で溢れ返っているモンスター<sup>の</sup>事かと思ったのか、私達が歩いて来た方向を指差してそう指摘しました。

「……………アレは、モンスターなんて茶稚<sup>で</sup>生易<sup>しい</sup>代物<sup>じや</sup>ないわ」

「アレは、今から約1000年前に現れたマジエコンヌが、この世界に解き放った死と絶望の権化」

「アレは数え切れない程の人間を溶かし」

「アレは、当時の女神の半数以上を手に掛けた」

「それだけの犠牲を払って、どうかこの地へと封印出来たの」

コンパさんの問いに対して、エルマさんは表情を殆ど変えずに淡々とした口調で話しています……………ですが、先程の『怪物』と言う言葉の所為か私にはその無機質さは何処か無理をしているようだとしか感じられないのでした。

「……………」

『……………(すう……………すう……………)』

そうして暫くの間、気不味い沈黙が続いた時でした……………

「……………あ、火が消えて……………」

先程まで燃え盛ってた焔が消え去り、その中身が露になったので

す。

「……………えーっと、これも説明して貰っていいかしら？」

「……………元々、そのつもり」

なんと、燃えていたのは（半ば予想はしていましたが）先程まで凄まじい勢いで大暴れしていたアナザーさんなのでした。

確かに、彼ならあれだけ燃えててもしぶとく生き残りそうだとは思いましたけど……………こう言ってはなんですが、殆ど火傷さえしていないのには一周回ってその頑丈さにドン引き……………とでも言うべきでしょうか？

（……………あれ？でも、アナザーさんってそんなに頑丈じゃなかったような……………？）

「……………とは言っても、わたしも全部把握している訳じゃないし、全部言える訳じゃないわ」

「別に、それで良いわ。言える範囲がよっぽど少ない限りはね」

「……………ん、言えないことはあんまりない……………でも、その前に」

言えないことはあまりないと言ったエルマさんは、そのまま私の方を向くと……………

「……………これ、よろしく」

「え？……………ああ、はい」

そのまま、エルマさんの鎖に縛られていたアナザーさんを投げ渡してきたのでした。

（……………取り敢えず、鎖を外してと……………）

「……………話せば長くなるけど……………何処から説明する？……………ん、そう、その辺」

「じゃあ、早速、キリキリ吐いて貰うわよ？」

「……………ん、まず第一に、アレが燃えていたのは、この結界の効果の一部」

そう言うと、エルマさんは先程物質化した黒板へデカデカと結界の二文字を書き、その下へ番号を振っていききました。

「……………言うまでもなく、この結界の効果の1つは、あの怪物の封印にある」

そして、一番目には【怪物の封印】と書き込みます。

まあ、そもそも封印するのに封印の対象を出られるようにしては意味がありませんし、当たり前ですよ。

「……………まあ、当たり前の話しだから、ここで一旦終わらせる。次に、この結界の内部では、様々な恩恵がある。一つはこれ」

【女神に属する存在の強化】

「すごいじゃない!?!」

「これなら、犯罪組織を倒してねぶねぶ達を助けるのなんてわけないです!」

コンパさんやアイエフさんは喜んでいますが……でも

「……………言っておくけど、この結界は維持するより張る方が難しいわ。専用の触媒が要るし、術者にも相当な負担を強いる禁術も使われてるから、術者も居なくなつて失伝してるだろうし」

「まあ、そんな事が出来るんならお姉ちゃんやグロウ辺りがとっくにやってるでしょうしね」

案の定、この結界を張るのはまず不可能と言う事が明言されただけでした。

仮に必要な触媒及びに複雑怪奇な結界の式を調整可能な術者の確保が出来ても、これだけの大結界です。一体どのような代償がある事か……考えたくもありません。

「……………尤も、これだけやってもわたしに出来たのは足留めだけのだけけど……つと、それは良いわ。問題はこの効果よ」

【特定の存在の弱体化】

「……………まあ、あの怪物にしかこの結界はこの力を発揮しないのだけれど」

「……………あの、これでどうしてアナザーさんは燃えたんですか?」

「それは……………」

エルマさんは、ネプギアさんからの質問にどう答えるのかを考えあぐねているようですが、私は大体の予想が付きました。

「それは……その怪物の力か血でも吸収して内包していたから………ですか?」………そうよ」

案の定、ですね。



いましょう。

「と、とにかく！まだまだダメージは消えていないのですから安静にしてくださいー！」

「ガア?!?!」

取り敢えず、私はアナザーさんの頸を軽く握ってその意識を強制的に落とすのでした。

『……………』

「さ、さあ！他にもまだまだ聞きたい事がありますからね！説明を続けてください!!」

——この時、この光景を見ていた全員は、心を一つにしてこう思ったそうな……

((((あ、誤魔化した)))



暑い一時もお忘れですか？」

『え』

「……………は？」

熱い一時？二人きり？なんだ？なんの冗談だそれは

真面目に身に覚えがないが、この女はそんなつまらん嘘は吐かない。非常に不快だし腑に落ちないが、熱い一時に相当するなにかが遭ったのは確かなのだろう。

そんな時、どうにかして何が遭ったのかを思い出そうと考え込んでいた俺の目に、近くに居たネプギアがハクに声をかける姿が目映った。

「えーっと……………ハクさん？熱い一時って一体……………」

（ネプギア！良いぞ！もつと聞け！あわよくばこのままこの話をうやむやにして誤魔化してしまえ！）

—なんか色々で見覚えがないのも居る《そもそもアイエフ、コンパ、ネプギア、ユニ、ハク以外知らん》が、その辺はもうどうでもいい。

今はとにかく、この嫌な死亡フラグを消し去るのが最優先だ。

「ああ、その事ですか？それは、ルウイーの雪山での事でしたよね——」

『……………』

「——と、言う訳です。前に教会で説明しましたよね？」

……………まあ、そんな事だろうと思ったよ。

（しかし、雪山か……………うん、まるで身に覚えがないな！）

取り敢えず、必要な事を聞くしかないだろう。

「そうか……………悪いが、俺の記憶はラストイションで犯罪組織の連中を庇う腐れロボットに斬り捨てたらr」は？アンタ、あの時の事を思い出したの!？」……………はあ？なにがだよ？幾ら暴走しても殺されかけた相手位は覚えてるぞ？」

「いえ、思いつきり忘れてましたよ……………」

「忘れてたですねぇ……………」

……………訳が分からないよ。

「……………まずは、お互いに情報を確認し合う事を優先しましょう？まず、



私から——」

そうして、ハクからの説明を聞いた俺が思ったのは、1つだけだ。  
(……………ゲームギョウ界って、なんなんだろうな……………?)

ここ二日間の事をアナザーさんへ説明し終えた私は、膝から起き上がって血に胡座を掻いて座っている仏頂面をしたアナザーさんを見ながら、思えばこの二日は色々遭ったなと思うのでした。

「……………言いたい事は多々あるが、その辺はもう良い。次は俺が説明する番だな」

「はい……………まあ、私達もそこまで分かっている訳じゃないんですけどね？」

取り敢えず、エルマさんが言う所の怪物をどうにかしないとゲームギョウ界が不味いとだけ認識していただけますけど……………ゲームギョウ界って、普段は本当に平和なんですけどね……………

「まず、暴走してた影響からか俺の記憶は曖昧だが……………ざっくり言えば、なんかあからさまに正義側っぽい見た目のロボに叩き斬られた」  
「……………見た目はって所が気になるけど、良いわ。他になにか覚えてないの？」

(は、犯罪組織なのに正義っぽい見た目のロボットですか……………なんて言うか、複雑ですね)

ネプギアさんの目が輝いている気がしますけど、今はアナザーさんの話に集中しm「他か？なんか白っぽい混ぜ物が在った気がするが、良く覚えてねえな……………えー」

「ちよ……………それだけ？他にこう、なんかないの？蛇と呼ばれてたーとか段ボールを被ってたとかk「ない」最後まで聞きなさいよ！」

「そうは言うが、お前はアルコールで酔い潰れた後の記憶が有るのか



でなら、外よりは弱くなってる筈だから……………」

『殺！』あぶ!? 『殺！』あほ『殺！』うか! 『殺殺！』貴様!」

そして、矢鱈と重点的に狙われるアナザーさん。

なにかしたのでしょうか? これでもかと言わんばかりにアナザーさんだけが狙われています。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!』

「だああああ!! 兎に角! 俺が囿になってるからお前らは最大出力で必殺技の用意でもしとけ!!」

……………まあ、それはさておき

アナザーさんが言うように、暫くはアナザーさんに囿になって貰って、私達は必殺技の準備をしましょう。

……………あ、そう言えば私、そもそもエグゼドライブは持っていないんです!?

## 第四十九話

白の女神が治める国に在るからか、矢鱈と白い雪原が在ったこの世界の内部だったが、そこは今、あちこちに大穴が空いて土の色が剥き出しになり、何処となく不愉快な光景白塗りの陶器のような景色は一白い鍍金が剥がれて土色が溢れ返った穴だらけの見るも無残な景色《何故か悲しくなる光景》へと変わり果てていた。

『殺ッツッツ!!』

「ぬおおおおおおおおお!!」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

しかし、今はそれ処ではない。

両腕が使えないにも拘わらず、矢鱈と俺を狙ってくる敵は、大地を踏み締めて突進してくる度に大地を砕き、ロケットもかくやと言う勢いで俺に向かって突撃して来る。

それをどうにか避けた俺だが、当然、そんな一撃をまともに受ければ命はない。恐らくだが、その破壊力はハクの拳を無防備に受けた方がマシに思える程だろう。

『殺!!殺殺殺!!』

「うげ……」

しかも性質の悪い事だが、アレは俺が触れたら命は無いだろう出力の——恐らくは、アレの固有能力だろう球体の闇を浮かべ、己の体積を嵩増ししながら同時にその危険度を高めている。

「チツ……なんだってんですか……この数日何が遭ったよ」  
「われてんですかー俺は……この数日何が遭ったよ」

突撃してくる闇と敵をどうにか回避して先程まであの闇が当たっていた大地を見た俺は、あの闇の在った場所から一直線にくり抜かれて消滅している大地の溝に、アレの危険度の見立てを急速に高めていた。

「たく……あがつ!」

「……そうか、お前はあの■■■を選ぶか……」

極め付けはこれだ。

とても悲しくなる  
誰かわからないが、赤紫色の髪をした女が悲しそうな、そして、全てを諦めたような表情をしながら左の視界を覆って、なにかよく分からない事を宣っている。

言葉にすればそれだけだが、それだけの映像と音が、脳への過剰な負担にでもなっているのか、左側頭部が割れそうな勢いで激しく痛み、心臓は今にも破裂しそうな勢いで、激しく脈打っていた。

(なんだこいつは……誰だ?なにが言いたい?)

【アナザー……ならばお前は、■■○○このゲームギョウ界○○■■○○】

だが、どんな理由があっても戦いの最中にそんな動作頭を叩いてをして良い訳もなく――

『殺!!!』

?!?!?!

「ガフツ――」

――突撃して来た敵に正面から衝突して、俺は血を撒き散らしながら彼方へと吹き飛ばされたのだった。

『殺ツツツ!!!』

「ぬおおおおおおおおお!!」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!

アナザーさんを囷にしてエグゼドライブ一斉掃射を入れようと言う方針になったこの戦いですが、轟音が響き渡る中で皆さんが限界まで力を高めている最中、私は1人、内心頭を抱えながら女神化だけはずせに力を高めました。

「一斉に行くわよー!」

『はい／ええ／うん!』

(……どうしましょう?私、エグゼドライブは持っていないのですが……今更そんな事を言って空気をぶち壊しにする訳にもいきませんし……)



から刺さっていた矢諸共に完全に千切れてしまいました。

「追加よ！耐えられるかしら?!」

更に、その上から巨大な隕石を横した赤い力の塊が叩き落とされたのですが、不意打ちで叩き付けたハートと違い、素早く大地へと配置しされた黒い塊が上方向へ腕のように変形し、隕石を横した赤い力の塊を押し止めてしまいました。

「カチンコチンに凍っちゃえ！／本気の攻撃……!!」

そうして、ラムさんロムさんの掛け声で上から来る力の塊に黒い塊で形成した大きな腕で抵抗している怪物さんの周りの空気が凍り付き、腕のような形状になっている黒い塊以外を固めてしまうと同時に、上空から赤い力の塊を無視して小さな青い光が8つ、腕を無くしているからかぎこちない動きをしています。氷塊の中で固められながらも下半身の力だけで己を閉じ込めている氷塊を強引に砕きながらこちらへと向かって来る怪物さんの周りを囲むのでした。

「ノーザンクロスー」

そして、凍り付いた怪物さんの周りを囲んでいた8つの青い光が二組の十字の形状となり、一方が半ば凍り付いている黒い巨腕を砕き、もう一方が氷を砕きながら怪物さんを打ちのめすのでした。

「目標確認!!／これが私の全力全開!!」

けれど、そこまでもなお生き残り、氷を砕く青い光の十字を肩から黒い塊を形成して生やした8本の偽腕を用いて、十字を発生させている四隅の光点を握り潰す事で無理やり消し去った怪物さんは、上から来る隕石を横した力の塊が墜ちる範囲から素早い動きで離れ、こちらへと向かって来ます。

「二いつけええええええええええええ!!」

しかし、そんな怪物さんに対してネプギアさんとユニさんは、それぞれの武器を怪物さんの方向へ向けて、一斉にそれまで溜めた力を解き放つ事で濁流のようなビームを放ち、怪物さんを所々焦がしながら先程隕石を横した力の塊が墜ちた場所にまで押し流すのでした。

「え、えつと……と、とりあえずすごい浄化ビーム!! (適当)」

「……?!……これで、私の使命は終わらせる——エンゼルアロ







そして、我を押し潰す巨大なハートが霧散すると同時に、上空から巨大な隕石のようなものが降り注いで来たが、それは我を生かす忌々しきこの加護が勝手に造り上げた腕が下から支える事で訳なく受け止めてしまうのであった。

（ああ、忌々しきあの気狂イメ……なぜ、素直に我を吾をワレヲ）

「カチンコチンに凍っちゃえ！／本気の攻撃……!!」

あの忌々しき気狂いへの憎悪に燃える我の祈りを、嘗て滅殺してしまった——否、滅殺した守護女神が聞き入れてくれたのか、我の周囲をそれなりに強力な氷の魔法が覆い、空気諸共固める事で、両足の動きを完全に停止させてしまうのであった。

「ノーザンクロス！」

そこから更に、凍らない範囲をうろついていた蒼い光が8つ、それぞれ4つずつが我と私の腕の代替の上部分に集まると、その光は氷塊ごと凍て付き強度を損なっている私の腕の代替を砕き、我自身をも打ちのめすのだった。

（だが、この程度はA足りヌ……我を我が我に我へ更にもっと強烈な）

しかし、これでは決定打足り得ない。

事実、我を流れる黒い力は、根元から砕けそうな脚を皮だけ強引に再生させ、完全に砕けた骨や千切れて失った筋肉の代用を務める事で我から支配権を完全に奪い去り、肩から無くした腕の代わりだと言わんばかりの8本の腕で蒼い光を全て握り潰しながら、凍り付いた周囲の空気を砕き、上から落ちる隕石から逃れようと懐かしい声の主達の元へと強引に突き進んで行く。

「目標確認!!／これが私の全力全開!!」

そうして、嘗て我が我となる少し前に滅殺した女神にそっくりな少女とその親友に良く似ている少女は、彼女達に良く似ている武器のエネルギーを限界まで充填したのだろうか？どこまでも懐かしい桃色と青白い光の力を一斉に撃ち込んで、我を先程の場所にまで押し戻して行く。

「いっけええええええええええええええ!!」

そうして、完全に元の場所にまで押し戻された我は、全身を先程の



## 第五十話

見上げた空は赤く、大地も荒れ果てたギョウカイ墓場

あの化け物の魔の手を掻い潜ってどうにか帰還したわたくしは、犯罪組織マジエコンヌの幹部クラスに支給されている部屋の中で、ベッドに寝転び、枕に顔を埋めながら喜びの笑みを浮かべるのでした。

「……………ふふっ」

(ああ、本当に嬉しいです)

わたくしは、今回の一件で犯罪神から勇者様を切り離す計画が大詰めになった事を、木彫り勇者様(色付き)を抱き締め、本物に限界まで近付けたその匂いを嗅ぎながら、喜び、狂喜し、悦びました。

あの後の事は知りません。ですが、あの化け物がどうなるかなど、聴くまでもありません。

あの時、確かに感じた悪寒からするとあの化け物は、勇者様に出会って直ぐ、まだ眼も鼻も耳も、肌以外の全てが揃わず、あのクズ共に捕らわれる以前の記憶まで無くしていて心も身体ものつぺらぼうのようだったわたくしに接触してきたナニかの一部——そうだけでなく、限りなく近いナニかでしょう。

「そう言う意味合いでは、今は亡きイヴェルト<sup>チンピラ</sup>さんからも似たような感じがありました。……まあ、気にするような事ではないわ」

そう、そんな事はどうでも良いの。

わたくしが真に気にするべきなのは勇者様の事だけで、それ以外は全てが無価値！

勇者様が同志としてのわたくしを求めるならばそのように振る舞いましょう。

勇者様がただの小娘としてのわたしを求めるなら、何処までも溺れて爛れたいと思えるだけの快楽を、わたくしの生命を削ってでも捧げましょう。

勇者様がわたくしの命が欲しいと願うなら、それこそ、全ての計画を捨てて、この終わりが近い命の全てを捧げて果てましょう。

それこそが、わたくしの愛であり、全てを与えられたわたしの願い



わたしは、脳に直接響く片言の声を全力で無視しながら、ベットの上で勇者様人形を抱き締めるのでした。

トリック（趣味が合わない上司）から受けた仕事を終えた私は、ホームクルス製造設備の簡略化私的な研究をする為に、ギョウカイ墓場の拠点に用意された私室で只管に、無数の機械を弄っていた。

因みに、材料費はタダだ。ジャンク限定なのは不満だが、その辺に掃いて捨てる程転がっている廃棄されたゲーム機やカセットの自身から部品を頂戴している。

「おーい、アレイストって臭せえ?!」

「黙れ下っ端が……ここは貴様のようなガサツな単細胞が入って良い場所ではない」

「おい、マジでオメエいい加減にしろよ？アタイは下っ端でもネエし単細胞でもネエ」

「知らん。兎に角出て行け」

そんな中、何故か入って来た下っ端が開口一番に暴言を放って来たが……まあ、知った事ではない。

「だーかーらー、アタイはマジk『操魔のグリモアに命ず。飛ばせ』ってふおおおおおおおおおお?!?!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

「……………さて、研究を再開するでしょう」

一応、この部屋には様々な精密機器に加え、重要なデータを保存したコンピューターが有る。

それを破壊されては敵わない。懐に何時も仕舞ってある操魔のグリモアを触媒に、事前に保存していた風の中位魔法を下っ端に叩き込んだ私は、改めて目の前に放置してある組み掛けの機械を完成に近付けるべく、スパナやドライバーを振るうのだった。

「……………しかし、これだけは本当に予想外だった」

この世界へ転生して一番に驚いたのは、一定以上の魔法の研究には機械が必須であり、ホムンクルスの製造には非常に高価な機材が必須であった事だった。

転生前に見たこの世界の概要では、ルウィーは魔法大国で機械文化は疎いとあったが……まさか、禁術クラスの魔法を研究するのに機械技術が求められるとは思わなかった。

勿論、ホムンクルスの製造にはある程度覚悟していた。

一応、元の世界で言うクローン技術のようなものだ。それを母体無しで行う以上は、一定規模の施設なり機材なりが必須だろうとは思っていたが……かなりの額の金が必要だった。具体的には、一般人十人の生涯年収分

拳句の果てに、禁術クラスの魔法は危険過ぎて使う前にはシユミレーターが必須であり、シユミレーターの内部で感覚をデータ上の義体に移さなければ代償で死ぬ可能性さえある始末だ。

「……まあ、幸いにも、代償は魔力で代用出来たが……匙加減を間違えると死ぬな。アレは」

実際、アレは酷い。

確かに威力は申し分なかったが、必要とされている魔力しか籠めなかつたら代償に心臓を持って行かれた。シユミレーターで形成されていた義体でなければそのままの世逝きは確定だろう。

「しかも、あの後代償を魔力で代替したらあの禁術の1発で総魔力の半分は持つて行かれたぞ……軽く見ても上級魔法30発分だな」

全く、何なのだろうな？この禁術と言われる魔法は明らかに人間が使用する事は考慮されていない。

それ故に術者に求められ、消費される莫大な魔力を補おうとして山を消し飛ばす程度と言う最低ラインの水準でしかない禁術一発で心臓を持って行かれてしまう。

時間や空間を破壊する威力それ以上の威力を求めるなら、半身や魂を喰い潰される。

確かに、その効力は補助や回復の系統であつても凄まじいものだが、ランクが上がって威力を上げる程にその分だけ代償も大きくなっ

ていく。

私を知る限りでは、禁術を連発出来るような存在など、それこそゲームギョウ界の旧き神話に語られるような——

「……ふん、くだらんな。私とした事が、毫碌したか？」

考え過ぎであるな。

そんな事など、ある筈もあるまい。

「それこそ、禁術が連発出来る一番現実的な存在は、先日復活させた、犯罪組織四天王の先代位のものだろうよ」

そうだ。

あんな化け物を超える神の存在など、ある筈もない。

あの歴史好きな老人に聴いたゲームギョウ界創成期を記した神話にある始まりの双神とやらは、存在しない単なる創作だろう。

「さて、私はさっさとホムンクルスを造り出して、禁術の威力を削がずに代償を削る研究でも続けるとしよう」

まあ、そんな事はどうでもいい。

今私が願うのは、一刻も早くホムンクルス<sup>人形</sup>ハーレムを形成し、それらを助手にして趣味の禁術研究を完成させる事だけなのだからな。

「……む」

そんな時だったが、懐かしき故郷の風景を観た影響からか、私は普段なら気にもしないような事を思い出していた。

私の肉親は犯罪組織に入る前に殆ど始末したが、思えば1人だけ、何年も前から教会の職員として働いていた関係上、殺せずに放置しておいた物が居たのだ。

「……………そう言えば、姉貴はどうしているのだろうか？もしも生きているなら——」

——その美貌の如何に依っては、最高のホムンクルスの為の素材として活用してやるのも一興だ。



## 第五十一話

怪物さんを倒してから、エルマさんの手引きでゲームキャラクターの前へ転移して貰った私達は、そのままゲームキャラクターの力を借りてルウイーの街にまで帰って来ました。

「いえーい♪ミナちゃんの所にまで競争しよう！ロムちゃん♪」

「うん……………(びゅん) (びゅん)」

ルウイーの街の城門を潜ったロムちゃんとラムちゃんは、仲良く走りながら、教会の方へと走って行きました。

「元気ね……………わたしは護衛があるから……………じゃ」

「ええ、任せるわ……………私達は、もう少しゆっくり教会に行くから、教祖に連絡よろしくね……………」

「……………」

そんなロムちゃんラムちゃんを追って、エルマさんも走って行きます。

「さ、アナザーさん？これから治療の時間ですよ？」

「嫌だああああああああ!!離せ!今すぐ離せ!」

そうそう、怪物さんに吹き飛ばされたアナザーさんですけど、ゲームキャラクターの前へ転移した時に、近くに転移していたんです。

ものすごい力を叩き付けられたのか、先程までは瀕死の重体でしたが……………それでも、治療しようとしていたコンパさんを押し退けたハクさんが背負いながら回復魔法を掛け続ける事で、今はあの通り、元気一杯です。

「もう!暴れないでください!」

「お前に看病される位なら、俺はそのまま死んだ方がマシだ!!」

「ふふふ♪ダメです♪アナザーさんは暫くの間、私が確り治療して看病もすると決めたのですから……………」

「H A ★ N A ★ S E」

楽しそうなハクさんとは対照的に、とても嫌そうな顔をしながら必死に暴れているアナザーさんですけど……………ハクさんは、そんなアナザーさんに対してとても良い笑顔を向けながら、暴れてはズレるアナ

ザーさんを背負い直して確保し続けています。

「では皆さん、申し訳ありませんが、私はアナザーさんを治療して看病しなければなりません。教祖のミナさんにはよろしくお伝えください」

「ええ、そうね……アナザーがやらかしたことも、改めて謝っておくわ」

「ありがとうございます……さ、行きますよ？アナザーさん」

「ぬおおおおおおお!!何故この程度で上手く動かん！俺の身体ああああああああ!!!」

ただ、アナザーさんは余程ハクさんとは一緒に居たくないのか、重傷から回復したとは言ってもまだまだ完治には程遠い状態の身体の傷口が開いて血が吹き出てるのもお構いなしに大声を上げながら暴れ続けています。

(ただ、そろそろ暴れるのもその辺にした方が………)

私はそう思ったのですが、声に出すのが少し遅かったみたいで……  
「もう！近所迷惑ですよ？少し大人しくしててください」

ドスッ

『……………』

「では皆さん、また後で」

……………案の定、アナザーさんのお腹にきつい愛の鉄拳一撃が叩き込まれ、色々と傷口が開いて出血が酷くなってるアナザーさんは、ぐったりとしたまま動かなくなってハクさんに連れて行かれてしまいました。

「……………さ、私達も教会に行きましょうっ」

「そうね…………」

……………まあ、大丈夫ですよ。ハクさんとアナザーさんですし

ルウイーの教会にある執務室

つい数時間前にアナザーがすごくやらかしちゃったからちよつと入り難かったんだけど……

「事の顛末はエルマ様から一通り聞かせていただきました。皆さん、本当にありがとうございます」

「将来の嫁の為だもん、当然だよ」

RED. はちよつとおかしな事を言ってるけど、そこはスルーして……執務室のソファアに腰掛けた私達は、目の前で立ち上がった教祖から言われたお礼の言葉に、私達としては顔を逸らすしかない訳で……

「気にしないでください。こうして無事に、ゲームキャラさんから力を借りる事が出来ましたから……アナザーさんの件もありますし」

「そうそう、うちのアナザーがやらかしたお詫びみたいなものよ」

………本当に、アナザーのやつは……その<sup>危険性</sup>辺を把握した上で陣営に引き込んでるプラネテューヌや私達も大概だけど、もう少し自重できないのかしら？

「そう言っていただけと……もうこの国からは出るのですか？」

「はい。色々ご迷惑をおかけしました」

まあ、全ての国の女神候補生と強者の力は借りられなかったけど、全てのゲームキャラから力は借りたし、残るはギョウカイ墓場からネプ子や女神達を救出するだけ………思えば色々、長かったわね。「いえ、こちらこそ、なにも協力できずにすみませんでした………どうか、ブラン様をよろしく願います」

「ええ！任せておきなさい！アタシがお姉ちゃんのついで位に華麗に助けて来るから！」

「じゃあ、私達はこれからプラネテューヌで女神救出作戦の準備をしなくちゃいけないからこの辺で」

とまあ、こんな感じにユニが意気込んだ所で、この教会から出てアナザー達と合流したらプラネテューヌに帰って最終調整に入ろうとしたその時よ。

「はいはい！待った待ったー!!」

「待って……（あせあせ）」

「何ですか？ロム、ラム……今日はもう寝ると言っていたじゃない」  
急に入って来た……何てここの女神候補生相手に言うのも変だけど、まあそれは良いわ。

いきなり話に入って来たここに残ると言う方針で教祖が押し通した双子の女神候補生が、大きな声を上げて執務室に入ってきたのだ。

「……二人から、話しがある」

その後ろには、怪物（仮）を倒す為に一緒に戦った（？）エルマの姿も……一体、どうしたと言うのよ？

そんな事を思っていると――

「今日からわたし達も、お姉ちゃんを助ける旅に付いて行くわ！」

「……！（くくく）」

「……と、言う訳だから……この国の女神候補生をよろしくお願ひします」

――具体的な理由が、双子の女神から語られたのだった。

「……ええ」

……一人だけ、話しがよく分かってないって顔をしている教祖をおいてけぼりにして

時間を少し遡り、ネプギア達が教会へ辿り着いて教祖に会う少し前  
ルウィー教会の3階に在る女神候補生達の自室

「……と、言う訳で、女神救出作戦は貴女達に任せるわ」

そこは今、ベットに並んで腰掛ける双子の女神候補生達に椅子に座ったエルマが向き合い、なにやら話しをしていた。

「ねえ、エルちゃんは どうして、一緒にお姉ちゃんを助けてくれないの？」

「教えて？（はてな）」

ラムとロムがそう問い質すと、エルマはアナザーと同レベルで表情が薄い顔を若干強張らせると、普段通りの感情を極力排した淡々とした口調で説明を始める……………

「……………行けるならそうしているわ。ただ、それが出来ないだけよ」

「えー！一緒にいきましょうよ！」

「エルちゃん、わたし達と一緒に……………イヤ？（うるうる）」

……………始めるのだが、ロムとラムはその見た目通りの幼さ故か、話を終える前にエルマに抱き付いて駄々を捏ねる。

これが姉のブランならば、見た目は幼くとも、長い稼働時間数百年の人生が在り精神が多少は成長してるが故にこうはならなかっただろうが……………この辺は、生まれてそう時が経っていない二人に求めるのは酷だったろうか？

そんな事を無表情の裏で思いながら、エルマは抱き付く二人を抱き返し、話の続きを再開する。

「二人の事が嫌いになったんじゃないわ……………ただ、わたしはこの国を出られない……………それがわたしの在り方で、わたしの選択の果て——」

そう言いながら、エルマはロムとラムの顔を見て、無表情な顔を若干緩ませ、微笑みを浮かべながら

「だから、わたしの代わりにブラン様をお願いできないかしら？」

そう締め括った。

「……………？／（はてな）」

ロムとラムは、良く分かっているような表情で困惑していたが、暫くして普段と同じような表情に戻ると……………

「うん！わかった！……………（こくこく）」

「……………ありがとう、二人とも……………」

「じゃあ、ミナちゃんにお話ししに行かなきゃ！」

「……………お姉ちゃん、助ける……………（ふぁいと）」

……………笑顔を浮かべ、そのまま一階へと走って行った。

「……………はぁ」

それを後から追っているエルマは、小さく溜め息を吐いて、1人廊下の真ん中で何かの不満を堪えるようにぼやき出す。

「……祖よ……何故、女神とは言えあの様な幼子へこの様な試練を課されるのですか……」

「何故……わたしでは不足であるとしても言うのですか……」

「………はあ……憂鬱だわ……」

そうして、一通りぼやいたエルマは、不服そうな顔を何時のものも無表情へ直すと、ロムとラムの後を追って駆け出した。

## 第四章く女神救出のワルツく 第五十二話

「む……なにやら重要な場面を逃した気がする」

「なにを言っているのですか？傷に響くので、ちゃんと寝てください」

ルウイーの街にある宿屋の一部屋

そこでは今、この宿の主人に了承を取り付けたハクによって運び込まれ布団に寝かされた俺と、その隣でネフ駄テュー女ヌなら『おとつあ  
ん、大丈夫かい？』とか言った後、無視した俺に『ちよつとー！ノリ  
が悪いよー!』とかなんとか言いそうな場所をハクが陣取っていた。  
「却下だ……つて、止める触れるな縛ろうとするな!？」

「えー……ですが、寝てくれないと傷が治りませんし……」

「貴様に触れられている方が悪化するだろうが！良いから！頼むから  
俺の事は放っておけ!!」

今一動きが悪い身体を鎖で縛ろうとするハクを見て思わず全力で  
叫んだが、相変わらず無邪気を装きよんとした表情でって首を傾げるこのアマは、それを  
無視して俺の身体の動きが悪いのを良いことに、鎖を手足に巻き付け  
て縛ってから額に触れる。

「んく、熱はありませんし……傷口はもう少し時間が経たないと膿ん  
でるのか無事なのか……まあ、今は寝てください」

「ツツツツツツツツツツツ?!?!?!アガガガガガガガガガガガガツガ  
ガツガツガガツガガガガガガガ?!?!?!」

何かを言っているが、触れられて額が熱く、バーナーで燃やさ  
れたような痛みが俺の正気を削り、意識を磨り潰していく。

身に覚えの無い慣れ最後の意地で声だけは全力で抑えているが、この激痛は正直大ダメ  
シだ。

「……………」

「……………もう、本当に看病とかいいから……放つといってくれ……  
(ぐったり)」

(……………俺が、一体何をした……いや、結構色々していたか)

急な身体の痙攣に違和感でも感じたのか、額から手を離して俺の顔をマジマジと視てくるこの女は……危うく意識が吸血鬼連中に伝わる樂園に持って行かれるかと……いや、どちらかと言うと地獄じやなくて樂園に引き摺り込まれそうな感じだったか

(……しかし、俺もここまでハクに弱かったか?)

記憶が確かなら、触れられただけで大ダメージを受ける事はなかった筈だが……

まあ、そんな事はどうでもいい。いずれにしても、既に全てのゲイムキャラの力は手に入れた。女神候補生は一国分欠けているが、見た目はガキでも生存年数はそれなりに長いブランと違い、生存年数の短い真正銘のガキだ。生存年数が誤差でも肉体に引き摺られてマシになってはいるネプギアやユニと違い、居ても居なくてもどうせ大して影響はないだろう。

各国の英雄級の実力者はラスティションからしか力を借りられなかったが、元々人間の強者は絶対数が少なく、最低限必要な戦闘力の持ち主にもなると国に1人居るかどうかだ。

確か、何時か血でも啜ってやろうと考えて嘗て覚えた限りだと、『プラネテューヌ』は俺を除けば古代吸血鬼との半吸血鬼が1体に上位吸血鬼との半吸血鬼が数体——しかし、こいつらはネプテューヌの言う事……厳密には、パープルハートの命令にしか従わず、他の誰の命令も受け付けないが為に説得するのは、例えば俺やハクが力尽くで叩きのめしても不可能だ。奴等はパープルハート以外に従えられる位なら、己の手で命を絶つだろう。

因みに、パープルシスターの言う事は歴代パープルハートの首都防衛令に反しない程度までは聞くが、ネプギアがパープルハートを継承しなければ主力をギョウカイ墓場に着いて来させるような命令には従わないだろう。

第一、連中にそこまで言うことを聞かせられるならイストワールが疾うに駆り出している。なお、非常に残念だが『人間』の英雄級は居ない。



『ラスティション』は言うまでもなく、あの<sup>ゲ</sup>変態だ。こいつは割愛しても良いだろう。

『ルウィー』は確か……『蒼魔』とか言う二つ名を得ていた魔法使いの冒険者だったか？まあ、詳しくは知らんが、確かそいつの身内にルウィー<sup>西</sup>教会の現<sup>ミ</sup>教祖<sup>ナ</sup>が居ただけ記憶している。しかし、こいつはそもそもかなり早い段階で犯罪組織に寝返っている裏切り者だ。言うまでもなく敵だから論外

『リーンボックス』にはそもそも英雄級の實力者は居ない。それに関しては大体ハクが悪い。

ハクが強いモンスターを片っ端から駆り出した影響で、リーンボックスの冒険者は非常に質が悪い。詳細は割愛するが、居ない方が楽だ。

総合的に考えるなら、最高とは言い難くてもそこそこの戦力にはなる筈だが……ダメだな。

犯罪組織<sup>俺を叩き斬った敵</sup>にあの正義風ロボットがいる限り、最低でも四天王の半分は各個撃破で削らなければ勝機はないに等しい。もしくは取っ捕まってるネプテューヌ<sup>駄</sup>達を全員取り返してそのまま数の暴力に持ち込んでも可

だがしかし、ネプテューヌ<sup>駄</sup>達は居ない。都合良く四天王が単騎で襲い掛かる事も無かった。

この状況で、四天王と正義風ロボットが全員で襲い掛かってきたら……全滅は免れない……か

(……まあ、無いものは仕方がない。本当はやりたくなかったが……)

「?どうかしましたか?」

口元に右手を当てて、頭が足りない癖に如何にも考えてますとも言いたげなポーズを決めているハクの喉を見ながら、俺は本当にこんな事はしたくなかったが、死なない為に仕方なく、ハクに『ある要求』

を突き付ける事にした。

「端的に言う。吸わせろ」

「ツツツツツツツツ」

ドゴン!!

?!?!?

……が、何故か急に顔を紅く染め上げたハクによって顔面に強烈なアイアンクローを掛けられ、軽く持ち上げられたらそのまま問答無用で畳に目掛けて後頭部を叩き付けられてしまっていた。

「な……が、Aるい………ガクツ」

「~~~~~ツツ?!?!?」

そして、俺の意識は深くに沈んで逝った。

「な……が、Aるい………ガクツ」

「~~~~~ツツ?!?!?」

(な、なななななにを言うんですかこの人は?!)

いきなり人の胸を見たと思えば、吸わせろって……アレですか? 絶妙にズレてるのに直球な告白かなにかですか!?

(そう言うのはちゃんと時間を掛けて一緒に過ごして絆を育んで……って、いえ、えつとえつとえつと………?!?!?)

ああ、どうしましょう? こ、この場合私は一体どうしたら……?!?!

そんな時でした。

後から振り返ってみると、非常にあり得ない話ではあるのですが、どうしようもなく混乱していた当時の私が上を見て天井の染みを数えていると——

『ハク?..』

「え? 姉さん?!」

——なんと、あまりの混乱っぷりから犯罪組織に捕まっている

筈の姉さんの声が聞こえてきたのでした。

『事情は分かっていますわ……なので、貴女へ唯一の答えをあげましょう』

「答え……」

『こう言う時は、いつそのことアナザーの顔を胸に押し付けて、一緒のお布団で寝てしまいなさいな』

ええ、ええ……後から振り返ると、絶対に姉さんの声が聞こえる筈がないと断言できますが、当時の私は非常に混乱していた訳で……

「え……そうすれば、良いのですか?」

『ええ、きつと上手くいく筈ですわ』

……幻聴で聞こえた姉さんの声に従って、アナザーさんの顔を胸に押し付けながら、同じ布団で眠るのでした。

——アイエフさんが迎えに来るまでずっと

ルウィーからプラネテユーヌへ帰る為、教会の玄関先でコンパやネプギアと別れてアナザー達と合流をしようと、血塗れな黒い服の人を背負ったシスター風の女性の目撃情報を訪ね回って西側の隅に在る宿屋に着いた私だったけど……

「……………」

……その宿屋の一室に居たのは、布団の中で女の胸に顔を埋めて 白眼を剥きながら痙攣する男 と、 そんな男を胸に抱きながら同じ布団で添い寝してる女 と 言 う、状況を分かってんのかこいつらと言いたくなるような、独り身には限りなく辛い雰囲気を形成しているバカ二人だった。

「……ねえ、アンタ達、バカなの?バカップルか何かなの?」

「違う!!／＼違います!!」

顔を紅くしてると蒼くしてのに対して投げ遣りに関係を問えば、返ってきたのは同時に即答での否定………ハア

「あーはいはい。仲が良いのは分かったから、そう言うのは時間があ  
る時にでもゆっくりやってちょうだい」

(全く………この大事な時にナニやってんのよコイツ等)

顔色は違うのに二人揃って違うくだのそんな関係ではないくだの  
と言う抗議を無視しながら、私はネプギア達を先に向かわせたプラネ  
テューヌ行き列車が出る駅にまで向かって行くのだった。

## 第五十三話

「うっぷ……酷い目に遭った……」

ルウィーからなんとか生きてプラネテューヌにまで辿り着いた俺は、何が目的なのかは知らんし知りたくもないが、近くに居座って俺に構い続けるハクの意識を不意討ち<sup>猫騙し</sup>で逸らし、その隙にプラネテューヌの駅から脱走を果たした。

そして、バーチャフォレストの最深部で息を潜めながら体力の回復を図る為にモンスターから血を搾り取っているのだ。

「チツ……ああ、クソ、不味い……だが、この際選んでいられる程の余裕もない……腹立たしい……」

本音を言うなら、俺とてこんな雑魚の血は飲みたくない。最低でもこの下位危険種<sup>フェンリスヴァオルフ</sup>辺りの血が欲しかったのだが、何故かハクが近くに居るだけで、生命力の消耗が激しく、殆ど死ぬ手前のようなレベルにまで追い込まれている以上、選り好みは出来ない。

こんな状態で下手な危険種を襲おうものなら、不意に受けた一撃でそのまま昇天しかねない現状を打破する為には仕方のない事だ……それに、下手に強いのを刺激して全力を振るおうものなら、死神<sup>ハク</sup>がやって来て今度こそ昇天させられかねないと言う実状もある。「ゴフツ……そもそもだ、何故俺はここまでして駄女神の救出なんぞ……ああ、そうだった」

そう、俺は契約の為に駄女神を捕獲しに行く。

何故忘れていたのかは知らんが、恐らく疲れたのだろう。それだけだ。

今こうしてクソ不味い血を啜っているのも、ハクと行動を共にしているのも、契約を果たす為だ。

多少の傷なら幾ら不味くとも血を啜って浴びれば癒える。以前半殺しの憂き目に遭った相手と遭遇した時の為に、例え何かしらある度に命の危険を覚えるような目に遭おうが、その欠点を補えるだけの戦鬪力を持つ輩とも同行する。

契約は絶対であり、必要ならば俺個人の感傷は斬り捨てるべきであ

る。

これだけは譲れないし、曲げる訳にはいかないのだ。

「……………」

「GAHYU?!」

そんな事を考えながらも、背後から獲物の頸を口で喰い千切り、爪で喉を裂く事で見られる音を最小限に留めて血を啜る。

些か暗殺者染みていて気に食わないが、今はフェンリスヴォルフ程度の危険種でも真っ向から挑む訳にはいかない以上は仕方がなかった。

「……………まだ、足りない…………グツ」

散々搾り取った血で殆どの傷はおおよそ快癒したにも関わらず、心臓の辺りだけが異様に痛む。

恐らく、この異常な治りの遅さから見て骨が見えるまで肉を抉って傷口が焼き潰されでもしたのだろうか？我ながら良く生き延びているものだ。一周回って呆れすら覚える。

「確かに、昔から…死に難い、性質だったが…………あの、クソアマア……………ガフツ、ゴハア?!」

意識した瞬間にこれだ。

幸いにも、血を吐き出す事はなかったが、いい加減肉体が限界を迎えそうだった。

俺は不死身ではないのだから、急いで傷を塞がなければ命に関わる可能性は低くない……………早急に、大量の血を絞らなければ……………

しかし、俺はこの時に気付くべきだったのだ。

【アは♪つうかまええたあああ———】

痛みの原因が、一体どんなものだったのかを———

プラネテューヌ教会に備え付けられた女神の執務室

本来の使用者である筈のネプテューヌが減多に使わない為か、それ

とも三年もの月日を犯罪組織に捕らわれているが為か……どちらが原因かは定かではないが、少なくとも埃を被った執務機の隣に併設されている手入れの行き届いた小型の机の上を、本の上に乗ったイストワールはふよふよと浮きながら、ダンジョンや山が消し飛ぶような災難に見舞われたルウィーを除いた各国の代表と共にネプギアから道中の報告を受けていた。

「――アナザーさんはプラネテューヌに到着すると、列車の扉を蹴り破って何処かへ行ってしまいました」

「……………そうですか……そんな事が……」

報告を受けたイストワールは、顎に手を当てながら考える人ならぬ考える妖精のポーズを取り、何やら考え事を始めた。

「まあ、あの男は約束は破らん。放っておけばその内帰ってくるだろう……そんな事より」

そんなイストワールの様子を見て何かを察したのか、心配する事はないと述べたグロウは、ユニを見ながら何かを言おうと言葉を続けようとしたが――

「ハク、大丈夫だった？アナタにもしもの事があつたら、お姉様に合わせる顔が「いえ、大丈夫なので心配はご無用ですよ？チカ教祖」……あう」

「……………」

――このような感じに、箱崎チカが大人の余裕とでも言うべき表情でグロウのセリフを遮りながらハクに声をかけ、途中からバツサリと斬られて撃沈した事で、声を掛けるタイミングを逃したグロウは心なしかしよんぼりしたような表情のまま、完全に固まってしまっている。

「……………確かに、今更こんな事を疑っても意味がありませんか……………」

ユニに声を掛けるのを計らずとも妨害されたショックで固まってしまったグロウではあつたが、どうやらイストワールの悩みを解く程度役には立ったらしい。

「とりあえずではありませんが、今日の所はゆっくり休んでください。

皆さんのお部屋もこちらで用意させていただきますので……………」

「あ、ちよ…いーすんさん?!」

考える妖精のポーズを解いてネプギアの方を向いたイストワールは、浮遊している高さをネプギアの顔の近くにまで調整してそれだけ言うと、有無を言わせずにそのまま何処かへと飛んで行ってしまった。



## 第五十四話

「……………いよいよ、ですね…」

日が暮れて暫く

プラネタワールの最上階にあり、犯罪組織が横行する前はネプテューヌがぐうたらしてゲームをする為に使われていた部屋の窓際で、プラネテューヌの夜景を眺めながら、イストワールは声に緊張を滲ませていた。

「うむ。堪え難き日々を耐え抜いた甲斐もあり、犯罪組織よりノワール様……いや、全ての女神を救う決戦の時が、とうとう訪れたな……隣、失礼する」

「あなたは…」

そんなイストワールに対して、何処からともなく現れたグロウは感慨深いとでも言いたげな声を上げて、ふよふよと浮いているイストワールの隣に立つ。

「明日の事で、少々話があったのだが……その様子では、まず貴女からだったようだ」

「話……ですか？」

首を傾げているイストワールの隣に立ったグロウは、きよとんとした表情で本の上に座っているイストワールを見ながら用件を切り出した。

「……まあ、そう時間は掛かるまい……先程、アナザーに渡していた携帯から連絡があったのだが……どうにも、少し考えたい事があるから作戦の決行を一日だけ待ってくれとの事だ」

「ああ、そんな事でしたか……そうですね。ネプギアさん達もお疲れでしょうから、一日だけ休息を挿んで体調を万全にしていたくのも良いでしょう……はい。でしたら、後の連絡は私がしておきますので、グロウさんはもうお休みしてください」

グロウはアナザーに渡したと言う携帯から着た連絡をイストワールへ伝え、イストワールはそれを丁度良いと受諾した。

「時に、イストワール殿……」



「嗚呼…最っ高じゃねえか!!これだけの力が有るなら、犯罪神だって血祭りに挙げて殺れ……………?!?!」

そんな思考に至った瞬間、俺の意識は冷や水でも浴びせられたような衝撃を受けていた。

「…………いやまて、犯罪神?犯罪組織ではなく?」

焼けるような胸の熱が引き、高まった力が霧散したのを感じる。

溢れ返った力が急速に内に戻り出し、周囲に齎した被害破滅以外には先程の圧倒的な力を証明するものがなくなつたが…………それこそどうだつて良い話だ。

「俺が闘うのは犯罪組織の連中であつて犯罪神ではない…………なのに何故、犯罪神と戦う前提で考えていた?」

そして何故、犯罪神の力を知っているかのような考え方をしていた……………?

確かに、俺はネプテューヌよりも若干前の時代に生まれている。

そう考えれば、前の代のパープルハートの生存していた年代で犯罪神を見ていても可笑しくはないかもしれないが…………それがまずあり得ない。

生まれて100年後なら——或いは、当時の女神と契約でもしているならまだしも、数十年の年月で得た力程度で、俺が自主的に犯罪神やその走狗を相手にして戦う筈がない。

そして、犯罪神も犯罪組織も、その当時には存在していない。

「…………それに、もしも俺が当時の教会と関係を持っていたならば、イストワールとて何かしら言つて来る筈…………」

そう。全ては俺の勘違いで、気の所為の筈だ。

きつと俺は、仮想敵で最大の力を持つだろう犯罪神を例に出す事で、俺自身の高まり続ける力を絶対的なものだと主張したかったのだ。誰に主張するのは知らんが、きつとそうに違いない。

「……………まあ、最早そのような事など関係ない。さっさとプラネテューヌへ戻つて、駄女神共の救出作戦の実行を急かすとするか」

でなければ…………俺は……………一体、ナンノタメニ、活D卯s r i 羅?

## 第五十五話

数分前にイストワールさんに温泉での休息を勧められた私達は、プラネテューヌ教会の敷地内地下にある秘蔵(?)の秘湯に浸かって旅の疲れを落としていたのでした。

「いやっほー!一番乗り、いったただきー!!」

「ああ、こころそこー飛び込むんじゃないの!」

RED.さんが温泉で走って湯船に飛び込んだ………本当は私が注意をしようと思ったけれど、アイエフさんが先に注意してしまったので手持無沙汰になった私は近くの掛け湯を浴び、マナーに則った上で温泉に浸かります。

「うずうず、うずうず………(うずうず)」

「えつと……ロムちゃん、ラムちゃん、あんな事はしちやダメだからね?」

(ああ、RED.さんは……後でお説教ですね)

けれど、そんなRED.さんを見たロムさん幼ラムさん子が真似をしたそうにうずうずしていたので、RED.さんは後でお説教の刑に処する事にしました。

(………まあ、今はゆつくりと温泉に浸かりましょうか)

「ほら、ネプギア……あつちに掛け湯があるから早いとこ済ませちゃいましょう」

「あ、うん。分かったよ。ユニちゃん……ロムちゃん達も、一緒に行こうか?」

「はーい!／………(こくこく)」

湯船から先程入って来たネプギアさんとネプギアさんに連れられたロムさんラムさんは、ユニさんに呼ばれて掛け湯がある方へと歩いて行ってしまいました。

(………けどまあ)

「………はあ」

けれど、そんなネプギアさん達(ついでにアイエフさん)を見ると、水面に浮かぶ邪魔な脂肪胸の事を否応なく意識してしまい私は憂

鬱な気分になるのです。

「……本当に、どうせならDかCにでも生まれて来れば良かったのに……」

確かに、この身はリーンボックスと言う名の姉巨乳好きの巣窟さんの信奉者達シエアが、その願望を極限まで集結させて創られた、所謂『精巧な人形』のようなものですよ？

シエア的にも、ある程度のサイズが有った方が有利に働くと姉さんやチカ教祖からも言われていますし

ですけど……

(……ですけど、だからと言って大きな胸こんなものを付けなくたって良かったじゃないですか……)

確かに、姉さんはこの脂肪の塊を是とされていますし有効活用グラビア活動もしています、私はそう言うのはちよつと……いえ、かなり嫌です。

挙げ句、ちよつと全力で動く度に揺れて鬱陶しいし、何より愛剣が振り難いんですよ……これ

今はどうにかかりましたが、生まれて時間が経ってない間は本当に振り難くって……姉さんに嗜みとして武器一式の扱いを教えられた時だって、出来たら大剣は振りたくなかったんですけどね……

(けど、女神化した時の神器は大剣……扱い難しいにも程があると思うのですよ。私も)

まあ、17年経った今となっては良い思い出ですし、何年か鍛錬を積んでたら何時の間にか手足の延長のような感覚になりましたけど

(……ああ、いけない……こんな事を考えるよりも、今は明日の姉さんの救出の際にどのような采配を振る舞うかの心配をするべきでしたね)

救出自体はこれだけの戦力が集まった以上、十中八九と言って良い程に成功するでしょう。

ですが、誰も犠牲にすることなく成功するかは……なんとも言えないのですよね……

(どのようにしたのかは不明とは言っても、幾らシエア不足で不調とは言え私達よりも戦闘経験が勝るだろう姉さん達を倒して殺す事な

く捕えているのだから……私やアナザーさんはともかく、他の方には少々分が悪いでしょう」

生憎と、姉さんが本気で戦う姿を見た事はありませんが、私の何十倍も生きているのだから当然、戦闘経験は私よりも上と見るべきでしょう。

私も、生誕してからずっと戦っては来ましたが、所詮はモンスターや中位以下の危険種が相手……長く生きてる分、上位危険種とも渡り合っている筈の姉さん達に及ぶ筈ありません。(何故か過去の戦果を尋ねたら新作ゲームがどうか言って逃げられてしまいましたけど、果たしてどれほどやれる事か……)

そんな(頭が痛くなるぐらい)難しい事を考えていた最中でした。

「………はふう………気持ちいいですねえ………」

「………え、あ、そうですね。プラネテューヌ教会が秘湯と紹介するだけはありません………」

温泉に浸かってぶかぶかと流れて来た(?)コンパさんに声を掛けられたのは……

「はくちゃんは、疲れがとれてるですか?」

「はい。特に肩凝りが取れていますよ?」

「それは良かったです」

コンパとハクは、縁に並べられた岩に背を預け、肩までお湯に浸かった状態で会話を続けながらゆっくりと寛いでいた。

「はくちゃん、あなざーさんのお目付け役ごくろうさまです」

「いえ、それは元々私がやりたい事ではありませんので、コンパさんは気にしないで良いのですよ?」

「それでも、わたしははくちゃんに感謝して居ます」

そう言ったコンパは、嘗てを懐かしむように目を細めて、過去の思い出を語り始めた。

「わたしがあなざーさんに会ったのは、ねぶねぶに初めて会った日から何日かしてからです……」

「そうなのですか？」

「はいです。とは言っても、あそこまでひどい戦い方をすると知ったのは、犯罪組織にねぶねぶや女神さん達が捕まって、あなざーさんを探し回ってた時なんですけどね——」

---

### 守護女神戦争末期

それは、守護女神戦争がまだ続いていた時の事でした……

当時のわたしは、空から降って来て記憶をなくしちゃったねぶねぶの記憶を戻す為に、ねぶねぶが降って来た場所にまで案内していたんです。

「お、もしかしてここが、わたしがねぶ神家の一族の水死体の如く地面に突き刺さってたって場所？」

「それはもつとこの先です。さ、ねぶねぶ！コッチです！」

そう言っ、わたしがねぶねぶの手を引きながら、森林公園の奥に連れて行っていった時でした。

「おい！ちよつと待てその能天気紫!!」

「ねぶっ?!なんかよく分かんないけどマジギレしてる女の子に絡まれたよコンパ!」

「だ、誰ですかあなたは!?!わたし達はこの公園の奥に用があるんです！なので、そこを退いてくださいです……」

他の女神さん達を振り払って、プラネテューヌにまで吹き飛ばされたねぶねぶを探しに来たあなざーさんに会ったのは……

「……そうか、よりにもよってその態度かこの駄女神は……」

「ねぶっ?!コンパ!なんか更にヤバイ感じになってきてる気がするのはわたしの気の所為なのかな?!」

「け、ケンカはダメです!落ち着いてくださいです!」

「……………あ?……………お前、ダレ?」

「わ、わたしはねぶねぶのお友達です!」

「て言うかー、君こそ誰さ!」

「……………は?」

そう言っ、わたしが居た事に初めて気が付いたような風にわたしを見たあなざーさんは、今思い出しても若干恐いモノでしたが、わたしがねぶねぶとの関係を伝えたら、ハトさんが豆鉄砲を受けたような表情をしながら固まってしまいました。

回想終了――

「……………そうして、その間にねぶねぶが記憶喪失である事、そして、その手掛かりを求めてねぶねぶが突き刺さった場所にまで連れて行つてた事を説明した後、あなざーさんは頭を抱えて簡単に事情を話してくれて、そのままいーすんさんの居る教会にまで連れて行ってくれました」

「……………なるほど、そのような経緯があったのですね」

「はいです。そこでアイちゃんとも会ったんですよ?」

こうして、コンパの昔話は終わった。

「……………そろそろ、上がりませんか?」

それを最後まで聞いたハクは、血行が良くなっているのか、若干赤みを帯びた顔で温泉から上がる提案をするが……………

「わたしはもう少しだけここに浸かっているので、はくちゃんは先に上がっていいんですよ?」

「では、そうさせていただきます……………興味深いお話し、ありがとうございます!」



……コンパはもう少しだけ温泉に浸かっていると行って、それを聞いたハクは1人で温泉から上がって行った。

## 第五十六話

早朝、日が昇る少し手前にプラネタワーへと辿り着いた俺は、魚の骨が喉に引っかかったような……美味いと思っていた天然もの人間の血が、実は人工の養殖もので微妙な味だったような……そんな微妙な気分でイストワールの元へと向かっていた。

「……………ああ、気分悪い……………」

しかしまあ、何なのだろうか？この微妙過ぎて絶妙に不快な気分は俺は犯罪神など知らないし、犯罪組織と言う名称自体、何となく聞いた覚えがあるような気がする程度のものだ。

「……………だが、妙に引っ掛かる……………」

あれだけ気分が高揚していた時の言葉だ。

もしも知る限りで一番強い者を引き合いに出していたのなら、それは馱女神ネプテューヌを中心に一致団結したシエアも万全の四女神全員か、全ての女神を■●、■●の■●■にした上で、全てのシエアを奪い尽して唯一国家の女神となった●●●●か——

「——いや、俺はなにを考えている?…」

オカシイ。本格的に記憶が狂っている。

少なくとも、俺はパープルハートを中心に一致団結したシエアも万全の守護女神達などは見た事はないし、ゲームギョウ界ではここ数百年の間で単一国家など存在していない。

だからこそ、知る限りではそんな知識は無い筈なのに……………

「……………なら、この妙に具体的なシミュレーションは……………いや、そもそも、この単一国家の女神は——」

『まあ、時間まであと少しありますから、それまで待っていきましょう?』

「っ!?!」

唐突に聞こえて来た何処となく不快だと感じる声に気が付けば、何時の間にか俺はイストワールのいる謁見の間の扉の前に1人で立っていた。

「……………そう、俺は今日、あの馱女神ネプテューヌを捕獲しに行く為に歩いて来た

のだった。そんなどうでも良い事など、考えている必要はない」

そう、その為にワザワザレンラクマデヨコシテ、ココマデキタンダ……イマハトニカク、ダメガミのカクホヲ——ソレイガイノコトナド、イツダツテカノウダロウ？

「ダツテオレハ……エイエンナノダカラ………」

一方、アナザーがイストワールを目指してプラネタワールの内部を進んでいる頃

「ねえ、まだなの？」

「もう少しです。もう少しだけお待ちください」

「あなざーさん、遅いですねえ………」

プラネタワールの謁見の間では、ユニやネプギア達がイストワールの横に在る大きな機械——敵の本拠地であり、女神達が捕らえられたギョウカイ墓場へと向かう為の転送装置——の前で、まだかまだかとアナザーの到着を待ち構えていた。

「ふむ、連絡によると、もうそろそろ到着している時刻なのだが……」

「まあ、時間まであと少しありますから、それまで待つていきましょう？」

ハクがそう言った矢先の事だった。

『………モドツタ』

謁見の間の扉が開いて、虚ろな表情をしているアナザーが入って来たのは

「遅かったじゃない。アナザー、アンタ以外は全員準備できてるのよ？」

『……ソウカ、ソナコトハドウデモイイ。イクナライクゾ』

「ちよつとー！一番遅れておいて仕切らないでよねー！」

『ソウカ………』

しかし、どうにも様子がおかしい。

何故か喋り方は片言だし、心なしかアナザーの声とは別に、少女のものと思われる声が微かに聴こえてくる。

「……あの、本当に大丈夫なのですか？体調が優れないなら、別にもう1日ぐらい待っても」「っ、ヒウヨウナイ」……そうですか？心なしか何時もより不健康そうですけど……」

それに加えて、普段ならハクが寄ってくる事に対して口で嫌がつている割りには警戒が緩いのだが、今はハクが近くに寄ってくる瞬間に近寄って来た分だけ正確に距離を取り、限界まで手を伸ばしても絶対に触れる事も触れられないような絶妙な距離を維持し続けた。

「えー、では、みなさん、準備はよろしいですか？」

『はい／はいです／はい／うむ／アア／……（こくこく）』

そうこうしている内に、転送装置の準備が整い、後はイストワールがスイッチを押すだけとなっていた。

「では、御武運をお祈りしています」

「お姉様の事を頼んだわよ！」

そうして、ポチツとスイッチが押されると共に、やる気に満ちたネプギア達は転送装置によってギョウカイ墓場へと転送されて行った。

『……………ニイ』

そんな中でアナザーだけ、まるで全てを嘲笑うかのように目を伏せて口の端を吊り上げながら、不穏な雰囲気を纏って転送されて行ったのだった。

## 第五十七話

「では、御武運をお祈りしています」

「お姉様の事を頼んだわよ!」

とても気持ちが良いギョウカイ墓場

そこに俺が転移させられる直前に聞いたのは、そんなイストワールと知らない誰かの声だった。

(アア、しかし、本当に)

何だろうか?この快感は

ギョウカイ墓場の空気を吸うだけで、心が踊る、胸が高鳴る

「……残骸の山、か」

しかし、不思議だ。

一度も来た事のない場所でこんな事を言うのも変だが、故郷に還ってきた?或いは、母親の胎の中で揺蕩う胎児にでもなったような……とにかく、不思議で仕方のない感覚だった。

……………だが

「なんですか!ここは!!」

「ちよつとハク?!急にどうしたのよ!」

「どうしたもこうしたもありません!有り得ません!何なのですかこの最低最悪な世界!!女神を馬鹿にしてるんですか!」

「お、落ち着いて!落ち着いてください!」

「落ち着く?!ネプギアさん!よくこんな最低な世界を許容できますね?!」

「ケンカはダメです!」

……………どうやら、ハクはこの居心地最高虚しく哀しいのステキ世界世界が気に食わないらしい。

アイエフやネプギア(ついでにコンパ)の制止を振り切り、左手に物質化した大剣を持って大暴れしていた。

「て言うか!こんな最低な世界に姉さんを捕らえるなんて!!最悪です!最悪過ぎます!!犯罪組織は何を考えてるんですか!」

「あの、私も最近まで捕まってたんですけど……」

「ネプギア、言ってもムダよ……」

「ハクちゃん……こわい……（ぶるぶる）」

「最低です！最低です!!最低です!!」

（……喧しい奴だ）

まあ、手当たり次第に溶解光線を撃たないだけ良しとしよう。

あんな危険極まりないビームを撃つて救助対象捕獲に中つては堪ったものではないからな。

だが、筋力でも上がったのか、剣先から十数メートル先の瓦礫の山が吹き飛ばされていく上に、何をどうやればこうなるのか、馬鹿デカい刀身の刃を叩き付けられた筈の大地は切断される事なく、小さなクレーター（但し、人間が数人ぐらゐは入れる）を生成していた。

（……と言うか、どうやって刃を大地に叩き付けてあのサイズのクレーターを作っているんだろうか？）

刀身が地面に埋まるならまだしも、あのサイズのクレータ―を造れる筈がないのだが……

「……はあ……はあ……こ、こんな場所にこれ以上姉女さん神を置く訳にはいきません！早速助けに行かないと!!」

「ちよ、場所は分かつて今行きます!!」……なんで、こうなるのかしら……?」

そんな事を考えている内に、一通り暴れて落ち着いたハクは息を整えながら、捕まっている駄女神達を探してもものすごい勢いで突撃して行った。

「アイエフさん！早く追いかけないと!!」

「……そうね。行きましようか……私としては、アナザーの方が暴走しないか心配してたんだけどね……」

そうして、ハクが向かって行った方にアイエフ達が行こうとした矢先の事だった。

「皆様揃い踏みで、飛んで火に入る夏の虫とはこう言う状況を指すのでしょうか?」

「リリース、そう言ってやるな……奴らも何かしらの勝算程度は用意して来たのだろう」

「確かに、その可能性は無視出来ませんね！流石は勇者様です！」

目の前に白いロボットと白い女の二人組が立ち塞がったのは――

「……あんた達、犯罪組織の関係者か何か？」

「悪いけど、アタシ達はこれから「女神共を解放しに来たのだろうか？」っ、お見通ししてワケね！」

アイエフとウニ……違った、ユニが白い二人（？）組に邪魔だとも言おうとしたのか、そのまま出鼻を挫かれ臨戦態勢に入った。だが、今のこいつらにアレの相手は不可能だろう。

「……そう血気に逸るな。オレ達の目的は貴様らではない」

「ええ、わたくし達としては、そこな紅毛の悪魔さえ置いて行くなら貴女方は素通ししても良いと考えておりますので」

その証拠に、あの白いロボットは前に俺が斬られた時は一応構えていた大剣を持つてすらいない。

腕を組んで仁王立ちとまではいかないが、それでもたかが女神候補生程度や人間如きならば素手で十分とばかりに、俺の目の前に立ち塞がっていた。

『……………』

(……まあ、そうなるだろうな)

白い女の方は知らんが、何処までも違和感しか感じない、正義の味方と言わんばかりの風体をしている白いロボットの方は、俺自身も良く憶えているとも

白い女の紅毛と悪魔と言うキーワードから、一瞬も迷う事なく全員が俺を見た事に思う所はあるが、そんな些事などどうでも良い。

「……俺を置いて先に「さ、ここはアナザーに任せて先に行きましょうか」い、け……………」

「そうですね。それが一番です」

「お姉ちゃん！今行くから、もう少しだけ待っててね！」

「ぎーぎー」

「……♪(びゅーん)」

「イエーイ♪RED・ちゃんが一番乗りなのだー！」

(……………解せぬ)

……まあ、良い。

全員から何の躊躇もなく置いて行かれたが、邪魔な足手纏いを手間なく引き離れたと思えば、気にする事は何もない。

『……………』

心なしか目の前の敵からさえ若干同情的な(?)眼差しで見られて  
いる気もしくないが、恐らくは気の所為だ。

向こうが言ったのだから、こうなる事を見越しての言葉だったのだ  
ろうと俺は思う。

「……………ふう……………」【ア……—♪】

あの日以来、心臓の付近で煮え滾る黒の力を意識する。／何処から  
ともなく、ノイズの混じった女の声が聞こえる。

「……………さあ、終焉を与えようか」【嬉しいわ? 衰しいかしら? 愛しいア  
ナタ、始源のカイナにおいでなさい?】

そうして、俺の意識を激痛が襲う。／はじめてノイズが完全に消え  
失せた女の声を聞いた。

『ああアa a A a AアああアアああアA a Aアああaアアああア  
アああA Aアアa aアa a A a a!!!』

「っ!?!」

「……………(はくはく)」

そうして、誰とも知らない女の意味のようなナニかが俺の意識に混  
ざると共に、周囲には全てを終わらせる闇が溢れ出すのだった。

『……………さあ、終わらせようか……………』



一方でその頃

ギョウカイ墓場の奥に向かつて全速力で走っているハクは、途中に居たモンスターやジャンクの山を薙ぎ払い、吹き飛ばしながら、捕らわれた姉の女神達を探し続けていた。

「ああもう!!何処に居るんですか姉さんは!!!」

その表情はニコニコと笑っている普段では考えられない程に嫌悪で歪み、上位の危険種である八百禍津日神が泡を食って逃げ出す程の殺気を撒き散らしている。

「気持ち悪い!!本当にもう!!なんなんですか此処は?!!」

だがしかし、ハクにとってギョウカイ墓場此が何なのかは、肝心な事ではなかった。

「さつきから変身しようとしても変身できないし!挙句に浄化作業も出来ない!!もう訳が分からないわ!!」

……そう、実の所、ハクはギョウカイ墓場地に辿り着いて以来、捕らわれた四女神を気にして一度も熱光線を放たなかった訳ではなかった。

ただ単純に、何故か女神化する事が出来ず、己が異能が使えなくなっていたに過ぎない。

「此処には、間違いなくシエアエナジーが漂っているのに……ゲームギョウカイだって、他所の国に行ってもある程度の時間は女神化出来る筈なのに……なんで!!」

そうして、これまでの経験にない現象に対する困惑と不安から、何処へともなく叫ぶハクだったが、その叫びに対して答える者が居た。

「さて…な。我が主である犯罪神様は、その答えを持ち得ない」

「へへっ♪マジック様、コイツ、能天気な1人で来やがりましたね♪」  
それは、鎌を構えた彼岸花のような姿の女——マジックと、全身から小物臭を漂わせているネズミを象った鼠色のパーカーを着た、鼠色の肌をした女——下っ端の二人組だった。

「ッ?!?!」

——ブチッ

そして彼岸花マのような女ッの姿を見た瞬間、ハクの中で何か切れた



## 第五十八話

『……………さあ、終わらせようか……………』

そう言ったアナザーの周囲には、全てを塗り潰さんと言わんばかりに黒い靄が漂い、アナザーの姿を見え難くしていた。

「な…なんだ！なんなのだ?!キサマは!!」

そんなアナザーに対して、ブレイブは声を荒げて問い掛ける。

『お前にその答えが必要なのか?』

「ぬうつ?!」

その問いに対して、アナザーは普段の血の弾丸とは違う、黒いナニかを撃ち込む事で返答とした。

「あ…あああ……………」

ブレイブの隣に居たりリスは、アナザーのあまりにも禍々しい姿に對して本能的なナニかを揺さぶられているのか、顔の左側を抑えながらブレイブに寄り掛かる。

『……………シネ』

「うおっ?!／きやあっ?!」

アナザーはその一瞬を突いてブレイブとリリースが重なるような軌道で黒い弾を撃ち込んだが、それはブレイブが自前の身体能力を用いてリリースを抱え、瓦礫以外は何もない横に跳んだ事で回避した。

だが――

『バカめ！引っ掛かったな!』

――それを回避される事を視越したアナザーは、ブレイブが跳んだ方から――つまり、アナザー自身も操っている血も基点とする事なく、虚空から数発の黒い弾を一瞬で発生させて撃ち込んだ。

つまり、今のアナザーにとつては場所の座標さえ知覚出来ているのなら、1つの戦場の全てから何処にでも黒い弾を発生させ、それを撃ち込めると言う事なのだろうか？

「勇者様危ない?!」

「ぐおおおおおおおっ?!」

しかし、ブレイブの反応速度は流石とでも言うべきなのか、リリース



黒い靄が無くなった先には、最初の時と変わらない、右眼の血涙さえ無い無傷のアナザーの姿が在った。

『……………』

しかし、ブレイブもリリースも、そんな無防備な状態のアナザーに対して、言いようのない不安と恐怖を感じて攻撃に移れないでいた。

『……………』

そうして、場が膠着状態になっている中、アナザーの側に動きがあった。

『…………アハア♪』

暴走時以外基本的に表情の変化に乏しいアナザーが、急に無邪気な子供のような笑顔を浮かべ——

『アハハっ♪アハハハハハ♪アッハハハハハハハハハハハハハハハハハッ♪♪』

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおっ?!?!／きゃあああああああああああああつ?!?!」

——周囲へと無差別且つ大量に、先程ブレイブの大剣を溶かして半ばから溶断した黒い弾を弾幕の如くばら撒き出したのだった。

一方でその頃、アナザーを置いて捕らわれた女神達の救出に向かったネプギア達一行は——

「お姉ちゃん!?!」

「ネプ子ー!今助けるわよ?!」

——ネプテューヌを始めとする四人の女神達を見付け出して、アイエフが各国で事前に用意していたシエアクリスタルを統合して作り出した大きなシエアクリスタルを翳していた。

「(私が)ノワール様(に縛らりたい)……………」

「お姉ちゃん……………」

『う、うう……………』

そのシエアクリスタルの光に照らされ、四人の女神達を縛っていた黒いコードのような紐がゆつくりと溶け出した。

また、眠りに就いていた女神達の意識も徐々に戻り始め、悪夢に魘されるかのような表情で唸り声を挙げていたが——

「っ!?危ない!」

「イヤツツハアアアアアアアアアアア!!」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!?!」

——しかし、突如としてシエアクリスタルを掲げているアイエフに目掛けて髑髏の意匠が施されたハルバードが叩き落とされた事で、シエアクリスタルの光は一時的に中断する破目になったのだった。

その容赦の無い不意討ちに対して、辛うじて直撃を避けたアイエフは遠くへと吹き飛ばされながらも受け身を取って膝を付く。

「まだまだまだまだまだまだまだまだアツ!!!」

「させるか!!」

更にそこから、黒いロボット——ジャツジはアイエフ目掛けてその巨大なハルバードを振り回して追撃したが、その追撃はグロウが死ぬ気で受け流した事でアイエフからは逸れ、アイエフ（とシエアクリスタル）にトドメが刺される事は回避した。

「——ぐぬう……?!」

「グロウ?!」

……だが、ジャツジの追撃を受け流したグロウは、そのあまりの威力に対して完全に威力を殺し切る事は叶わず、受け止めた刀は碎け散り、右腕はあらぬ方向へと捻曲がってしまった。

「ア……クツ……じよお……」

「……絶対絶命って奴かしらね?」

しかも、そこへ更に黄色い恐竜人形の出来損ないのような姿をした者が現れた事で、ネプギア達は敗北同然の状況へと追いやられて行ったのだった。

## 第五十九話

ギョウカイ墓場で待ち受けていた犯罪組織の幹部ブレイブザードとその部下リリス

『さらさらどうした!? 避けてばっかじゃ勝てねえぞ?!』

「ぬうつ?!」

「勇者様っ?!」

今、2人（1人と1機）は、最早二重の意味でどちらが悪役か判らなくなるようなアナザーの容赦ない攻撃に対して、逃げ回る事しか出来なideいた。

『あはは♪アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪♪♪』

「くっ?!おのれ卑劣な!」

「わたくしの事など気にしないで! 全力で「そうはいかん!!」……勇者様……」

ブレイブの逃げ回る方に目掛けて、無数の黒い球体がアナザーの周囲から射出される。

それをブレイブがリリスを小脇に抱えながら必死になって避けているのには訳があった。

「おのれマジック! 何が収穫の時を待つか!」

「勇者様! 右斜め後ろから黒の球体が来ます!」

以前、マジックに言われて素直に引いた自分（と、マジック）をぶん殴りたい衝動に駆られつつも、リリスが背後に魔力弾を撃ち込んで隙間を作り、その隙間を風切り音とこれまでに無い程に全力で稼働させた直感で察知し、機械で出来た己の身体を滑り込ませるようにしてどうにか、弾幕の壁をすり抜ける。

「ぬおおおおおおおおおおおおおお!!?!」

「きゃっ?!」

『あー、アー、アー、あー、アー、あー、アー、アー、アー、アー、あー、アー、あー、アー、アー………アツハハ♪アツハハ♪アツハハ♪♪♪』

以前の血の弾幕は斬って防いでいたブレイブではあったが、そんなブレイブであってもあの黒い弾だけは絶対に受ける訳にはいかな

った。

「ぬう……!?!」

『アは♪ギヤは♪ハ♪ほらほら!ハハッ♪♪黙って死ねや雑魚共がア!!』

先程、どうにか回避した黒い弾幕がギョウカイ墓場では珍しくもないゲーム機やゲームソフトの残骸の山に直撃した。

その結果、残骸の山は爛れ落ち、強酸性の液体らしきナニかへと変貌を遂げていた。

これ以外にも、腐敗、反転、溶解、自壊、老衰、破裂、腫瘍、病毒、破壊、狂乱等々

黒い弾に齎される結末は多種多様であり、同時にそれだけの多様性を保ちながら、一貫して触れたモノ全てに約束された滅びを黒い弾は齎らしていた。

「ぐ、おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!?!」

『アハハハハハハハッ♪ホラホラー!もつと楽しませろよ!!』

そんな危険な力である黒い弾約束された破滅の雨を無数に撃ち込まれながらもブレイブが死んでいないのは、単純にアナザーがブレイブを甚振って遊んでいるからに他ならない。

少なくとも、ブレイブの持っていた大剣を溶かして折った時の様にアナザーの周囲からだけでなく、ブレイブの周囲からも黒い弾を撃ち込めば、それだけで既に勝負は付いていたのだから――

『んく♪いい加減に飽きてきたな……』

「うおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

しかし、そんなアナザーにとつての遊びは、アナザー自身が飽きて来た事によって終わりの時を迎えようとしていた。

『もう、オマエイラナイ♪消えちゃえ★』

そう言ったアナザーの周囲には、膨大な数の黒い弾が展開されていた。

「……………まで、か……………」

その数は万を超え、億の域に届きかねない程の膨大さで、アナザーの姿が一切見えない程にぎっしりと詰め込まれていた。



「ゆ、勇者様……」

それだけに飽き足らず、ブレイブ達の逃げ場を奪うようにアナザーの正面以外の全方位に黒い霧が漂っており、それに巻き込まれた残骸の山は視界から消えたものの、漂う異臭からして残骸は溶けたか腐ったか……何れにしろ、黒い弾に中つた時と似たような状態になっている事だろう。

「……すまん」

「え——」

そんな状況の中、ブレイブはリリスに謝ると、首の裏を叩いて意識を刈り取った。

「……」

「……お前は、まだ生きると良い」

そう言つて、リリスの身体に紙のようなモノを張ると、リリスの周囲に魔法陣が浮かび、そのまま何処かへと消えて逝った。

「『あくあく、面倒臭い事をするね〜?』」

それを見たアナザーは、人を小馬鹿にしたような表情を浮かべながらも表情とは別に面倒だと口にするが——

「……ふん、わざと見逃しておいて良く言う」

「『あ、分かっちゃう? 解る? 判つたの? そうだよ! どうせあの死に損ないが一匹逃げてでもどうにでも出来るし?』」

「『まあ、お前を見逃すなんてお願いは叶えてあげる訳にはいかないけど、あの程度の粕一匹を見逃す程度なら……ねえ?』」

——ブレイブの言葉に対して、あつさりと言を翻して塵を見るような眼差しを向けながら、知つてか知らずか、リリス本人が聞けば怒りのあまりに力の差さえ無視して襲い掛かりかねない程の軸を突いた暴言を口にしていた。

「……どう言う意味かは聞かん……が、貴様はオレが必ず始末する」

「『アハツ♪ 怒つた? ねえ怒っちゃつたの? たかが死に損ないの生け贄<sup>エサ</sup>如きの為に?』」

そんなアナザーの暴言に対して、ブレイブは視線に仲間を侮辱された事による憤怒と殺意を乗せながら、半ばから溶断された大剣を構え





「殺す!!壊す!!グツチャグチャのミンチにしてやんよオオオオオオオオオオ!!」

「アツクCク……吾輩は何処dE此処は誰?……まあ、YOい……あ  
Nノ幼女達Hあ吾輩のモノダアAああAああaアアツ!!!」

「……………私は何故、こんなものの部下をしているのだろうか  
……………」

そんな事を考えていた私ですが、敵は待つては……いえ、蒼いローブの人はなんだか遠い目をしながら恐竜人形みたいな黄色いロボットを嫌そうな顔で見えていますけど、それはそれゆにして

「あああああああああああああああああああああ!!?!!」  
「……………コロス」

「ま、まだ動いてやにやめでええええええ!!?!!」

敵は待つては……………アレ?なんだかユニちゃんどグロウさんの様子がってエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ?!!?!

急に黒い光を発しながら何時もより布地が少ない変身をしたユニちゃんと何処からともなく刀を取り出したグロウさんが明らかにやる気満々なロボットの敵を無視してあからさまにやる気が無さそうな蒼いローブの人に襲い掛かった?!

しかもグロウさんは折れてた筈の腕で刀を強く握って振り回して  
るし!?

「華麗にブツ飛ばしてあげるわ!!」

「惨Si滅re津」

「?!?」

奇声を挙げながら黒い敵からの攻撃を謎の軌道で潜り抜けて蒼いローブの人に斬り掛かったグロウさん

そしてそれを援護しながらとてもの確に蒼いローブの人の金的や頭を(金的7:頭3位の割合で)狙ってどンドン狙撃を加えていくユニちゃん

「……………」

『……………(ふにゆう…………)』

二人の急な奇行の影響からか、執拗に攻撃を加えている二人と、そ

の二人から必死になって防御結界を張ったり転移魔法で回避したりしてる蒼いローブの人以外の全員は混乱の渦に包まれたのでした。

突然黒い光を纏ったかと思えば、ボール様に匹敵するぐらい露出の激しい格好になって変身したユニと、(服が黒いから分かり難いけど)全身に薄っすらと黒い光を纏い続けてるグロウ

「……………」

『……………(ふにゆう…………)』

(え、えー…………)

二人は急に大幅なパワーアップを果たして、犯罪組織の強敵らしき二人(二機?)を掻い潜ったかと思えば、そのまま奥に居る何処かで見たとような気がする蒼いローブの男に襲い掛かっていった。

(え、ちよつ…………なんでそっちに行くのよ?!)

あからさまにやる気がなさそうな奴よりも目の前で世紀末風味でヒヤッハー的なやる気に満ちてるアイツ等から殺らないとコツチがヤバイじゃない?!

今は凄いい形相で蒼いローブの男に襲い掛かっているのが予想外だったのか止まってるけど、そんなに時間ないわよこの状況っ?!

「つてオイコラトリック!!コイツ等はオレ様の獲物だ!!!勝手に手を出すんじゃない?!!」

「アクッアククッ…………アクッ?ワガ輩は幼女以外はどうでも良い!ウム!それだけだが?」

「チツ…………等々イカれやがったかこのポンコツが!」

『……………』

(…………意外と、時間が有りそうね)

目の前で漫才をやっている二人(?)の敵を見て、思ったよりも時間がありそうだと感じた私は、この現状を打破する為にネプ子達の救助を急ぐ事にした。

(今の内今の内と……)

## 第六十一話

無駄に陰気臭くて不気味なギョウカイ墓場

『( )そこそ……( )そこそ……』

そこで今、私とコンパとRED「アイエフ！わたしの名前はRED.  
！. が抜けてるよ！」「し！静かにしなさい！」「あいちゃんも声が大  
きいです……後、ちよつと胸が苦しいです……」「おお！わたしももの  
だ！この体勢は胸が潰されるし、服が汚れるし、最悪なのだ」

……ん”ん”……なんかシ主に胸とか胸とか胸とか胸とかョツキングな発言も聞こえた気がする  
けど、気を取り直して……私とコンパとRED. の3人はネプ子達の  
元へと気配を極力消し、瓦礫に紛れながら匍匐前進で向かっていた。  
「アツハハハハハハ!! 撃ち落としてア・ゲ・ル！♪」

「オオオオオオオオオオオ!!」  
「おまつ!?!ふざ、ふざける!?!なア!!!」

その間、仲間のユニとグロウが意味もなく大騒ぎしながら蒼いロー  
ブの男……いえ、良く見たらあれは確か………まあ、そんな事はど  
うでもいいわ。

蒼いローブの男に2人掛かりで襲い掛かる事で、多少の物音なら掻  
き消してくれる状況が出来上がっていたから、少々声を出しても良い  
けどね「良いの／良いんですか?!」……出しても良いけど、ほら、こ  
の手の潜在ゲームっぽいのは気配を殺して物音を立てないってのが  
基本じゃない?

……そっちの方が気分も乗るし

「上等だクソ野郎がア!!人が下手に出てたら付け上がりやがって!!ま  
ずテメエから血祭りに挙げてやらああアアアアア!!」

「A C C U K u k k ……この伝説のスーパー紳士なワガ輩に、勝てる  
と思うか?」

と、とにかく!

ネプ子まで後数分も有れば辿り着くでしょうし、そうになったら後は  
こつちのものよね!

ササツとネプ子達を連れてネプギア達の所にまで行けば、後はネプ







手で持ち、それを水平に振り切った。

その結果、マジックが咄嗟に張った魔力障壁は神器でさえない普通の大剣によつて和紙か何かのように一瞬で斬り裂かれ、胴を狙った刃こそ回避したもののハクが全身から発していた莫大な熱量を至近距離で浴びた腹部に深い火傷を負い、比較的近くに存在していて他に比べれば脆かった彼岸花のような背中のプロセスユニットは熔けてその機能を一部喪失した。

かなりの大怪我ではあったが、咄嗟に魔力で障壁を張り直したのが功を奏したのだろう。

でなければ、隣に居た下っ端と同じように灰も残さず蒸発していたかもしれない。

「…フーツ…フーツ…」

しかし、一方でハクの方も、それだけの火力を放った代償からか、過剰なまでの熱を内包させられた大剣の刀身はハクが両腕で振るった際の力に耐え切れずに半ばからグニヤリと振れ、柄に至っては握り潰されている始末である。

ここまで破損したら、最早板金に錆潰して一から造り直した方が良いだろう。

更に、普段ならば耐熱性を重視している為か、過剰に熱を溜め込むに留まっていた衣類は焼け焦げて黒い襪褌布と化し、その下に見える皮膚は所々焼けて爛れていた。

「……………いきなり、か…」

「……………起動《セット》」

マジックが神器故か、プロセスユニットさえも融解させ機能停止に追い込む程の熱を浴びても尚、原型を留め武器として扱える状態を保持していた戦鎌を構えると同時に、普段からは考えられない鬼のような形相をしていたハクは、能面のような無表情になつてその手に持っていた最早使い物にならない大剣を放り、緑色の光を放ちながら女神化した。

「……………」

しかし、どう言う事だろうか？

ハクが女神化した姿は、普段の天使を模したような姿から大きくかけ離れていた。

「貴様、まさか…」

背後で浮いていた筈の後輪は消え失せ、腰に付いていた天使の羽根のような機械は黒く染まり片翼は蝙蝠の羽根の様に変貌していた。

頭部の黄色いサークレットとそれに付いている角を模した緑色の刃は、サークレットが灰色に変色すると共に、二本の角も赤黒く染まり山羊の角を模した逆刃の鎌に成り果てた。

身体に纏っていた緑色の水着のような装束に至っては、ジャラジャラと大小不揃いの鎖が付けられ、胸元には南京錠が付けられた拘束具のような有様の黒い修道服である。

「……………浄滅、開始」

そして、閉じていた目蓋を見開いたハクの瞳は、左眼だけが赤黒く変色してしまっていたのだった。

## 第六十二話

幕切れは、とても呆気ないものだった。

「インファイニットスラッシュ／N・G・P!!」

「ネプテューンブレイク／プラネティックディーバ!!」

「認めぬっ!!…こんな結末、認められるわけがっ」——「ギイアあ?!?!…ぐわあああああああああああ?!?!?!」

光の柱が建つたのと同時に、目覚めた四女神と新たな力を得た四人の候補生達の手(…)で犯罪組織の黒いロボットは爆散し——

「ハードブレイク／ノーザンクロス／アブソリュートゼロ!!」

「スパイラルブレイク!!」

「アックククク…我が人生に一片の悔いなあああし!!!…:…:…:つて、なんと——?!?!」

「くっ…:…:ここは一旦、避難するしか…:…:!!」

——また、それと同時に倒された黄色い恐竜人形のようなロボットは、最後の瞬間だけ急に中身が入れ替わったかのように雰囲気が変わったものの半壊状態で機能を停止し、蒼いローブの男は転移魔法で何処へ消えた。

「勝った…?!…:…:勝ちました!私、勝てたんですね!?!」

「イエーイ♪わたし達の大勝利♪」

「そうね…ネプ子達が目覚めてくれなかったら、きっとヤバかったんでしようけど…:…:」

「でもすごいです!あの時は黒いろぼとさんだけでも逃げるので精一杯だったのに、今度は勝てたです!」

その結末勝利に、少しずつ実感していったらしきネプギアは満面の笑みを浮かべ、変身を解いたネプテューヌと抱き合いながら歓喜し、アイエフやコンパもそれに同意するかのように笑みを浮かべる。

また一方で、なにか言いたそうな表情のユニは、非常に緊張しながらノワールの元へと小走りで駆け寄った。

「あ、あの…:」

「…ユニ…:…:随分と、時間が掛かったみたいね。正直、もっと早く来て

くれると思っっていたわ」

「ご、ごめんなさい!?アタシ、まだ全然お姉ちゃんみたいには…」

そんなユニに対して少々気怠げな雰囲気を出しながら皮肉な言葉を放ったノワールは、自分のお尻をチラチラと気にしながら、普段の勝ち気な雰囲気が消失しておどおどとした雰囲気になっっているユニに笑みを浮かべて一言多い台詞と共にありがとう、とそう告げた。

「なにを謝っているの?あれだけ時間が有ったなら当然だけど、大分成長はしてるじゃない。ありがとう、助かったわ」

「う…うん…けど、お姉ちゃん…」

そんなノワールに対してやつと安心したような表情を浮かべたユニは、未だにノワールのお尻を気にしながら気にしていた疑問を投げ掛ける。

「?なにによ?」

「あ、あの、お尻…」

「これは気にしなくて良いわ」

「あ、そうなんだ……」

しかし、ノワールの気にしなくても良いと言う発言によって、感動的な筈の場面に不釣り合いな変なものを見たような、それとも<sup>7年間の蓄積</sup>自分の常識が間違っていたのか……そんな心境が窺えるような微妙な表情を浮かべて、ノワールのお尻をチラチラと見ていたのだった。

『……………(ふるふる)』

……………微妙に震えながらも、ノワールに近寄った途端とても神掛かった鮮やかな滑らかさで椅子となったグロウを――

「ねえねえ!お姉ちゃん!」

「ダメよ……」

「わたくしの妹は、何故ここに居ないのでしようか……」

――なお、その近くには二人の妹の視界をうs…もとい、大きくない身体で抱き締めて強引に塞いでいるブランと、自分の妹だけがこの場に居ない事に対して何処となく別次元の因果らしき何かを感じながら独りでしょんぼりしているベールの姿が在ったとか……



ると共に、支配した血を自身の頭上に浮かべ、支配を解除した。

「ふんふんふくん♪」

そのまま、全身の煤を落とす為だけに八坂禍津日神から搾り取った血を全て使用した後だった。

「……………あ??」

「……………何、■の力を使っただ……………あのクソガキが……………」

先程までの機嫌の良さそうな雰囲気は何処に行ったのか、煤に塗れた時よりも顔を顰めながら、底冷えのするような怒りと憎しみを声に滲ませて、アナザーは北東の方角に顔を向けた。

「……………仕方ない、か……………」

それから少々名残惜しそうに自分の身体を見たアナザーは、黒い靄を全身から吸収すると共にそのまま気絶して倒れた。

四女神が目覚め、女神候補生達が新たな力に目覚めていた際

「……………浄滅、開始」

身体へ纏っていた光を消し、悪魔のような姿になったハクは表情1つ変えずにそう言うと、両手で持った神器の大剣に黒が混じった光を纏わせマジックに目掛けて斬り掛かる。

「ぬ、おおお!」

右、上、下、左、突き、払い

時に不可能な筈の軌道を力業で強引に放ち、幾度も繰り出される大剣の乱舞に対して、マジックは薄皮一枚を切られながらも防御と回避を繰り返した。

「……………」

「こ、の……………調子に、乗るな!」

そして、防御と回避の合間に反撃を繰り出すも、ハクは強引な力尽くで大剣を引き戻して弾き返す。

その力は変身前は愚か、前の天使を模したような姿のそれさえも凌駕しており、黒が混じった光を大剣に纏わせている事もあって、魔王のようなナニかを連想させられた。

そのような攻防を数分程繰り返していた時だった。

「……………」

「ハア……ハア……グッ……………」

そこには、息一つ乱さずに無表情で立つハクと、片膝を着いて息も絶え絶えなマジックと言う構図が出来上がっていた。

「ふ、くふふ……まさか、貴様に……このよう、な……才が有ったとは、な……………」

「……………浄滅を執行」

ハクの放つ黒の混じった光に焼かれながら、マジックは嘲笑うような声色で毒を吐く。

「貴様は、そう遠くない時に破滅を迎える……………」

「浄滅……………」

黒が混じった光を左手に集束させてマジックの頭に右手を向けたハクは、肩で息をしている確実にしとめる為か、光の集束を続けて出力を増幅していく。

「何故なら……………」

「消えなs——」

『ぐちゃっ』

そんな時、何かが潰れたような音がして、ハクの右手に集束していた光が喪失した。

「……………は？」

その状況には、ハクだけでなく敵である筈のマジックさえも驚愕した。

何故か、ハクの左腕の肘から先が黒い靄に呑み込まれ、黒い斑が浮かんだ左手が背後からハク自身の胸の中心を貫いていたのだ。

「……………ぐいっ」

それを認識したハクは血を吐くと共に、前向きに倒れ伏した。

「……………一体、何があつたと言うのだ……………」



あまりにも訳が分からない状況に終始困惑していたマジックは、女神（？）化がゆつくりと解けながら胸元から大量の血を垂れ流しているハクを一瞥し、破損したプロセスユニットをシエアエナジーで修復して先程爆発があった方へと飛んで行ったのだった。





「…………えっと、確か私は……姉さん達を探して走り回っていたような………何で傷もないのにこんなに沢山の血をベツタリと着けて倒れていたのでしょうか?」

そう言いながら頬を掻いたハクの修道服の胸元から下は、まるで紅いペンキでもぶちまけたかの如く真紅に染まっていた。

これを返り血だと言うには着いていた場所が限定され過ぎであり、逆にハク自身の血だとすれば死んでいても可笑しくない程の量である。

「…………そうそうでしタシた…私は……、姉ンサエネさんの気イハケ配を探つテツグサて……………」

そのように部分部分に可笑しな発音が混じった言葉を発しつつ、虚ろな表情のハクは髪と同じ色合いの銀眼を不気味に輝かせながら、先程爆発があった方向——ブレイブが自爆した場所——へと視線を向けた。

「……………神罰、執k「ハク!」う……………姉さん?」

そして、虚ろな表情で右腕を爆発があった方——マジックが飛んで行った方——へと向けて白い光を集束し始めたその時、露出度が極端に高く、緑色の長髪をポニーテイルにしている女性——女神化した状態で飛んで来た姉のグリーンハートの姿を視認し、少し驚いたような表情をしたハク。

何時の間にかその右腕に集束していた光は霧散していた。

「ああ、やっぱりここに居ましたのnって、その血はどうしたのですか?!」

右腕から光が霧散すると共に、ボールからは光の加減からギリギリ視えていなかった胸から下にべったりと付着した血液がボールの視界に映り、それに驚いたボールはアメジストのような瞳を見開き慌てて降り立った。

「さあ?私が気付いた時にはこうなっていましたし」

「さあって…………大丈夫なの?」

そんな心配に対して、ハクは大した事では無いと言わんばかりの無頓着な反応を示した。

胸から下にべつとりと大量の血液を付着させているにも拘らず、あまりの無頓着さに呆れながらも安否を問うようが……………」

「外傷が存在していない以上は、問題などありません」

「……………」

その心配は、先程のような空虚な表情とは違う普段通りの微笑みを浮かべたハクによって膠も無く一蹴されてしまっていた。

そんなあまりの塩対応っぷりに怯んだベールは、心なしかしよんぼりしたような表情を浮かべて硬直した。

「そんな事よりも、姉さんは何故こんな所に？」

「ああいえ、これは……………」

ベールはハクのそんな一面がとても苦手だった。

極一部の例外を除けば、何時でも何処でも誰に対してもハクは微笑みながら対応する。

そう、何時も表情が変わっていないのだ

「それは、何ですか？」

勿論、無表情とかそういう話ではない。

寧ろ、逆に笑顔を絶やさない良い娘として周囲には認識されている

——姉であるベール自身を除いて

「たいしたことじゃありませんわ…単に他の方達が妹の女神候補生と再会の喜びを分かち合っているのを見て、わたくしもそうしたいと思っただけですもの」

「まあ、嬉しい……………」けど、それなら尚更、大人しく待っていてくれれば、私の方から向かいましたよ？」

切っ掛けは些細な事だった。

ハクが女神化を可能とした少し後、クエストでエレメントドラゴンを倒す為にガペイン草原に行った時だった。

突然、謎の集団——今の犯罪組織マジエコンヌ——に襲われたのだ。

幸いにも周囲に人質にされるような市民も居らず、実力もそこ等のチンピラに毛が生えた程度だった為にあっさりと撃退して牢屋に押し込めた。

しかし、その後が問題だったのだ。

それ以降、ハクは夜な夜な捕まえた襲撃犯達の収容されていた牢に足を運んでいた。

周囲も止めていたのだが、見張りも居るのだからと押し切って止まらないハク

流石に心配になり、こつそり後を追った先で見ってしまったのだ。親の仇を見るような目で襲撃犯に見られても尚、微笑みながら襲撃犯に尋問を行うハクの姿を

「まあ、良いではありませんか：折角の姉妹水入らず……と、言いたい所ですが、それとはまた別に、急ぎのお話があります」

思い返せば、ベールの記憶に在るハクの姿はどんな時も微笑んでいるものしか無かった。

それこそ、ベールと共に過ごした時間でさえも、常と変わらない微笑みばかり

極一部の例外と共に争っている時だけが、微笑み以外の表情を浮かべている数少ない例である。

「犯罪神マジエコンヌが、復活しました。急いでギョウカイ墓場から避難しますわよ」

「えっ」

ハクの驚いているような声を聞いて、ベールは想う。

——ああ、まだ、微笑みから変わらない。



マジックの声を聴いたアナザーは虚ろな表情を憎しみに満ちた表情へと変えると共に、マジックの胸に突き刺さっている剣の柄を足蹴にしてぐりぐりと押し込んでいく。

「ウ、ぐ……ッ」

「ああ、やつと思ひ出したんだよ……お前が、ムシケラが、木偶がクソが」

「ぐ、アグっ?!」

底冷えするような声を出しながら右手でマジックの首を掴んだアナザーは胸に剣が突き刺さったままのマジックを持ち上げ、紫に明滅する刀身の七割が貫通して背中側にある剣の柄を左手で持ち、首を絞め上げながら剣を一気に引き下ろす。

「ああ、今度は間違えない……今度こそ、この剣……いや、『ゲハバーン』で犯罪神を——ハカイスル」

「……………」

幽鬼のような表情のアナザーによって胸から下が左右に斬り別けられたマジックは血も内臓をぶちまける事なく、赤黒い光の粒子に分解されて引き下ろされた禍々しい剣——ゲハバーンへと吸い込まれていったのだった。

そして血の滴る刀身から紫色の暗い輝きを放つゲハバーンを持ったアナザーは、夢遊病の如くフラフラとネプギア達が向かった方へと歩いて行ったのだった。

アナザーがマジックの心臓へ禍々しい剣——ゲハバーンを突き立てた丁度その頃

通信機よりイストワールの声が響き渡り、帰還を呼び掛ける。

『ネプギアさん!?そこは危険です!今直ぐに帰還してください!』

「え、ちよっぴーすんさん?!」

「イストワール様、これは一体……?!」



それに連鎖するように、姉の女神達と再会を果たした女神候補生達の居る地ではシエアエナジーで在りながらその在り方を致命的な迄に変質させた邪悪なエナジーが、ギョウカイ墓場の黒く染まった大地から間欠泉の如く噴き出していた。

『現在、凄まじい質量の邪悪なシエアエナジーが計器から検出されています！これは——まさかっ!?!』

そう言つて通信機越しに慌てるイストワールの発言を皮切りに、暗黒の大地から溢れ出る莫大なシエアエナジーが先程まで四女神達の囚われていた場所に集まり、おぞましいナニかを形成し始めていた。「ちよ、どうなつてんのよこれ?!」

『急いでください！犯罪神が…犯罪神が復活を果たしましたブツツ——!?!』

集束を続けるシエアエナジーがウサギのような頭部を形成し始めると共に、イストワールからの通信は嫌な音を立てて途切れる。

しかし、肝心な部分は確りとネプギア達に伝わっていた。

「皆さん！急いでここから逃げましょう！」

「そうね。ここは一旦退くのが最善よ」

「ふぎけないで！一戦も交えずに逃げる？そんな事が出来る筈ないでしょう!?!行くわよ！グロウ！ユニ！」

「ノワール様、お供致します！」

「えっ?!…うん！分かったわ！お姉ちゃん!!」

「わたくしはハクを探しに行きます！」

「ロム、ラム、お前らは逃げろ！アタシは少しでも時間を稼ぐ！」

「イヤよ！」

「…イヤ（ふるふる）」

「ちよ、こんな時に言い争つてる場合じゃないでしょうが?!」

か ……伝わっていたのだが、果たしてそれは良かったのか悪かったのか

撤退を促すパープルハートとネプギアに対して良くも悪くも私の強い女神達は、あるものは戦おうと従者と妹を率いて1m以上の大きさをしている漆黒の剣を取り、あるものはこの場にはいない妹を探しに

飛び立ち、あるものはこの場に居る妹を逃がす為に身の丈程の大きさの純白の戦斧を構えた。

「————オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………!!!」

「先手必勝！ヴォルケーノダイブ!!」  
そういうしている内に、ウサギのような頭部しか形成されていない  
かった犯罪神(?)は人間の女性のような上半身まで形成を終えてい  
た。

そのウサギのような頭部から響き渡る呪詛のような唸り声を聞いたノワールは、2~3m程跳び上がって犯罪神に目掛けて勢い良く武骨な黒いバスタードソードの刀身が赤くなる程の魔力を纏わせて振り下ろす。

降り下ろした刃が敵に中らずとも大地に叩き付けた段階で纏った魔力が火柱となり、降り下ろす刃と敵を焼く豪炎の二段構えのコンボは必殺技であるエグゼドライブには及ばずとも中位以下の危険種ならば一撃で灰塵と化し、上位の危険種であってもまともに受けられずでは済まない。

「なっ?!」

「オオオオオオオオオオオオ————」

しかし、女神化までしている状態のノワールの攻撃は、犯罪神が形成されている右腕で刀身を掴んだ事であつさりと無力化された。

更に、刀身に纏わせていた陽炎が発生する程の炎の魔力は犯罪神が掴んだ事で強引に握り潰されてしまい、刀身そのものもギチギチと神器でなければ握り潰されかねないと確信する嫌な音を立てていた。

「ウソっ?!魔力まで握りつぶ【オオオオオオオオオ!!!】——あああああああああ?!?!」

「ノワール様ツ?!／お姉ちゃん?!」

あつさりと己が攻撃を受け止められたブラックハートは驚きながら、嫌な音を立てて軋む神器諸共に遙か遠方へとぶん投げられて行った。

ぶん投げられたブラックハートの安否を優先してか、ユニは女神化状態で飛行して後を追いつ、グロウは置き土産として念の為に持っていた。

た予備のシエアクリスタルに内包されているシエアを暴走させ、簡易爆弾として犯罪神へ投げ付けた上で飛んで行ったユニの後を追った。

「ノワール!? クソツツ!!」

それを見たホワイトハート<sup>プ</sup>は、シエアクリスタルの爆発と共にモクモクと立ち上る煙の中へ構えていた純白の戦斧を投げ付け、女神化状態の2人の妹の手を掴んで飛び上がり、一先ずノワールが飛ばされた方向へと全速力で逃走した。

「ちよ、ブラン!？」

「私達も、急いでここから逃げましょう!!」

「そうね! 私はコンパと…えつと、この娘を連れて行くから、ネプギアはアイちゃんをお願い!」

「うん! アイエフさん! こつち!」

それに乗じて、パープルハート<sup>ネプテューヌ</sup>はコンパを背負いRED. を小脇に抱えて、ネプギアはアイエフを背負って飛行し、ブランが去った方へと逃げ出したのだった。

煙幕が晴れた後

「……………」

そこには無傷の——しかし、上半身と右腕だけが形成された犯罪神が、弾き飛ばしたのか、大地へと突き刺さりながら少しずつシエアに分解されているホワイトハート<sup>プ</sup>の戦斧を一瞥すると共に、先程の女神達を追う価値も無いと言わんばかりに瞼を閉じて瞑目した。

「——オオオオオオ」

## 第六十五話

『あ、二人とも目を覚ましたですか？おはようですう』

『……………此処何処さ？』

『あ、いーすん！チュートリアルありがとね！それで今回はどんな用？』

『……………イースン？』

『大体、話は分かったわ。つまり三人はその……………イースンって人に頼まれて、四つの大陸にある鍵の欠片を探してるのね？』

『そう、だな。付け加えるなら、オレは自分探しがメインで、鍵の欠片はオマケだ』

『ミスをして当たり前なのが人間なら、私は迷わず機械に仕事を頼む』

『なあ、なら何故、アンタは人間のままなんだ？』

『魔——ミテスの使いに見付かったら——』

『そうか、ならばこの場でシネ』

『……………チツ』

一歩、また一歩

犯罪神に近づく度に歯抜けが多くとも懐かしい記憶と、それに伴った殺意を思い出していく。

『……………全く、何が聞き覚えのある名称か』

思えば、あの時には既に記憶の一部が歪んで書き変わっていたのだろう。

なにせ、殺したくて壊したくて仕方がなかった【マジエコンヌ】の名前を聞いても、聞き覚え程度にしか思い出せなかったのだ。相当根深く洗脳をされていたとして、さて誰がやったのか

ひよつとしたら、こうして魔剣片手に神風特攻している現状さえも洗脳した輩の思惑の内かもしれないが……

『……………まあ、そんな事はどうでも良い』

何れにしても俺は犯罪神マジエコンヌを殺さなければ気が済まないし、その為の手段だつて用意している。

先程から時折大地が崩れているのを見るに、そして大地が崩れる度

に前回の力を超えて上昇していく犯罪神の力を感じるに、この地は犯罪神復活の為の予備電源兼補強用の建材としての側面を持っていたのだろうか？

「ならば何故、前回の犯罪神復活の際にこの地が崩れて消え去らなかったのか——」

分からない。分からないが、前回こうして犯罪神が復活しなかった事だけは感謝しても良い。

もしも前回、こうして復活されてしまっていたら、ウラヌス達が犯罪神を封印できたか分からないし、何より——

「何よりも、今回こうして俺が犯罪神をコロス機会も無かつたらうからな」

どちらにしろ、犯罪神だけはコロス。何としてでもコロス。是が非でもコロス

例え、結果として犯罪神と同じような事をしてでも………

「「「あ」」」

「…む」

(……ああ、そう言えばこいつ等も居たな)

思い出した先代女神の面影がある今代と次代のプラネテューヌの女神の姿を見た俺は、最悪のパターンを回避する為の最低水準を満たした事に安堵しつつ、何としてもネプテューヌとネプギアをさっさとこんな場所から避難させる事を決めた。

「……ちようど良い。早くこのギョウカイ墓場から逃げろ」

それは、犯罪神マジエコンヌから皆を連れて逃げている途中でした。

「「「あ」」」

「…む」

敵の白いロボット（正直、分解してみたかった）を任せたアナザーさんと遭遇したのは

（き、気まずい……）

いえ、囷にして置いて置いて難ですが、こうして再会するとこれはこれで……って、なに言ってるんだらう私……

っと、そうだった。

きつとアナザーさんはまだ犯罪神が復活した事を知らない筈

ハクさんはボールさんが連れて来てくれる筈ですし、今は——

（と、とりあえず、今は急いで——）

「……ちようど良い。早くこのギョウウカイ墓場から逃げろ」

『えっ』

「聞こえなかったのか？逃げろと言ったんだ」

………あ、ありえせん。

今、別に可笑しくはないけど言った人が可笑し……いえ、アナザーさんが言う筈のない言葉が聞こえて来ました。

あのアナザーさんが『逃げろ』なんて……正直、『邪魔だ』とか『足手纏いは要らん』だとか、仏頂面で有無を言わせずに言うものとはばかり……実際、お姉ちゃんもポカーンって感じの顔になってるし

（しかも、なんだか珍しく表情がにこやか、で………ツ?!」

「ネプテューヌは兎も角……どうした？ネプギア。百面相などしている暇が在るなら、オレは即刻逃げる事を推奨するぞ？」

けれどそんな考えも、アナザーさんの左手で引き摺られている……もつと言えば、アナザーさんの左腕と同化している……禍々しい紫色の刃を見た瞬間に消し飛びました。

（ダメ?!アレだけは、絶対に……!!）

私の……だけじゃ不安かもしれないけど、隣に居たお姉ちゃんも身構えた辺り間違っつてはいないだらう女神としての本能そのものが、あの昏くて禍々しい紫色の剣に対して全力で警報を鳴らし、仲間……と言えるかもしれない間柄である筈のアナザーさんに対して条件反射で武器を構えて臨戦態勢を採ると言う行動を選ばせました。

「ちよっ?!ネプ子もネプギアも、急にどうしたのよ!」

「…おいおい、どうしたんだ?俺を相手に無駄な時間を消費している暇が有るなら、こんな場所からはさっさと避難するべきだろうに……所詮、先代の劣化品か」

けど、流石にいきなり武器を向けたのはやり過ぎでした。

私が背負ったアイエフさんは戸惑ったように声を上げ、お姉ちゃんの方も内容を聞いている余裕はありませんが、コンパさんも戸惑ったような声を上げているのが伝わります。

勿論、私だつて初めて見た……もつと言えば、知らない筈の武器を見ただけでここまで過剰な反応を示した事に戸惑っていますし、お姉ちゃんも表情が困惑してるのに、機械剣の柄を握り締めている両手は緩む所か更に強く握り締めています。

それを見たアナザーさんも表情はにこやかなのに先程までは何処となく温かかった眼差しから一変して、まるで塵でも視るような冷たい眼差しで私とお姉ちゃんを見ています。

「……アナタ、本当にアナザーなのかしら?」

「さあ?少なくとも俺はオレをアナザーだと認識しているしそれ以外の何者でもないつもりだが?」

その極端な落差からか、お姉ちゃんは更に困惑したような表情でアナザーさんに声を掛けますが、アナザーさんははぐらかすような答えを返しました。

「……まあ、オレが俺がどうかなんざどうでも良いだろう?お前らは早くイストワールの元にでも還ると良い」

「ダメよ!無謀な戦いで死に行くような友達を見捨てることは出来ないわ!」

「……ッ……」

そう言つてアナザーさんは、私達<sup>犯罪神に</sup>が来た方に向かつて歩き出しました。

ただ、お姉ちゃんはそんなアナザーさんの自殺行為を認められずに禍々しい紫の刃に同化<sup>侵食されて</sup>していません右手を掴んで引き留めました。

……ええ、引き留めてしまったんです。

「良く考えてみなさい！あなた1人が犯罪神に突撃して何になるの？  
ここはノワールやブラン達に合流して全員で犯罪神と戦った方が「な  
あ、それは本気で言ってるのか？」……なんですって？」

「本気で言っているのかと、そう言ったんだよ。ネプテューヌ」

一瞬だけ悲し気な表情をしたアナザーさんは急に無表情になって  
冷たく言うと共に、禍々しい紫色の刃をお姉ちゃんに突き付けまし  
た。

「ちよ、アナザー！ふぎけんのm「お前には聞いていない！」……っ」  
「……なあ、ネプテューヌ……お前は本当に、他の連中と協力すれば  
犯罪神に勝てると思ってるんだな？」

それを咎めたアイエフさんを一喝して、その周囲に禍々しい紫色の  
刃よりも禍々しい赤黒い球体を出現させたアナザーさんは、  
据わった目をお姉ちゃんに向けて淡々とした口調で問い掛けます。  
ハイライトの消えた

まるで一個選択肢を間違えたら即DEATHすると言わんばかり  
の状況に、私は足がすくんで動けません。

そして、そんな状況にお姉ちゃんは――

「少なくとも、あなたが単独で犯罪神に挑むよりは勝率があるわ！だ  
から、一緒に来なさい！」

――そう啖呵を切つて、未だに目が据わっているアナザーさん  
へと手を伸ばすのでした。

「……すう、はあ………」

据わった目を閉じたアナザーさんは数回程深呼吸をしてから目を  
開くと、纏っていた重々しい雰囲気は霧散して据わっていた瞳は皮肉  
と諦感が滲み出ていました。

「そう、か……ああ、後続お前が言うのなら、良いだろう」

「それじゃあ……」

「……ああ、どの道もう時間切れだ。今はお前の戯れ言に従つてやる  
よ」

そう言つてアナザーさんは、(多分)ベールさんが飛んで行った方に  
向かつて歩き出すのでした。

『……………(え、なにこの状況)』



と言うか、何でアナザーさんはベールさんが飛んで行った方向が分かるんでしょうか……………

女神達が逃げ出した後の事

「————オオオオオ」

犯罪神は左腕を除いた上半身だけが具現化されていた状態で、目蓋を閉じて瞑想を行っていた。

その周りには、赤黒い光——恐らくは犯罪神のシエアエナジーだろう光点が飛び交い、犯罪神の肩や腰の断面へと付着して行く。

光が付着した断面はポコポコと泡立ちながらじわじわと……：それこそ蝸牛の歩みのような速度ではあるが、肉が盛り上がっていった。

どうやら、周囲のシエアエナジーを吸収する事で不完全な肉体を補完しているようだ。

「オオオオオ————」

四天王が全滅したギョウカイ墓場では未だに生命力に溢れる存在が残ってはいるものの、不完全な復活を果たした犯罪神はそれらを無視して——否、大半は気にする必要が無いのだ。

犯罪神がシエアエナジーを吸収する度に、周囲で山のように転がっているゲーム機の残骸や割れたディスクは最初から存在していなかったかのように消滅していく。

それはギョウカイ墓場の黒い大地やこの地に残存しているモンスターさえも例外ではなく、場所によっては既に崩落している部分から白い手のようなナニカが地獄の亡者の如く這い出ようとしては元の場所へと堕ちて逝った。

あらゆるものが消滅していくギョウカイ墓場は、着実に本来の役目を果たしていた。

## 第六十六話

時は少し遡り、アナザーがネプテューヌと言い争っていた最中

「犯罪神マジエコノヌが、復活しました。急いでギョウカイ墓場から避難しますわよ」

「えっ」

ハクを見付けたベールは、口にした言葉だけ聞けば驚いているように聞こえるものの、表情は微笑みで固定されているハクに避難を呼び掛けていた。

「さっ、急ぎますから急いで変身しなさいな」

「……………」

しかし、避難を呼び掛けられたハクの様子が少しだけ可笑しかった。

表情こそ微笑んでいるが無言で両手に異能の光を灯しており、握り締めている右の拳は心なしか周囲の空間が歪んで見えていた。

「……ハク？」

「……………」

そんなハクの様子に気が付いたのか、ベールはハクの顔を覗き込んで様子を伺うが――

「……姉さん、避難の件は丁重にお断りします」

「は？」

――唐突に避難はしないと宣言したハクの言葉を聞いて、間の抜けた声を出して呆けたのだった。

「ど、どう言うつもりですか？」

「どう、と言われましても……言葉通りですが？」

ベールは動揺して吃りながらもハクにその意図を尋ねるがハクは普段通りの表情を一切崩す事なく、まるで近所のコンビニにおつかいでプリンを買いに行く某女神候補生のような軽い雰囲気です。死地に残ると宣った。

「姉さんも分かっていると思いますけど、女神が矛も交えずに敵前逃亡なんてしても良いことはありません。シエアは減るし増長した犯

罪者が暴れ出すで大惨事しかないのですから」

「うぐつ……敵前逃亡………つて、まさか貴女……!?!」

「はい。その反応は少々気になりますけど、時間がないのでスルーしますね。これから復活した犯罪神を征伐しに出掛けなければなりませんし」

……いや、避難しないそれよりも尚悪い事に、死犯罪神にに戦行いを挑むとハクは宣ったのだった。

「ダメですわ！勝てる訳がありません!!」

「ええ、ですから姉さんはどうぞご自由に？私は私で犯罪神を征伐しなければなりません」

逃げる間際に復活した犯罪神の力を感じていたベールはそんな無謀な突撃を止めるものの、ハクはその制止を気にもせずその辺の瓦礫の山から鉄パイプを数本程束ね無理矢理巨岩に突き刺して失った大剣の代わりに大槌を造り上げた。

「ですから、他の方達と共闘をすれば少しは活路も見出せる筈ですわ」  
「……ふむ、及第点、と言った所ですね。後は——」

最早ハンマーを通り越して単なる岩塊と言っても良い手製の大槌を振るい、幾本も束ねるように突き刺した鉄パイプが軋みながらもどうにか耐え切ったのを確認したハクは、そのまま大槌を肩に担いでベールが飛んで来た方を見た。

「——見付けました……けど、こ、れ……は………」

「あの、聞いていますの？ハク？」

『「……………」』

そして、ハイライト瞳から光が消えた状態で俯き沈黙したハクの様子を心配してか、隣に寄り添ったベールが声を掛けるものの、ハクは何の反応も示さない。

『認識情報確認、error、error、error、error、再三のerrorに伴い、認証手段の変更を開始——類似するデータを検出、グリ——ト——に35%の類似パターンを確認』

「ハ、ハク？一体何を言っていますの？」

それ所か、声を掛けたボールを何の感情も籠っていない実験動物を  
視るような無機質な眼差しで謎の発言を繰り返し

『「——ハートへの同調率0.00000000000005%  
未満と判定、認証を完了——器としての適合は認められず、新た  
なる「見付けたぞ」ううつつつわわわわわわわわわわわわをヲをヲを  
』

——ボンツ!!

「えっ」

突然上空から現れたアナザーによって、謎の発言に壊れたCDのよ  
うな震えが発生し、脳が処理落ちした事で気絶した止まったのだった。

「……………丁度良い。どうせこいつは勝てないと確信していても犯罪  
神に挑むだろうし、このまま連れて行くとするか」

「あ、でしたらわたくしが連れて「お前は止めておけ」き…………えっ」  
「全く、何故俺がこんな事をせねばならんのか…………」

それを幸いにと、不満気な顔をしたアナザーはハクを背負ってネプ  
テューヌと言いつ争っていた場所に歩き出すのだが、不満タラタラなア  
ナザーはハクを運ぶのを代わると言ったボールを素っ気なく一蹴し  
て運んで行く。

「あの、不満なら代わって「黙れ雑魚」……………」

そして、ハクを運ぶのを代わると申し出たのに罵倒付きで断られた  
ボールは、若干殺気を滲ませながら苦虫を噛み潰したような表情をし  
てアナザーに着いて行ったのだった。

こうして、犯罪神に対する戦力がプラネテューヌの教会に集まっ  
た。

しかし、プラネテューヌの教会に集った者達は、この選択肢こそが  
地獄への片道切符だった事をまだ知らない。

## 第五章く呪いの剣のファンタジアく 第六十七話

四女神を救出し、ギョウカイ墓場よりイストワールの力で帰還したネプギア達

吹き飛ばされたノワール達とハクを背負ったアナザーとも合流したネプギアは、プラネテューヌの教会で他の教祖達の主導で行われている何かを知っているらしきアナザーへの尋問に立ち会っていた。

「……さて、何から話してやろうか？」

「なら、何故今まで犯罪神についての情報を秘匿していたのかを聞かせて貰おうか？」

「そうか、生憎だがそれについては俺にも解らん。なんせ、犯罪神が復活する直前まで犯罪神<sup>そ</sup>関連の情報が封印されていたみたいでな」

「ならば、その封印を施した輩への心当たりh「ある訳ねえだろう、そんなもん」……そうか」

まずはラステイションの教祖ケイとグロウがアナザーに犯罪神の情報を秘匿していた理由を聞くが、アナザーは封印の理由や原因に関しては不明と答えた。

「だが、何故犯罪神について知っているのかは答えられる」

「へえ、そう……なら、教えて貰おうじゃないの」

それによって疑惑の眼差しが強まるが、補足するように犯罪神について知っていた理由を開示する。

「単純な話しだな。前回の犯罪神討伐に俺が関与していたからだ」

『はっ／えっ?!』

結果はイストワールを含めたほぼ全員から有り得ないものを見たような表情を向けられただけだったが、アナザーは気にした様子は一切見せずに言葉が続ける。

「言っておくが、イストワールが前回の犯罪神復活のデータを見付けるのは不可能に等しい。なんせ、それで先代のパールハートが討たれて100年近くは眠っている筈だからな」

「……はい。私の意識は確かにネプテューヌさんの顔を見た時から持続しています」

「だろうな。それでも過去の記録レコードを漁れば出るかもしれないが、犯罪神が完全復活を遂げるのには間に合わん」

そう言ったアナザーは、やや芝居掛かったオーバーな身振りで壇上に上がった。

「俺が知る限り、犯罪神を降す術はたった2つだけ」

「2つもあるんですか？」

「そうだ。まず1つ目は想いの力を束ねて叩き付ける事……だが、これは前回の犯罪神を封じたと言う結果を出したものの実行した先代女神をも死に追い遣った」

「それは、なんと言うか……」

「封印出来ても死ぬとは、なんとも割に合わない話ですわね」

犯罪神を倒す術が2つあると聞いたコンパが意外そうな声を上げる。

しかし、それを実行すれば死ぬと聞いた他の女神達やアイエフは、微妙そうな表情で壇上のアナザーを見上げた。

「そうだろうな。これは俺としても推奨はせん……2つ目は単純だ」

そんな微妙そうな雰囲気肯定了アナザーは、次の手段を告げる前に数秒程瞼を閉じて間を空ける。

そうして、未だに左手と同化している状態だった禍々しい紫色の刃を頭上に掲げ――

「この魔剣ゲハバーンに、女神の命を与える事――つまり、実質的な守護女神戦争の再開だ」

――とんでもない爆弾仲間割れの推奨発言をしたのだった。

「この魔剣ゲハバーンに、女神の命を与える事――つまり、実質的な守護女神戦争の再開だ」

『……………』

「ふぎけんな!!」

「どのみち死ぬんじゃない!!」

そのあんまりな発言に一瞬だけ空気が凍り付いたかと思えば、次の瞬間には壇上に居るアナザーに向かってブランとノワールの怒号が響き渡る。

こっそり周囲を見ると、ベールやリーンボックスの教祖さんを始め、ブランの妹のロムちゃんラムちゃんにルウイーの教祖さん、ユニちゃんも尋常じゃないぐらいの殺気やら嫌悪感みたいなのを発して、普段はぱつと見残念イケメンなオーラを纏ってるグロウも残念オーラと面の皮が分厚過ぎて微妙に分かり難いけど、微妙に殺気みたいなのが漏れ出てる。

アイちゃんやコンパなんて、失望や怒りが見え隠れしてるぐらいだし

(……………ま、まずいよコレ…アナザー、わたしが居ない間にナニしたの？尋常じゃないくらい嫌われてるんだけど…………)

特別変化が無いのはラストেশヨンの教祖さんとベールの妹のハクちゃん位で、いーすんからは悲しみみたいな色が溢れている。

(え、えーつと、こんな時に最適なボケは…………)

昔から人の気持ちの色として見えてたのに対してこれまで後悔した事は無いけど、周囲からもの凄い量の殺意やら嫌悪やら憎しみやら怒りやらの負の感情が溢れ出してるのを見たわたしは心底後悔した。「なにを言うかと思えば…………少なくとも、俺が知る限りで魔剣以上の術はない。あるのは封印して全滅するか殺して一人か二人生き残るか…………たかがそれだけだろうか?」

ただ、一番危ないのはこの一触即発を通り越して一触爆裂魔法な雰囲気や気を気にすることなく、寧ろこれこそが正しいと言わんばかりに——昔、一度だけリーンボックスで見た事があるベールの狂信者さんみたいな自信とか歓喜みたいな色を纏ってるアナザー自身だった。

「……………成る程、確かに合理的だね」

「……………教祖、貴様もか」

「まさか、ボクは推奨はしないけど手段の一つとしてはありだと言いたいだけさ」

(あ、あばばばばば……?! すっごい不穩だよ?! どうする、どうするわたし! こんな時こそ渾身のポケを……!)

そんなアナザーに賛同とも取られかねない事を言ったラスティシヨンの教祖さんが分厚い面の皮を若干ぶち抜いて殺意を滲ませた残念イケメンのグロウに殺意を向けられている現状に慌てて、わたしが渾身のポケを披露して場を和ませようとした時だった。

「ま、まあまあ、みんな落ち着いて、どんな時も優雅に「一応断っておくが、俺とてプラネテューヌの女神と教祖には決定権を譲ってやるのも……当然、他の術があると言うなら付き合ってやるのも吝かではない」赤い服のあご髭おじさんも言って………えっ」

『……………』

その瞬間、周囲から『使わないよね?』と言う無言の威圧感と共に地味に殺気みたいなのが乗った視線を向けられたわたし達は、予想外の状況に固まった。

「や、やだなー…アナザー? 冗談も程々にね? ほら、みんなも落ち着いて落ち着いて! そんなのつく」…一日だけ、考える時間をください」

な、い……………」

(ね、ネプギア……!!)

まさかのネプギアの使うかもしれない発言にアナザーの時とは違って戸惑いみたいな色が多かったのは幸いだけど、これはヤバイ、ホントのホントにヤバ過ぎだよ……

「好きにすると良い。だが憶えておけ…今や時間は俺にとっても有限で、そう長くはないと」

そう言ったアナザーは早々にどっかに行っちゃうし………これから、本当にどうしょ?

復活した犯罪神に対抗する為の話し合いの結末に、わたしは不穩な雰囲気を感じつつ、これから色々考えるだろうネプギアの方向性をどうにか穏当なものへ誘導する為にギャルゲーの超難関ヒロイン攻略張りに頭を使うのだった。



## 第六十八話

アナザーによる爆弾発言があった日の晩

他の国の女神や教祖達はプラネタワールの客間に泊まり、翌日に出されるネプギアの答えを待っていた。

そんな中、プラネタワールの最上階に在るネプギアの部屋では、部屋の主であるネプギアが姉のネプテューヌと共にベッドに腰掛けて話をしていた。

「お姉ちゃんは、どう思ってるの?」

「どうって?」

「アナザーさんが持つて来たあの剣の事だよ…」

「ん、アレか…」

ネプギアの質問に対して、ベッドの外に足を出して寝転んでいるネプテューヌは口に人差し指を当てて、宙に浮いた足をぷらぷらと揺らし考える。

数秒程考え込んだネプテューヌは考えが纏まったのか、『よいしょっ』と掛け声を挙げて起き上がり、隣に居るネプギアの顔を見ながら答えを返した。

「……そうだね。わたしとしては、折角教えてくれたアナザーには悪いけど、あの剣は出来るだけ使いたくはないかなって思うよ?」

「……そう、だよね……やっぱり、そうだよね」

それを聞いたネプギアは同意ともとれる言葉こそ発しているが、心此処に在らずと言った表情で俯いており、まるで自分に言い聞かせているようだった。

「そう言うネプギアの方はどう思ってるの?」

「……えっ、あ、その……」

何故なら、ネプテューヌの返しに対して言い難そうに吃り出したのだから――

「あわてないあわてない、わたしはネプギアがどんな答えを出しても怒らないし、ネプギアの味方だから…ね?」

――しかし、そんなネプギアを見たネプテューヌは、何時もの

ちやらんぽらんさは何処へやら、ナニかを察した理想を諦めたような表情でネプギアを安心させる為の言葉を掛け、質問の答えを促した。そんなネプテューヌの言葉を聞いてネプギアは深呼吸を数回程行い、投げ掛けられた質問の答えを口に出した。

「……………うん…私は——」

「そっか、じゃあ、わたしもそれで良いと思うよ！」

「うん…さあ、答えも出たことだし、今日はもう寝よっか？」

そして、答えを聞いたネプテューヌは、明日に備える為にベッドに籠って眠りに就いた。

#### 同時刻

「……………あ……………」

プラネテューヌ教会プラネタワーから無断で外出し、バーチャフォレストの最深部のゲームキャラが亜空間に避難する直前までゲームギョウ界に存在していた場所で寝転んでいるアナザーは、左腕を魔剣『ゲハバーン』と同化させた状態で気の抜けた声を挙げながら、ただ呆然と月を見上げていた。

「……………」

見た目だけなら女にも見えるアナザーがそうやって月を見上げている姿は、周囲に人間が居れば思わず見惚れる程に美しく、アナザー自身の危険度を知らなければ光に集まる蛾か何かのように、フラフラと引き寄せられた事だろう——

『Nu、N u r a a a a a (ザクツ) ……a、 a……………』  
「……………」

——周囲にぶちまけられている、大量のモンスターの死骸と蒼血が無ければの話だが

スライヌを初めとした然程強くないモンスターに、フェンリスヴォ

ルフのような下位の危険種も所々混ざっている死骸は数百にも及び、それだけならば英雄級は言うに及ばず、上級の冒険者ならば片手間  
で、ある程度強い中堅処の冒険者でも全滅させる事は可能だろう。

しかし、アナザーはモンスターには一切意識を向けず、起き上がる  
ことも無く、ただ無意識に逃げようとするモンスターも、向かってく  
るモンスターも、ゲハバーンの刀身を魔力と血液で伸ばして斬ってい  
るだけなのだ。

「……………」

その証拠に、時折混ざっている死骸の中には普段は殺す対象からは  
外れているし外してもいる人間のものと思われる死体が混ざってお  
り、背後からザツクリと心臓を一突きされている様子から、祿に意識  
する事無く殺ってしまったのだろう。

大量の血はバーチャフォレストの最深部の広場を満たし、咽せ返る  
ような血臭と死臭が溢れていた。

「……………あ……………」

しかし、それらの死骸は大部分が既に光の粒子へと分解されても可  
笑しくはない筈の時が経過しているにも関わらず、何故か分解が始ま  
らない。

「う……………」

本来、ゲームギョウ界ではモンスターを討伐した場合、女神シヌスの守護  
の恩恵によって時間経過で光の粒子に分解される。

守護の大本である女神本人、もしくは女神とパーティーを組んだ者  
が討伐した場合は即座に分解が実行され、死骸そのものが残留する時  
間は皆無と言える。

「あうあうあ……………」

『Guruuuuuuu!?!?』

しかし、現に討伐されたモンスターは光の粒子へと分解されず、流  
れ出ている蒼い血が池のように溜まってアナザーの背を濡らしてい  
た。

「……………」

そんな光景は月が木々に沈むまで続けられ、月が沈んでやっと周囲

を見回したアナザーが周囲の身に覚えのない死骸の山に不思議そうに首を傾げると言う、ただそれだけの結果を残したのみであった。

………犯罪神が討たれた後、スライヌ退治で迷い込んだ駆け出しの冒険者達が発見して腰を抜かすその日まで

## 第六十九話

アナザーが頭を抑えながらフラフラと帰って来た早朝から数時間後

プラネテューヌ教会を内包しているプラネタワー

その上部にある謁見の間で魔剣ゲハバーンの扱いを決める会議が始まっていた。

『……………』

……とは言っても、重苦しい雰囲気からか謁見の間は静寂に包まれていたが

「……で、決まったのか？」

「うん、決まったよ」

「そうか、ならばさっさと」さき、ネプギア！ちやちやつと言っちゃつて！」……………ああ、お前が決めたのか」

「……はい」

相変わらず、アナザーはそんな重苦しい雰囲気を気にもせず左手と柄が同化しているゲハバーンを右手で指差しながら、ネプテューヌに視線を向けてその扱いを尋ねていた。

しかし、ネプテューヌの発言で決めたのがネプギアだと知ると、途端にやる気が失せたかのような表情を向けて面倒臭そうにネプギアへと視線を向けた。

「……まあ、良い。それで？どうするよ？」

「…私は、その剣は使うべきではないと思っています」

「だろうな。お前に限らず、女神と言う存在は本能的にこの剣を忌避するように出来ている」

そして、魔剣を使わないと口にしたネプギアに対して、ほつと一息を吐いた女神達を中心に重苦しい雰囲気が霧散するのとは対照的にアナザーは完全に興味を失ったとでも言いたげな眼差しを向けながら、投げ遣りな口調で問い掛ける。

「……で？封印して全滅を選ぶと？俺としては封印して全滅しようが魔剣で壊滅しようが大差は無いと思うが？」

……そう、結局の所、問題は何も解結していないのだ。

犯罪神への対処に魔剣を使って1人か2人生き残るか、封印を選んで全員死ぬか

その程度の違いでしかなく、いずれにしても女神の大半が喪われる結果にしかなりえない。

「いいえ、私は封印も選びません」

「なら、どうする?どの道、犯罪神をどうにかしない限りこのゲームギョウ界は終わりだが」

魔剣も封印も選ばないと言ったネプギアにざわつくネプテューヌを除いた全員を気にすることなく、アナザーはどこまでも無関心に問い掛ける。

……まるで、次に出て来る言葉を知っているとやわんばかりに

「……このゲームギョウ界に存在する全てのシエアを、1つの国へ——プラネテューヌに集めます」

『なっ……?!』

そして放たれたネプギアの宣言に驚いたのは、アナザーを始めとする一部の例外を除いたこの場に居るほぼ全員だった。

「待ちなさい!何を言ってるの?!あなたは!」

「えっ…だから、全てのシエアを「そう言う事を言ってるんじゃないわ!!」はうっ?!」

「……言うまでもないが、それをノワール様が呑むとでも思っているのか?」

「やれやれ、若いと言うか青いと言うか……」

まず、ノワールが全てのシエアをプラネテューヌへ集めると言ったネプギアを睨みながら怒鳴り付け、それに追従するようにグロウとケイが冷めた眼差しと呆れた表情を向けながら却下の二文字を叩き付ける。

「わたしも、賛同できません」

「同じく。どうしてもやると言うなら、リーンボックスでやれば良いじゃない」

「うむ。リーンボックスでと言う選択肢には同意しないが、プラネ

テューヌでやる理由がないのは確かだな」

更に、箱崎チカと西沢ミナの両名が同じく却下の意を述べ、それに補足するようにグロウがプラネテューヌでやる必要が無いと口にした。

「そんな……」

「あなたは、考え直す気はないの？ ルウイーのシエアを脅かすなら、敵と見做すしかない」

「……………」

「どうしても言うなら、プラネテューヌとは敵対せざるを得ませんわ」

「……………」

そこへ、ルウイーの女神であるブランとリーンボックスの女神であるベールがネプギアを睨みながら宣戦布告を発し、双子の候補生達は片やネプギアを悲しげに見つめ、片やネプギアを睨みながら武器である杖を構えている。

「私達が争つてる場合じゃないのに……」

「アンタが選んだ選択は、そう言う事よ……ネプギア……」

そうして、ユニの言葉を皮切りに各国の教祖や女神達は、口々にシエアを一国へ集中させると言ったネプギアへと非難の言葉を投げ掛けながら、1人、また1人と教会を立ち去っていった。

「……みんな……………」

一方で、シエアを一国へ集中させると言ったネプギアの言葉に驚かなかった一部の例外達はと言うと——

「実に下らん茶番だった……が、まあいい。シエアを集めれば犯罪神に勝てると言うのなら、精々やれるだけやってみるといい」

「あらあら……………」

「……ネプギア……………」

アナザーはネプギアの選ぶ手段から結果まで、全て予想通りとでも言いた気な表情で国へと帰って行った他の女神や教祖達を嘲笑い、ハクは相変わらずの微笑みでしょんぼりしているネプギアへとジアイの眼差しを向け、最初から知っていたネプテューヌは覚悟を決めたよ

うな表情にうつすらと諦感を滲ませながらネプギアを見ていた。

これにて、破滅への道は拓かれた。

絶望の序曲は覆すべからず。されど破滅の運命は覆すべし

緑の妹神は何も救えず

紅の悪鬼は総てを破滅へ導いた

紫の妹神の決断のみが、破滅の運命を覆す最後の鍵となる。



## 第七十話

プラネテューヌの各ダンジョンで暴れ回り争った俺とハク

「……ふう」

「…ク、クソオ……orz」

結果はいつもの通りとでも言うべきか、あれほどまでにパワーアツプした筈にも関わらず、俺の負けと言う形で幕を引いた。

「…は、放せえ……」

「ダメ、ですよ？運んであげますから大人しくしててくださいいね？」

俺の後頭部を左手一本で掴んだまま空を飛ぶハク。

態々顔が見えるようにした上で話しかけてくる為に見える表情こそにこやかだが、その意図は明白だった。

どう考えても、これ以上暴れたら殺すと言う脅迫だろう。

………まあ、そんな事はどうでも良い。

「クソツタレ……何が、足りないんだよ……orz」

あれほどまでに強大なパワーを手に入れても尚、何故かハクには届かない。

結局の所は、その一点こそが最大の問題であった。

何時ものように支配下に措いた血は殆どが右手から放つ光によって蒸発させられ、あの黒い力さえも問答無用で消し飛ばされた。

際限無く湧き上がった力を振るえば多少の善戦こそ出来たが、それだけだった。

攻撃の全てを凌ぎきられ、黒い力の反動によって起こった肉体能力の低下で真っ向から叩き潰されたのだ。結果は惨敗としか言いようがない。

「あ、そろそろプラネタワーに着きますよ？」

「!？」

(他の女神連中でも一時間は掛かりそうな距離だったにも関わらず、数分で着く……だと………!?)

本格的に可笑しい。

こいつの力の総量自体は間違いなく他の女神連中が犯罪組織に

取っ捕まった時と然程の差はない筈だ。

なのに、このタイムミングで急激なパワーアップだと……?!

あり得ない! 仮にパワーアップしたとしても、数十倍そ数百倍のパワーれアップに相応しいだけの相手は——

「じゃあ、その物騒な剣は没収ですからね?」

——そんな事を考えていた俺だったが、空いている右手を向けて催促するハクによって思考を中断せざるを得なかった。

「ちっ…そら!」

「はい。確かに、預かりましたからね?」

宙吊りでプラネタワーにまで連れて行かれている俺は、大人しくゲハバーンとの同化を解除してハクに渡したのだった。

そのまま地面に降ろされた俺は、ほぼ同時に降り立ったハクと共にプラネタワーへと入って行く。

「では、これからの事を共に考えましょう?」

やはり、相変わらぬのにこやかな表情で俺に話し掛けてくるハク。とてつもなく忌々しいが、力では正面から叩き潰され、ゲハバーンも剥奪された俺には最早どうしようもない。

「ふん……好きにしろ」

「ふふっ」

勝手に俺の隣に居座っている微笑んでいるこの女が、俺にはとても疎ましかったのだった。

アナザーとハクが争っている最中、プラネタワーでの事

「ほら、ネプギア…元気出しなさいよ」

「ギアちゃん、あの2人は最初つからずーつと、あんな感じだったですよ？」

「うう…はい……」

そこでは、アナザーから徹底的に邪険にされてへこんでいるネプギアを残った面々が慰めていた。

「ネプギアさん…落ち込んでいる所悪いのですが、これからの事を話しませんか？」

「ちよ、いーすん？まだネプギア立ち直れてないからね？」

「……お姉ちゃん、私はもう大丈夫だから…こうしてへこんでる時間なんて、ないもんね……」

「ネプギア…うん。ネプギアがそう言うなら……」

一通り慰めが終わった頃を見計らい、イストワールはネプギアへ今後の展開を決めようと持ちかける。

それに『まだ立ち直れていないから』と待ったをかけたネプテューヌだったが、他ならぬネプギアが『時間へこんでいた本人が無いからと』言った為に、一応は納得の色を見せて引き下がった。

「では、これからの事です…ラスティシオン、ルウイー、リーンボックスの順にシエアを集めましょう」

「……はい。まずは近場から、ですよね……」

「うん。わたしもそれで良いと思うよ」

イストワールが最初にシエアを集める場所をラスティシオンにするべきだと伝えると、ネプテューヌとネプギアは思う所があると言いた気な表情こそしているが、概ね賛同の意を示す。

アイエフやコンパ等の面々もこの采配には文句がないらしく、特に抗議の声上がる事はなかった。

「さて、問題は……」

「……アナザーのやつ、ですよね……」

『あー……』

イストワールの言葉を引き継いだアイエフがそう言うのと、その場にあったネプテューヌ以外の全員が遠い目をしながら上を見上げる。

「えっ？なんで？アナザーはあれで意外と良い？人……人？……鬼だ  
よー？」

「ネプテユーンさん……後でこれまでの事は教えてあげますから、  
ちよつと黙っててください」

「(・ω・)」

「でも、アナザーさんだつて犯罪神を倒してゲームギョウ界を守りた  
いって気持ちは同じ筈ですし……」

「コンパ……本当に、そう思ってるの？」

「……………ごめんなさいです」

ネプテユーンとコンパはそれぞれアナザーを擁護したのだが、イス  
トワールとアイエフの反論によって擁護する事を早々に諦めた。

「とりあえず、あの魔剣はこちらへ引き渡していただくとして……」

「問題は、ストツパーッがどうなったかですね……」

そんなイストワールとアイエフの会議は、ハクがアナザーを伴って  
帰ってくるまで続いた。

## 第七十一話

ここは、機能性を重視した建物がしつかりと区画整理されているラステーションの中でも、特にきつちりと区画整理が成されている大通り

全盛期に比べれば疎らながらも漆黒人機軍のモノ達や教会の職員達の見回りでそれなりに治安も良く、まだまだ人通りが多いこの通りには当然、クエストを受ける為のギルドも存在していた。

「……はい。クエスト完了を確認しました」

そんなギルドの建物の中にあるカウンターでは、受けたクエストの完了をを報告しているネプギアの姿があった。

「…他にクエストは有りますか？」

「申し訳ありません、今ので未消化のクエストは最後なんです」

他のクエストを受けようとネプギアがギルドの受付嬢に話し掛けるが、ギルドの受付嬢からはもうクエストが無いと言われてしまった。

「そうですか……じゃあ、私はこれで」

それを聞いたネプギアは、『ありがとうございました』と言うギルドの受付嬢の言葉を背に、ギルドの建物から立ち去って行った。

やって来ましたラスステーション！ 主人公オブ主人公なわたしの視点！ 広い道をネプギアやアイちゃん達と一緒に歩くわたしは、プラネテューヌの女神ネプテューヌ！

つい最近まで犯罪組織マジエコンヌに捕らわれてたんだけど、解放されるや否や、何故か早々に復活しちゃった犯罪神マジエコンヌを倒す為、ざつと300年位前に仲良くなったアナザーや、アナザーの友達？ 保護者？ ……まあ、どっちでもいいけど、リーンボックスの女神ベールの妹のハクちゃんも一緒にシエア集めをがんばってたん

だよー！

『……………』

……集めてただけどね？

(えっ？ 何この重たい空気……主人公オブ主人公なわたしの視点なんだから、もうちよつと明るい感じじゃないの？)

いやまあ、確かにわたしも、犯罪神に勝つ為に他所の国からシエアを奪って強くなるってのは思う所もあるんだけどね？

それでも、わたしはネプギアを支えるって決めちゃった訳で……

(だから、もうちよつとネプギアの心に気を使ってくれないかなーって……ダメですか、そーですか)

……………ふう

ま、しょうがないよね。わたしだって、停戦協定を結んだ数週間と3年ちよいの人質もとい女神質生活を共にしたノワールやブラン達の敵になるのは思う所があるんだし

いーすんからネプギアの冒険を聞いた限りだとノワールの妹のユニちゃんを中心に仲が良いお友達作ってたみたいだし、仲良くなりたかっただけのわたしよりも思い入れは強いよね。是非もナイネ！

そう、思ってた途中だった――

「これ以上、私の国で勝手な真似はさせないわ！」

「……………ああ、やつと来たのか？」

――ノワールが、ユニちゃんと一緒に目の前に立ち塞がったのは

……………

ノワールとユニが、ネプギア達の前に立ち塞がる数十分前の事だった。

ラストイションの教会の中枢に在る女神ブラックハートの執務室では、部屋の主であるノワール、妹のユニ、教祖のケイの三人が、顔を合わせて話し合いをしていた。

「……………やれやれ…随分と、人の国で好き勝手してくれてるようだね。

まさかシエアの半分を持って行かれるとは……」

「…そう」

渋い顔をしながら、教祖である神宮寺 ケイはノワールに現状を報告する。

その報告を受けたノワールは、チラリと複雑そうな表情をしているユニを見て一瞬、心配そうな表情をしたものの、即座にラステイションの女神としての顔になって次の行動に移った。

「グロウ！」

「……ああ、彼に用があるのかい？ 確かに、この状況を監督させるにはちようどいい人材だが……」

「あ、じゃあアタシがグロウを呼んで「その必要はないわ」く、る……えっ」

ノワールが唐突にグロウの名を呼ぶと、ケイはこの状況を報告させるのにちようどいいと述べ、ユニは別の場所で書類整理を行っているグロウを呼びに行こうと扉の方へと向かう。

しかし、ノワールは扉の方へと向かうユニを止めた。

「はっ!!」

『えっ……!?!』

それと同時に、急に『すっ』と音も立てずに床が持ち上げられ、グロウが現れた。

そこから素早く出て、外した床も音を立てず元に戻したグロウは、一昔前の王様に仕える騎士のように片膝を着いて頭を垂れた。

それを見たユニとケイは、それぞれ内包した意味合いは違いながらも驚き、ドン引きしたような表情をグロウへと向けた。

「グロウ、あなたに聞きたい事があるの……答えてくれる?」

「はいーなんなりと」

しかし、そんな教祖ケイとユニと妹の事は気にも留めず、ノワールはグロウへと問い掛ける。

またグロウも、己ノワールの主人への過剰なまでの忠誠心被支配欲故か、あくまでも同輩でしかないケイも、あくまでも己の主人の妹でしかないユニの事も（流石にユニに関しては多少は意識を割いていたようだ）気にせ

ず、面を上げて何処までも狂信に曇った眼差しをノワールへと向けながら、ノワールが掛ける問いを待っている。

「……そう、なら聞くわ」

そんなグロウを見たノワールは一瞬だけ不安そうな表情をしたものの、グロウへの信頼故か、それとも表情には出ていなかっただけで先程のグロウの現れ方にドン引きでもしていたに過ぎなかったのか、直ぐに普段通りの勝ち気な表情に戻り、誰にも気が付かれる事はなかった。

「……ねえ、あなたは、その短い人間の一生を縛られて生きるのと、自由に生きるの、どっちが好き？」

「縛られる方です！ いえ、寧ろ縛ってください！」

『……………』

……即答だった。

ノワールも、一応どんな答えが返ってくるかは予想出来ていたようだが、あまりの興奮具合と即答振りに絶句しているケイとユニ共々、ドン引きしたと言わんばかりの表情でグロウを見るが、ノワールからしか見えないそんな眼差しさえ気持ちいいと言わんばかりのグロウの表情に更にドン引きし、若干表情が引き吊っていた。

「……………ええ、良いわ。なら、縛ってあげる」

しかし、ノワールもノワールで色々と思う所でもあったのか、軽く頭を振って表情をドン引きしたような状態から真面目なものに戻すと、最期の最後まで束縛を望むグロウへと、最後になるかもしれない命令を与えた。

「これから、私はネプテューヌと決着を付けに行くわ」

懐古の念を滲ませながら、ノワールはネプテューヌへの想いを露にする。

「ただ、仮にネプテューヌに勝っても犯罪神には敵わない……犯罪神に直接神器を叩き付けた私は、そう確信しているわ」

それと同時に、犯罪神には敵わないと言う本音を述べる。

「だから……これはもしも私がネプテューヌに負けたらの事だと思っ  
てちょうだい」



『もしも』の部分強調しつつ、ノワールグロウへと、最後になるかもしれない命令を与える。

「もしも、私がネプテューヌに負けたら、あなたは——」

「はい。ノワール様……私は、何があろうともその命を遂行して見せます」

その命令を受けたグロウは、珍しくノワールに対するドM精神全開の状態を押し込めて、極めて真面目な表情でそれを遂行すると誓った。

「ふふっ…それを聞いて安心したわ」

その返事を聞いたノワールは、安心したような表情で微笑みながら扉へと歩き出す。

「それじゃあ、まずはネプテューヌを征伐しに出掛けるわ！後に続きなさい！ユニー！」

「……………はっ!?あ、うん！分かったわ！お姉ちゃん！」

そんな姉妹の様子をまるで目蓋に焼き付けるように、グロウは見ていた。

しかし、誰一人として気が付かない。

その選択では、何も守れず、何も得られないと言う事を

悲愴の果てにあるのは、ただただ破滅、それだけだ。

このゲーム<sup>世</sup>ギョウ<sup>界</sup>は、救われない。

## 第七十二話

俺が、ハクに負けた結果、とてつもなく不愉快ながらもハクと（ついでにネプギア達と）共にプラネテューヌのシエアを集めようと諸国を巡り、手始めにラストイションからシエアを奪っていた最中だった。

「これ以上、私の国で勝手な真似はさせないわ！」

この国の女神、ブラックハートとその妹のユニが現れたのは――

「……ああ、やっと来たのか？」

――だが、俺がそれを気にする事はなかった。

少なくとも、シエアカの大半を失った女神などは俺の敵ではないし、そもそも今のこいつが全盛期だったとしても、一対一なら俺が負ける筈がない。

俺が負けるとすれば、四女神が協力して襲って来た時か、隣に居座るこいつハクと争った時くらいだ。

「だが、今更、俺一人にさえ勝てない力しか持たないお前達が来て何ができる？」

「ちよつ、アナザーさん!？」

近くのネプギアが慌てているが、知った事ではない。

今は一刻も早く、犯罪神を倒す力を得なければならぬ。この程度の雑魚共に時間を取られる訳にはいかないのだ。

「言ってくれるじゃない……けど、だからってこの国のシエアを易々とくれてやる訳にはいかないのよ！」

そう言いながら、『キツ』と俺を睨み付けるブラックハート

周囲を見れば、それなりにあった筈の人影は既になく、どうやら人払いは向こうが済ませたようだった。

これはまあ、なんと言うか……

「くくつ……随分とまあ、気合いが入ってる事で」

そう思ったのだが、どうにもブラックハートは違った思惑で人払いを成したようで――

「あんたに用はない！」

——そう、一括すると共に、俺ではなく、俺の後ろにいるネプテューヌへと剣の切っ先を向けた。

「ネプテューヌ！ 私と一対一で戦いなさい！」

「ええっ!？」

「……………ふん。なんだ、そっちか」

切っ先を向けられたネプテューヌは驚き戸惑っているが、そんな事は俺の知った事ではない。

「……………ならば、勝手にするといいい」

……………つもらん。

一方で、ノワールと対峙しているアナザーとネプテューヌから少し離れた場所では、ネプギアがアイエフやコンパ達と共に、ノワールと共に現れたユニと対峙していた。

「ユニちゃん……………」

「ネプギア、武器を構えなさい！」

憂いに満ちた表情のネプギアに対して、野郎ぶっ殺してやると言わんばかりの殺る気に満ちたユニは、女神化前ではあるものの、己が武器である武骨な銃口を突き付けて武器を取れと命じる。

「……………はあ、やるしかなさそうね」

「……………ユニちゃんと戦うことになるなんて思いもしなかったです…」

それに対して、仕方がないと言わんばかりの表情でアイエフは刀身と持ち手が合体したような武器を構え、心底残念そうな表情をしているコンパは謎の液体が入っている巨大な注射器そのものである武器を構えた。

「でも…私はっ?!？」

しかし、ネプギアは女神化する所か、白い筒上の機械であり、内蔵されたエネルギーを消費する事でレーザー状の刀身を形成するビームソードの刀身部分を展開する事すら迷い、躊躇していた。

「ここで諦めるんだったら、良いわ！ アタシが犯罪神を倒してあげ

る！ あんたの国のシエアも全部奪ってね！」

だが、そんなネプギアに迷うならば死ぬと言わんばかりに、ユニは構えた銃口から『ダアンツ！』と弾を撃ち、ネプギアの頬にカスらせた。

「それは、ダメ……私がやるって決めたんだから！」

「…う、じゃあ、さっさと構えなさい！」

そんなユニの主張に強く反発したネプギアに対して、ユニは一瞬安心したような表情をするが、次の瞬間にはラストイシヨンのシエアを奪う敵への敵意に満ちた表情をした為に、運悪く誰にも気が付かれる事は無かった。

もしも、この時に気が付く事が出来れば、最悪の結末は回避されたにも関わらず

「……うん。行くよ……ユニちゃん」

そして、戦いの火蓋は落とされた。

「ネプギア、加勢するわよ！」

「ですう」

是なるは、皮肉にもゲームギョウ界そのものを脅かせし犯罪組織によって中断された守護女神戦争の再現である。

「アイエフさん、コンパさん……手を、出さないでください」

「ニンゲンは大人しく引つ込んでなさい！」

故に――

「で、ですけど……」

「黙って見てるだけって訳にもいかないのよ!!」

これは――

「ニンゲン如きが、アタシ達の争いに首突っ込んでんじゃないわよ!!!!」

「アイエフさん、危ない!!」

「きやつ?!」

――最早、人間如きには止められない、神々の落陽が始まるのみだ。

## 第七十三話

女神ブラックハートが人払いを済ませたラスティシヨンの大通り

そこでは、片やラスティシヨンの女神ブラックハートとプラネテューヌの女神パープルハートの二柱が、片や少し離れた位置では、その妹であるパープルシスターとブラックシスターの二柱が、それぞれ戦っていた。

「ハハッ！ あなたと白黒付けられるなら、こうして殺し合うのも悪くないわね！ ネプテューヌ!!」

女神化した事で一見すると特殊な水着の類いにしか見えないプロセツサユニツトを身に纏い、女神としての力を完全に振るえるようになったブラックハートとパープルハート

「そう……私は残念だわ……ノワール」

ブラックハートがその手に持った神器であり、自身の身の丈程もある巨大な機械剣を自慢の速度で振るうのに合わせ、パープルハートは同じく神器であり、身の丈程もある巨大な機械剣を振るい防御する。

「アツハハハハハハハ!!」

「……………」

両者共に宙を舞い、前後左右上下の全方向からとてつもない速さで斬撃を入れようと攻勢に出るブラックハートと、専守防衛と言わんばかりに守勢に回るパープルハート

上位の冒険者程度では微塵に成り果てる程の斬撃の嵐を巻き起こしているブラックハートも、それを捌き切っているにも関わらず息一つ乱していないパープルハートも、現状ではまだどちらも余裕があった。

「行くわよ！ 行くわよ行くわよ行くわよ!!」

そんな中、ブラックハートの攻勢は加速的に勢いを増していき、守勢に回るパープルハートも徐々に捌ききれなくなって傷を負う。

その斬撃の嵐は、仮に英雄と呼ばれるだけの力の持ち主であるグロウが4人居たとしても、何等かの特殊な装備でも無ければ成す術なく鱈斬りにされていた事だろう。

幸いにも、速さに主眼を置いた斬撃の数々は、速さを優先したが故にパープルハートへ致命傷を刻む程の威力は無かった（但し女神基準）が、何度も攻撃を受けては命に関わる事に変わりはない。

「つう!? ……ヤア!!」

「おっと、危ない危ない」

時折、速いだけの斬撃に混じって飛んでくる威力を重視した攻撃を刀身の腹で受けたパープルハートは、その一瞬で力を込めて無理矢理に弾き飛ばした事で、ブラックハートから距離を取って体勢を立て直すのだった。

「つう!? ……ヤア!!」

「おっと、危ない危ない」

そんなやり取りと共に、少しだけ距離を取った両女神

それを見た俺が思った事は、『期待外れも良い所』だった。

（やはり、魔剣を使わなければ犯罪神には勝てそうにもない……）

そもそも、溜め込んだシエアだけ見ても現状の犯罪神に分があるのに、今更シエアを一国に集中させた程度で勝てる筈もないのだ。

仮に今直ぐ犯罪神からもシエアの供給元である信者を全て奪ったとしても、既に送られているシエアまでは奪えない。

ましてや、三年もの間、ゲームギョウ界の半分よりも少ないシエアを更に4つに分割した挙げ句に、捕まっている間も女神化していた所為で溜まる以上のシエアエナジーを消耗し続けていた四女神と、三年間ずっと、集まるゲームギョウ界の半分を超えるシエアを貯め続けていた犯罪神

どちらのシエアが多いかなど、考えるまでもないだろう。

（分かっただけだが、案の定でも言うべきか?）

更に、トドメを刺すかのように長い幽閉生活で素の力<sup>レベル</sup>まで下がっているのだ。どれだけシエアを集めても無駄と言わざるを得なかった。

(だが……)

だからと言っても、残念ながら魔剣は既にネプギアに渡された後だ。

幸いにも、ネプギアから魔剣を奪い取るのは難しくない。寧ろ、簡単な部類だ。

紛いなりにもプラネテューヌに行動の指針を任せた以上、出来る限りそれを破りたくはないが、犯罪神に勝てない方法に固執するつもりもない。

……まあ、どのみち現状では――

(……せめて、こいつさえ居なければ……)

「……?」

――目の前でプラネテューヌの女神とラストイションの女神が戦っているのに、何故か態々俺の隣に居座っているこいつが居る以上、俺がゲハバーンを使うのは不可能に等しいだろう。

そんな事を考えながら、犯罪神を討伐できる可能性が最も高い第一候補を見ていたのだが、種族柄他者からの視線には鋭いのだろう。

「どうかしましたか?」

ハクがこの状況でも変わらず、能面のように張り付いている微笑みを向けてきたのだ。

「……いや、何でもない」

俺は、そう答える他になかった。

「そうですか?何かあるなら、早めに声をかけてくださいね?」

(ある訳ないだろう……仮にあっても、何故お前に声を掛けねばならんのだ)

……まあ、良いだろう。

残念ながら、期待外れだった第二候補ネプテューヌの戦いは十分に視た。

あまり期待は出来ないが、少し離れた場所で戦っている第三候補ネプギアの様子を視るとしよう

(……せめて、第三候補のネプギアが俺の予想を上回る力を見せてくれれば良いのだがな……)

——そして、俺はネプギアの気配がする場所へと向かうのだった。

一方で、アナザーが、パープルシスターの元へ向かう少し前、ネプテューヌとノワールの戦いを観ている最中の事

「ニンゲン如きが、アタシ達の争いに首突っ込んでんじやないわよ!!!」

一瞬で女神化したブラックスターは、先程まで持っていた武骨な銃よりも機械的で、明らかに通常の銃とは違う平べったい銃——エクスマルチブラスターを一瞬でアイエフの方へ向けると、『バシウン!』と言う音を響かせてシエアをエネルギーに変換した光弾を放つ。

「アイエフさん、危ない!!」

「ぎゃっ?!」

幸いにも、ブラックスターがアイエフの足元へ向けて光弾を放つた事、あくまでも牽制目的であった事、アイエフ自身英雄には届かずとも上位の冒険者と呼べる程度にはレベルを上げていた事などの要因が重なって、放たれた光弾がアイエフに直撃する事はなかった。

「あ、危なかった…」

「アイちゃん!? 大丈夫ですか?!」

しかし、それによってアイエフはネプギアとユニから引き離されてしまい、怪我の有無を確かめる為か、コンパまで離れてしまっていた。

「ふん! やつと邪魔者が居なくなったわね!」

「……ユニちゃん」

邪魔者が居なくなっって清々したと言わんばかりのユニと、それを悲しそうに見つめるネプギア

両者の姿は非常に対照的で、近くで今も争っている姉の女神達を彷彿



佛とさせられる光景であった。

「さあ、ネプギア！ 武器を構えなさい！」

「……本当に、やるんだね……」

——そうして、開戦の時は訪れた。

「……行きますー！」

ネプギアの全身が一瞬光に覆われ、女神化を完了させたのを皮切りに、ブラックシスターとパープルシスターの激突が始まったのだった。

ブラックシスター様とネプギア殿が争い始めて数分程

街への被害を恐れてか、舞台を上空へと移した二柱は、私でも眼で追うのがやつとの凄まじい速さで目まぐるしく戦っていた。

「ヤアアアアア!!」

「ハアアアアア!!」

ネプギア殿が手に持ったピンクのレーザーを刃とする白い機械式の銃剣で接近戦に持ち込もうと近寄るネプギア殿と、そうはさせまいと青白いレーザーを放ちながら距離を取り続けるブラックシスター様

両者共に、人間の領域を超えた力を振るい、眼前の敵を『討ち滅ぼそう／無力化しよう』としており、私やあの辺りの地上で上を見上げるだけしか出来ていないアイエフ殿程度では、余程の巧い横槍の入れ方をしなければ邪魔にしかないだろう。

(……無論、死ぬ気で突撃すれば命と引き換えにネプギア殿の腕からは奪えるかもしれないが)

しかし、ここから少し離れた場所で戦っておられるノワール様の方は風切り音こそ聞こえるものの、私には最初から動いていない敵のパープルハート殿しか見えないのだ。

(あちらでは仮に命を掛けて突撃しても、腕処かノワール様に斬られ

るのが関の山であろうな……うん？　待てよ……それはそれで……はっ?!　いかんいかん)

これ以上ノワール様に微塵に斬られる妄想に耽るのは危険だと思っただ私は、ギリギリ眼で追えるブラツクシスター様の戦いへと意識を集中させようとしたのだが――

(……むっ？　あれは――)

ノワール様の闘っている場所の近くにいた筈のアナザーと、何故かリンボックスに帰る事なくプラネテューヌと行動を共にしているハク殿を見つけた私は、なんとなく嫌な予感を感じた。

「……様子を、見ねばならんな」

そして、私はアナザーの元へと向かった。

## 第七十四話

ラストイションで女神と女神候補生が争っている最中の事

「……………」

ネプテューヌの弱さに落胆した俺は、元居た場所から離れたネプテューヌの近くからネプギアとユニが争っている地点に向かっていた。

……だが、途中からは本来の目的も忘れ、只々ハクを振り切ろうとする為だけに、ラストイションの大通りも外れ、たまに襲ってくるチンピラを惨殺……はせずに半殺しにしながら全力であちらこちらへと動き回った。

だが、それでもハクを振り切れず、無駄に時間と体力を浪費しただけであった。

「……………（何故だ）」

「……………？」

隣で小首を傾げながら、にこやかに微笑んでいるこの女が煩わしい。

疎ましくて煩わしくて、どうにかなってしまいそうだ。

と言うか、そもそも何故、この女は自分の国に帰らない？

なにか理由があるのか？それとも——

「そこまでだ！」

「……………あ？」

——しかし、そこまで考えている時間は俺には無いらしい。

目の前に立ち塞がった珍しく真剣な顔をしているラストイションの英雄を見た俺は、この国のシエアを奪い尽くしてから、ハクがこれ程までにしつこく俺に付き纏う理由を考えると決めたのだった。

……………そんな時間など、存在しないとも知らずに

「そこまでだー！」

「……あ？？」

アナザーの眼前に立ったその時、私は確信した。

『この男は危険だ』と

別段、姿形が変わった訳ではない。不機嫌そうな顔さえにこやかならば腰まで伸びた紅い髪も相俟って、女と見間違う程の端麗な容姿も含め、普段通りと言っても良いだろう。

だが、私の本能は、今この場でこの男を討たねば近い未来に災厄を巻き起こすと、そう警鐘を鳴らしているのだ。

何故、今まで気が付かなかったのか、私には不思議でならないが……いずれにせよ、今この男を見逃しては私がノワール様より承った最終命令ラストオーダーさえも果たせなくなるのだと、私はそう確信したのだ。

「つたく、何なんですかっの……邪魔をするなら、お前から「ダメですよ？」………チツ」

私の制止を受けたアナザーは、私を睨みながら、退かないなら死ねと言わんばかりに武骨な四角い両手剣の切っ先を向ける。

しかし、アナザーの隣に立つハク殿がアナザーの左肩を掴み、制止を掛けた事によって、その両手剣の切っ先は降ろされた。

「それで、私達に何か御用でしょうか？」

そのままアナザーを押し退けて前に出たハク殿は、こんな情勢であるにも拘らず何時もと変わらない、ノワール様が居なければ私でさえ屈服しかねない程の強烈な神性と、誰からも好かれるだろう柔らかな微笑みを湛えながら、用件を訪ねてくる。

「……なに、大した事ではないとも」

そのままでは自分の姉の国が無くなり、一步間違えばゲームギョウ界さえも滅ぼされかねない現状にも拘わらず、その不変っぷりには流石の私も恐怖を禁じ得ないが、その気持ちの一切を奥底に押し込めた上で、何時もの癖で挿していた刀を鞘から抜き、アナザーに対して向

けた。

「ただ、貴様アナザーには今日この時を以て、このゲームギョウ界から退場願いたいだけだ」

「えっ」

「……ハア？」

余程、私の宣言が予想外だったのか、心底訳が分からないとでも言いたげなきよとんとした表情を浮かべたハク殿を改めて押し退けて、アナザーは瘴気や邪気の域にまで墮昇華ち果されたた、僅かに紅を残した闇のような漆黒の鬨気を撒き散らす。

「……くくっ……おいおい、何を寝言を言っている？」

そうして、小馬鹿にするような目で私を見ながら、アナザーは隣に立つハク殿に声をかけた。

「おい！ これは俺とアレの争いだ！ 手を出すんじゃないぞ!!」

「まだ話し合えば「知らん」なんとか……っつて、ちよつと!？」

引き留めるハク殿の手を掻い潜り、目では追えない速さ——ともすれば、少し離れた場所で今もなお戦っておられるノワール様に匹敵ないし凌駕する程の速さで私の懐にまで潜り込み、振るわれた拳を刀で防げたのは偶然以外の何物でもなかったのだろう。

「言うだけあって、流石にこの程度じゃ死なないか……」

「……なん……だと……」

しかし、その拳を防いだ刀は黒いナニかに蝕まれるかのように飲み込まれ、危険を感じて咄嗟に手放した際にぶつかった壁や道の一部を巻き込みながら、砂のように崩れ去る。

（ノワール様やユニ様の持つ武器ほどの業物ではなくとも、相当な名刀だぞ……?!）」

極一部の例外を除いた女神様が生まれながらに保有する、神体に最も適した武装である神器

科学者の中には、原初の女神なる存在が生まれた女神娘に対して贈る唯一の護身武具と言う説もあるが、実際にどうかは解らない。

だが、実際にそんな説が出るだけの性能ではあるのだ。

この世界のありとあらゆる物質よりも頑強で、例え杖でも伝説に名

を列ねた名工が生み出した鉄槌でさえ破壊出来ず

この世界のありとあらゆる物質とも違う……強いて言うならば、シエアクリスタルに類似した物質で形成されており

当代一と謡われた人間の鍛冶屋が心血を注ぎ誂え捧げた、神器と寸分違わぬ形状の武具でさえ、神器には至れない

そんな神器や神器に限りなく近付けた神器擬きには及ばすとも、先程アナザーに破壊された名刀は店売りで8万はする代物なのだ。刀の耐久値が高くないとは言え、易々と破壊できるような代物では断じてない。

だが、異常な壊れかたとはいえ、手元の一番良い武器が破壊された事に代わりはない。

「アツハハハハ!! 随分と脆いナマクラだよなアオい!!」

「くっ…の、ばけもの、、がア!!」

右、左、上、下、下

わざと私が反応出来るギリギリ速さで振るわれた拳や脚をギリギリで回避し続け、私は思索する。

何故、奴の攻撃は名刀を一撃で破壊——それも、分子崩壊を起こすような異常な破壊が出来たのか

そもそも、何の意味があって奴は私に手加減を加えるのか

そんな事を考えながら、私は全力を出してアナザーの攻撃を回避し続ける。

「そろそろ、ゴミ箱はアッチだぞつと!!」

「ぐ、…!?!」

叩き込まれた蹴りを紙一重で避けたにも拘わらず、飛び散ってきた極少量の黒い障気が当たった箇所には激痛が走り、徐々に腐食していく。かすただけでこの威力ならば、直に触れれば即死だろう。

全ての攻撃を完璧に回避せざるを得ない状況に体力は大きく削り取られ、呼吸して得られる以上の酸素の消費によって意識がボヤける。

「アナザーさん！ ダメですって急に早い?!」

「ダメエは邪魔だ!!」



と強烈な悪意狂気が入り込んできたのだった。



## 第七十五話

「……行きますー！」

そう言つて女神化したネプギアは、赤紫のラインが入った黒い水着のようなプロセツサユニットと対を成すような、身の丈の半分程のサイズをした刃のない白い機械剣型の神器を顕現させ、刃がある筈の位置に紫色の光を展開し、光の刃と成して構えた。

「さあ、来なさいー！」

そう言いながら、リーンボックスの女神であるグリーンハート並みに露出度の激しいプロセツサユニットを纏つたユニは、ネプギアへと向けていたその身体と殆ど同じ大きさをした銃の神器から、ラスティシヨンのシエアクリスタルより引き出したシエアの光弾を放ちながら上空へと飛翔し、ネプギアから距離を取つた。

しかし、ネプギアはその光弾を躲すと、上空に飛んだユニを追つて空を翔ける。

「クツ」

「……」

そして、上からの確にネプギアを狙つて放たれる光弾を躲し、時には斬り捨てながら、ユニの元へと近寄つて行く。

この結果は、ネプギアにとっては幸いな事に、ユニにとっては不幸な事に、そして、どちらにとつても皮肉な事に、嘗てラスティシヨンでアナザーから受けた水弾の弾幕の回避と迎撃の成果が如実に表れていた。

「く、この！ 当たれ!!」

「……………」

ユニが放つ光弾は、着弾した建物や道を貫通し穴だらけにする程に強力なものだった。

しかし、銃口からしか放てないと言う武具の仕様上、アナザーにの放つ水弾の弾幕に比べて圧倒的に密度が足りていない。

「……………」

そんなユニを悲し気な眼差しで見つめながら、ネプギアは空を翔

る。

勿論、ユニも上空へと昇っていくが、ネプギアを狙って撃つ関係上どうしても後ろ向きに翔ばねばならず、本来の意味での全速力を出せない。

「……」

「っ!？」

故に、そんな状況での鬼ごっこが長く続く筈もなく、高度が数百mを超えた辺りでネプギアに近付かれたユニは、ネプギアの神器であるM・P・B・Lの届く距離まで接近を許してしまっていた。

右、下、上、斜め左

M・P・B・Lの紫色の光刃は、比較的初心者でも当て易い胴体へ目掛けて淡々と振るわれる。

「……………」

「い、のお!？」

そんな機械的な動作を回避しながら時折蹴りを繰り出し躲されるユニは、拭い難い疲労を蓄させていた。

ユニの神器は大型の銃であり、暗殺用の小銃ならばまだしも、大型の銃は接近戦で使うものではない。

遠距離から攻撃する為の武器故に近寄られると取り回しが悪くなる神器を持つユニと、遠近両用の銃剣故に近距離では剣に、遠距離では銃に劣るものの、どの距離でも扱える神器を持つネプギア

徐々に高度を下げながら戦う両者の勝敗を別けたのは、そんな武器の差だった。

「きゃあ!？」

当たれば致命傷を負う精神的な疲労から回避をし損ねたユニは上段からの唐竹割りを叩き込んだネプギアの攻撃を避け切れず、背面にある翼を模したプロセスサユニットの左側を斬り落とされてしまった。

結果、滞空機能を維持することも儘ならなくなり、数十m程の高さから地上へと墜落した。

「く……」

「……………」

幸いにも、紫の女神のお約束程の高度なかつた為に足から墜落したユニが死ぬ事は無かったのだが、それでも足首を捻挫したらしく、立ち上がるのにも普段の倍近い時間を掛けていた。

そんなユニへと悲しげな眼差しを向けながら、ネプギアも徐々に地上へと降りて行く。

「まだよー… まだアタシは負けてない!!」

徐々に高度を下げて行くネプギアへと己が神器であるX・M・Bの銃口を向けるユニだが、強気な口調とは裏腹に、ゆつくりと降りているネプギアを狙う銃口は安定せず、小刻みに震えていた。

「…………もう、無理だよ…ユニちゃん」

「うるさい!!」

しかし、地上へと降り立つたネプギアの悲し気な——諦めの滲んだ表情を見たユニは両腕の震えを強引に押さえ付けて、青白いレーザーを何発も放った。

「っ?!——」

その攻撃は、ネプギアの背後で何か出来る事は無いか探るように状況を見ていたアイエフと、何も出来ずに呆然としていたコンパを巻き込み、煙を巻き上げながら何発も何発も叩き込まれていった。

そうして、シエアエナジーが切れたのか、ユニが女神化を維持する事も出来なくなった事で攻撃は止まったのだった。

「ハア、ハア、…………!?!」

手持ちの殆どのシエアエナジーを攻撃に使用した事で、プロセッサユニットを纏っていた姿は普段の黒いワンピースの姿へと変わり、白銀のツインロールは黒のツインテールに戻ったユニ

流石に消耗が激しかったのか最初は肩で息をしていたのだが、自身の攻撃で巻き上げた砂煙が晴れた瞬間、驚きのあまりに目を見開いてネプギアを見た。

「…………もう、勝負は付いたみたいだね…………」

そう言いながら武器を降ろしたネプギアは舞った土埃と小さな傷は付いているものの、致命的な傷は負わず、ネプギアの後ろに居たア

イエフ達は無傷である。

更に致命的なのは、ネプギアの女神化が維持されている事である。それはユニと違ってネプギアがまだ戦える事を示しており、その力に多少の損耗はあれど健在であると言えた。

実際、女神にとって女神化の有無は、戦闘能力に桁外れの差を生み出す。

その差は、女神化前の姿を基本とするなら女神候補生で3倍、女神で5倍にも及ぶ。

それ故に、女神は人間を超える力を持つと言われていて、強大な力を持つ上位危険種や吸血鬼の真祖への抑止として機能しているのだ。

「くっ……………ハア」

悔しそうな表情でネプギアを見銃口を持ち上げたユニだったが、溜め息を吐きながら諦めの混じる笑みを浮かべると、ネプギアに照準を合わせた銃口を下ろしたのだった。

「くっ……………ハア」

女神化が解けたユニちゃんは悔しそうな顔をした後、色々と悟ったような落ち着いた表情で愛用のライフルの銃口をそっと下ろした。

これで、きつとユニちゃんも私がこの国のシエアを持っていく事に賛同してくれる……………はず

「あくあ、負けよ負け」

そう言いながら、先程まで殺気立っていた雰囲気や纏っていたユニちゃんは、肩を竦めながら『ヤレヤレ』って感じの雰囲気を纏う。

「それじゃあ……………」

「ええ、持っていきなさい……………と言っても、アンタかアンタのお姉ちゃんがアタシのお姉ちゃんにも勝てたらの話だけど？」

そう言ったユニちゃんは、手に持ったライフルを舗装された地面に

下ろして両手を上げながら、微妙な違和感を持った笑みを浮かべて立ち上がった。

(やった！ これで、誰も死ななくて「けど！」…………え?)

「持って行くなら、文字通りこの国の全てを持っていきなさい！」

「ユニ…ちゃん…?」

それに喜んでいた私だったが、次の瞬間、ユニちゃんが放った言葉は私の喜びを打ち砕き、混乱と硬直をもたらした。

「アンタ、どうせアイツから渡された剣は持つてるんでしょ？ それでアタシの命と力を啜りなさい！」

「……?!?」

た。…………それは、私がこの選択を選んだ理由の全てを否定する選択でした。

「そんな、なんで!?!」

「やっぱり、持ってたのね」

『ま、当然でしょうけど?』なんて、当たり前のように言いながら、据わった目をしたユニちゃんは、思わず見てしまった魔剣をくるんだ布を見て、感情を抑えたような口調で淡々と話し出す。

「お姉ちゃんのおこぼれ程度でも、アタシだってトップのシエアを誇っていたラスティションの女神よ？ シエアを集めた結果として得られる力の上昇幅ぐらいは分かってる」

そう言いながら皮肉気に笑うユニちゃんは、言外に『シエアを集めても犯罪神に勝てない』と言っていた。

「多分、アイツもその辺は分かってたんでしょね…………だから、シエア以外の解決手段を求めた」

どうやって知ったのかは知らないけど、なんて眩きながら、ユニちゃんはなんとなく嫌な感じと、なんとなく懐かしさと安心感を感じる方を見ていた。

「アイツの思惑通りつても癪だけど…………まあ、ネプギアに殺られるなら良いわ。その剣でアタシを斬りなさい」

「そんな…出来ない…………出来ないってば……………」

そして、嫌な感じと懐かしさと安心感を同時に感じる方から目を逸













あはは……そうだよな……ここで壊れる位なら、この力で——  
「……………」

—— 犯罪神を殺して、殺して、殺して殺して殺して殺して殺して  
殺して殺して殺して殺して殺して……殺し続ける装置として、壊れ果  
てるまで戦えば良いよな？

「ちよつと！ アナザー！ 大丈夫なのあなた!？」

視界に紫の髪をした女が映った気がしたが、俺はそれを無視して、  
よく分からないモノの間に碎けて落ちている魔剣ゲハバーン<sup>×</sup>の中  
でも一番大きな欠片を拾い、挟じ開けた空間からギョウカイ墓場へと跳  
んだ。

それは、唐突に訪れた。

「あつはははは……は？」

「……………」

パープルハートに向かって斬りかかるブラックハートは、ガラスが  
割れたような音を脳裏に響かせながら、突然『何故こんな事をしてい  
るのか？』と、とても今更な疑問を抱いた。

パープルハートとの決着を求めて？

シエアエナジーを奪わせない為？

魔剣に命を捧げて、ゲームギョウ界を護る為？

(いいえ、どれも違うわ)

パープルハートとの決着は今着ける必要がない。そもそも犯罪神  
を倒す前に戦力を消耗するのはバカがする事だ。

シエアエナジーは犯罪神を倒してから再分配すればいい。寧ろ、犯  
罪神を倒した後に100%のシエアを永遠に維持できるような女神  
がない。

信用<sup>ア</sup>がおけないアイツ<sup>ナ</sup>が持ってきた眉唾物の魔剣に命を捧げても、  
ゲームギョウ界を護れる保障がない。

(なら、一体どんな理由で私はこんな事をしているのか——)

戦闘中にはあるが、思わずと言った感じで止まってしまったブラックハート

これがブラックハートと同等以上に好戦的なホワイトハートや隙を見せたら割りと容赦なく突いてくるグリーンハートであれば、流石にブラックハートも行動の停止まではしなかったろう。

「……ノワール？」

しかし、今ブラックハートの目の前にいるのは、そこまで好戦的ではなく、守護女神戦争の最中でさえ武力抗争は無意味だと訴えてきたパープルハートだ。

故に、ブラックハートは提案するのだ。

「——ねえ、ネプテユヌ……もう一度、確りと犯罪神を倒す方法を話し合ってみない？」

「……え」

普段なら絶対にしない筈の提案ではあったが、今のブラックハートにはそれが最善の解答であると、何故か心の底から感じられたのであった。

## 第七十七話

「……それで？ 話って何かしら？」

冷ややかなルウイーの女神の声が響く。プラネタワー最上階

そこには今、プラネテューヌとラスティシヨンの女神が協同で他の二国に呼び掛け、殆ど全ての女神と全ての教祖が再び集まっていた。

「うーん、なんだっけ？ 第七百七十七回、プラネテューヌ漫才コンテスト？」

「違うでしょう！ 犯罪神への対抗策を改めて話し合うのよ!!」

重苦しい雰囲気になんてかネプテューヌがボケをかます。

そんなネプテューヌのボケを聞かされたルウイーの女神——プランは、ただでさえ薄い表情を限りなく無に近づけてネプテューヌを睨むが、ネプテューヌにツツコミを入れたノワールの言葉を聞いて、ボールと共に意外そうな目を向けた。

「……意外ね。真っ先に突っ込んで真っ先にぶっ飛ばされた貴女が、犯罪神に対抗する為に話し合うなんて」

「そうですね。て言うか、貴女そんなキャラだったかしら？」

「うるさい！ 良いから話を進めるわよ!」

そう言つて、脱線した話を強引に本筋に戻したノワールは、『ゴホン!』と、態とらしく咳払いをしてこう切り出した。

「前の話では、最終的にゲームギョウ界のシェアを一人の女神に集中させるって話で決裂したわよね？」

「……ええ、そうね」

「……………うう」

ノワールが前回の話し合いでの話題を出すと、プラネテューヌとラスティシヨンを除く二国からの眼差しがキツイものに変わっていく。

その空気の重苦しさに、以前その提案をした張本人であるネプギアがお腹を抑えながら蹲るが、心配そうな表情で背中を擦る姉のネプテューヌや、近くを飛ぶイストワール以外はそんな事などどうでも良いと言わんばかりに無視し、話を進めていく。

「あの案を実行するのは反対だと言うのに変わりはないわよ!!」

「……私も、ルウイーが無くなってしまおう事態を招くのには賛同致しかねます」

「……」

特に反対意見が激しいのはリーンボックスの教祖で、消極的だが明確な否定がルウイーの教祖

ラストイションの教祖もはつきりとした否定こそしないものの、自国の消滅を選んでいるに等しいノワールを正気かこいつ？ と言わんばかりの目で見ていた。

「……」

「ネプギアさん?!」

「ちよ、ネプギア?! 誰か! 誰かコンパを呼んできてー!? メディック! メディック!!」

……なお、床に蹲って痙攣し始めたネプギアも居たが、プラネテューヌの面々以外からは相変わらずスルーされていた。

「ふう……ノワール、急にどうしたんだい? そんな話をして、拗れるだけなのは目に見えてるじゃないか」

カオスなプラネテューヌ組はさておき、最後にラストイションの教会で別れた——それも、永遠の別れになると覚悟していた神宮寺ケイは、ネプテューヌ達を連れてラストイションの教会に帰還してから様子がおかしいノワールを心配してかそう声を掛けた。

「……………床になりたい」

……尤も、ケイが心配をしている理由には、隣でノワールの足をガン見しながらケイ以外には聞こえないような声量で相変わらずな事を呟いている変質者を少しでも認識したくないと言った意識が働いていないとは言えば嘘になるのだが……まあ、そんな事は気にしなくても良いだろう。

……そう、これからノワールが告げる言葉に比べたら、些細な事なのだ。

「どうしたもなにも、気付いたのよ————仮に私達がシェアエナジーを全部失っても、誰もそのシェアを完全には維持出来ないってね」

自虐気味な表情で告げられたその台詞を聞いた教祖達と女神達は、ハツとした表情で今気が付いたと言わんばかりであった。

「……確かに、わたしがゲームギョウ界のシエアを独占しても、リーンボックス辺りの連中は数日も保たずに——」

「わたくしも、ルウイーの国民からのシエアを維持するのは難しいのでした……」

ルウイーとリーンボックスの女神であるブランとベールは、自分の体型を片や不満そうに、片や満足そうに見ながら、真逆の国民性性癖を持つ互いの国民を省み——

「あー(納得)……うちはそもそも、ずっとシエアを独占出来るなら万年シエア最下位を張ってないしね！　しょうがナイネ！」

「ネプテューヌさん！　自覚をしておられるのなら普段からちゃんと働いてください!!」

「いやいやすん!!　今そんな事言ってる場合じゃないから！　今絶賛世界の危機真っ只中だから！」

ネプテューヌとイストワールは、何故か漫才(片方ガチ)が始まったかと思えば説教と追いかけてここが始まっていた。

「……理解できたかしら？」

「ええ……色々と不本意な事はあるけど、わたしやベールじゃあゲームギョウ界の全てのシエアを完全に維持するのが不可能に等しいって事は理解出来たわ」

「仮に維持できたとしても、直ぐに溜まった不満が弾けて崩壊してしまるのがオチですわね」

ノワール、ブラン、ベールの三柱は口々にそう言うと、頭を抱えて悩み始めた。

嫌な話ではあるが、シエアを全て集め短い間でも維持できるのがイストワールに説教されながら追いかけられているネプテューヌとその近くでお腹を抑えながら蹲りプルプルと震えているネプギア

頭を抱えながら悩んでいるノワールと、その近くでオロオロしている指に包帯を巻いたユニ

何故かこの場に居らず、最後に目撃されたのがアナザー失踪の直前

にラスティシヨンの路地裏と言うハクの五柱しか居なかったのだ。そりやあ頭を抱えたくもなるだろう。

……実質的に戦力となるのが、ネプテユーンとノワールしか居なかったのだから

ネプギアは候補生故に女神化時の力が弱く、拳句に精神面が不安定で切っており、ゲハバーンの力なのか、指の傷は回復魔法では回復しなかった。

ハクに至っては、何処に居るかも分からない始末である。

「……て言うかそもそも、たかがシエアを全部集めた程度の力で犯罪神を倒せる訳ないじゃない……私が何年シエアトツプを張ってたと思ってるのよ」

「カハッ……」

「ちよ、ネプギアアアア?!?!」

どうしようもない状況からか、シエアエナジーの独占程度と言ってヤケクソ気味に頭を抱えたノワール

前にユニから聞かされたとは言え、自分が一晚悩み抜いてこれしかないと出した結果、仲違いまでしてしまった結論をたかが程度とまで言われたネプギアは、折角少しだけ立ち直ったのに吐血し、床に倒れて痙攣を始めていた。

流石に焦ったネプテユーンは、別室で待機して貰っていたコンパを呼びに猛ダツシュをしたのだった。

……なお、これでプラネテユーンの女神は話し合いから一時離脱してしまっているが、実質的な頭脳担当のイストワールが居る為問題は一切なかったりする。それで良いのかプラネテユーン

「あの時はなかあいつが何処からか持ってきた魔剣で勝てると思っていたけど、よくよく考えたらあんなやつが持ってきた武器よ？

信じられる訳ないじゃない……」

「ノワール様……その事なのですが」

そして、ノワールが何故か知りもしない、裏付けも取れていない、持ってきた奴も信用出来ないとナイナイ尽くしの魔剣を使えば犯罪



神に勝てると思ひ込んでいた視野搾取っぷりに頭を抱えている中、グロウはなにか言いた気な顔でノワールに声をかけた。

「……なによう？　こんな時にまでくだらない事言ったらぶっ飛ばすからね？」

「後で存分にぶっ飛ばしてください！　……じゃなくて、魔剣についてなのですが」

『……………』

……ドン引きだった。

即答でぶっ飛ばしてくださいと懇願したグロウに、既に慣れきっているノワールと神宮寺ケイ、運ばれていったネプギア、ネプギアに着いていったネプテューヌ、意味が分かっているロムとラム以外の全員が、うわあ……と言った目でグロウを見ており、ユニは乾いた笑い声を挙げ、ベールと箱崎チカは残念な人を見る眼差しを向け、ブランに至っては自身の教祖である西沢ミナに目配せして自身の妹であるロムとラムを背後に庇いつつ、地味に物質化したハンマーを構えていた。

「その魔剣の欠片を使って、新たな武器を作ってはいかがでしょう？」  
しかし、そんな危機的状况にも拘わらず、グロウは一切動じることなくノワールへとそう進言したのだった。

## 第七十八話

犯罪神の復活と共に力を吸い上げられて崩壊しつつあるギョウカイ墓場で、復活を果たした犯罪神から最も遠い地点

「……………」

ラストイシヨンの空間をゲハバーンの欠片で斬り裂いてそこへ突入したアナザーは、周囲に敵が居ないのを確認した後に死んだ魚のような眼をしながら手に持ったゲハバーンの欠片を視ていた。

「……………っ」

そして、徐にゲハバーンの欠片を持つ腕を頭上へ掲げ、手首から先を腐らせて苦悶の表情を浮かべながらゲハバーンの欠片に黒い力を纏わせ始めたのだった。

黒い力を纏ったゲハバーンの欠片は、送られてくる力を吸収してその紫の刃を黒く染め上げる。

力を失っていても視たものに禍々しきを感じさせていた魔剣ゲハバーンは、破壊され欠片となり果てても尚、禍々しきを完全に損なう事はなかった。

そして、黒く染められたゲハバーンの欠片であった刃は、魔剣ゲハバーンがその力を完全に取り戻した——それこそ、全ての女神を斬り捨てた果てに開放される力を凌駕し、禍々しきに至っては単なる人間が視ればそれだけで悪意を刺激され、心が弱ければモラルを失い犯罪行為に走らされるだろう。

「……………」

それから暫く、元紫の禍々しい魔剣にして現黒く禍々しい邪剣が完成したのを確信したアナザーは、何時の間にか治っている腐っていた筈の手を嫌そうな顔で見つめながら、何故か柄まで再生していた邪剣を持ってギョウカイ墓場の奥へと向かうのだった。

——これは女神達が邪剣と対を成すような白く輝く剣を持ち、ギョウカイ墓場へと突入する二日前の話であった。

「……………Code：Darknessの部分解放を確認……………Code：Lightの部分覚醒を完了した後にCode：Bloodの討滅を開始します」

夜遅くのプラネタワーでの事だった。

「……………」  
「……………ZZZZ」

夢の世界に旅立った姉のネプテューヌを目の前に、ネプギアは先程の話し合いの結果を振り返りながらカーン、カーン、カーン、と、リズム良く鎚を振るい、シエアの炎で融かした各国より譲り受けたシエアクリスタルを同じく融かした魔剣の欠片と混ぜ合わせて剣の容に形成していた。

「……………」

そうするように提案したグロウ曰く、アナザーがあればほど固執していた魔剣ならば犯罪神を確実に倒せないまでも有効打を与える程度の力はあるのではないのか？ との事で、実際に効果があるのかは分からなかったが……………まあ、ネプギア自身も含めてあの場に居た全員がこのまま何の対策も見出だせないよりは良いだろうと言う結論に至った結果、こうしてネプギアが鎚を振るっているのだ。

それに――

(お姉ちゃん……………お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん)

――ネプギア自身の精神もまた、かなり限界が近付いていた。

大体重な精神的ダメージに加え、本来ならば精神が成長する為の糧となる出来事もその大半が消え失せた。

代替となる出来事は幾つかあったが、消えた出来事の質量に比べれ

ば微々たるものであり、本来の数値には一切届いていなかった。

他の皆を生かす為の手段は感情論で全否定を受け、理論でさえも冷静になったラストেশヨンの姉妹に否定された。

本来ならばそれさえ耐えきる程に精神が成長した証であったプロセツサユニツトの変化は、単なる外的……否、女神と言う存在の内に巢食っている外的要因に依るものでしかない。

それでもなお、女神として生まれる際に刻まれた善の性質は歪む事なく機能していたのだが、今となつてはそれすら歪みかねない程の傷を負っている事に変わりはない。

平穏な時を過ごせば自然と修復されるのだが、犯罪神が復活した現状ではそんなものなど望める筈もなく

どうか表面だけは繕えているものの、もしも後一押しを誰かが、或いはなにかが押ししまえば、それを切っ掛けに闇に堕ちてゲームギョウ界を滅ぼす機械に成り果てた事だろう。

(お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん……)

……そして、そんな堕ちる数歩手前でギリギリ踏み留まっている状態で純粋なシエアを剣に加工している現状は、最大の失敗でありながらも最善の失敗として機能したのだった。

『……………』  
半ば狂気を漂っているネプギアの身体から、ほんの僅かな量ではあるが黒い靄が漏れ出ていたのだ。

何時の間にか起き上がり、普段の印象からは考えられない程に姿勢を正してそれを無言で見詰めるネプテユヌ。その瞳には女神としての力を解放した時と同じく、ゲーム機の電源ボタンと同じマークが浮かび上がっていたのだった。

また、漏れ出ている黒い靄は少しずつではあるものの、製作途中の剣に吸い込まれていき、先程まではこの世の全てを浄化せんとばかりに輝いていた光は、徐々にその輝きをくすませていた。

『……………』  
そんな中、一方は無表情で妹を視て、もう一方は憂鬱そうな顔と虚

ろな眼差しで坦々と鎚を振るう。

カーン、カーン、カーン、と、幾度かの金属音が響いた時

「……………」

「……………Zzzz」

黒い靄が全て製作途中の剣に吸い込まれた時点で、ネプギアから憂鬱そうな表情が消え、暗い雰囲気収まった。

また、ネプテューヌは先程までの無表情で無機質な眼差しなどなかったと言わんばかりに眠りこけ、ネプギアを視ていた証拠は机に突っ伏していたのが仰向けに引っくり返っている事だけである。

「……………あ、出来た」

そして、魔剣の残骸とシエアクリスタルは白く輝くシエアの剣としての再誕を果たしたのだった。

——その本来の輝きを失ったまま

「……………ニイ」

## 第七十九話

出来上がった邪剣を引き摺りながらギョウカイ墓場の奥へ向かう最中、俺は急に戻った記憶の中でも特に大事な事を思い出していた。

今の女神よりも強大な力を誇った女神である真面目なブラックハート<sup>ブラックハート</sup>、知識を蓄え続けたホワイトハート<sup>ホワイトハート</sup>、人々から愛されたグリーンハート<sup>グリーンハート</sup>の三柱

そして当時の女神の中で最も弱かったが、国民から慕われ、中でも特に半吸血鬼<sup>ダンピール</sup>や今より全体的に強かった冒険者から強く信仰をされていた人望溢れるパープルハート<sup>パープルハート</sup>

一柱を除き今代女神よりも強かった当時の女神達は、当時の犯罪神の手駒であり、贖でもあつた四天王を守護女神戦争の休戦期だった事もあつてシエアが削られる前に討ち倒し、ゲームギョウ界にマジエコンが溢れ返る前に犯罪組織としてのマジエコンヌを一切国同士で協力する事なく壊滅させていた。

……そう、一切協力する事なく壊滅させたのだ。それこそが、決定的な敗北の要因とも知らずに

ウラヌス以外の各国の女神がそれぞれ一対一で滅ぼし、ウラヌスも半吸血鬼や冒険者と共に討つた四天王は、犯罪神を構成する肉体となる生け贖だった。

そして、復活した犯罪神は当時の女神さえ凌ぐ力で四柱居た女神の半数を滅し、犯罪神との戦いでは力の差から足手纏いだった俺を含めた人間や半吸血鬼を置いて残った女神であつたウラヌスとズナニエは協力して戦つたのだが、これまで敵対していた者が組んだ所で即興の同盟が力を発揮できる筈もなく

連携が脆かつた部分を突かれてズナニエが滅び去り、最も人望があつたが女神の中で一番弱かつたウラヌスだけが勝機無しとの判断で命からがら逃げ延びて運良く生き残つたのだつた。

最早どうしようも無いと思つたが、それでも希望は残されていた。

知識を蓄え続けたズナニエは、犯罪神を打倒する二通りの選択肢を己が教祖へと遺していた。

1つ目は犯罪神を滅する呪われた剣である魔剣ゲハバーン

2つ目はゲームギョウ界の人々の想いを1つに束ねてぶつけると言う攻撃方法

ウラヌス達は2つ目を選び、俺は——否、俺だけが1つ目を選んだ。ウラヌスだけは最終的に受け入れてくれたが、当時の共に犯罪組織を討伐した仲間とも言える半吸血鬼や冒険者の面々からは女神が信じられないのかと最後まで反対された。

勿論、そんな事はない。俺が信じられなかったのは想いを束ねるウラヌスではない。

寧ろ、ウラヌスの人望ならば人々の想いだって束ねられると確信さえしていた。

……だが、俺にはどうしても、想いを束ねられる側である人間達が信じられなかったのだ。

人間は不安定だ。

我慢できず、裏切り、嘘を吐く。

やると言つてやらず、決める事が出来ない。

楽な方へ流され、手を取り合おうと言った口で騙し、自分の為に誰かを陥れる。

当時儲かるから、楽だから、好き放題欲望のままに振る舞えるからと犯罪組織に流れ、犯罪組織が潰れたら『ああ、女神様、仕方がなかったのです。どうか御慈悲を下さい』と言つて薄っぺらな懺悔を吐き教会に戻ってきた人間、特に酷い者は、薄っぺらな懺悔さえ無く何食わぬ顔で犯罪組織が現れる前の生活を再開した人間を間近で見るとなった俺は、当時の犯罪組織討伐メンバーの中で唯一、人間でなければ吸血鬼でもなく、半吸血鬼でなければモンスターでもない俺は種族が誰とも違う事もあって、人間への強い不信感を覚える事になった。

流星に殺人や人体実験等の洒落にならない犯罪を犯していた者は処分されたが、少なからず流れてはいたマジエコンの販売員や製造工場で働いていた者、証拠不十分な者は見逃され、市井に流された。

恐らく、当時の裏切り者達の子孫達はそんな事も知らずに今でも能天気な生きているのだらうと思う。ひよつとしたらまた犯罪組織

に加担していたかもしれないが、だとしたらどうしようもなく救いが  
ない。

……まあ、そう言った理由から、ウラヌス以外からの反対を予  
備の策を求めている事と押し切って、少なくとも人間の想いを束ねる必  
要がない犯罪神を滅ぼす剣を求め、ズナニエの遺した資料を頼りに  
ギャザリング城へと独りで向かった。

——最期にウラヌスと、生き残った方がゲームギョウ界の平和  
を維持しようと言う約束を交わして

ウラヌス達と別れた俺は、ギャザリング城を探索し続けた。  
ギャザリング城の敵は、当時の弱かった俺には手強かった。

入り口付近でさえヒーリングスライヌのようなモンスターが強大  
な攻撃魔法を行使し、当然のようにドラゴン系のモンスターが跋扈し  
ていたような城だ。今の女神でも、恐らく単独で走破できるのはハク  
とネプテューヌ位のものだろう。

何度も死にかけたが、死にかける度に何故か生き残り——今になっ  
て思えば、喰われたり焼かれたりして喪失した手足や捌かれた腹とそ  
の中身まで再生して邪剣にも使った黒い力が俺を無理矢理生かして  
いたのだろう。

脚を喰った筈のドラゴン系モンスターは何故か腐っていて、腹を穿  
ち臓腑を焼いた火球を放ったスライヌは魔力が無くなり青い皮だけ  
を残して蒸発していた。手足を全て千切って苗床にしようとした人  
面樹は枯れ果て、全身を取り込み溶かしてきた巨大なスライヌは中の  
液体が濁って腐っていた。

このように、そうでなければ死んでいない方がおかしい状況が多々  
あるのだ。何故そんな事になっているのかは分からないが……まあ、  
それは良い。

肝心なのは、魔剣ゲハバーンが見付かった事と、魔剣ゲハバーンを  
見付ける前に犯罪神とウラヌス達が相打ちになった事なのだから

俺が何度も死に掛けて時間の感覚を失いながら魔剣ゲハバーンを見  
付け出すまでに、時間が掛かり過ぎていた。

数日の休養と修練を終えたウラヌス達は、当時のイストワールを



使ってギョウカイ墓場へと向かい、犯罪神へと最後の戦いを挑んでいた。

詳しい事は分からないが、結果が犯罪神の封印とウラヌス達の死であった以上、相討ちと評するのが適切なのだろう。

女神を全て失った人間はその後100年程、新たな女神が生まれるまで国を失い、新たな女神が生まれるまでの国を維持できただろう前のイストワールはどうやらシェアエナジーが燃料だったらしく、女神を失った事で機能停止に陥っていた。

その仮定で様々な記述や知識を喪失したようだが、詳しい事は知らん。

何せ、その100年の半分近くをギャザリング城で鍛えた力でモンスターを滅ぼし続け、残りの半分を無気力に過ごしていたのだから――

――ああ、時間か

「……やっど、着いたのか」

槍を持った兎頭の女の姿をした犯罪神を視界に収めた俺は、今まで無理に抑え込んできた邪剣の力を解放し、この身を喰らわんとばかりに侵蝕する黒い力を全身に纏った。

全身を喰われようが腐らせようが知った事か！ あの野郎 犯罪神だけは徹

底的に破壊し尽くしてくれるわ!!

とにかく――

『死ねええええええ!!』

呪詛に染まったギョウカイ墓場の黒い大地

普段は死せるモノ達の安寧の場として静寂に包まれているそこは今、怪獣大決戦も真つ青な決戦が始まっていた。

『死ねええええええ!!』

『温い！ コノ程度ノ力デ我ヲ倒セルト思ツタカ!?!』

犯罪神へと突撃し、黒く禍々しいオーラを纏って邪剣を振るうアナザーと、全身を完全に顕現させて赤黒いオーラを纏った神器である槍を振るうマジエコンヌ

両者のぶつかり合いは地を割り空を裂きながら徐々に激しさを増していき、静寂に包まれていたギョウカイ墓場を激しく揺るがしていた。

『コプツ!?』

『ハハハハハハハハッ!!!』

しかし、本来のアナザー自身の力を大きく越えた黒い力は、アナザー自身に由来しない事もあってその肉体を徐々に蝕んでいき、口から腐り果てて黒く染まった血と溶けた臓器を吐き、邪剣を持っている左腕を中心に、左半身が黒く溶け出していった。

本来なら死んでいなければ可笑しい程の重傷だが――

『殺スコロすころスK.O.ロス――!!』

『ホウ……ソレホドマデニ汚染サレテイナガラ、マダ呑マレヌカ』

――そんな状態でもアナザーが生きているのは――否、アナザーを生かしているのは、皮肉な事にアナザーに力を与え、その身を蝕んでいる黒い力そのものだった。

腐った皮膚が剥がれるとその下からは真新しい白い肌が見え、内臓が液化化した結果、臓器が減ってへこんだ腹部は再生した内臓でまた膨らんでいる。

しかし、再生と同じ速度で元に戻った白い肌は黒く腐り、復活した内臓は再度液化化して溶け落ちてきているのだ。

今のアナザーは自身を蝕む黒い力によって強制的に生かされているような状態であり、力の行使を止めた瞬間、崩壊する肉体を抑える事は叶わずに死を迎える事となるだろう。

『俺の為にお前を殺す！ だから滅べ!! マジエコンヌウウウウ!!!』

『クハ、クハハハハハハハ!!!』

だが、アナザーは止まらない。

自身の肉体が崩れようと、腐り果てようと、黒い靄そのものに成り

果てんばかりに纏う黒の濃度を更に深め、更に力を引き出ししている。  
今のアナザーは、犯罪神を完全に滅ぼすと言う一念だけで動いており、犯罪神を完全に滅ぼすまで止まる事はない。

『アアアアアアアアアアアア!!』

『無駄ナノダ。貴様ニ我ハ倒セナイ』

……例え、どんな悪手を打とうとも

【……………】

邪剣に負けず劣らずの禍々しさを放つ程に黒を深く纏うアナザーと、空間さえ歪ませる程の赤紫のオーラを纏った犯罪神がぶつかり合う瞬間

【……………a l a …… a a a a a a a a!!】

輝く金眼と反比例するかの如き灰色の鈍い光を放ちながら、女神達が搜索をしていた行方不明のハクがアナザーと犯罪神の衝突に乱入してきたのだった。

【……………】

ハクは、何時の間にかギョウカイ墓場の上空3000メートルを飛んでいた。

銀色だった髪は女神化で金髪と、何故か毛先から3分の1程が黒く変わり、元より白かった肌は病的な——それこそ、死人の如き白さと成り果てていた。

しかし、飛んでいる事から間違はなく女神化している筈なのに身に纏っているプロセツサユニツト<sup>補</sup>は一切無く、戦闘用に改造されている白かった修道服は纏うシエアの力場によって灰色に染まっている。

見開かれた金眼は物理的に光を放ち、下方で——それも遙かな大地で行われている戦闘を見ているのだ。

【……………a l a …… a a a a a a a a!!】

そして輝く金眼を見開いて雄叫びを挙げながら、ハクは地上で行われている決戦の場に乱入していったのだった。

『邪魔を、するなあああああ!!!』

『ハハハハハハハハハッ!!!』

——その結末が、どんな事になるかも知らず

## 第八十話

それは、聖剣が完成した日の朝の事だった。

「ねっぷうううっ!?!」

「え、ちよつま…のわあああ!?!」

四女神や女神候補生達が集まっていた謁見の間——否、プラネタワ―処かゲームギョウ界そのものでは、大惨事が起こっていた。

「なん、で!…こんなに、揺れて…:きやあ!?!」

「チカ!…私の、そばを、離れては、ダメっ、です…:わよ!」

「は、はい!」

ゲームギョウ界は大きく揺れ、万が一倒壊した時の危険性から女神同士が本気で戦っても崩れないを目標に特別頑丈に造られたプラネタワ―こそ健在ではあるが、プラネテューヌの街ではあちらこちらで家屋が崩れていた。

暫くして揺れはある程度落ち着いた時、他の国の教祖達の業務用端末が『pipipi!』と鳴り響き、空中にディスプレイが映し出された。

『申し上げます!…ラスティシヨンの工業地帯が先程の地震で爆発しましたア!』

「工業地帯の鎮火を優先しながら生存者の確認と保護をして二次災害に気を付けるんだ!」

工業地帯が爆発したと言う教会職員からの報告に慌てて指示を出すラスティシヨンの教祖

『チカ、さっきの地震で火山が幾つか噴火を始めたわ!…急いで近隣住民の避難と救助を行うから、生活物資の備蓄を解放する許可と避難先の手配をお願いしたいのだけど』

「くくくッ?!?!…こんな時に噴火ですって!?!」

慌ただしく動き回っているらしきリンボックス特命課のケイブからの報告にストレスからか額に青筋を浮かべながら備蓄の解放許可を出し、避難先の手配を行うリンボックスの教祖

『さ、先程の地震で崩れてきた雪と一緒に下位から上位の吸血鬼の軍

勢が接近中！ 只今一生懸命に魔法騎士団が対処していますが……持ち堪えられません！ 至急ホワイトハート様かホワイトシスター様を——ギャアアアアアア——?!?!」

「……っ、ロム！ ラム！ 急ぐわよ!!」

ルウィーに至つては然り気無く滅びかけており、雪崩と共に雪崩れ込んだ大勢の吸血鬼が昼間から暴れ回る地獄のような惨劇が巻き起こっていた。

その対処の為に女神化したブラン達が大慌てでプラネタワーから飛び立ったが、誰も咎めるものは居なかった。

「そうですね……はい。では、市民は極力プラネタワーへ集めてください——辺境や村に住んでいる方は、兵達を動員して仮の避難先を設置して——ええ、お願いしますね？」

そんなイストワールの一言を最後に、各国の教祖達の事後処理が一段落つき、飛び立ったブラン達こそ戻らなかったもののかどうか話が出来る状況になっていた。

「さっきの揺れは、なんだったのかしら……?」

ノワールがそう言うのも無理はない。

女神の守護が働いてさえいれば、基本的に地震なんて起こらないゲイムギョウ界であの規模の地震が起こる事は滅多になく、仮に地震が起こっても雪崩と共に吸血鬼が一人や二人ならまだしも軍勢を成してまで昼間に襲撃を仕掛けてくる事はもつとない。

幾らルウィーが雪国で一年の大半を雲が覆っていようが、太陽が絶対に出ない訳ではないのだ。

上位以下では太陽の光を数秒でも浴びれば死が確定しているのに、そんな危険を犯してまで人間の住んでいるエリア——日が照っている時が比較的多いエリアに向かうようなら、とうの昔に吸血鬼と言う種族は滅びていただろう。

「……これはっ!?!」

そんな天変地異の前触れのような事態に、原因を調べようとログを閲覧していたイストワールは驚きの声を挙げた。

「どうしたの? いーすん」

「ネプテューヌさん！ 魔剣を材料にした武器は出来上がっていますか？」

「え？ う、うん。ネプギアが一晩でやってくれたからね」

声を挙げたイストワールを心配してネプテューヌが声を掛けるも、そんな時間さえ惜しいとばかりにイストワールは魔剣を材料にした武器は出来たかと問い掛ける。

それに戸惑いながらもネプテューヌは答えたが、それを聞いたイストワールは慌ててギョウカイ墓場へ転移する為の装置を弄り、同時に空中投影式のコンソールを操作して壁に映像を投影しながらこう言った。

「そんなんっ!？」

「でしたら！ 今すぐにギョウカイ墓場へと行ってください！ このままではハクさんが……!？」

映し出された映像では、現在進行形で紅い塊となって暴走しているアナザーと以前ノワールがぶっ飛ばされた時に見たウサギのような上半身と四本の脚の付いている胴体部分には赤い目と牙の生えた巨大な口が開き、更にウサギのような上半身の後ろにはそれとは別に四本の腕と大きな単眼の付いた上半身が付いている、あまりにも禍々しい異形の姿をした犯罪神マジエコンヌと思われる存在に向かって女神化した状態で向かって行くハクが叩き潰され、ボロボロになっていく姿が映し出されていたのだった。

そして場所は替わり、アナザーと犯罪神とハクの三つ巴が発生しているギョウカイ墓場の奥地

『『しぶてえんだよ!! 良い加減に死ねえええ!!』』

『ハハハ……我ハ死ネン……貴様モ、ソノカヲ使ウナラバ覚悟スル事

ダ』

雄叫びを挙げながら犯罪神マジエコンヌに向かって邪剣を振るうアナザー

何度も打ち合った結果、緩急が付き始めたそれをあつさりと槍の穂先で受け流し、柄で邪剣の剣身を絡め盗ろうとして即座に諦めながら十数メートル程背後に跳ぶマジエコンヌと同時に、黒い力に馴染んでいるのか腐っている面積が徐々に少なくなっているアナザーも、力の加減までは利かないのか大地を大きく陥没させながら背後へ向かって跳躍し、数十メートル程の距離を瞬時に取った。

アナザーが下がったのと同時に、上空より大樹の如き太さの灰色の光が降り注ぎ、ギョウカイ墓場の大地を融かし貫いた。

『Code:BloodとCode:Crimeの生存を確認……殲滅に失敗、Limiterの上限値を引き上げ、再度殲滅を開始します』  
『邪魔だっつってんだろぅが!!!』

それは最初に本来なら緑色で、何故か灰色になっている神器の大剣で一撃を叩き付けて以来、ずっと上空に浮かんでいるハクからの長距離砲撃だった。

黄金に輝く眼を見開きながらアナザーとマジエコンヌを狙うハクは、その両腕を砲身に見立てるかのようになり前に突き出し、灰色の光を集束させる。

それを見たアナザーは、邪剣の恩恵で高められた身体能力で強引に空気を蹴り抜き、ハクの元へと向かって行く。

『我ニ背ヲ向ケルトハ……随分ト、余裕ダナあ!!』

『ぐあッ!?!』

しかし、それを犯罪神が見逃す筈もなく

槍を大地に突き刺して飛び上がって一瞬でアナザーを飛び越し、両手を組んでアームハンマーを叩き付けるのだった。

【充填完了……ファイア】

『グキヤッ』と言う音を背中から響かせて地に墮ちるアナザーと、そんなアナザーから離れて縦横無尽に宙を舞う犯罪神マジエコンヌに向けて、上空のハクはの人の頭よりも大きな光で覆われた両腕を向



け、光の砲撃を放った。

その光は背骨を折られてまともに回避行動が取れないアナザーにのみ直撃し、その全身を膨大な熱量を以て融かし尽くすかと思われた

『が、あああああ……あ……？』

——思われたが、その光がアナザーを融かし尽くす事はなかった。

寧ろ、押し折られた背骨とズタズタの上半身の再生速度を促進している始末である。

『……？』

これには、終始無表情を貫いているハクも困惑を禁じ得ないようだった。

『ErrorCodeを確認、Code:Crimeに宛てられるResourceをCode:Bloodに移行します』

出力が足りないのかと、犯罪神に向けていたもう片方の腕を向けるも、結果は真逆

その光は、アナザーに刻まれたダメージを修復していただけだった。

『Error、Error、Error、Error、Error、Error、Error、Error、Error』

『……………』

それを見たハクは人形の如き能面に焦りを浮かばせ、狂ったように灰色の光を放ち続ける。

しかしそれは、ギョウカイ墓場の大地を融かすばかりでアナザーに直接ダメージを与える事は一切無かった。

『……………えっ』

やがて放たれる光が底を付くと共に、訳が分からないとも言いた気なアナザーが大地に空いた大穴から飛び出してくる。

やはり、その身体には傷処か火傷の1つ、水膨れの1つさえなく、寧ろ自滅で受けていたダメージすらも回復して、これまでより少しだけ毛髪が昏く、肌が白くなつてはいるものの、全快と言っても問題がな

い状態にまでなっている始末である。

「……………」

『……………』

明らかに自分が喰らえばただでは済まない威力の攻撃が何故かアナザーには効果がない——処か、回復までしている。これには犯罪神マジエコンヌも困惑せざるを得なかったのだった。

## 第八十一話

ハクに撃ち込まれた灰色の光は、俺の身体を融かす処か焦がす事も叶わなかった。

『……………』

大地に空いた穴から無傷で出た俺に、撃った張本人（張本神？）のハクも第三者の犯罪神も押し黙ってしまふ。

一体なにが遭った……ハクの放つ光、しかもあの充填時間から逆算した威力なら、仮に普段と速度は変わらないとしても俺一人を蒸発させるには十分過ぎる程の火力が片腕の時点である筈なのだ。

『……………』

なのに、あの光は足場の大地を融かすばかりで俺を蒸発させる事もなく、挙げ句に傷付いた身体を回復させる始末だ。

これまで一度としてなかったあの女の放つ光の一面に思わず別人か否かと疑うが、そんな事はありません。あの光と大地を融かし穴を開けた熱量は紛れもなくあの女の力であり、感じる気配も多少の違和感は有れどあの女のものとは大差ない。

だが、異能の光で回復こんな真似が出来るとしたらあの女が仮にも女神である以上は公の場で間違いなくやるし、今まで気が付いていなかったただけだし、でも片腕の一撃は犯罪神を狙っていた。にも拘らず両方とも回復の力を発揮するだけの理由がない。

そもそも、異能というものは力を応用する事までなら出来ても根本的な在り方を変質させる事はまず出来ない。

現に、端から見れば異能の変質だろう俺の扱っている黒い力を俺自身は自分の力だと感じられないし、これまでの血を操る力の方がその出力はともかく、俺自身の身体には良く馴染んでいる。

あの女の力は徹頭徹尾、破壊にしか使えない。出来ても精々が殺菌や加熱料理位のものか？

どちらにしる、熱を用いて加工するのが精一杯である以上は再生処か回復さえ夢のまた夢、仮に出来たとしても熱気のみで構成された気

体生命体のような炎熱属性を吸収する存在位のもだろう。

そして、俺の足場だった大地が融けている辺り異能の根底に在るだろう属性は変わっていない。

同一ないし類似した異能を持った人物の噂は聞いた事がない故に同一人物であるとは思うが、ならばこの回復は何故――

「……………ニイ」

「……………?!?」

予想外の事態によって戦闘中であるにも関わらずつい熟考してしまったが、それは突然走った背筋の寒気によって中断を余儀なくされた。

「ahaha、ahahaha……!!」

突如大声で笑い出したハクは、何時もの澄まし顔とは程遠い、攻撃的などすら言える凄惨な笑みを浮かべて俺を見る。

「……………うわあ……………」

「……………コレハ酷イ」

今回ばかりは犯罪神の言葉に全面的に同意せざるを得ない。それぐらいに酷い笑みだった。

ハクの容貌が人外の域で整っているから見れるだけで、毛先から3分の1程の長さが黒くなっている長い金髪を振り乱し、両目を見開き黄金の瞳を物理的にも輝かせ、口元は歪に歪み、頬は興奮からか上気して赤く染まる。

不気味とか不快感とか、そんな領域を通り越してただ純粹に、逃げたい……………心底そう思った。

「kyaha! kyahahaha hahaha hahaha!!」

しかし、逃げる事は叶いそうになかった。

「ぬ、おおおおおおおおおお!!?!?」

凄まじいとしか表現しようのない速さで俺の前に現れたハクがケタケタと笑いながら振り降ろした大剣を、俺は咄嗟に左へ跳ねて避けた。

地面を焼いて融かしながら大剣の勢いをどうやってか抑え込んだハクは、そのまま犯罪神など知らんとばかりに俺が避けた方に向けて





ワタシ私の光で熔けなかつたアナタ……私の総てで守護愛するアナタ  
だから……まずはその闇穢れを祓いましょう？  
けれど、幸福な時は長くは続きませんでした。

【あ”あ”？ 残り滓が調子に乗ってんじやねーよ】

【a、a a——亞aあ阿A娃鏹a闕鴉痾會ア鏹蛙………】

突如暗闇の方から聞こえてきた声は、私の意識を絡め取り、細切れ  
にするように引き千切り始めました。

(痛い！ 痛い！ 痛い！ 痛い！ 痛い！ 痛い！)

苦しいです、痛いです、悲しいです、哀しいです

ですが絶対に諦めない……必ずアナタはワタシ私のモノに

その一念だけで最後の力を振り絞り、薄れる視界を動かしながら先  
程の黒いナニかを探すと——

【蛙、西啞——あっ………】

——みいつけたあ

## 第八十二話

「蛙、西唾——あっ……………」

そう呟くと、先程までの身も心も焼き尽くすような不快感と身も心も呑み込み押し潰すような、なのにこれまでも何度か感じたこれ以上は無いと言い切れる安心感を抱く矛盾を抱えた謎の圧力は嘘のように霧散し、ハクは地面に向かって堕ちていった。

『ハ、ハハハ、ハハハハハハ、ハハハハハハハハ——』

『ちよっ!?!』

バカ笑いする犯罪神を尻目に、俺はハクが地面に叩き付けられる前に駆け寄って受け止めようとする。

例え守護すべき民衆以外には碌な事をしない光の外道とも呼ぶべきあの女でも、一応は次期統治者なのだ。こんな所で死なせるつもりはないし死なれても困る。

死ぬならせめて、統ベッベッベスベが崩壊してからにして欲しい。

それだけの思いから駆け寄り、黒に染まって上昇している肉体能力で堕ちるハクを受け止めたが——

『ガアッ——?!?!』

『クハッ、ハハハ、ハッハハハハハハ——!!!』

力が堕ちる。

身体から際限なく溢れ出し、攻撃の威力をKあシeいた黒い力が引き出せなくなり、黒い力を再生に回す事が出来なくなった結果、残留した残り滓のような量の力が肉体を内側から壊していく。

幸い、残留した力が抜けるも早かったから最小限のダメージで済んだが、後数秒遅ければ自分で使った力で戦闘不能に陥っていた所だった。

「な、なにが…!?!」

相変わらずバカ笑いを続ける犯罪神を気にする余裕もなく、まるで接続の切れたネットワークのように、先程までは手足のように——とは言い難かったが、自分の意思で使える程度には扱えていた黒い力の使い方さえ霧が掛かったように不透明なものになっていく。



『ハッハハハハハハハハ——ゲホツ、ゲホツ!!!』  
「どう言う…:ことだ!？」

黒い力を得る前、それこそネプテューヌ達が捕まる前後にまで力が下がった影響で笑い過ぎて喉が詰まったのか、勝手に死にかけている犯罪神を倒す事も出来ず、確認の意味合いも兼ねて一度ハクから離れても見たが、それでも喪失した力<sup>レベル</sup>を含む黒い力やその使い方の知識や感覚さえ戻る事は無かった。

それでも、黒い力さえ戻れば犯罪神にトドメが刺せる故に、必死になつて黒い力を引き出す術を思い出そうと記憶を漁るが——

『——貴様、我ヲ笑い殺ス気ダツタノカ?』  
「——っ」

——どうやら、時間切れのようだ。

こちらが黒い力を引き出す術を思い出そうと必死になっている間に犯罪神は咳き込んでいた状態から復帰して、ウサギ頭でニヤリと嘲笑うような表情でこちらを見る。

俺は犯罪神との戦いに黒い力を宛にするのは諦めて、本来の構えとは違うものの、左腕で邪剣を正眼に構える。

この戦いでの勝利は実質的に諦める事にはなるが、今右腕で抱えているハク<sup>これ</sup>を安全まで運び、目覚めるまで時間を稼げればもうそれで良い。先程の力さえ発揮出来たなら、ハクは犯罪神を正面から叩き伏せる事も出来ると俺は確信している。

(この場で倒せればそれが最善だとは思うし、約束的にも俺が倒したかったが……まあ、最終的に犯罪神が倒せばどちらでも同じだろう)

そしてこれは勘でしかないが、次の覚醒は先程の歪な気配を孕んだものではなく、ハクの自身の本来の力だと、何故だかそう感じられた。故に俺は、この場からハクを逃がす為の隙を窺おうと犯罪神を視る。

そうして一挙手一投足を見逃す事のないように犯罪神を視る中、犯罪神は嘲笑うような表情のままゆっくりと槍を頭上へ振り上げると

——っ?!

「ガアッ!？」

それを辛うじてでも防げたのは奇跡だった。

振り上げられただけの構えもなにもない槍に対して死を感じ、咄嗟に侵蝕の倍率を上げられるだけ引き上げ、更には身体から黒い力が抜けても尚、女神の神器を優に超える程の膨大な力が溢れんばかりに漏れ出ている邪剣で叩き付けるように降り下ろされた槍を辛うじて受け止める。

だが、ハクを抱えて片腕であった事と使い手である俺自身の力が急激に低下していたのが原因で、先程のように力尽くで押し返して逆に斬り掛かる処か受けきる事も叶わず、凄まじい勢いで背中から瓦礫の山に叩き付けられる事となった。

『ドウシタ？ コノ程度デ殺ラレルヨウナ貧弱極マリナイ加護デハアルマイ』

「ぐ、ぐ、ぐ……」

犯罪神は槍を向けながら訳の分からない事を言うが、こちらはそれを考えられる状態ではない。

今の一撃で俺の身体は背骨が折れ、肋骨も折れたようだ。衝撃で折れた肋骨が心臓を含めた幾つもの内臓に刺さり、胸や腹を突き破って飛び出している。

更には、右腕で抱えていたハクも遠くに吹き飛んでおり、別の場所で力なく倒れている。

異常に頑丈なのか血の匂いこそしないものの、内部の状態までは分からない。

(今のは、単なる人間……いや、女神でも死ぬるか)

壊れた内臓の修復は諦めて生来の異能で胸部や腹から流れ出ようとする血液を壊れかけの内臓と共に体内へ引き戻し、折れて好き放題に散らばった骨は操作した血液で諸共に体外へ排出する。

同時に、その骨を含んだ血液を使い遠くで倒れているハクの改造修道服と髪を固め、引き摺るようにして更に遠くへと持ち運ぶ。

「……これで、足手纏いは居なくなったか」

ここには血を薄めて嵩増しする水がなく、流した血を最小限度に留

めても尚、気絶したハクを避難させる為に血を使うと攻撃用に使える血液はないに等しくなるが仕方がない。

血の制御を一步間違えば内臓を零れないように抑えている血の膜は失われて零れ落ちるだろうし、破れた血管や心臓の血流を異能で代用している以上、これ以上は血を体外へ放出する事は即ち死を意味する。

血のストックは黒い力の影響で使い物にならないほど腐り果てた以上、現状の残量でどうにかする以外にはないのだ。

『貴様が動力ヌナラ、我カラ行クトシヨウカ』

そう言った犯罪神の姿が掻き消えると共に、首から下の感覚が消えた。

「っ——」

声を出そうにも掠れた音さえ出せず、視界もどンドン下へ落ちていく。

そうして頭から地面に叩き付けられ、自分がどうなっているのかを把握した。

(……ああ、首から下が消し飛んだのか)

首から下にあった穴が開いた胴体も、それに付随していた手足さえ、今の俺には無かった。

血を操作して生命維持を図るにしても、肺が無ければ酸素の供給も儘ならない。

感覚的に邪剣を持っていた左腕だけは何処か遠くに有ると感じられるものの、左腕だけではどうにもしようがない。

『……………ム、マサカ、本当ニコノ程度ダツタノカ?』

「———!!」

何かを言っているらしい犯罪神の声が聞こえる。

しかし、俺が見たのは他総てを塗り潰すような闇と、その闇の中で踊り狂う黒い女だけだった。

赤黒い空も、黒く染まった呪われた大地も、幾つもの山のように積み上げられたゲーム機やソフトも、捕まっていた当時から比べるとその量も濃度も落ちたと感じるギョウカイ墓場

ネプテューヌの所の人間も、ユニを含む候補生も、ブランも欠けた現女神だけでそこへ突撃した私達は、厄介な足留めを食らっていた。

「ハク！ ハク!! 起きなさい!!」

「……………」

そうベールは叫びながら、何故かこんな場所に居て、何故か死んだように眠るリーンボックスの女神候補生の身体を揺すっている。

(…………まあ、こんな場所で寝てる理由は分からなくもないのだけど)

明らかにアレが関わっているだろう、骨を含んだ血で髪と服の一部を固定して引き摺るように運ばれていたリーンボックスの女神候補生——ハクを見て、私は慌てて来た原因となった情報との差異に顔をしかめて考える。

(…………ダメね、情報が少な過ぎる)

しかし、あまりにも情報は少な過ぎ、考える事が無意味と言う結論にしか行き着けなかった。

私は、この訳がわからない現状で唯一はつきりしている方、つまり、犯罪神の力が感じられる方を見る。

「…………犯罪神は、あっちの方みたいね…………」

その力は数分程飛ばせば埋まる程度とは言え、離れていても尚恐怖すら感じる程に強大で、聖剣があっても本当に勝てるのかと言う不安が消える事はなかった。

なにせ、亜空間と呼ばれてはいても実質的な繋がりには殆どないギョウカイ墓場からゲームギョウ界にまで空間を超え、震災と言う形で大きな影響を出した程の力だ。

最低でも空間の壁をぶち破って大きな影響が出せるレベルである事は想定でき、そこまでの力は女神にはなく、そもそも四天王を倒し

にいった時よりも戦力は下がっている現状では勝率は非常に低い。  
（……いいえ、グロウは勝てないのに勝てるというほど耄碌も盲信もしてなかったわ）

勝てる訳がないと理性で判断したものの、思い出すのは矢鱈自信満々に私達を送り出した信頼できる副官の事だった。

あいつは踏まれたり過剰な労働を課されたりして悦ぶような変態ではあるが、それだけにそんな現状が失われるような結果になる可能性は徹底的に排除するような奴だ。

（……まあ、ユニ達が連れて来られない以上は考えても仕方ない、か）  
正直、今のレベルダウンした私達より戦力になり得るユニ達が連れて来ればとは思うものの、無理なものは仕方がない。

犯罪神の力に影響されたのか、地震が治まったと思えば突然町や村に襲撃してきたモンスター軍勢には無駄に戦力が揃っているプラネテューヌは言うに及ばず、ラストイションだってあいつが集めて鍛えた部下が対応するから上位の危険種以外ならある程度は大丈夫なもの、そこで気絶している候補生がモンスター退治を過剰にやっていたリーンボックスには対応できる人材が足りずに幾つかの町が陥落しかけていた。

だから同盟を結び、これから守護女神戦争を終わらせる為の和平を結ぶ関係上仕方なく、リーンボックスに貴重な戦力であるユニやネプギアを送り込むしかなかった。

（まあ、その穴埋めは後できっちり請求するとして、問題は犯罪神をどう倒すかね）

そう、一番の問題はそこだ。

感じられる気配からして、犯罪神と候補生を含む私達女神の力には大きな開きがあり、女神化した私達が全盛期だと仮定して全員で戦っても十中八九で力負けする。

候補生<sup>妹</sup>達に加えて雪崩れ込んだ吸血鬼達に対処する為にブランも不在のこの状況では、頼みの聖剣が役立たずだった時の為にグロウ曰く全盛期の私達四人に近い力を持つらしいリーンボックスの候補生が目覚めるのを待つ以外の選択肢はない。

そんな事を考えていた時かしら？

「……………ん、んう……………?」

「ハキユツ?!」

ベールの妹が目を覚ました——ツツ?!?!

「あばばばばば、ヤバイ！ ヤバイよこれ」

ベールの妹が目を覚ましたと同時に、突然犯罪神の力が爆発的に高まる。

その力は先程の比ではなく、先程を蠟燭の火に例えるなら今は山火事と言った所だと思う。

「な、なに?! なんなのよ、この力は?!」

動揺して慌てるネプテューヌの隣で思わずヒステリックに叫んでしまうが、それほどにどうしようもない力の差だ。

(さっきまでだって勝てるかどうか分からなかったのに！ こんなの、勝てる訳ないじゃない?!?)

しかし、悪い事は続くようで

『……………』

「あ、ああ……………」

「もうだめだー……………おしまいだー……………」

犯罪神が、目の前に現れた——

## 第八十三話

『……………ム、マサカ、本当ニコノ程度ダツタノカ?』

目の前の首だけになった生け贄を見据えて、我は思わずそう呟いた。

目の前の生首からは先程まで感じられた膨大な力は感じられず、魂こそ残っているがこの状態から再生して復活する様子はない。

「……………」

念の為、消し飛ばさないように最小限まで力を絞って槍の穂先で突くが、生首が復活する事はなかった。

『フン…………』

まあ、良い。

これで幕切れだと言うのなら、我にとってそれはそれで別段構わない。

もう少しこの身体の力を思う存分振りたいとは思わなくもないが、ウォーミングアップ程度にはなった。

『…………マア、良い…………ナラバ、我ハ■トノ契約ヲ果タストシヨウ』

原初の我だった頃からの付き合いである神器の槍を地面に突き刺し、我は祈りを捧げる。

本音を言うならば祈りを捧げる等したくないが、あのアバズ——御母様はこうしなければ反応しないし碌な事をしない。

にも拘らず心の中で思った暴言には必ず反応する辺り、何処かで出待ちしているのは明白だ。

心底腹立たしいが、目的の為には仕方がない事なのだろう。

「クスクス…………」

そんな上品な笑い声を上げながら浮かび上がる黒い塊を見据え、我は余計な思考や感情<sup>罵倒</sup>を切つて頭を垂れた。

『…………コレデ、良いノダツタカ?』

「ええ、ご苦労様、とでも言った所かしら?」

そう、私の問いに答えて、目の前の黒い塊——御母様は、先程仕留めた男の生首に対してまるで情欲に狂った淫魔の如く矢鱈と卑猥

な手付きで撫で回した。

「ツツツツツツ——!!!」

ただそれだけの事であるにも関わらず御母様はまるで数日程手足の自由を奪われ、薬や改造で感度を高められて焦らすだけ焦らされ続ける生活を強要された女のように悶えている。黒い塊だから表情は分からないが、顔も淫欲に塗れて相当酷い見せられないよな有り様だろうか？ 容易に想像できてしまったそれは控え目に言って気持ちわらっ？!

「……あら、勘は良いのね？ それ以上考えてたら壊してたわ」

『……申シ訳アリマセン』

全身を穴だらけにするストレスで止まった全方位を囲む黒いトゲは私の身体を貫く寸前で留まっているものの、考えを止めていなかったら確実に貫かれて魂まで消滅させられていただろうあり得た未来に我は冷や汗を掻きながら、泥のような威圧感を放つ御母様に謝った。

「クスクス……そこで御母様と続けない貴女は嫌いじゃないわ……」

そんな思ってもない事を言つて黒いトゲを消すと、御母様は生首をアレな手付きで撫で回す作業を再開した。

『……………』

ああ、御母様は恐ろしい。

先程まで御母様と同じ黒い力を器に纏っていた生首等比較対象にもならない程に恐ろしい。

あの生首が幾ら御母様と同じ力を纏おうと、その大部分が与えられた力に耐えきれずに自壊し、崩壊と修復を繰り返していた。

挙げ句、まともに扱った経験もないのかその大部分が無駄になり、実際に強化に回せていたのはほんの数%程だったろうか？

(ソレデモ我ヲ滅ボシ得ル力ヲ発揮シタ辺リニ御母様ノホストニ際限ナク貢グ金持チノ如キ入レ込ミヨウガ窺イ知レルガ……イヤ、コレ以上ハ止メテオクトシヨウ)

こちらに飛んでくる視線を感じて考えを打ち切ると、何処となく満足気な雰囲気を感じた御母様は喘ぎ声を挙げながら左手と思われる





辛うじて崩壊は免れているのだが、それも長くは保たないだろう。

『ア、グ……ガ、ア、ア、ア………?!?』

そんな崩壊間近の器に無理矢理流し込まれる膨大な力に適應する為か、器が強引な肥大化を始めるが――

【もう、醜いからそう言うのはダメって言うてるでしょう?】

そんな御母様の一言と共に膨れ上がろうとしていた筋肉は削り取られ、竜の首から下に変化しかけていた下半身は元の人型のそれへと押し戻される。

背中から生えそうだった二対の腕は弾け飛び、腹部で縦に開いた大口は熔接されたかのように閉じられた。

『ア、アア――ツツツツツツ?!?!?』

余りの絶望と逃げ場から強引に戻されて行き場をなくした力による痛みで声にならない声が出る。

無理矢理圧縮しても圧縮しきれない力で肥大化させていた部位を削り取られ、元の状態に戻された結果、力の圧縮も儘ならなくなり放出され、器には大きな亀裂が走り出す。

『ナ、ゼ……?』

その一言を絞り出すだけで、モンスターの証である蒼い血が我の全身から噴水のように噴き出し、器の崩壊が加速する。

大量の亀裂が走り物理的に崩壊しかけている器を強引に動かして、未だに力を送り込んでくる御母様へとその真意を問い質すが……

【……何故? 貴女如きにゲームギョウ界は壊せないからに決まってるでしょう?】

『ソ、N、ナ……WA……ケガ……』

そう、そんな筈がない。

今のゲームギョウ界に於ける最高レベルは現存する女神の4000代を除けば真祖吸血鬼トウルヴァンパイア、それも真祖の中で永く生きた上位の個体Lv.6000が2、3体だ。

その真祖は来る日の為に眷族エルダーヴァンパイアの古代吸血鬼に守を任せて眠りに就いている上に、吸血鬼自体が個体差は有れど御母様の側である。

人間の力などたかが知れている事も考慮すれば、女神を正面から殲

滅しきれただけの力を持てばゲームギョウ界を滅ぼせる。

にも関わらず、我ではゲームギョウ界を滅ぼせないと宣った御母様に『そんな筈はない』と返すと――

「……はあ？ ゲームギョウ界を壊すなら、最低でもLv10000000はなければダメに決まってるでしょう？」

――そんな、恐ろしい話を聞かされた。

『……………ハ？』

ひやく、まん……………？

なんだそれは……………レベル100万……………？

『ク、狂ッテル……………』

それは我が我になる前、女神だった当時のLv100000を裕に超え、神話や伝承の域に達するものだった。

その神話や伝承でさえ、創世記最期の女神はLv1000000が四柱、その先代でLv800000である。

創世記処か数万年前よりも弱いモンスターしか残っていない現代では、例えゲームギョウ界に生きる生物を種族問わずに根刮滅ぼしたとしてもそのレベルに届きはしないだろう。

「……………あらあ？ 言わなかったかしらあ？」

『……………ア、――!!』

愉しそうな雰囲気の御母様に聞いてない！ と叫ぼうとしたが、空気の掠れた音が鳴るばかりで我の口から言葉が出る事はなかった。

口から出る事はなかったが……………やはり、思った事は読んでいるのだろう。愉しそうな雰囲気が更に深まるのを感じる。

あの様子を見るにこの状況は態となのだろう。自然と、これまで無理矢理抑え込まれてきた殺意や憎悪が湯水のように湧き出してくる。

(アア、モウ……………良イカ……………)

最早、我慢などしなくて良いのだと

不満を口に出そうとしただけで躰と称して痛め付けられて数万年どうせ死ぬなら、最後に言いたい事を好き放題言わせてもらえ

と思っていたのかしら？

『?!?!?!』

?!?!?!?!

大量に流し込まれていた力が、一斉に暴走を開始する。

それはまるで、燃え盛る焔にガソリンを放り込んだように――

【それじゃあ、最後のお勤め行ってらっしやくい♪】

あのキチガイBBAの言葉を皮切りに、我は内側から爆発した力によつて吹き飛ばされたのだった。

## 第八十四話

『……………』

「あ、ああ……………」

空間を轢き千切って黒い闇の中から現れた犯罪神は、何故か毛皮の所々が破れて蒼い血を滲ませ、左腕を炭化させていた。

「……………もうだめだー……………おしまいだー」

だけど、その力は相変わらず健在で、四女神が束になつても勝てなかった彼岸花のような四天王の何万倍も強い力がわたし達を威圧する。

「……………」

「ハ、ハク!?!」

女神化していたとしても尚、そんな威圧感だけで殺されそうな圧力の中、ベールの妹のハクちゃんは犯罪神に向かって慈母か何かみたいな微笑みを浮かべながら歩き出す。

慌てたベールが止めようと手を伸ばしたけど、威圧感に曝されて腰が抜けたのか、その手がハクちゃんに届く事はなく、どうにか身体を動かそうと足掻いている数秒の間にハクちゃんは犯罪神の直ぐ目の前にまで辿り着いてしまっていた。

「はいいつ?!」

「なん…だと……………」

——そう、単なる威圧が物理的な圧力になつて女神さえ寄せ付けなくなつてる犯罪神の目の前にまで……………」

「ねえ、犯罪神さん」

『……………』

そんな異常な光景でも尚、余裕綽々な感じに微笑みを崩さないハクちゃんは、微笑んでいるのに不気味な気配を漂わせてボロボロながらも強大な力を振り撒く犯罪神に声を掛ける。

話掛けられた犯罪神はそんなハクちゃんに反応を返す事なく沈黙を保っていたが、次の瞬間、信じられない一言と共に信じられない光景が目についた。

「どうして——そんな虚仮脅しにしかない力を撒き散らしているのかしら?」

『……………?!?!?』

なんと、ハクちゃんの一言を皮切りに、犯罪神は脇目も振らず全力で逃げ出したのだった。

「うふふ……逃げしませんよ?」

『ガ、アアアアアアアア——?!?!?』

ここからだと思中しか見えないけど普段のネプギアみたいな清楚で大人しそうな雰囲気とは違う、あれで意外となんちゃって系お色気枠のベール以上に妖艶で、非常に退廃的な雰囲気を漂わせながら、ハクちゃんは白い光を全身から放ち檻のように囲んで犯罪神から逃げ場を奪った。

光の檻に直撃した犯罪神は全身を焼かれたのか非常に香ばしい匂いを漂わせながら檻を破壊しようと暴れるが、それでも光の檻は壊れる気配を見せない。

それ処か——

「威圧感が、消えていく……?」

——なんと、犯罪神から感じられた絶望的なまでの力の差からくる威圧感が、光の檻に触れて暴れる度にまるで嘘だったかのように消えていったのだった。

『オ、ノレ——オノレオノレオノレオノレオノレオノレ、オノレエエエエエ!!!』

暴れても檻が壊れないと判断したのか、光の檻から離れた犯罪神は地の底から響くような声を上げ激怒するが、既に先程までの暴力的なまでの威圧感を見る影もなく

今もなお、犯罪神が女神わたし1人よりも強い事には変わりなかったが、感じられる力は三年前にわたし達を捕らえた彼岸花のような四天王と比べても弱々しいと感じられるまでに弱体化していた。

「……あの、これやってる間は私も動けませんので、早く犯罪神を倒してくださいませんか?」

「え、ええ……そうね」

「ハク…… ええ、ええ！ 私、全力で犯罪神をぶちのめして差し上げますわ！」

その極端な変化に戸惑っていると、突然振り向いたハクちゃんからジトーつとした目で見られ、早く犯罪神を倒してと急かされる。

……なお、何故かものすごく目をキラキラさせて興奮している殺る気満々と言った感じのベールは全力で見なかつた事にしつつ気にならない事にした。

(……ええ、これが好機なのは変わりないだし、犯罪神を倒すなら今しかない……のよね?)

実際、ここを逃せば次はないと思える程のチャンスなのだから……けど、どうしてなのかしら?

さつきからこの状況に激しい違和感を感じ、脳に警鐘が鳴り響くのは。

ベールもノワールも、誰も気にしていないように見えるけど、あまりにも現状はわたし達女神にとって都合が良過ぎた。

あの時感じた力からして本来なら絶対に勝てないと感じられる力の差があるのだろう犯罪神は、わたしが一人では無理でも四人全員で戦えばどうにかなる程度にまで弱体化し、それだけ弱っているにも関わらずわたし達の前に現れた。

弱体化に関してはアナザーが必死に喰い下がって頑張った結果なのだとしても、どうしてそんな状態の犯罪神がわたし達の前にノココと現れるのか……

「ーヌ！ ネプテューヌ!!」

「……えっ?」

「なにをボーツとしていますの?」

「早く聖剣を構えなさい！ 行くわよ！」

そんな事を考えていると、ノワール達に声を掛けられ、早く構えろと言われた。

「……ええ、そうね。ごめんなさい……少し、ボーツとしていたわ」

「まったく、こんな時になにやってるのよあなたは！」

「さあ！ このまま犯罪神を倒してハクとゲーム三昧の日々を送りま

すわ！」

ノワール達に怒られたわたしは聖剣を構えると、それぞれが武器を構えて犯罪神に突撃する準備が整っていた。

「ごめんなさい……じゃあ、終わらせましょうか」

わたしは先程までの考えを一旦打ち切ると、まるで全てを諦めたように立ち尽くす犯罪神に目掛けて女神化すると同時に聖剣で斬りかかって行った。

(……ええ、難しい事はいーすんやあいちゃんにでも相談して、一緒に考えて貰えば良いわよね……?)

御母様……いや、もうあんな奴をそう呼ぶ必要もないか……契約を違えたクソババアの手で器を半壊にまで追い込まれ、女神達の前に放り出された我は、忌々しいクソババアの執着していた小僧の同類……否、それ以上に複雑で、絶妙なバランスの元に存在が成り立っている小娘の手で拘束されていた。

『オ、ノレ——オノレオノレオノレオノレオノレオノレ、オノレエエエエエ!!!』

拘束から逃れようと暴れる度に光の檻は我の半壊している器を砕き、あのクソババアに飛ばされる時にその領域からどうにか掠め取り、壊れかけた器を補修するように纏っていた力は霧散する。

器を補修するように纏っていた力が霧散した結果、支えを失った器はまた崩れ出した。

崩れそうな器を気合いと執念で強引に保とうとするが、光は我の器の脆い部分を破壊し、既に破損している箇所も含めて内側に潜り込み、結合から溶かしていく

「でえええええい!!!」

焼却されて剥ぎ取られたクソババアの領域から掠め取った力の残



滓を含めた力の殆どを費やしても破れない光の檻によつてこの場から離脱する事は不可能であると判断した我は、最早どうしようもないと、全てを諦めて眼前の女神が振るう剣を受け入れた。

『……………ガッ……………』

「……………えっ」

胸に深々と突き刺さった白く輝く剣は我を内側から焼き尽くさんとばかりにヤミを溶かし、力を削ぎ落とす。

更には、我の核である魂さえも——ああ、そうか

(あ、ああ……………我が、消える……………)

クククツ……………まさか怒りや憎しみで暴れ回り逃してしまいもう二度と来ないと思っていた好機が、あの時の後悔がこんな形で晴らされるとはな……………

眼前の女神達は訳が分からないとでも言いた気な表情で何もせず剣に大人しく貫かれた我を見るが、知った事ではない。

(あれは確か9000年前だったか……………あの時の剣が、堕ち果てた光が、我を本r——)

———そうして、我はゲームギョウ界から完全に消滅した。

## 第八十五話

犯罪神が討たれる前の事

「アーツハハハハ!!」

「不味い! もう一匹イ!!」

「ヤバイ、にギヤアアアアアア——?!?」

「ヨツバシー——!!!」

どんよりと曇った空の下、陽光が分厚い雲に遮られているのを良い事に、ルウイーでは雪崩に便乗して山奥から降って来た100を超え、数の吸血鬼達が昼間からまるでキノコのような形状の民家を焼き、黒い塔のようなデパートを襲い、兵士達を蹴散らしながら生き血を啜り、逃げ遅れた人々を串刺しにして遊び血と肉を撒き散らしていた。

「弱いなあ? ニンゲン」

『Guru——』

「ヒイツ?!」

「ひ、怯むな! 後少してブラン様達が帰ってくる! それまで何とかしても耐え凌ぎ市民を守るnガファ?!」

「ぎやはつ、ギヤハハ……アーツハハハハハア!!」

「た、隊長——!!!」

狼に囲まれて怯える兵士を鼓舞しようと声を上げる隊長へと凄惨な笑みを浮かべた吸血鬼が一瞬で迫り、腹に腕を挿し込んで直接繋がった血管を傷付ける事なく心臓を抉り出す。

抉り出しても尚、ドクン、ドクン、と鼓動を刻んでいた心臓を持ち主の部下達に見せ付けるようにして吸血鬼の1人は握り潰し、その血をシャワーのように浴びながらゲラゲラと嗤って、次の獲物を品定めするかのような眼差しを残された部下達に向ける。

それはまるで屠殺場の豚を視るような眼差しであり、次はどれにしようかなど、誰を選べば少しでも多く嗜虐的な嗜好を満たせるかを考えている眼差しであった。

「い、イヤダ……死にたくない……死にたくない!」

「たす、助け……助けてください……!」

「……………?!?!」

次は自分達の誰かだ……そう感じた三名は、逃げる意思すら喪つてガタガタと震え続ける。

しかし、そうなるのもやむ終えないのかもしれない。

純粋な吸血鬼の括りに於いて最下位である下位吸血鬼レッサーヴァンパイアですら人間で言う所の中堅冒険者——凡そレベル40前後のパーティーと互角に渡り合える。

戦闘の技術やレベル自体が極端に低い場合はもう少し落ちるが、それでもレベル30のパーティー1つ位なら高い身体能力と心臓か頭部を大きく破損しない限り再生し続ける高い不死性で返り討ちにしてしまうのが、最下位の下位吸血鬼レッサーヴァンパイアだ。

「さあ、巻族共！ 削ぎ落とすように喰らい貪れやア!!」

『G A A A A A A——!!』

「二あ、…あああああああ——」

ましてや、今兵士達の目の前に居るのは上位吸血鬼グレートヴァンパイアの巻族であり、上位吸血鬼から吸血鬼としての異能である『変身能力』『巻族作成』『不死性』の中から2つ、『巻族作成』と『不死性』を引き継いだ中位吸血鬼ミドルヴァンパイアだ。

その力は下位吸血鬼レッサーヴァンパイアの比ではなく、最低でも上級冒険者に匹敵する。

根本的に生物としての規格が違う。幾ら厳しい環境や散発的に襲い来る吸血鬼の脅威が常に在るルウイーの兵が精強とは言えど、雪崩で指揮系統を破壊され、下位が多数と言えど100近い数の吸血鬼に襲われれば成す術もないのだ。

「———?!?!?」

そして、声にならない悲鳴を上げながら、三名の隊員達は狼に貪り喰らわれた。

それから程なく



(おいおいおい、よく見たらご近所さんやお隣の集落の連中がそこらじゅうに……どうなつてんだよこれ)

俺達は元はその辺の町や村から食糧調達係りだとか身の回りの世話だとか、何かしらの理由で浚われて吸血鬼にされた後、親の上位く中位の吸血鬼が何等かの要因で死んで解放された元人間の中位く下位の吸血鬼達の集まりだ。

親の吸血鬼は大体人間を家畜以下のゴミとしか思っていない場合も多く、その辺の村が進行方向に在ると俺達に命令して更地にしてから通るなんてのもザラにあった。

その時の悪行から(大体時間が経ち過ぎていて帰る場所は残っていないが)人間の所に帰る訳にもいかず、かと言って生まれながらの吸血鬼——真祖ではなく、三代以上両親が吸血鬼だった連中の事だ——達の中に戻つても居心地が悪い、悪過ぎる。

一応、親無しの扱いはそいつが強ければ相応の地位をくれるし割りとは自由なのだが、弱ければ容赦なく奴隷落ち

人間を浚つて吸血鬼にしたら親がどんな扱いをしても基本的に干渉は許されず、上位個体から浚つた人間に惨い拷問を加える遊びに誘われたら強制参加

精神を病んで狂った奴は数知れず、あまりの悲惨な扱いや拷問を加える事に堪えかねて防衛と監視の任務を請け負う形で親無しが集まって人間の近くに集落を作ったのが俺達の集落の成り立ちだ。

……まあ、そんなこんなで今日まで自衛以外で人間を襲わず、集落の中で大人しく生活しながら人間の国の動向を蝙蝠の眷族作成持ちが報告して偶に飛んでくる女神から隠れながら時折来る上からの命令をこなし平和な日々を過ごしていた訳だが——

「……これ、ヤバくね?」

「……どー考えても、ヤバイよね?」

あちらこちらから立ち昇る黒煙

たまに聞こえてくる大質量が雪に叩き付けられたような音

ついでに聞き覚えのある複数の高笑い

シユアの顔が引き吊るのが見える。恐らく俺の顔も似たような表





幸いにも、触れて直ぐに弾かれているから指で壁を穿られる事は防  
げているが、それでもそう遠くない内に結界は破られ、壁を破壊した  
吸血鬼達が雪崩れ込む事だろう。

「……………えか」

そんな光景を見たブランは、下を向いて拳を固め、肩を震わせる。

「…上等じゃねえかあのヤロウ!!」

そう言ったブランの纏う純白のスクール水着のようなプロセツサ  
ユニットが黒く変色する。

神器である白く神々しかった戦斧は黒く染まり、より凶悪に、より  
禍々しい形状に変化してその重量を増す。

同時に纏う力が増大し、可視化する程の灰色の光が小柄な身体から  
発せられた。

「絶対に許さねえぞムシケラ共が！ 全員まとめてブチ殺してやる!!」

一匹も逃がさねえぞ覚悟しろオ!!!」

そうして、怒りの臨界点を超えたブランはどこぞの宇宙の帝王のよ  
うな事を言いながら激怒し、教会に取り付いている吸血鬼達を瞬く間  
に皆殺しにしたのだった。

犯罪神が自決した直後の事

「つ、——ああ……………?!」

ズル、ズル——と引き摺るようにして前に進みながらギョウカイ墓  
場の黒い大地に焦げ茶色の染みを残し、少し進む度に火花を散らしな  
がら全身から機械の部品をバラ撒いている赤黒い塊があった。

「ギ、イギユ——!!」

この機械と肉の入り雑じった塊は嘗て、犯罪組織マジエコヌ又四天  
王、ブレイブ・ザ・ハード直属の配下として活動していた。

それがどうしてこうなっているのかと言うと、単純だ。

ブレイブ・ザ・ハードが負ける直前に隠れ家へと逃がしたのだが、そ



ここで敬愛する上司を喪い無気力状態になって脱力した事で治療や修理が遅れ、疲労やダメージが回復して行動が可能となる前に犯罪神とアナザー、そしてハクの戦いの余波をまともに浴びたのである。

余波だけで全身にもう助からないと断言できる程の致命傷を負ったそれは、意識もまともに保てない激痛を感じながらも狂気のような意思と妄執の如き激情故に生き続け、文字通り這いつくばってでも進み続けていた。

「あ……………」

全ては、自分から唯一無二の希望を奪ったアナザーへの復讐の念故だ。

それだけが、今の肉塊——リリスの壊れた肉体を突き動かす力となっていた。

「ご、——ごはあつ…ゴプ、ごファ…?!」

しかし、それも限界に近い。

口からオイルが混じった大量の血を吐くと、前に伸ばした腕がぼたりと地に落ちる。

「……………」

そのままピクリとも動く事はなく、リリスはギョウカイ墓場の奥深くで力尽きた。

最早、リリスが活動を再開し、それ以降も命を繋ぎ続ける事はないだろう。

——ある物が飛んで来なければ、だが

突如として凄まじい勢いで飛んで来たそれは、この世の全ての悪意と呪詛を束ねたかのような禍々しい剣……否、剣の容をした邪悪であつた。

それは常人が視認すればそれだけでモラルや理性を蒸発させ、英雄と呼ばれる程の逸材であろうとも、恒星にも等しい輝きを放たぬ限りは握った瞬間に悪へ堕ち、二度と醒めぬ狂乱の檻へ囚われるだろう。

「……………がはっ?!?!」

そんな邪悪の権化の如き剣はリリスの胴体と思われる部位に突き刺さる。

その瞬間、ピクリとも動かなかつたりリスは海老反りになり、ビクン、ビクンと跳ねた。

「ア、あ亞痾極蛙両鏹鏹會姍娃聖唾阿吾——!!!」

それに伴い、酷く大きな悲鳴を上げて全身を黒い闇が覆う。

「……これ、は——」

それから暫くして悲鳴が収まり黒い闇が晴れると、そこには生まれのままの姿で立つ女の姿が在った。

女は自分の体を見遣り、その手で全身をペタペタと触り出す。

その髪は金糸のように煌めき、忙しく動く瞳は翠玉の様な翠色をしている。

手足はすらりと長く、括れもあり女性らしい丸みを帯びた豊満な体付きだと言える。

そんなおおよそ一般的に美女と呼べるだけの美貌を持つ女の姿で唯一可笑しいと言えるのは、邪悪の権化の如き剣と同化した左腕だけだった。

「……は、ハハ——」

「——はは、つはは……ハハはハハはハハはハハはつはははハハはハハははは——!!!」

女は唐突にギョウカイ墓場の赤黒い空を見上げて乾いた笑い声を上げると、何もかもが狂っていると言わんばかりに狂った笑みを浮かべ、狂笑を上げる。

そのまま暫く狂ったように笑い続けた女は、両手で顔を掻き毟ると同時に底冷えするような声で呟いた。

「………コロス」

そして左腕と完全に同化している剣を振るい、空間を引き裂くと引き裂いた空間に身を投じたのだった。

## 第八十六話

犯罪神が自殺してから早数ヶ月

プラネタワーの屋上から復興した街を眺め、わたしは憂鬱な気分  
でいーすんに話し掛ける。

「……………たくさん、死んじゃったね」

「そうですね……………」

うちとノワールの国は比較的被害の少ない方だったけど、ブランと  
ベールの国は相当酷い事になっていた。

それでも昔はアナザーの狩りを良く見てたからグロ耐性の高い方  
なわたしでも目を逸らしたくなるようなR20Gまつしぐらな状態  
のルウィーと、噴火の影響で国土の4分の1がマグマに埋まり、4分  
の3に火山灰が飛んで農家の人達に影響が出てるリーンボックス

それぞれ復興作業を進めてはいるし、早くに復興が終わったプラネ  
テューヌとラストেশヨンもそれぞれ支援協力はしてるけど、ル  
ウィーだけはどうにも上手くいかない。

リーンボックスの方は人と作物の被害こそどうにもならなかった  
けど、巻き上げられた大量の火山灰はラストেশヨンの工場地帯に置  
いてる煙を吸い込む機械を改造した火山灰を吸い込む機械で除去し  
て太陽の光を確保できたし、東側の固まったマグマはうちのロボット  
と削岩機で3割を撤去し終えた。

ベール達も色々とやってるみたいだからとりあえず来年には回復  
すると思うんだけど……………

「…………ルウィーは、大丈夫かな？」

「…………きつと、大丈夫だと思います」

ルウィーの方は人や建物の被害が大き過ぎた。

地震で起きた雪崩で指揮系統が混乱してる時に雪崩に紛れて吸血  
鬼達が一斉に襲い掛かり、兵士の人達は大部分が犠牲になって雪崩か  
ら逃げ遅れた民間人を救助して逃がすだけで精一杯

それでも雪崩から逃げ遅れた人達の殆どを教会に逃がしてブラン  
が帰ってくるまでの間、吸血鬼の猛攻を耐えたんだからすごいよね

……

「……わたしも、頑張らないとダメだよね」

今まで書類仕事はネプギアに任せてあんまりしてこなかったけど、これを知って何もしないなんて——

「……ネプテューヌさん？ 熱でもあるのですか？ ……まさか、犯罪神と戦った時に頭を打ったのが今になって——」

「ねぶっ！ ナチュラルに頭の心配された!？」

——って考えてたらいーすんに頭の心配された!？」

「ちよつといーすん！ 流星にそれは酷くない!？」

「いえ…今までのネプテューヌさんを見ていたら当然の反応だと思うのですが……ああ！ 不貞寝しようとしなくてください！ 謝ります！ 謝りますから——!！」

(ふーんだ！ 良いもん！ 明日から本気出すもん!！)

いーすんにひどい事を言われたわたしは、無職の人みたいな事を考えながら近くにある椅子に寝転がって猫みたいに丸くなるのだった。

(……そう言えば、あれからアナザーは何処に行ったんだろう?)

まあ、いつか……明日いーすんに聞いてみよう

……その日わたしは、綺麗だけど寂しい世界の夢を見た。

ここは光の膜に覆われたギョウカイ墓場と同質同系統でありながら、ゲームギョウ界の地獄であるギョウカイ墓場を超える深く暗い闇の中

『……………』

そこにぼこぼこ泡を立てながら、青白い肌をした銀髪の女の生首は闇に浮かんでいる。

その顔は非常に満足そうであり、未練や不安など微塵もないと言わんばかりの微笑みである。

『ハハハ！ 見ろよ●●●、犯罪神の奴、無様に負けた癖に満足そう

に逝ってやがるぜ!』

『……ああ、妬ましい……何故、私の時にこうなってくれなかったのか……』

そんな女を聖剣で自決した犯罪神と呼び、愉しそうに嗤う蒼い髪の少女と羨望と嫉妬の眼差しを向ける紫銀色の髪の少女は闇の中から浮かび上がる。

『そりゃあ無理な話だな! 全てはあのあば……つと、危ない危ない、お母様がどれだけ個人的な感情を抑えられるかだぜ?』

『……ええ、分かっています……』

蒼い髪の少女は、妬まし気な紫銀色の髪の少女を皮肉るように言葉を紡ぐが、ただ一点、アバズレと言い掛けた時に蠢いた闇を見て言葉を改め、誰かにアピールするかのよう強調して『お母様』と言いつ直した。

紫銀色の髪の少女はそんな蒼い髪の少女を見ながら分かっているとは言うが、あからさまに『私、不満です』と言わんばかりの表情である。

『……では、次は私の番ですので』

しかし時間が押していて不満ばかりも言っていられないのか、今にも舌打ちをしそうな表情を隠しもせずに紫銀色の髪の少女は光の膜に触れて消えていく。

『おう! 精々気を付けるんだな!』

そう言って不満そうな表情のまま光の膜に消えていった紫銀色の髪の少女を見送り、蒼い髪の少女は独り呟き始めた。

『しっかし、オレの後輩達もバカばかりだよな……自分達が女神として、人類として滅びる事が出来る最後のチャンスを不意にしちまったんだから——』

その表情は侮蔑はあれど確かな親しみが感じられた紫銀色の髪の少女へ向けていた複雑な笑みとは違い、侮蔑と否定のみが色濃く出た嘲笑である。

『——まあ、アイツが失敗するまでオレの出番はないんだし、逆鍵絞り滓のオレを言いくるめる謳い文句と計画の見直しでもして待つ

ているかな……?」

『フフフ——』と笑いながら、蒼い髪の少女は先程の紫銀色の髪の少女と同じく、闇の中へと消えていったのだった。

……その数秒後、犯罪神と呼ばれた女の生首以外に誰も居なくなつた闇から突然現れた淡い金光が紫銀色の髪の少女が消えた方向とは反対の方向に向かつて光の膜に消えていったのを最後に、闇の中は静寂に包まれた。

犯罪神に殺された俺は、気が付けば何処とも知れない闇の中に囚われていた。

【●●●……】  
『……………』

眼前で女が息を吸う度、犯罪神に消し飛ばされて失った筈の首から下——何故か邪剣を持っていた左腕だけがない——に内側から大量の蟲に喰い荒らされているかのような激痛が走る。

しかし、最近では上半身と下半身を叩き斬られて泣き別れにされたり全身を摂氏数千℃の光熱でこんがり焼かれたり内側から全身の血管が破裂したり全身が腐りながら再生したりと、痛みには事欠かない日々を送っていたが為にそれほどの苦痛ではない。寧ろ、こうしてものを考える余裕がある位だ。

問題は——

【■◆□◇、??+##%\*+||??!\$】  
(……何をいつているのがさっぱり分からん)

——目の前の女が何をいつているのかさっぱり分からんと言う現状だ。これではここが何処なのかすら聞けん。

……まあ、厳密には聞くだけなら出来るだろう。それを相手が理解

できるかどうかと、返ってきた内容を俺が理解できるかが問題なだけで

(……まあ、先代<sup>ウ</sup>と今代<sup>ラ</sup>のプラネテューヌ<sup>ス</sup>の女神ならそれぞれ天然ボケ噛ましながら何故か会話を成立させたり、強引にボケ倒して一方的に話し掛けるのだろうがな)

この変化に乏しい暗い世界の中で何時からか、時間の感覚が薄れる程度には長い時間を束縛され、機嫌の良さそうな笑顔を浮かべ続けている黒い髪の女に意味の分からない言葉を聞かされ続けている現状には疲れた。

現実逃避気味に赤紫<sup>ウ</sup>の髪をした女と薄紫<sup>ラ</sup>の髪をした少女<sup>ス</sup>に会った時の事を思い出して無聊を慰めていると、目の前の女に変化があった。

【……………】

……いや、何を言っているのかは相変わらず分からんし外見には然程変わらない。何故か機嫌の良さそうな笑顔もそのままだ。

ただ……なんと言うか、後ろからバツサリと串刺しにされそうな嫌な予感と全身をズルズルの肉塊されそうな威圧感が放たれているだけだ。

(……いや、それ殺気だよな……)

どう考えてもこうして呑気に考えている場合ではないのだが、脱出しようにも首から下は動かず、表面だけは形を保っているようだがその内側は虫食いだらけで張りぼて同然(だと思う)

どうやってか、この闇で拘束されていなくともまともに動けない以上、慌てても仕方ない……箒だ。

不思議と不安も恐怖も感じず、それどころかそこそ長い付き合いである箒のネプテューヌやイストワールにさえ感じた事のない安心感を感じている現状に困惑していると、唐突に殺気らしき圧力が収まった。

【……………】

(……あ、収まった)

少し時間が経って突然殺気が収まると同時に、目の前の女はそれな

り以上に豊かな胸元で腕を組むと、うんうん、とでも言いた気に首を縦に振る。

何か機嫌を直すような事でもあったか、それとも殺気を振り撒いていた理由でも無くなったのか

言葉は分からないが、初対面なのに妙に好意的で友好的な女は俺に手を差し向けると、内側から蟲に喰い荒らされるような感覚が治まった。

(……ああ、こいつが原因だったのか)

何時もなら内側から蟲に喰い荒らされるような感覚を味合わされたらキレて襲い掛かっている筈なのだが、やはりそんな気にはなれない。

何故だ……そう考えていると、目の前の女は突然意味の分からない／＼分かったくない行動に出始めた。

【◆◆△△▽▽――】

(えっ)

女は突然服を脱ぎ出し、その白い裸身を晒け出した――

『……………え、ちよ……?!』

――だけに留まらず、その右半身から黒い触手を大量に生やし、左半身の白い肌には大量の魔法陣を展開した。

その魔法陣からは無数の蟲、そして獣を放出し、俺の周囲を囲んでいる。

しかも、魔法陣から召喚された獣は例外なく狂ったサイズのナニを立たせ、召喚された蟲は股間のナニの形状をしている。

アレ等が自慰用とかでないなら……………

『……………(白目)』

………なんと言うか………あー、うん

『もう、どうにでもなれ』

その後、俺は目の前の女の手で全身の穴と言う穴に触手や蟲、獣のナニを無理矢理ぶち込まれ、ズルズルになったり壊れたりした肉や内臓は蟲や獣が貪った。

機能不全を起こした内臓やズルズルになった皮膚や肉、欠損した部



位はどうやったのか、今までの人生で感じた激痛を全て束ねて数百倍に濃縮したような痛みで意識を失っている間に完全に再生されていたのだった。

Re;Birth3編 第一章〈呪怨のオーベル  
テューレ〉

第一話

これは、早朝の事です。

「たあああああ!!」

『Gyuaaaaaaa!!』

目の前の翼が生えている私の倍以上の大きさをした茶色い二足歩  
行のトカゲ……エンシエントドラゴンを以前、犯罪組織との戦いで熔  
けてしまった大剣よりも更に耐熱性を上げた大剣で一刀両断して、そ  
の骸に光を浴びせて浄化します。

「はあ、はあ——っ」

犯罪神マジエコンヌが滅びて早3年、一時期は噴火で酷い事になっ  
た大地は最近やっと自然を取り戻しました。

火山灰で覆われていた空は晴れ渡り、(教祖のチカさんに聞いた限  
りだと)リーンボックスは失った自然の4割を取り戻しました。

私と言えば、相変わらず民を脅かすモンスターを討伐する日々を  
送っています。

……ええ、送ってはいるんですが——

「はあ、はあ……足りない……もつと、もつと闘いを——」

——犯罪組織マジエコンヌとの戦い以来、私はどうにも壊れてし  
まったようです。

少し戦うだけで、それも危険種とはいえ、下位の半ば程度のエン  
シエントドラゴンを一匹倒すだけで身体は火照り、息は切れ、心臓は  
激しく脈打っています。

なのに目は周囲にモンスター<sup>獲物</sup>は居ないかと忙しなく動き、スライヌ  
にすら反応してしまいますし、身悶えが止まりません。

なら戦わなければ良いのでは? とチカさんや姉さんには言われ  
ましたが、戦わないでいると今度は姉さんにその矛先が向きそうで  
す。

……いいえ、姉女神さんならまだいいです。

最悪姉さんに矛先が向いても、姉さんなら私と戦っても軽くあしらってくれる筈ですし

問題は、無英雄以下力な民にそれが向いた時です。

「…はあ、はあ…っ、いけない……」

思わず股間に伸びた大剣を持った左手の手首を右手で掴みます。

ああ、早く、早く強いモンスターと闘わないと……っ、治まりが、効かなく……

「あ、ああ……」

……また、やってしまいました

あまりの昂りで尿道が弛んだのか、チヨロチヨロと尿を漏らして下着とスカートを濡らしてしまいました。

浄化の光で直ぐに蒸発して乾くのですが、なんと言うか……この年にもなってお漏らしと言うのは、色々と恥ずかしい限りです。

まあ不幸中の幸いと言うか、それで多少は落ち着いたのですが、所詮は多少

多少の快感と共に、それ以上の欲求不満が蓄積されているのを感じています。

危険種さえ一撃で滅してしまう私とまともに殺り合える相手は中々居ません。

姉さん達女神か、ネプギアさん達女神候補生か、でなければ――

「っ、彼は救済の対象です。彼は教育の対象です。彼は守護すべき対象です。彼は――」

ダメです、アナザーさんはそもそもそういう対象ではありません。例えどれだけ強くても、彼は救済の対象であり、教育の対象であり、

守護すべき対象です。

…ああ、でも――

「――ああ、でも……今思えばあの日々は、とても素晴らしい日々でしたね……」

頬が吊り上がり、凶悪な笑みを浮かべているのを感じます。

本当に、本当なら人間であるアナザーさんはどれだけ強くても対等

の存在ではありません。

人間は女神が守護すべき対象で、何処までいっても慈愛以上の感情は向かない……ええ、向いていません。向いていませんとも

「……ええ、本当に……私は心底自重すべきです」

デモ、ドウシテモアナザーサントタタカイタイトカンガエテイルワタシガソングザイシテイルノモ、タシカナノデシタ

『……随分とまあ、壊れているようですね』

「っ!? 誰ですか!!」

咄嗟に何処かで聞いたような声がした方へ顔を向けると、そこには紫銀色の髪をした女の子の姿がありました。

『私が誰か、なんてどうでも良いですよね?』

「……いいえ、どうでも良くなありません」

女の子は、若いのにまるで生きるのが嫌になったお爺さんみたいな顔で私に話し掛けてきます。

自殺志願者か、でなければ引退して隠居した高位な魔法使いの方かと辺りを付け、私は女の子に声を掛けます。

「どうされましたか? ここは最寄りの村から3Kmは離れた危険地帯ですよ?」

『ええ、あなたに用があります。グリーンシスター』

どうやら女の子は私に用があつたらしいのですが、ものすごく嫌そうな顔をされているのはどうしてなのでしょう?

どうにも、本当なら顔も見たくないのに業務上仕方がないからと嫌々声を掛けたように見えるのですが……私、初対面の方にそんな顔をされるような事はしていないと思うのですが……

「どのようなご用でしょうか? 相談ですか? 懺悔ですか? 依頼ですか?」

……まあ、嫌々だろうとなんだろうと、用があると云うのなら私はそれを聞き、最善の答えと結果を出せるよう尽くすのみです。

……ええ、例えここが懺悔室でなくとも、依頼されたら後ろ暗い内容だと喧伝するようでも、誰にも聞かれたくない悩み位ならば聞き届け、その上でどうするかを決めれば良いのです。

『ああ、単純な話です』

そう言った女の子が唐突に指を『パチン』と鳴らすと、私の視界はぐにやり、と歪み始めるのでした。

「あう……な、なにが——」

『……今から少し、この次元から退去していて欲しいだけです』

……そんな女の子の言葉を最後に、私は意識を失うのでした。

## 第二話

太陽を分厚い雲に覆い隠された日の昼間、ネプギアと一緒にこれからおやつプリンを食べようとした所だった。

『ネプテューヌ!! そちらにハクは来ていないかしら?!』

突然のベールからの通信は、そんな言葉から始まった。

「……ハクちゃんが行方不明?」

『そうですわ!』

どうにか興奮するベールを宥めて詳しく話を聞くと、どうやら昨日の早朝からモンスター退治に出掛けたハクちゃんが帰って来ないらしい。

それだけなら、偶々泊まり掛けでモンスター退治に出てるだけなんじゃって思うんだけど……

『いいえ! ハクはわたくしに黙ってお外でお泊まりしちゃうような娘じゃありません!!』

「お、おおう……」

……とまあ、こんな感じでベールがすごい怒るから、とりあえず行方不明って事にしてみた訳なのです。

『とりあえず、あなたも仕事か遊びで外を回るようならハクを探してくださいまし!』

あー……本題はそっちかく……

「えー……わたし今日、書類関係の仕事をする日なんだけど……」

けど残念、ネプ子さんは今日は書類仕事の日なのでした。

『えっ』

「えっ」

……と思っていたんだけど、映像越しのベールからあり得ない事を聞いたような顔をされた件（泣きそうです）

『えっと……ネプテューヌ? あなた、本当に大丈夫なのかしら?』

「むー、心外だなく……わたしだってあれから結構がんばってるんだよー!」

「お姉ちゃん! プリン持ってきたよー!」

あ、ネプギアがプリンを持って来た！

「やつほーい！ プリンだ〜!!」

『ちよ、ネプテューヌ!? まだ話は終わって——!!』

ベールがまだなにか言ってるみたいだけど、わたしは目の前に差し出されたプリンに釘付けなのでした（はーと）

犯罪神が倒れてから、3年の月日が過ぎました。

お姉ちゃんに頼まれたおやつのおプリンを取って来た私は、自分の分を食べながらプリンに夢中のお姉ちゃんの代わりにベールさんのお話を聞くのでした。

『——と、言う訳ですよ』

「そう、なんですか……」

なんでも、ハクさんが昨日から帰って来ないから探すのを手伝って欲しいって話で、他の国も仕事のついでとして探して貰えるよう話が付いているみたいです。

（ハクさんが行方不明？）

ハクさん、同じ女神候補生なのに私とユニちゃん、ロムちゃんラムちゃんが協力して戦っても勝てないあの人——アナザーさんをたつた一人で何度も叩き潰した、恐らく女神候補生としての枠内なら最強の女神候補生

あの人が行方不明になる状況は想像が付かないけど、きっとそれが出来るとしたら………

『お願いできるかしら?』

「……………あ、はい！ 外回りの仕事のついでとしてなら、大丈夫だと思います」

何時の間にか血が出るぐらい握り込んでいた右の拳を開いて、ベールさんの質問に答えました。

（ううん、そんな筈はないよ……だってアナザーさんは、犯罪神との戦

いで命を落としたんだから——)

ハクさんを行方不明——最低でも殺せるだけの力を持っている人は、私の知る限りではもうお姉ちゃん女達位神のものです。

ええ、きつと何処かで迷子になってしまっているか、でなければ困っている誰かの為に奔走してるのでしよう。多分

(……だって、アナザーさんはもう死んだのですから)

……でないと、私……

『……ネプギアちゃん?』

「え?」

『どうしましたの?』

あれ……? 私、何を……?」

『疲れているのでしたら、無理にハクを探さなくても良いですからゆっくり身体を休ませてくださいまし』

「いえ、大丈夫です……とりあえずいーすんさんには話を通しておくので、私とお姉ちゃんの二人でモンスター退治をしながら探す事になると思いますがそれで大丈夫ですか?」

『え、ええ……お願いしてもよろしいかしら?』

何故か不安そうなベールさんに『大丈夫、問題ありません』と返して、通信を切ります。

そのまま残っていたプリンを食べると、余韻に浸ってるお姉ちゃんに声を掛けて一緒にいーすんさんの所にまで足を運ぶのでした。

(……ハクさん、あんまり心配は要らないと思うけど、何処に行ったんだろう?)

どうして、こんな事になったんだろう……

『起きなさい……もう必要な力はあるでしょう?』

プラネテューヌの市街地で大小問わず何人ものアイドルのマナー



ジャーを勤めている大物マネージャー……の、身の回りの世話やアイドルへの伝令、その他諸々の雑用のアルバイトをしていた私は、気が付いたら何処かの森の奥で目の前のアイドルでもやっていけそうな紫掛かった銀髪の女の子に拘束され、良く分からないけどすごく嫌な感じのする黒い……それも、品がある感じの黒じやなくって泥とか汚物とかがぐちやぐちやになった感じの黒い光を浴びせられていました。

「アあ、アアあ——!!」

何故、私はこんな目に遭っているのでしょうか？

分かりません……銀髪の女の子はまるでゴミを見るような目を向けてくるだけで質問には何も答えてくれませんでしたし、雇い主のマネージャーやその事務所とアイドルはともかくとして、私自身はこんな事をされなきゃいけないような怨みは買ってない……と思います。

お金だって忙しいのに連絡ミスや買い物の間違いとか、色々な失敗も多くて最低賃金よりも少ない金額しか貰えてないから余裕がないですし……?!?!

「アああアアああアアああ——?!?!」

痛い痛い痛い痛い、怖い怖い怖い怖い、痛い痛い痛い痛い怖い怖い怖い——?!?!

『全く、どうして私がこんな事までしなければならぬのか……』

【アハハハハ!!】

女の子の言葉が全く耳に入らなくなるほどの激痛と恐怖が際限なく湧き上がり、周囲が暗くなると同時に内側から私のもものと思われる、なのに私と違って慢心とも思える程の絶対の自信に満ちた笑い声が響き始めました。

「これがアタシい？ まアた随分とくっだらな、ゴミみたいな人生送ってるのねエ！」

内側から響く声はそう言って私の人生を全否定して嘲笑いました。

どうしてか、私の意識を苛み続けていた痛みと恐怖は治まりましたが、これまでのダメージからか一言も喋れそうにありません。

「……………」

【けエどお！ これからはこのアタシがアンタみたいなの価値もない屑を価値のあるモノにしてあげるから、泣いて喜んで従いなさい？】

【図らずとも黙りを決め込んだ私に対して一方的に酷い事を言うその声は、こう言いました。

【あんたの身体は私のもの、さあ、全てを明け渡して、さっさと眠つてろツてーのオ!!】

そんな言葉と同時に、後頭部をゴン！ と殴られたような衝撃が走って、私の意識はそのまま泥のような場所に沈んでいったのだ。

【アハハ、あははははは……アーツハハハハハハハハハハ!!!】

そんな私が最後に見て聞いたのは、そんな悪意と傲慢さに塗れた醜い笑い声と、そんな笑い声を上げて醜く顔を歪めた……私と良く似た顔の露出が激しい女の人なのでした。